

方言使用の場面的多様性

—鶴岡市における場面差調査から—

国立国語研究所

2006年3月

正誤表

- | 誤 | 正 |
|-----------------------------------|------------|
| ・ p.30 1.1 パネル調査61.6歳 | パネル調査61.5歳 |
| ・ p.51 図24・bのキャプション
〔(1) a〕の発音 | 〔o a〕の発音 |
| ・ p.121 図11のキャプション
〔友達場面〕 | 〔先生場面〕 |
| ・ p.127 1.17 「わずかながら」を削除。 | |
| ・ p.128 1.5 2倍 | 3倍 |
| ・ p.128 図16を下記に差し替え。 | |

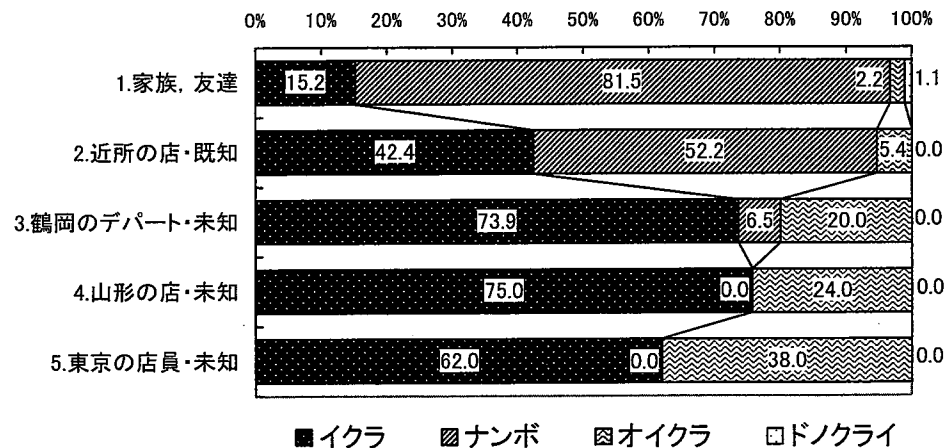


図16 「いくら」にあたる表現形の場面比較 (女性)

- ・ p.224 本正誤表の右ページを追加。

901. 被調査者の属性 ('91調査時) 【要確認】

職業 被調査者No.

学歴 学校の所在地

902. 終了時刻 午前 _____ 時 _____ 分 (調査時間: _____ 分)

午後 _____ 時 _____ 分

903. 長い間, どうもありがとうございました。 **粗品進呈** を忘れずに!



904. 調査全般の被調査者のことば [調査員判定]

1. 正しい共通語 2. 共通語だがどことなくちがう 3. 共通語が混ざる 4. 共通語を話さない 5. 共通語が通じない

- 905.-1. 調査に対する態度 [調査員判定]
- 1. 積極的 2. ふつう 3. 消極的 4. 拒否的
 - 2. 調査した場所
 - 1. 自宅 2. 勤務先 9. []
 - 〃 1. 部屋の中 2. 玄関先 3. 店先 9. []
 - 3. 住まいの形態
 - 1. 集合住宅 2. 一戸建 9. []
 - (_____ 階建ての _____ 階)
 - 4. 同席者
 - 1. 本人のみ 2. 配偶者 3. 子ども 9. []
 - 5. 反応までの時間
 - 1. 長いほう 2. ふつう 3. 短いほう
 - 6. 質問に対する問い返し
 - 1. 多いほう 2. ふつう 3. 少ないほう
 - 7. 使用録音機 _____
 - 8. 使用マイクフォン
 - 1. 内蔵マイク 2. 外部マイク []
 - 9. 録音環境
 - 1. 良い 2. あまり良くない 3. 悪い

【メモ欄】

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所は、創立以来、国民の言語生活の実態を把握するためのさまざまな調査研究を行ってきた。そのなかの重要な研究課題のひとつに「方言の共通語化」がある。特に戦後は、急激な社会変化や交通手段・通信手段の発達により、全国各地の言葉が一律化してきた。

その実態をとらえるため、昭和 25 年(1950 年)に山形県鶴岡市において 600 名近くの市民を対象に面接調査を行った。その調査結果は『地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—』として報告している。

その約 20 年後の昭和 47 年(1972 年)には、当地において再度調査を行い、この 20 年の間に共通語化がどの程度進行したか、またその社会的要因は何であるかを明らかにした。その調査結果は『地域社会の言語生活—鶴岡における 20 年前との比較—』として報告している。

さらにその約 20 年後の平成 3 年(1991 年)には、当地において第 3 回目の調査を行った。これは世界的にも類を見ない調査である。中間報告はすでにいくつか行っており、現在最終報告書刊行の準備を進めている。

第 2 回目・第 3 回目の調査では、過去の調査結果と比較しうるデータを得ることを重要な目標とした。そのために、質問方法や場面設定は単一かつ同一にして調査を繰り返してきた。

しかしながら、現実の地域社会における言語使用には場面的な多様性が伴っていることが考えられる。特にさまざまな人と接する機会が全体として一層増加した現在では、方言を使うか共通語を使うかは、場面により大きく異なることが予想される。

そこで、第 3 回目の調査の翌年の平成 4 年(1992 年)には、方言使用と共通語使用の場面的多様性を明らかにすることを目的とする調査を、鶴岡市民 175 人を対象に実施した。これにより、これまで実施してきた調査方法で鶴岡市民の言語生活のどの側面をとらえてきたかを検証することもあわせて目標とした。本書はその報告書である。

調査を進めるにあたっては、直接調査に応じてくださった鶴岡市民の皆様や、調査実現のためにさまざまな形で御助力くださった関係者の方々に大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

本書が学界・国語施策等の上で広く活用されることを願うものである。

平成 18 年 3 月

国立国語研究所長

杉戸 清樹

目 次

刊行のことば

第 1 章	研究目的と調査概要……………尾崎喜光・杉戸清樹…	1
第 2 章	音声の使い分け(1) —これまでの調査方法でとらえてきたもの— ……尾崎喜光…	15
第 3 章	音声の使い分け(2) —音響分析による検討— ………………前川喜久雄…	75
第 4 章	語彙の使い分け ………………加藤和夫…	105
第 5 章	文法の使い分け ………………朝日祥之・尾崎喜光…	133
第 6 章	敬語の使い分け ………………朝日祥之・尾崎喜光…	169
資料 1	面接調査票……………	201
資料 2	提示リスト……………	225
資料 3	調査協力依頼状……………	235
付記	……………	238
執筆者一覧	……………	239

第1章 研究目的と調査概要

尾崎喜光
杉戸清樹

1. 研究目的

国立国語研究所では、昭和25年（1950年）に山形県鶴岡市において、地域社会における方言の共通語化を主たる研究課題とする社会言語学的調査を実施した。その約20年後の昭和47年（1972年）には、同市において再度調査を行い、急激な社会変化が進んだこの間に共通語化がどの程度進化したか、またその社会的要因は何であるかを明らかにする調査を行った（図1を参照）。得られた結果は、それぞれ国立国語研究所(1953)、同(1974)として報告している。

そのさらに約20年後の平成3年（1991年）に、同市において第3回の調査を実施した。その中間報告は米田正人(1993)、Yoneda,M.(1997)で行い、現在最終報告書を準備中である。

その翌年の平成4年（1992年）には、第3回の調査に関連して2種類の調査を実施した。

一つは、共通語化を測定するにあたりその土台となる伝統的な方言を改めて記述する「記述調査」である。もとより第1回の調査でもその種の調査は行っているのであるが、言語の体系的な側面についてはさらに詳細なデータが必要だと判断されたこと、またこの約40年の間の研究の進展に伴い方法的にさらに深めるべき点が見出されたこと、そして第2回の調査時点で共通語化が著しく進行していたことから考えると伝統的方言を記述できるのは最後の機会であると判断したことから、この調査を行った。得られた結果は国立国語研究所(1994)としてすでに報告している。

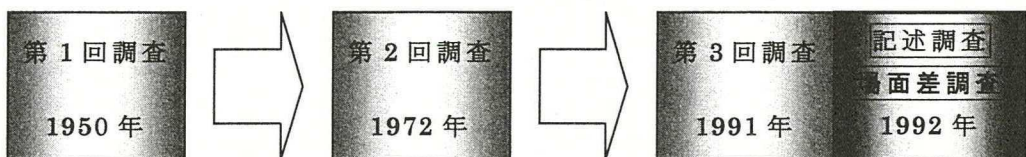


図1 鶴岡市での調査の展開

もう一つは、我々が「場面差調査」と呼ぶ調査である。第2回・第3回の調査では、過去の調査結果と比較しうるデータを得るため、質問方法やワーディングにも注意を払い、第1回を踏襲してきた。たとえば音声に関する項目では、回答者に絵を見せたりなぞなぞ式で尋ねてその語を発音させることにより、回答者の発音を調査してきた。また、語彙や文法に関する項目では、「ふつう何とおっしゃいますか」のように「ふつう」という副詞を添えることにより、特に気が張るわけではない日常生活での共通語使用／方言使用をとらえようとしてきた。調査項目によっては「ふつう」を特に付けずに質問した項目もあるが、回答者には同様の状況を想定して回答してくれることを期待した。先の音声項目についても、第1回の調査時では、共通語音声と方言音声を使い分けることなどおそらく想定していなかったため、あえて「ふつう」と言わずとも、回答者は生活の中で「ふつう」に使っている音声により回答してくれるものと考えたと推測される。一言で言えば、ごく日常的な場面での言語使用をとらえようとしてきたのである。

しかし、日常的な場面、「ふつう」の場面も実はさまざまである。言葉の調査に応じるというような場面はきわめて非日常的であるにしても、たとえば会話を構成する人的要素の点から言えば、家族や友達と話をする場面から、知らない人と話をする場面まで、「ふつう」に存在する日常的な場面は広がりを持つ。第1回の調査の昭和25年(1950年)頃であれば、会話の相手は限られた地域内の知っている人物という状況が生活の中で多かったであろうが、交通手段・通信手段の発達により生活圏が拡大した現在では、遠方の知らない人と話をするという状況も一層日常的なこととなった。どのような相手と話をするかにより、方言を使うか共通語を使うかも変わってこよう。近畿地方で調査した国立国語研究所(1990)によれば、相手や場面による方言と共通語の使い分けは明確に認められる。鶴岡市も同様である可能性は高い。

すなわち、「ふつう」の言語生活と言っても実は幅があり、その幅は現在に近づくほど大きくなっていると考えられる。

先に述べたように、前年度(1991年度)実施した第3回調査では、過去の調査と比較しうるデータを得ることを最大の目標としたため、生活の場面の幅や広がりにはあえて考慮せず、過去の質問方法やワーディングを踏襲して調査した。しかし、「ふつう」の言語生活にも幅があるという現実から目をそらしたままでよいはずがない。その幅により、共通語使用／方言使用がどうで

あるのかという「場面的多様性」を把握しておくことは、地域社会の言語生活をより総合的に把握する上で不可欠であるし、過去3回実施してきた調査、特に調査時期がほぼ同じ第3回の調査でとらえたものが言語生活のどの局面を切り取ったものであるのかを検証する上でも有益である。

そこで、第3回調査の翌年には、鶴岡市民の方言使用／共通語使用の「場面的多様性」を把握することを目的とする「場面差調査」を、杉戸清樹と尾崎喜光が中心となって企画し実施した。本書はその調査報告書である。

2. 調査概要

2.1. 研究課題および研究期間

調査は、前年度実施した第3回の調査と同様、下記の科学研究費補助金を得て実施した。

「地域社会の言語生活—鶴岡市における戦後の変化—」（平成3年度～4年度文部省科学研究費補助金，総合研究(A)(1)，課題番号 0330106，研究代表者：江川清）

本書で報告する「場面差調査」は第2年次（平成4年度）に実施した。調査期間は平成4年（1992年）11月17日（火）～25日（水）の9日間であった。

2.2. 研究組織

研究には下記の34名が参加した。このうち第2年次の「場面差調査」に調査員として参加した者（16名）には氏名の右上に「*」を付してある。括弧内は調査当時の所属である。

[研究代表者]

江川清（国立国語研究所）

[研究分担者]

米田正人，杉戸清樹*，熊谷康雄*，相澤正夫*，前川喜久雄*，尾崎喜光*，井上優，大西拓一郎*（以上国立国語研究所），佐藤亮一*（フェリス学院大学），今石元久（広島女子大学），井上史雄*（東京外国語大学），高田誠（筑波大学），真田信治（大阪大学），加藤和夫*（金沢大学），佐藤和之*（弘前大学），水野義道*（京都工芸繊維大学），渋谷勝己*（大阪大学）

[研究協力者]

伊藤雅光，横山詔一*，池田理恵子*，白沢宏枝，辻野都喜江，塚田実知代，磯部よし子，米田純子（以上国立国語研究所），金沢裕之（岡山大学），沢木幹栄（信州大学），篠崎晃一*（東京都立大学），鈴木敏昭（富山大学），新田哲夫*（広島文教女子大学），吉岡泰夫（熊本短期大学），堀司朗（鶴岡市立図書館），早野慎吾（上智大学大学院）

2.3. 回答者の求め方

「場面差調査」では，鶴岡市民の言語使用に関する正確な縮図を得ることよりも，場面により方言と共通語の使い分けを生活の中で確かに行っているかどうかを見ること，また従来の調査方法でとらえてきたところが市民の言語生活のどの側面であったかを検証することを最大の目標とした。そこで，限られた時間と経費の中で回答者をできるだけ多く得るために，今年度は回答者を改めて無作為に抽出することはせず，前年度調査の回答者の中から得ることとした。

前年度の調査は，過去2回の調査と比較すべく住民基本台帳から回答者を無作為抽出して（ただし平成3年10月末現在15～69歳という限定をつけて）実施した「継続調査（ランダム調査）」と，個人レベルでの言語使用や言語意識の変化の有無を明らかにするために過去2回の調査の回答者を追跡して実施した「パネル調査」の2種類からなる。

継続調査は住民基本台帳から無作為に500人を抽出して405人から面接調査の回答を得た（回収率81.0%）。一方，パネル調査は，第2回調査の継続調査の回答者457人とパネル調査（＝第1回調査の継続調査の回答者）107人の計564人を対象としたが，所在が確認された368人が実際の対象となり，314人から面接調査の回答を得た（回収率85.3%）。

「場面差調査」の回答者は，継続調査405人，パネル調査314人の回答者の中から得た（継続調査のうち6人はパネル調査の回答者でもあるため合計は713人となる）。ただし，この中から無作為に選ぶのではなく，次の条件を満たす者を選ぶこととした（年齢・性別等は特に考慮しなかった）。

- (1) 前年度の調査票の「調査に対する態度」（調査員の印象にもとづく判定）の項が「積極的」であった者。継続調査の該当者は132人（32.6%），パネル調査の該当者は144人（45.9%）であった。
- (2) 同じく「反応までの時間」（これも調査員の印象にもとづく判定）の項

が「普通」ないしは「短いほう」であった者。すなわち「長いほう」であった者は対象から除外した。継続調査の該当者は 345 人（85.2%）、パネル調査の該当者は 244 人（77.7%）であった。ちなみに「普通」の平均所要時間は継続調査が 33 分、パネル調査が 38 分、「短いほう」は継続調査が 30 分、パネル調査が 34 分であった。

(3) 同じく「質問に対する問いかえし」（これも調査員の印象にもとづく判定）の項が「普通」ないしは「少ないほう」であった者。すなわち「多いほう」であった者は対象から除外した。継続調査の該当者は 381 人（94.1%）、パネル調査の該当者は 289 人（92.1%）であった。

(4) 居住地が旧市内である者。第 1 回・第 2 回の調査では鶴岡市の旧市内（ただし周辺部の一部を除く）を調査対象地域としたが、第 3 回の継続調査では対象地域を拡大した。場面差調査では、拡大した地域を再び除外し（大字の地域を除外）、旧市内とした。パネル調査の回答者の中には鶴岡市から転出した者もいるが、その回答者も除外した。

すなわち、前年度に続き再度回答者となってもらうわけであるから調査に協力的である人、場面性を付与した質問となり前年度よりも調査時間が長くかかることが見込まれたため（調査前後の挨拶を含め実質 60 分以上を見込んだ）回答がスムーズに得られる人、古くからの市域に住んでいて従ってまた調査員の移動時間も長くかからない人、を回答者の条件とした。

このような手順により、回答予定者を 222 人（継続調査 112 人、パネル調査 110 人）選んだ（図 2 を参照）。

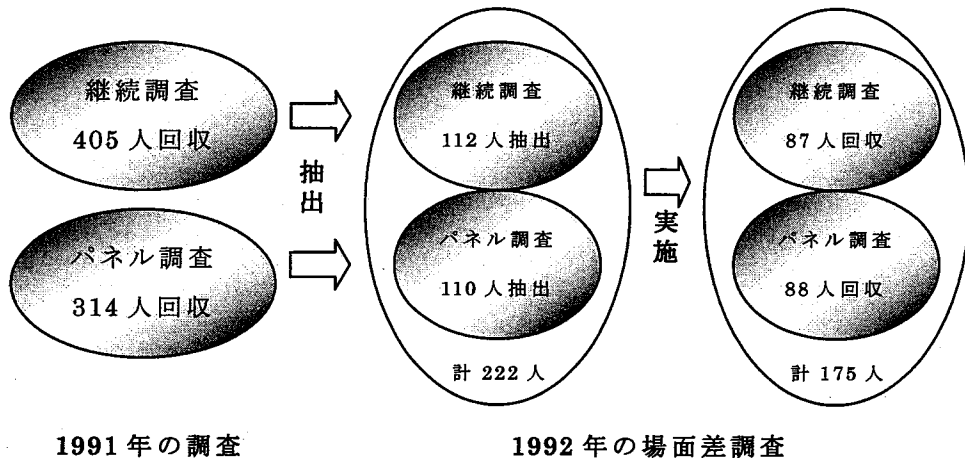


図 2 場面差調査の回答者の抽出と回収

2.4. 回答者との接触

回答予定者の 222 人には、本書末尾の資料 3 として掲げた国立国語研究所長名による「調査協力依頼状」を事前に送付し、同封した返信用葉書により協力の諾否および都合のよい日時を尋ねた。なお、前年度の調査にならい、回答者自記式の「言語生活調査票」(A4 判 4 ページ)も同封し面接調査時に回収した。ただし「場面差調査」とは直接関わらない質問も含む多目的な調査であったため、本書ではその報告は省略する。

回答予定者 222 人のうち 9 人からは調査不可能の回答があり、調査開始時点で対象とした人数はそれを差し引いた 213 人(継続調査 111 人、パネル調査 102 人)となった。

鶴岡市には平成 4 年(1992 年)11 月 17 日(火)から、国立国語研究所員ほかの研究分担者・研究協力者が調査員として入った。そして、調査員ごと割り当てられた回答者に対し調査協力の諾否ならびに面接調査の日時等を電話で問い合わせた。

最終的に調査できた人数は 175 人であった(継続調査 87 人、パネル調査 88 人; 図 2 を参照)。213 人を母数とする回収率は 82.2%であった(継続調査 78.4%, パネル調査 86.3%)。

調査をスムーズに進行させるため、それぞれの回答者は原則として前年度の担当調査員が調査することとした。ただし、同時期に実施した「記述調査」と調査員が重複する等の理由により、それが実現したケースは 33.7%(59 人)にとどまった。面接調査の設定の中には、東京から来た初対面の人に向かって話す場面を回答者に想定させたものもあるが、設定場面に現実味を持たせるため、目の前にいる調査員に向かってどう言うかを回答させた。これら約 1/3 のケースは、厳密に言えば「初対面」ではないが、ほぼ 1 年間間隔を置いての 2 度目の接触に過ぎないので、「初対面」としても有効であると判断した。なお、調査員の中には東京都在住者以外もいるが、調査では東京から来た者であると名乗らせた。

2.5. 回答者の属性

回答者 175 人について属性別の分布を示すと表 1(前年度調査の種類別)および表 2(男女別)のとおりである。本書では、年齢層別に分析する際、

全体の人数があまり多くないため 10 年刻みの年齢層を 3 つの年齢層にまとめて分析することがあるので、その分布も「年齢層別(2)」として示した。回答者の平均年齢は 53.7 歳である（継続調査からの回答者の平均年齢は 45.6 歳、パネル調査のそれは 61.8 歳）。場面差調査の検証対象となる前年度の継続調査の回答者 405 人の平均年齢は 42.0 歳であるので、平均年齢が 11.7 歳年上のグループを調査対象としたことになる（ちなみにパネル調査 314 人の平均年齢は 61.5 歳）。3 つの年齢層に分けて見る際の留意点を指摘しておく。

「10～30 代」は実は 30 代の回答者が大きな割合を占めており、10 代・20 代の回答者は少ない（特に 10 代は少ない）。また、「40～50 代」は実は 50 代に大きく傾く。「60～80 代」も実は 80 代は少なく、60 代に大きく傾く。

表 1 回答者の分布(前年度の調査の種類別)

	全体	性別		年齢層別(1)								年齢層別(2)		
		男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	10～30代	40～50代	60～80代
継続調査	87	41	46	4	8	20	14	25	16	—	—	32	39	16
パネル調査	88	42	46	—	—	7	10	16	29	20	6	7	26	55
全体	175	83	92	4	8	27	24	41	45	20	6	39	65	71

(注) 年齢層別の欄の年齢は第 1 年次の調査時点のものである。

表 2 回答者の分布(男女別)

	年齢層別(1)								年齢層別(2)		
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	10～30代	40～50代	60～80代
男性	3	6	16	9	16	21	11	1	25	25	33
女性	1	2	11	15	25	24	9	5	14	40	38
全体	4	8	27	24	41	45	20	6	39	65	71

回答者自身や家族の地理的背景は図 3 のとおりである。凡例の「庄内」とは鶴岡市や酒田市を中心とする山形県北西部の地域名であり、ここでは鶴岡市を除く庄内地方という意味で用いている。「東北・北海道」も同様に「鶴岡市」と「庄内」を除く意味で用いている。

「出生地」や「5～15 歳の最長居住地」を見ると、回答者の 6～7 割は鶴岡

市であることが分かる。その周辺の庄内地方まで含めると 8~9 割に達する。ただし、グラフには示していないが、生まれてからずっと鶴岡市内で外住歴無しという純粹の鶴岡市ネイティブは 32.6%にとどまり、庄内地方以外で 2 年以上生活したことがある人が 52.0%いる。両親や配偶者の出身地も、鶴岡市が 5~6 割、庄内地方まで含めると 8 割前後となる。本人にしても本人を取り巻く家族にしても、鶴岡市を中心とする庄内地方を地理的背景とする回答者が非常に多い。本書で分析対象とするデータは、言語形成のバックグラウンドを地元とする人々から得たところが大きな割合を占める。

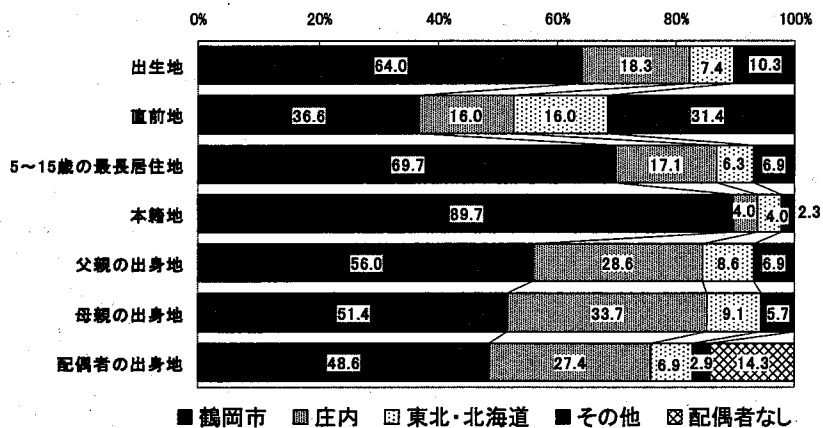


図 3 第 2 年次調査の回答者(175 人)とその家族の地理的背景

図 4 は、場面差調査の検証対象となる前年度の継続調査について同様に示したものである。全体的に図 3 と大きな違いはないと言えるが、図 4 を基準にすれば、図 3 は「鶴岡市」が 5~10 ポイント程度高い傾向が見られる。すなわち、地理的背景の点から言えば、場面差調査は鶴岡市ネイティブの色合いが多少強く出ているデータであると言える。なお、図 4 に比べ図 3 で「配偶者なし」の数値が 10 ポイントほど低下するのは、平均年齢が高く既婚者が増えるためである。

設問の中には、一番気楽に話せる家族や友達を想定させ、その人物に対する表現が方言形か共通語形かを知らうとする項目がある。その前提として、同居している家族の人数や、それが誰であるかを尋ねた。図 5 は同居している家族の人数である。1 人 (=2 人家族) ないしは 2 人 (=3 人家族) が比較的多く、あわせて全体のほぼ半数となる。0 人 (=一人暮らし) も 1 割ほどいる。

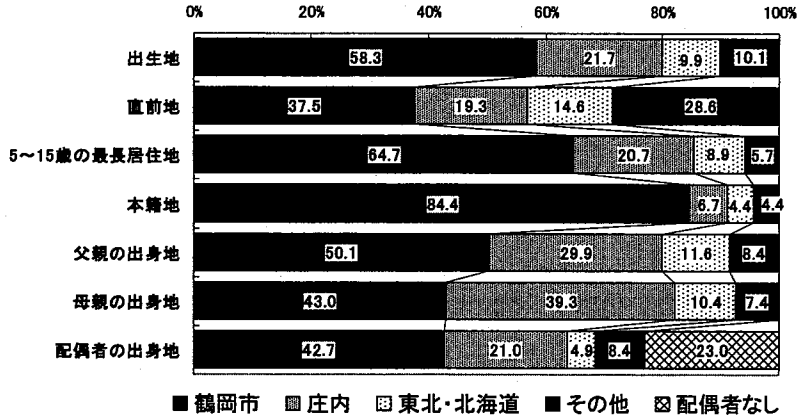


図 4 第 1 年次の継続調査の回答者 (405 人) とその家族の地理的背景

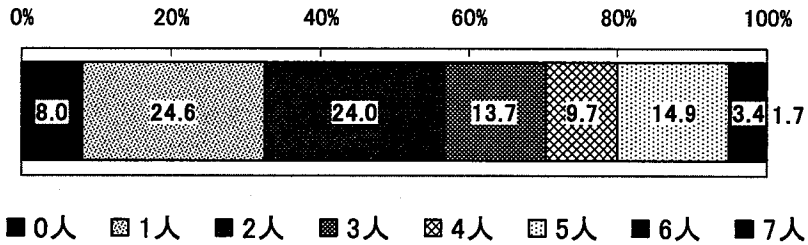


図 5 同居している家族の人数 (回答者を除く)

図 6 は、同居している家族がいる場合、それが誰であるかを尋ねた結果である (母数は 175 人)。夫と妻をあわせた配偶者が約 7 割と最も多い。次いで子供が約 6 割となる。家族と同居している場合、多くの回答者に該当する同居者の人物は、配偶者や子供であることが確認される。

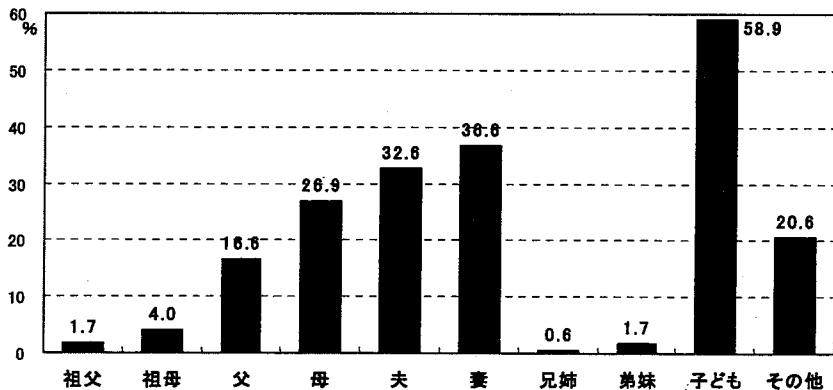


図 6 同居している家族

2.6. 調査方法・調査状況

調査は、回答者の了解を得た上で全体を録音した。

今回の場面差調査では、同一の項目について設定場面をさまざまに変えて質問するため調査時間が長くなることが予想された。そこで、音声に関する項目については、一部を除き回答を調査票に記録することは行わず、調査現場では調査したことのチェックおよび関連する次の質問のためのメモを取る程度にとどめ、事後に録音を聴いてデータとした。

音響分析ソフトを用いて音声を分析する項目を含んでいるため、状況が許せば外部マイクを用いて録音することとした。それが実現できた回答者は74.3%（130人）であった。録音環境（調査現場の静かさなど）は、調査票への記録（調査員による印象判定）によれば、「良い」が65.1%、「あまり良くない」が25.7%、「悪い」が2.9%、無記録が6.3%であった。

調査に対する態度（積極性；調査員による印象判定）の項を集計すると、「積極的」が62.9%、「ふつう」が32.6%、「消極的」が0.6%、「拒否的」が0.0%、無記録が4.0%であった。前年度調査で「積極的」であったことを条件とした回答者であるため当然の結果ではあるが、全体として調査は協力的な雰囲気の中で進められた。外部マイクを襟元に付けて録音することなどはこの種の調査ではあまりないが、そのことにより回答者が調査に消極的になったり拒否的になったりすることはそれほどなかったと言える。

反応までの時間については、「長いほう」が10.3%、「ふつう」が58.9%、「短いほう」が27.4%であった。また、質問に対する問い返しについては、「多いほう」が5.7%、「ふつう」が57.1%、「少ないほう」が33.1%であった。全体として調査はスムーズに行われた。

調査を行った場所は「自宅」が83.4%と最も多かった。部屋の中か玄関先かについては「部屋の中」が81.7%であった。回答者の住まいの形態は「一戸建て」が89.1%であった。同席者の有無については「本人のみ」が77.7%であった。従って、今回の調査の典型的な形態は、一戸建ての回答者の自宅の部屋の中で回答者と一対一で進める形、ということになる。

調査そのものに要した時間は平均53分であった（最短33分、最長97分）。前後の挨拶まで含めると平均60分程度要したものと思われる。前年度の継続調査が平均33分（最短17分、最長77分、無記録の2人を除く）、パネル

調査が平均 38 分（最短 10 分，最長 85 分，無記録の 3 人を除く）であったことと比べると，平均 15～20 分長くなった。

調査終了後は，謝礼として文具を渡した。また，後日，国立国語研究所長名による礼状も送付した。

2.7. 質問項目

面接調査に用いた調査票は資料 1 として巻末に示した。その 3 ページ以降が言語項目である。調査票の作成は尾崎が担当した。

言語項目は大きく「音声項目」「語彙項目」「文法項目」「敬語項目」から構成されている。

「音声項目」は設問番号が 100 番台・200 番台・300 番台・600 番台・700 番台のものである。このうち 200 番台は，方言音声の中でも母音の中舌化に注目し，文章を読むときと親しい相手に対し自分の言葉で伝達するときの使い分けの有無や度合いについて音響分析ソフトを用いて分析することを前提とした質問項目である。

これに対し 300 番台は，母音の中舌化も含むさまざまな方言音声や，複数のバリエーションが存在する共通語音声について，相手による使い分けを見ようとした質問項目である。音声の判定は通常の聴き取りによることを前提とした。100 番台は従来の方法によるもの，600 番台は単語リストを読む方法によるものである。300 番台と関連付けて分析するものである。

700 番台は，方言音声・共通語音声を回答者に刺激として提示し，さまざまな反応を求める質問項目である。刺激として提示した方言音声・共通語音声は，鶴岡市出身で本調査の研究分担者でもある井上史雄が発音したものである。オリジナルの編集テープから調査用のテープを作成した。調査員は，録音用のテープレコーダーとは別に再生用のテープレコーダーも携帯し，それにより刺激音声を再生した。スピーカーを通しての再生を基本としたが，調査員がモニターできる環境にあればイヤホンで再生することも可とした。

400 番台のうち 401～405 は「文法項目」である。助詞や活用形の方言形と共通語形の使い分けを中心に調査した。

一方 400 番台の 406・407・408 と，500 番台の 502 は「語彙項目」である。「ご飯」「食べる」「壊れた」「捨てる」「いくら（物の値段）」の方言形と共通語形の使い分けを調査した。いずれも前年度の継続調査では調査項目と

なっており、前年度調査の検証というよりも、使い分けの有無を見ることを主たる目的とする項目である。

500番台のうち501は「敬語項目」である。相手に薦めるときの表現について、尊敬語や授受表現の方言形と共通語形の使い分けを中心に調査した。

800番台は、共通語化に対する意見や、それに関係すると推測される回答者の日常行動等について、前年度調査の補足として尋ねた質問項目である。場面差調査と直接的な関係はないため、本書では分析の対象外とする。

2.8. データ処理

調査終了後、研究協力者の磯部よし子が調査票と録音テープの整理を行った。また、アルバイトの補助を得て、音声項目の聴き取り用の編集テープの作成を行った。

編集テープによる音声の聴き取りは、音響分析ソフトを用いて分析を行う項目(200番台)を除き、分担者の尾崎喜光が行った。音声の聴き取りは、聴き取る者が言語形成期を過ぎた地域の方言的バックグラウンドの影響がありうるが、聴き取りをした尾崎は18歳まで長野県上田市で過ごした者である。当該地の音声やアクセントは基本的に共通語と同じ地域である。ガ行鼻音も有している。鶴岡市や庄内地方での生活経験は特にない。

音声項目以外は、尾崎の指示によりアルバイトが録音テープを聴き直し、調査票の記録と食い違いがあった場合は尾崎が該当箇所を聴き直した上で回答を確定した。なお、直接分析対象とするのは単語レベルの回答であるが文の形で回答を求めた設問については、尾崎の指示により文全体の文字化もアルバイトに行わせ参考データとした。

回答はコード化した上でコンピュータに入力した。校正してデータを確定した上で、別に作成していた第1年次のデータと結合し、統計プログラムを用いて集計した。

2.9. 本報告書における分析

本書では、面接調査の調査項目を分析した結果を報告する。

このうち800番台は、場面差調査とは直接関係のない項目であるため本書では分析を行わない。700番台は分析が十分進んでいないため、本書での分析は割愛する。

これらを除く項目について、第2章以下で、次の順番に分析結果を報告する。右端の氏名は分析・執筆の担当者である。朝日祥之は分析の段階から研究に参加した。

- ・第2章：音声の使い分け(1) 100番台・300番台・600番台 …尾崎喜光
- ・第3章：音声の使い分け(2) 200番台……………前川喜久雄
- ・第4章：語彙の使い分け 406・407・408・502 ……加藤和夫
- ・第5章：文法の使い分け 401～405……………朝日祥之・尾崎喜光
- ・第6章：敬語の使い分け 501 ……朝日祥之・尾崎喜光

参考文献

- 国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告 5 地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—』秀英出版
- 国立国語研究所(1974)『国立国語研究所報告 52 地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』秀英出版
- 国立国語研究所(1990)『国立国語研究所報告 102 場面と場面意識』三省堂
- 国立国語研究所(1994)『国立国語研究所報告 109-1 鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査 報告 1—』秀英出版
- 米田正人(1993)「鶴岡市における共通語化の調査—約20年間隔で行われた3回の調査を比較して—」『日本方言研究会 第56回 研究発表会 発表原稿集』pp.17-24
- Yoneda,M.(1997) Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: Comparison of results from three surveys conducted at 20-year intervals. 『日本語科学』2,pp.24-38

第2章 音声の使い分け(1) —これまでの調査方法でとらえてきたもの—

尾崎喜光

1. はじめに

本章では、分節音（子音・母音）および単語アクセントの場面による使い分けについて分析した結果を報告する。

前年度に調査した第3回の継続調査で得られた結果と対照しつつ、これまで回答者に対し絵を提示したりなぞなぞ方式で質問する方法によりとらえ続けてきた共通語音声あるいは方言音声の使用状況が、鶴岡市民の言語使用（特に音声の使用）のどの側面をとらえてきたかを検証する。また、過去3回の継続調査の項目にはないが、場面による使い分けを見る目的で新たに追加した音声項目もいくつかあり、その結果もあわせて報告する。なお、分節音のうち母音の中舌化の現象については、文章を読む場合とそれを親しい者に向かって自分の言葉で伝える場合とを比較した調査もあわせて行っているが、中舌化の有無や度合いについてはコンピュータを用いて分析しているので、その項目の分析結果については第3章にゆずる。

なお、本章で報告する項目の一部については、尾崎喜光(2000・2001・2003)で中間的な報告を行っている。

2. 分析対象とする調査項目

2.1. 継続調査結果の検証のための項目

過去3回の継続調査で対象とした音声項目は、分節音が31項目、アクセントが5項目であった。今回の「場面差調査」では、調査時間の制約からこれら全てを調査項目とはせず、代表項目を選んで調査することとした。分節音の項目は、音声的な特徴からいくつかのカテゴリに分類されているが、各カテゴリから1項目ないし2項目選ぶこととした。アクセントについても、2モーラ語・3モーラ語から各1項目ないし2項目選ぶこととした。

これまでの調査で対象としてきた分節音のカテゴリとそれらの調査項目およびアクセントの調査項目を、米田正人(1993)による中間報告の資料により

示すと図1(分節音)および図2(アクセント)のとおりである。各カテゴリの方言音声の特徴について、2.1.1節と2.1.2節で簡単に説明を加える。

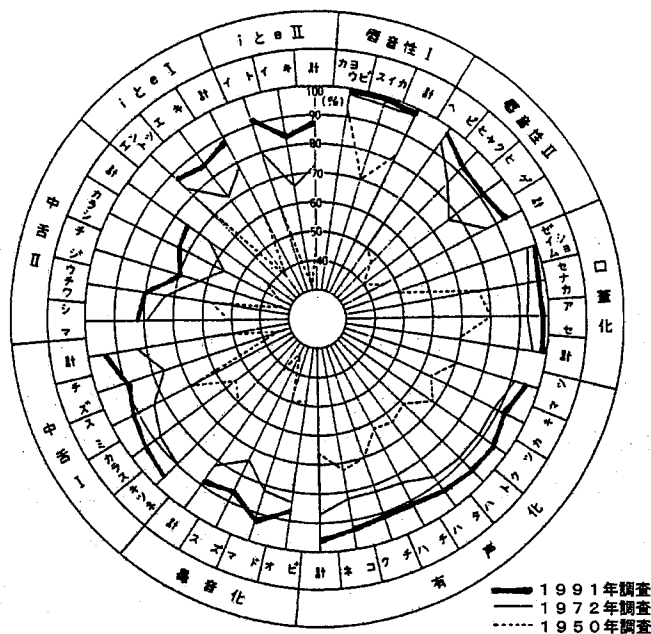


図1 過去3回の調査の共通語音声の使用率

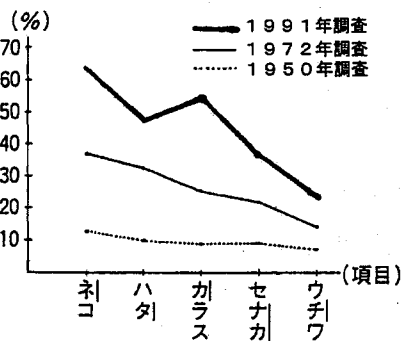


図2 過去3回の調査の共通語アクセントの使用率

2.1.1. 分節音

「唇音性 I」は、共通語の [ka] を [kwa] と発音するものである。共通語音を基準にすると、[k] の唇音化ないしは半母音(接近音)[w] の介入が見られる発音である。以下本章では、他の音声特徴の表現とそろえて「唇音化 I」と呼ぶ。

継続調査では「カヨービ(火曜日)」「スイカ(西瓜)」が調査されているが、場面差調査では「西瓜」を調査項目とした。

「唇音性Ⅱ」は、共通語のハ行子音[h][ç]を両唇摩擦音[Φ]で発音するものである。すなわち、へ[he]をフェ[Φe]、ヒ[çi]をフィ[Φi] ないしは[Φç i]のように発音するものである。共通語音を基準にすると、[h][ç]が完全な唇音に置き換えられたり唇音化する発音である。以下本章では「唇音化Ⅱ」と呼ぶ。継続調査では「ヘビ(蛇)」「ヒヤク(百)」「ヒゲ(髭)」が調査されているが、場面差調査では「髭」を調査項目とした。

「口蓋化」は、共通語のセ[se]をシェ[ʃe]、ゼ[dze/ze]をジェ[ʃe/ʒe]と口蓋化させて発音するものである。継続調査では「ゼームシヨ(税務署)」「セナカ(背中)」「アセ(汗)」が調査されているが、場面差調査では「税務署」を調査項目とした。

「有声化」は、共通語の非語頭の無声破裂音を有声破裂音、無声破擦音を有声破擦音ないしは有声摩擦音で発音するものである。すなわち、[t]を[d]、[k]を[g]、[ts]を[dz/z]、[tʃ]を[ʤ/ʒ]と発音するものである。継続調査では「マツ(松)」「カキ(柿)」「クツ(靴)」「ハト(鳩)」「ハタ(旗)」「ハチ(蜂)」「クチ(口)」「ネコ(猫)」が調査されているが、場面差調査では「柿」と「猫」を調査項目とした。このうち「猫」ではアクセントも同時にチェックした。

「鼻音化」は、共通語の非語頭の有声破裂音や有声破擦音(あるいはその閉鎖が不完全になった有声摩擦音)の直前に軽微な鼻音(いわゆる「入り渡り鼻音」)が挿入される発音である。すなわち、[b]を[-b]、[d]を[-d]、[dz/z]を[-dz/-z]と発音するものである。継続調査では「オビ(帯)」「マド(窓)」「スズ(鈴)」が調査されているが、場面差調査では「窓」と「鈴」を調査項目とした。このうち「窓」ではアクセントも同時にチェックした(ただし継続調査ではアクセントはチェックされていない)。

「中舌Ⅰ」は、共通語のア行以外のウ段の母音ウ[u]を中舌化して(すなわちイ寄りにして)[i]のように発音するものである。共通語の発音も若干中舌化しているが、それ以上に中舌化した発音である。継続調査では「キツネ(狐)」「カラス(鳥)」「スミ(墨)」「チズ(地図)」が調査されているが、場面差調査では「鳥」を調査項目とした。「鳥」ではアクセントも同時にチェックした。

「中舌Ⅱ」は、共通語のア行以外のイ段の母音イ[i]を中舌化して(すなわちウ寄りにして)[i]のように発音するものである。継続調査では「シマ(島)」

「ウチワ(団扇)」「チジ(知事)」「カラシ(辛子)」が調査されているが、場面差調査では「知事」と「辛子」を調査項目とした。

「i と e I」は、共通語のア行のエ[e]をイ[i]に近く[é]と発音するものである(補助記号[.]は通常[e]の下に付すがここでは上に付す)。継続調査では「エントツ(煙突)」「エキ(駅)」が調査されているが、場面差調査では「駅」を調査項目とした。

「i と e II」は、共通語のア行のイ[i]をエ[e]に近く[é]と発音するものである。継続調査では「イト(糸)」「イキ(息)」が調査されているが、場面差調査では「息」を調査項目とした。

2.1.2. アクセント

継続調査では「ネコ(猫)」「ハタ(旗)」「カラス(鳥)」「セナカ(背中)」「ウチワ(団扇)」の5項目が調査されている。いずれも分節音を調査する項目でもある。場面差調査では、2モーラ語から「猫」、3モーラ語から「鳥」を調査項目とした。さらに、今回の場面差調査で調査項目に含め、従来は分節音のみがチェックの対象であった「窓」については、アクセントもあわせてチェックした。高い拍をH、低い拍をLで表すと、共通語ではこれら3語はいずれもHL・HLLと頭高型であるが、当地ではLH(直後に1モーラの助詞が伴う場合の助詞はL)・LHLが最有力の方言アクセントとして使われている。

2.2. 新たに追加した項目

以上は、これまでの調査結果を検証するための項目であるが、今回行った場面差調査では、これらに加え、さまざまな地域で調査対象とされることのあるガ行鼻音や、外来語の音声やアクセントについても、従来の音声と新しい音声、方言音声と共通語音声の使い分けが見られるか否かを調査した。若干説明を加えつつ、以下に調査項目を示す。

2.2.1. 分節音

(1) ガ行鼻音

「鏡」のガの子音について、[ŋ]と[g]で場面による使い分けが有るか無いかを調査した。当地の伝統的な発音は[ŋ]である。「鏡」のアクセントの使い分けについてもあわせてチェックした。

(2) 外来語音

学校教育において英語を履修した人口が増えるにつれ、すでに日本語として取り込んだ外来語を、従来の日本語にない音の組み合わせにより原音に近く発音する人が増えてきつつある。たとえば「フィリピン」「フィルム」の「フィ」は、従来フィ[Φ_wi]のように2モーラに分けて発音されていたが、フィ[Φi]と1モーラで発音する傾向が出てきた。[Φ]や [i]自体は従来の日本語音として存在しているが、[Φ]は[w]と組み合わせられるのみで[i]との組み合わせはなかった。しかし、英語の[fi]により近い発音にすべく、[Φ]と [i]を直接繋げて[Φi]と発音する人が増えてきた。同様に、英語の[ti][di]の音も、日本語のタ行音・ダ行音に「ティ」「ディ」がないため、子音を活かした[te][de]とするか（たとえば「PTA」をピーテーエー）、母音を活かした[ʧi][ʧi]とする（たとえば「diesel」をジーゼル）のが従来の発音であった。しかし、近年、両者を組み合わせた[ti][di]の発音（すなわちピーティーエー、ディーゼル）も使われるようになってきた。

こうした新しい外来語音（厳密には外来語音節の発音）がどの程度使われているか、また場面による使い分けが有るか無いかを見るために、「NTT」（日本電信電話株式会社—Nippon Telegraph and Telephone Corporation）の「T」の発音を調査した。「NTT」は、前身の「電電公社」（日本電信電話公社）が民営化されたことに伴い改名されたもので、調査当時社会に定着し始めた新語であった。

2.2.2. アクセント

外来語にも、方言アクセントと共通語アクセントの違いや、従来の共通語アクセントと新しい共通語アクセントの違いがある。それぞれどの程度使われているか、場面による使い分けが有るか無いかを、次の3語により確認することとした。

方言アクセントと共通語アクセントの対立を見る項目としては「テレビ」と「アメリカ」を調査項目とした。

「テレビ」は、共通語アクセントは HLL だが、当地の方言アクセントは LHL である。ちょうど「鳥」のアクセントの対立と並行的である。3モーラ語の場合、共通語 HLL、方言 LHL という対立は外来語にも及んでいる。

「アメリカ」の共通語アクセントは LHHH だが、当地の方言アクセントは LHLL である。共通語も、外来語アクセントの一般規則からすれば LHLL であるはずだが、早い時期から平板化が一般化している。当地では、本来のアクセントである LHLL が、方言アクセントとして用いられている。

「チャンネル」は、共通語において、外来語アクセントの一般規則による HLLL から LHHH(ないしは HHHH)へと変化しつつある。平板化が進行しつつあるのだが、当地における使用状況および使い分けの有無を見ることとした。なお「チャンネル」は、テレビの放送局の意味ではなく、それを切り替えるためのテレビの装置の意味として調査している。

2.3. 調査方法

場面差調査における調査方法は次のとおりである。

2.3.1. 絵・なぞなぞ

継続調査の調査項目のうち、場面差調査で対象とする項目については、絵を提示したりなぞなぞ方式で問う従来の方法により改めて調査した(以下ではこの方法によるものを「絵」と略称する)。継続調査の回答者から場面差調査の回答者を抽出し、該当する項目について集計することも考えられたが、この部分の調査にはさほど時間を要しないため、改めて調査することとした。以下に記した【100番代の設問】が、場面差調査の「絵」による調査項目である。【リスト】とあるものは、カードに描かれた絵を回答者に提示し、「これは何ですか?」のように質問して回答を求めたものである。提示した絵は継続調査と同じものである(本書末尾の資料1・資料2を参照)。【リスト】と書かれていないものは、口頭でなぞなぞ方式で質問し回答を求めたものである。基本的に調査票に書かれた文言に従って質問した。問118～問123は、今回の場面差調査には直接関係しないが、関連項目として調査したものである。分析結果の報告はここでは省略する。

発音の記録は、これまでのように調査員が調査現場で調査票に記入することとはせず、調査終了後、研究分担者である尾崎喜光が録音を聴き取ることにより行った。聴き取り作業用のシートを別途用意し、そこに判定結果は記入した。音声の判定カテゴリ(選択肢)は、前年度の継続調査の調査票と基本的に同一とし、最も近いと判定される選択肢にチェックした。聴き取り作業は、他の音声項目とあわせ、1998年8月から同年11月にかけて行った。

【100 番代の設問】

まず、絵を見てお答え下さい。ふつう何とおっしゃいますか？（録音のみ）

101. 〈西瓜〉 【リスト 101】
102. 〈柿〉 【リスト 102】
103. 〈鳥〉 【リスト 103】
104. 〈窓〉 【リスト 104】
105. 〈駅〉 【リスト 105】
106. 〈税務署〉 …税金をとりたてる役所を何とおっしゃいますか。
107. 〈猫〉 【リスト 107】
108. 〈鈴〉 【リスト 108】
109. 〈アメリカ〉【リスト 109】 …地図のこの国を何といいますか。米国のことです。
110. 〈髭〉 【リスト 110】
111. 〈息〉 ……口からハーツとはくもの、これを何とおっしゃいますか。
112. 〈鏡〉【リスト 112】 …顔をうつすための、こういうものを何とおっしゃいますか。
113. 〈N T T〉 …昔の「電電公社」、電話や電報を扱っている会社のことを、ふだん、何と呼んでいらっしゃいますか。
114. 〈知事〉 ……市でいちばん上の人を「市長」と言いますが、県でいちばん上の人を何とおっしゃいますか。
115. 〈テレビ〉【リスト 115】 …このような機械を何とおっしゃいますか。
116. 〈チャンネル〉【リスト 115】 …それでは、この部分は何とおっしゃいますか。
117. 〈辛子〉 …こちらの名産の小さいなすをつける辛い粉を何とおっしゃいますか。
118. 〈地図〉 【リスト 118】
119. 〈胃〉 【リスト 119】
120. 〈絵〉 【リスト 120】
121. 〈汗〉 ……夏働くと背中からだらだら流れるものを何とおっしゃいますか。
122. 〈鉛筆〉 【リスト 122】
123. 〈インク〉【リスト 123】 *インキでも可。

2.3.2. 単語読み

リストに書かれた単語を読むときの発音を調査した(以下ではこれを「単語読み」と呼ぶ)。以下に記した【600 番代の設問】がそれである。問 618～問

630 は、今回の場面差調査とは直接関係のない項目であるが、関連項目として含めたものである(分析結果の報告は省略)。

調査員は調査票に従い「発音に注意しながら少し改まった調子で読んでみて下さい」と回答者に指示した。リストに書かれた単語を発音に注意しながら読むのであるから、標準的であると回答者に意識される発音が最も現れやすい場面、すなわち共通語音声の使用が最も期待される場面である。このあと説明する他者への伝達場面での発音を見る設問では、方言音声が最も使われやすいところをとらえようとしているが、この設問では、逆に、共通語音声が最も使われやすいところをとらえようとしている。なお、「場面」という用語は、どのような関係にある人物を話し相手とする状況であるかとか、その場の公式性・改まりの度合いがどのようなものであるか等を表わす用語である。リストに書かれた単語を読むという状況は、発話の「場面」というよりもむしろ発話の「スタイル」と呼ぶべきであろうが、ここではそれも含めて「場面」と呼ぶことにする。

調査の現場では、これも録音のみを行い、発音の記録は、調査終了後に尾崎喜光が録音を聴き取ることにより行った。

【600 番代の設問】

では今度は、次のことばを発音に注意しながら少し改まった調子で読んでみて下さい。(録音のみ；調査者は解説をしない；リストは1ページにつき3語)

【リスト 601～630】

- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| 601. 〈西瓜〉 | 602. 〈柿〉 | 603. 〈鳥〉 |
| 604. 〈窓〉 | 605. 〈駅〉 | 606. 〈税務署〉 |
| 607. 〈猫〉 | 608. 〈鈴〉 | 609. 〈アメリカ〉 |
| 610. 〈髭〉 | 611. 〈息〉 | 612. 〈鏡〉 |
| 613. 〈N T T〉 | 614. 〈知事〉 | 615. 〈テレビ〉 |
| 616. 〈チャンネル〉 | 617. 〈辛子〉 | 618. 〈地図〉 |
| 619. 〈紙クズ〉 | 620. 〈宝クジ〉 | 621. 〈時間〉 |
| 622. 〈図鑑〉 | 623. 〈鉛筆〉 | 624. 〈インク〉 |
| 625. 〈胃〉 | 626. 〈絵〉 | 627. 〈汗〉 |
| 628. 〈癖〉 | 629. 〈風邪〉 | 630. 〈小銭〉 |

2.3.3. 新聞見出し記事の読みと伝達

調査員の質問に答えたりリストに書かれた単語を読むなど、単語を単独で発音したときと、当該の単語を含む文として読んだり、他者に自分の言葉で文の形で伝えるときとでは、発音が異なる可能性がある。そこで、次の方法により、後者の発音がどのようなものであるかを調べることにした。

発音をチェックするための項目を含む次の9つの架空の「新聞見出し記事」をリストとして用意し、回答者に提示した。

- (1) 今年はスイカは安いが、柿は高い
- (2) ジェット機の窓に カラス激突
- (3) 駅の北側に税務署移転
- (4) 猫に鈴、はやる *ペットの飼い方の流行についての記事
- (5) アメリカで髭、はやる *外国のファッションについての記事
- (6) 息で曇らぬ鏡を發明
- (7) NTT社長、知事と会談
- (8) テレビからチャンネルなくなる *番組を切り替える装置の変化についての記事
- (9) 白いカラシ、新発売

下線部分が音声に関する注目箇所である。ただし、回答者に示すリストには下線は付されておらず、どこがチェックポイントであるか、あるいはそもそもどのようなチェックがなされているかは分からないようになっている。

回答者には、調査員が調査票の文言に従い簡単な状況説明を口頭で加え記事の意味を十分理解させた上で、一度黙読させた。その後、まずはそれを調査員に向かってそのまま読ませた(以下ではこれを「短文読み」と呼ぶ)。次いで、その内容を他者に伝達する場面を想定させ、回答者自身の言葉で(ただしチェックポイントとした語は含めて)その相手に向かって言うつもりで発話してもらった。少し先に示した【300番代の設問】が一連の設問である。

回答者に想定させた伝達の相手は、回答者との「親疎」の度合いの違いにより次の3種とした。

一つは、問 202 で回答させた「一番気楽に話をする相手」である(以下ではこれを「親しい相手」と呼ぶ)。従って、回答者が想定した具体的な人物は、回答者ごと異なる。

他の相手の一つは、調査現場で回答者に質問している調査員である。調査

では、国立国語研究所員以外の調査員も、「国立国語研究所の者」と名乗っている。調査依頼の段階で、その研究所が東京にあることは回答者は了解している。回答者と調査員は初対面であるので(厳密に言えば前年度と同じ調査員から調査を受けた回答者が 33.7% [=59 人] いる)、「東京から来た初対面の人」と話をする場面という想定である(以下ではこれを「疎遠な相手」と呼ぶ)。

もう一つは、それらの中間の相手として「国勢調査員」を想定させた。「地元の人ではあるが初対面の人」という設定である(以下ではこれを「中間的相手」と呼ぶ)。年齢は 50～60 代で同性と限定した。「同性」を「同姓」と誤解させないため、調査の現場では、回答者の性別に従い「男の人」「女の人」と言い換えた。

問 202 の「親しい相手」の回答は図 3-a のようであった。

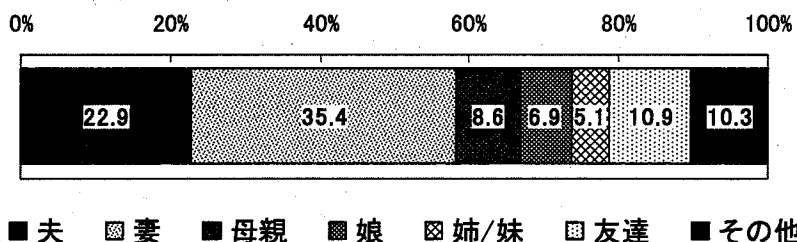


図 3-a 一番気楽に話をする相手

「配偶者」(「夫」+「妻」)が最も多く全体の約 6 割を占める。「友達」「母親」がそれぞれ 1 割程度でこれに続き、さらに「娘」「姉/妹」がある程度見られる。全体としてはこのような相手を想定してなされたのが「親しい相手」の回答である。

なお、調査では、もしその相手が調査に同席している場合は、相手に実際に話しかけてもよいとした。同席していたか否かは図 3-b のようであった。

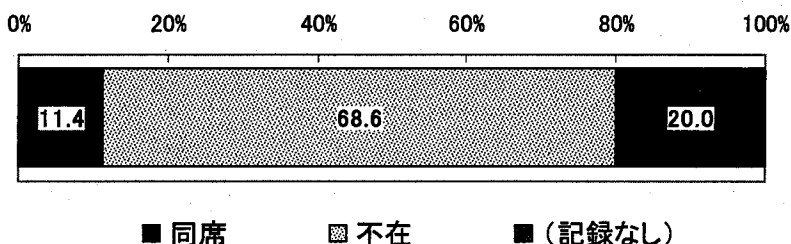


図 3-b 「一番気楽に話をする相手」が調査に同席していたか否か

「同席」が約1割、「不在」(非同席)が約7割、記録なしが2割である。多くの場合、その相手は実際にはその場におらず、回答者には相手が目の前にいるつもりで演じてもらったことになる。なお、「同席」(20人)の内訳は、妻が12人、夫と母親が各3人、娘と嫁が各1人であった。

先の図3-aを男女別に示すと図4のようである。

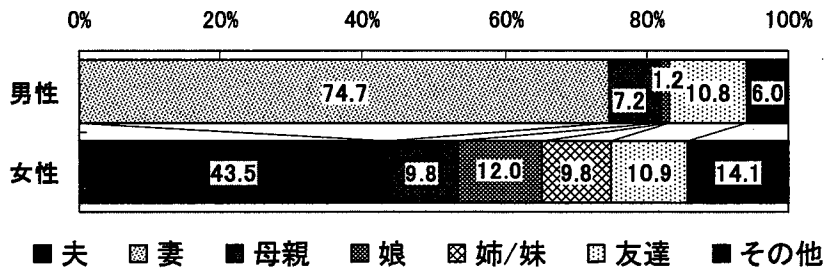


図4 一番気楽に話をする相手(男女別)

男性は「妻」が非常に多く7割半を占める。女性の場合も最も多いのは「夫」で4割以上を占めるが、それ以外もある程度ありバラエティーに富む。男性では少ない「娘」「姉/妹」もある程度見られる。「その他」の数値も女性は高めだが、その内訳は「嫁」「息子」が比較的多い。

図3-aを、本章の分析で用いる3つの年齢層別に示すと図5のようである。

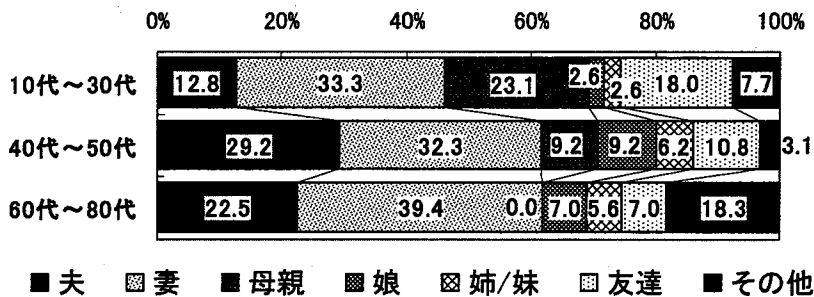


図5 一番気楽に話をする相手(年齢層別)

どの年齢層でも「配偶者」(「夫」+「妻」)が最も多いが、10代~30代では「母親」や「友達」もそれぞれ2割前後いる。60代~80代は他と比べ「その他」の数値が高めだが、その内訳は「嫁」「息子」が比較的多い。

この設問も、調査の現場では録音のみを行い、聴き取りはこれも事後尾崎喜光が録音により行った。

300番台の設問は次のとおりである。

【300番代の設問】

それでは、別のことについてお尋ねします。

【リスト 310】

311. 新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。野菜や果物の値段の予想についての記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈今年はスイカは安いが、柿は高い〉

312. では、この話しの内容を、●●さん(202の回答)に向かって自分のことばで伝えるとしたら、ふだんどんなふうに言いますか？ 多少ことばを換えて言ってもかまいません。(つかえたら再度)

◆「スイカ」「柿」が含まれている？ 含まれていない場合は、リストのその文字の部分指で差し、再度発話を求める。以下でも同様。

◆引用的発話になった場合には、「最後のところを〈高いそうだよ〉などと言うとしたらどうなりますか？」などと質問し、再度発話を求める。以下でも同様。

313. では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？(つかえたら再度)

314. では、鶴岡の国勢調査の人(50～60代で同性で初対面の人)が家に来たとして、雑談中、その人に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？(つかえたら再度)

【リスト 320】

321. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。空港での事故の記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈ジェット機の窓に カラス激突〉

322. ～324. 【312.～314.と同様】

【リスト 330】

331. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。鶴岡市の役所の移転の記事です。まず、一度目を通してから、私に向かっ

て普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈**駅**の北側に**税務署**移転〉

332. ~ 334. 【312. ~ 314. と同様】

【リスト 340】

341. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。
最近のペットの飼い方の流行についての記事です。まず、一度目を通して
から、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈**猫**に**鈴**、はやる〉

342. ~ 344. 【312. ~ 314. と同様】

【リスト 350】

351. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。
外国の男性のファッションについての記事です。まず、一度目を通してか
ら、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈**アメリカ**で**髭**、はやる〉

352. ~ 354. 【312. ~ 314. と同様】

【リスト 360】

361. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。
冬の朝などに手鏡を使おうとすると、よく曇ってしましますが、そうなら
ない新製品を発明した、という記事です。まず、一度目を通してから、私
に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈**息**で曇らぬ**鏡**を発明〉

362. ~ 364. 【312. ~ 314. と同様】

【リスト 370】

371. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。
政治記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみ
て下さい。(つかえたら再度)

〈**NTT**社長、**知事**と会談〉

372. ~ 374. 【312. ~ 314. と同様】

【リスト 380】

381. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。少し前までは、放送の番組を切り替える時にはツマミを回していましたが、最近リモコンになってツマミがなくなりました。将来は全ての製品がそうなる、という記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈テレビからチャンネルなくなる〉

382. ~384. 【312. ~314. と同様】

【リスト 390】

391. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。食品会社がちょっと変わった色の調味料を新しく売り出した記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈白いカラシ, 新発売〉

392. ~394. 【312. ~314. と同様】

3. 分析

場面差調査の主たる目的は、音声項目について言えば、これまでの継続調査の「絵」による調査方法で、鶴岡市民の共通語音声使用/方言音声使用のどの側面をとらえてきたかを検証することにある。従って、第3回の継続調査の結果を場面差調査の結果と照らし合わせることになる。しかしながら、場面差調査の回答者は、継続調査とパネル調査の回答者の中から、調査に対し「積極的」と判定される等の条件を満たした者を抽出して得たものである。従って、母集団(鶴岡市民)に対する代表性は確保されておらず、それが確保されている継続調査と直接比較できるデータではない。そこで、その隔たりを埋めるべく、継続調査とパネル調査の回答者の中から、場面差調査の対象となった175人を抽出し、その結果もあわせて示すこととした。

しかし、継続調査のデータは、26人の調査員が調査の現場で記録して得たものであるのに対し、場面差調査のデータは、事後に尾崎喜光が録音テープを聴き取ることにより得たものという違いがある。場面差調査の中間報告をした尾崎喜光(2000)で示したデータの中には、恐らくそうした聴き取りの違

いが原因のひとつとなり、継続調査・パネル調査 175 人と場面差調査 175 人の同一項目の結果に、数値の開きがやや大きな項目も見られた。

そこで、その隔たりを埋めるべく、継続調査とパネル調査の音声項目については尾崎が改めて全ての録音の聴き取りを行い、参考データとして付すこととした。聴き取りは2000年7月から2004年4月にかけて断続的に行った。

以上をまとめると、本章で示すデータは次の10種となる。

- ①「絵(継続=405人)」……………第1年次の「継続調査」405人のデータ
- ②「絵(I=175人)」……………第1年次の「継続調査」「パネル調査」のうち第2年次で対象となった175人のデータ
- ③「絵(継続=405人)尾崎判定」…上記①の尾崎聴き取りによるデータ
- ④「絵(I=175人)尾崎判定」……上記②の尾崎聴き取りによるデータ
- ⑤「絵(II=175人)」……………第2年次調査の「絵」によるデータ
- ⑥「単語読み(II=175人)」……………同じく「単語読み」によるデータ
- ⑦「短文読み(II=175人)」……………同じく「短文読み」によるデータ
- ⑧「疎遠な相手(II=175人)」……同じく「疎遠な相手」(調査員)に対するデータ
- ⑨「中間的相手(II=175人)」……同じく「中間的相手」(国勢調査員)に対するデータ
- ⑩「親しい相手(II=175人)」……同じく「親しい相手」(家族や友達など)に対するデータ

以下、調査項目ごとに、得られた結果を報告する。

3.1. 有声化

非語頭の無声子音の有声化については「柿」のキの子音、「猫」のコの子音を調査項目とした。「柿」は図 6-a、「猫」は図 7-a の結果が得られた。凡例の「その他・NR など」の「NR」は「無回答」の意味である。

継続調査の結果は各図の①のとおりである。有声音（凡例の「ギ」および「ゴ」；鼻濁音でないので注意）の使用は、「柿」が 6.4%、「猫」が 7.9%とかなり少ない。継続調査とパネル調査の回答者の中から、翌年行った場面差調査の回答者 175 人を抽出した②の数値は、「柿」が 7.4%、「猫」が 13.1%である。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含むため数値は①よりも多少上昇するが、少数派であることに変わりはない（平均年齢は、

継続調査 42.0 歳， パネル調査 61.6 歳， 場面差調査 53.7 歳である）。

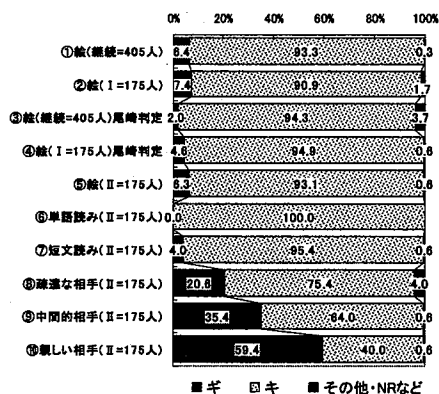


図 6-a 「柿」のキの発音

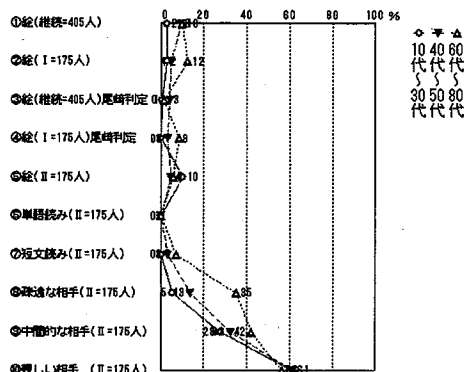


図 6-b 「柿」のキの[ギ]の発音

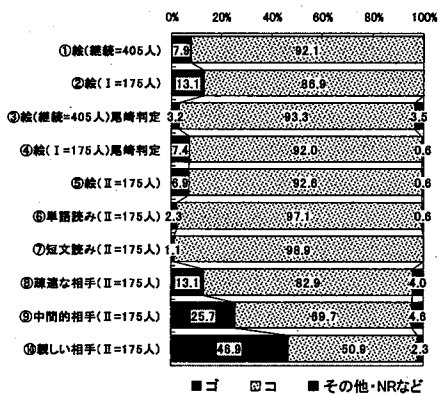


図 7-a 「猫」のコの発音

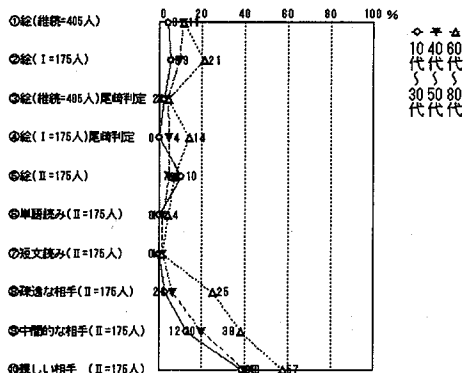


図 7-b 「猫」のコの[ゴ]の発音

①②について尾崎が聴き取りをした③④は，尾崎の有声音の判定が厳しい傾向にあったためか，有声音の数値は全体としてほぼ半減する。①②と③④の間には，このような数値自体の違いはあるものの，有声音の使用がかなり少数である点は変わらない。

⑤以降は場面差調査の結果である。聴き取りは全て尾崎による。

⑤は継続調査で行ってきた方法である「絵」による結果である。同一の対象者に対し同一の方法で調査し同一の者が聴き取った④とほぼ同じ結果になることが期待されるが，おおよそそのようであり（無効データ 2 件を除く判

定の一致率は「柿」「猫」とともに93.6%), 有声音の数値は6~7%であった。

⑥は「単語読み」の場合であるが、⑤に比べ有声音の数値は低下し、「柿」が0.0%、「猫」も2.3%に過ぎない。リストアップされた単語を読むという状況では、方言音声である有声音が使われることはほとんどないと言ってよい。

⑦は新聞の見出し記事をそのまま読む「短文読み」の場合である。発音に対する注意の度合いは「単語読み」よりも低下し有声音の数値が上昇するのではないかと予測したが、「柿」が4.0%、「猫」が1.1%と語により異なる傾向を示し、必ずしも上昇するとは言えない。有声音の数値は「単語読み」も「短文読み」も非常に低いが、これらは「文字を読む」という点では共通であり、「単語」か「短文」かの違いよりも、その共通点の効果の方が大きいようである。

⑧は、⑦で読ませた短文を「疎遠な相手」(目の前にいる調査員)に自分の言葉で伝える場合である。有声音の数値は大幅に上昇し、「柿」が20.6%、「猫」が13.1%となる。模擬的ではあるが、人を伝達する会話場面では、東京から来た初対面の人に対してであっても、方言音声の有声音を使う人がある程度いる。

⑨の「中間的な相手」(地元の国勢調査員)に対する場面では、有声音の数値はさらに上昇し、「柿」が35.4%、「猫」が25.7%となる。初対面という点では「疎遠な相手」と同様であるが、それが地元の人となると、有声音の使用はさらに上昇する。

⑩の「親しい相手」(配偶者を中心とした家族や友達など)に対する場面では、数値はさらに上昇し、「柿」が59.4%、「猫」が46.9%となる。恐らく方言音声が最も使われやすい状況であろうが、そのような場面では回答者のほぼ半数が有声音を用いている。場面差調査の175人は、鶴岡市民全体の中から無作為に抽出されたわけではないので、鶴岡市民の平均的な数値は恐らくこれと異なっていよう。①対②(あるいは③対④)の数値の関係から推測すると、その数値はいくぶん下がるものと推測されるが(この点は⑤~⑨の場面も同様)、それでも「親しい相手」に対しては半数近くの市民が有声音を使い、場面による使い分けも行っているものと考えられる。

すなわち、場面差調査で得られた①の「絵」の調査方法による有声音の数値は、鶴岡市民の言語生活の中でも有聲化の度合いが低い場面、逆に言えば共通語音声である有聲化しない発音の使用がかなり高い場面をとらえたもの

であり（ただし「単語読み」や「短文読み」のような文字を読む場面ほどは高くない）、人と会話をする場面、特に家族や友達など地元の親しい人と会話をする場面では、有声音はまだ普通に使われていると推測される。

このように、有声音の使用には、場面による使い分けが明確に認められる。恐らくこれは、第3回の調査時点だけのことではなく、第1回・第2回の調査時点においても同様であった可能性がある。すなわち、継続調査の「絵」による調査方法では、有声音の使用が少ない状況をとらえ続けてきたものと考えられる。

場面による使い分けは年齢差を伴いながら行われていることが推測される。場面差調査の175人が適度な人数で分散するよう「10代～30代」（39人[男性25人・女性14人]）、「40代～50代」（65人[男性25人・女性40人]）、「60代～80代」（71人[男性33人・女性38人]）の3つの年齢層に分け、前年度の継続調査等の結果と併せて有声音の数値を示すと、「柿」は図6-b、「猫」は図7-bのようであった。

場面差調査の⑤～⑩の部分を見ると、どの年齢層のグラフにも傾斜が認められ、有声音の使用は場面により異なる。つまり、どの年齢層でも、有声音と非有声音の使い分けがなされていることが分かる。

図6-a、図7-aで有声音の数値が低かった⑦の「短文読み」までは顕著な年齢差は認められないが、⑧～⑩では場面差とともに年齢差も明確に認められ、年齢層が高くなるほど有声音の数値が高くなる。ただし、「10代～30代」と「40代～50代」の数値は接近し、「60代～80代」はこれらと離れて数値が高い傾向にある（ただし「柿」の⑩は例外）。すなわち、どの年齢層でも場面による使い分けが見られるのであるが、若年層になるに従い、有声音の使用は場面を通じて減少する。特に「60代～80代」から「40代～50代」にかけての衰退が著しい。場面による使い分けには、こうした年齢差も同時に伴っている。

3.2. 鼻音化（入り渡り鼻音化）

非語頭の有声子音の鼻音化（有声子音の直前に軽微な鼻音を挿入する入り渡り鼻音化）については「鈴」のズの子音、「窓」のドの子音を調査項目とした。すなわち、「鈴」をス～ズ、「窓」をマ～ドのように発音するか否かを調査した。「鈴」は図8-a、「窓」は図9-aの結果が得られた。

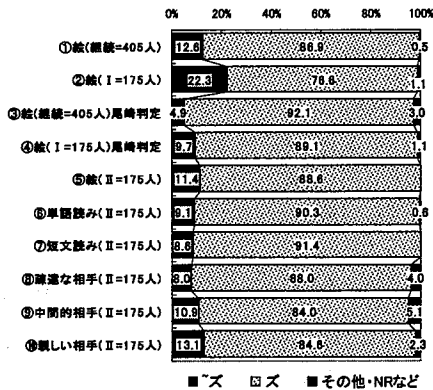


図 8-a 「鈴」のズの発音

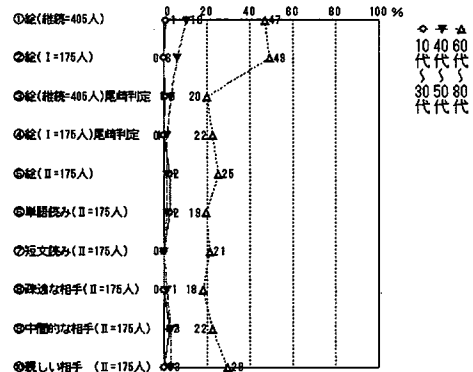


図 8-b 「鈴」のズの[ズ]の発音

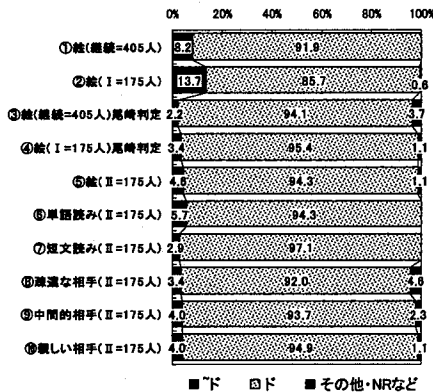


図 9-a 「窓」のドの発音

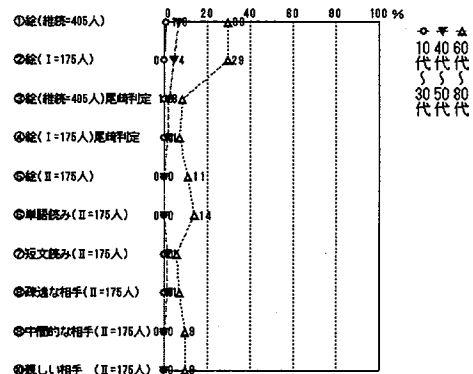


図 9-b 「窓」のドの[ド]の発音

①の継続調査の結果を見ると、鼻音の使用は、「鈴」が 12.6%、「窓」が 8.2% とかなり少ない。継続調査とパネル調査の回答者から、翌年実施した場面差調査の回答者を抽出して集計した②の数値は、「鈴」が 22.3%、「窓」が 13.7% であった。①と比較すると多少上昇するものの、少数派であることに変わらない。

③④の尾崎による聞き取りは、鼻音の判定が厳しい傾向にあったためか、鼻音の数値は全体として①②の 1/2~1/3 程度に低下する。鼻音の使用が少数派である点はやはり変わらない。

⑤は従来の「絵」による場面差調査の結果である。鼻音の数値は前年度の④とほぼ同様で、「鈴」が 11.4%、「窓」が 4.6% であった。

⑥は「単語読み」の場合である。先の有声音で認められたような⑤からの顕著な数値の低下は見られず、「鈴」は 9.1%、「窓」は 5.7%であった。⑦の「短文読み」の場合もこれと大差なく、「鈴」は 8.6%、「窓」は 2.9%であった。リストアップされた単語や短文など「文字を読む」状況だからと言って、方言音声である鼻音の使用が「絵」よりも顕著に減少するということはないと言ってよい。

⑦の短文を自分の言葉で伝える⑧～⑩も、鼻音の数値はこれまでと大差なく、「鈴」で 10%前後、「窓」で 5%程度にとどまる。有声音で見られたような数値の大幅な増加、すなわち場面による鼻音と非鼻音の使い分けは特に認められない。⑩は生活の中で最も方言音声の使用されやすい場面と考えられるが、それでも数値がこの程度にとどまるということは、鼻音の使用は、生活全般において現在消滅に向かいつつあるものと考えられる。これらの数値が、「絵」による④や⑤と大差がないことを考えると、聴き取り者や調査対象が異なるため数値自体にはやや開きがあるが、①の継続調査の「絵」による方法では、結果的に生活全般に渡る鼻音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別に鼻音の数値を示すと、「鈴」は図 8-b、「窓」は図 9-b のようであった。

「10代～30代」と「40代～50代」の数値はきわめて低く、場面に関わらず鼻音はほとんど使われていない。これに対し「60代～80代」は、尾崎が聴き取りを行った③～⑩については、「鈴」で 20%前後、「窓」で 10%前後と、少数ながらもある程度は使用者が見られる。「10代～30代」と「40代～50代」の数値が接近し、「60代～80代」がこれらと離れる点は、有声音の⑧～⑩と共通する。鼻音も有声音も、「60代～80代」から「40代～50代」にかけての衰退が著しかったことが、この間の年齢差に反映している部分が大いと考えられる。

このように鼻音には年齢差は認められるものの、場面による明瞭な使い分けは、いずれの年齢層においても認められない。有声音では年齢差を伴いながらの場面差が認められたが、鼻音では場面差はなく年齢差のみである。

なお、図 8-a、図 9-a の①②と③④の間に認められた数値の開きは、主として「60代～80代」の鼻音の判定に起因している。

3.3. 唇音化（唇音声Ⅰ）

カ行音・ガ行音の唇音化，すなわちカをクワ，ガをグワとする発音については，「西瓜」のカの子音を調査項目とした。非語頭であるため，子音の部分は有声化したガ・グワで現われうるが，ここでは有声か無声かの区別はせず，「カ/ガ」か「クワ/グワ」かという対立で集計した。結果は図 10-a のようであった。

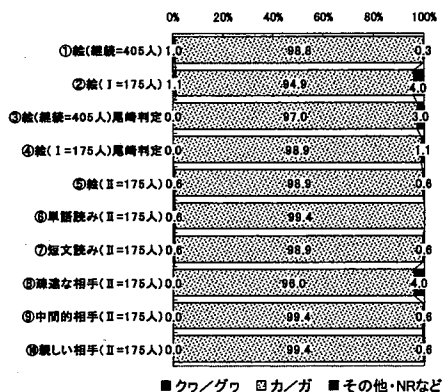


図 10-a 「西瓜」のカの発音

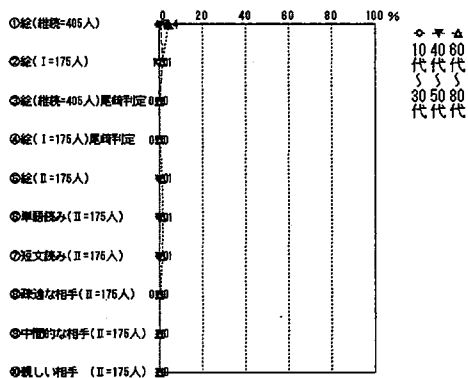


図 10-b 「西瓜」のカの [クワ/グワ] の発音

①の継続調査の結果を見ると，唇音クワ/グワの使用はわずか 1.0%に過ぎない。②以降もこれとほぼ同様であり，場面に関わらず唇音の使用はほぼ皆無と言ってよい。場面による唇音と非唇音の使い分けも当然認められない。方言音声最も使用されやすい⑩の場面でも使用がゼロということは，唇音の使用は，生活全般において現在ほぼ完全に消滅したということであろう。①の従来の「絵」による方法では，結果的に生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別に唇音の数値を示すと図 10-b のようであった。

どの年齢層でも，場面に関わらず数値はほぼゼロである。唇音は，語中の有声音や鼻音よりも共通語化が早く進み，すでに「60代～80代」においてほぼ消滅している。このように唇音は，高年層の段階ですでに共通語化が生活全般に行き渡っており，年齢差も場面差も認められない。

3.4. 唇音化（唇音声Ⅱ）

ハ行子音の唇音化については「髭」のヒの子音を調査項目とした。すなわ

ちヒゲと発音するか、それともフィゲのように発音するかである。結果は図 11-a のようであった。

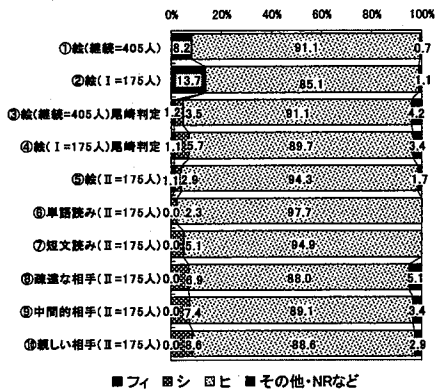


図 11-a 「髭」のヒの発音

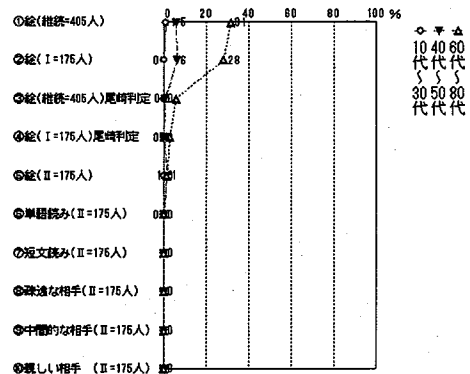


図 11-b 「髭」のヒの[フィ]の発音

①②では、調査票のチェック欄の選択肢がフィかヒかの二者択一であったためか現れていないが、尾崎が聴き取りをした③以降では、関東地方の一部などで行われるシゲという発音も見られる。ただし、その数値は、場面を通じて10%以下にとどまる。このシゲという発音も方言音声の一つではあるが、ここではフィとヒの対立に注目する。

①の継続調査の結果を見ると、唇音フィの使用は8.2%にとどまる。平均年齢が高いパネル調査の回答者を含む②は多少数値が上昇するものの13.7%にとどまる。これを尾崎が聴き取りをした③④では、唇音はわずか1%程度に過ぎない。⑤以降もほぼこれと同様であり、唇音の使用は皆無に近い状況である。場面による唇音と非唇音の使い分けも当然認められない。方言音声が最も使用されやすい⑩でも使用がゼロということは、先の唇音クッと同様、唇音フィも生活全般において現在ほぼ消滅したということであろう。聴き取り者が異なるため数値自体は多少異なるが、①の従来の「絵」による方法では、結果として生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別に唇音の数値を示すと図 11-b のようであった。

①②を除けば、唇音の使用は、どの年齢層でも、場面に関わらずほぼゼロである。尾崎の聴き取りによる③以降について言えば、唇音フィはすでに「60代～80代」においてほぼ消滅しており、年齢差も場面差も認められない。ただし①②では、「60代～80代」の唇音フィの使用は30%ほどあり、それより

も若い年齢層との間に年齢差が見られる。これが確かだとすれば、この間に共通語化が進んだ可能性が考えられる。

3.5. 口蓋化

セ・ゼの口蓋化，すなわちセをシェ，ゼをジェとする発音については，「税務署」のゼの子音を調査項目とした。結果は図 12-a のようであった。

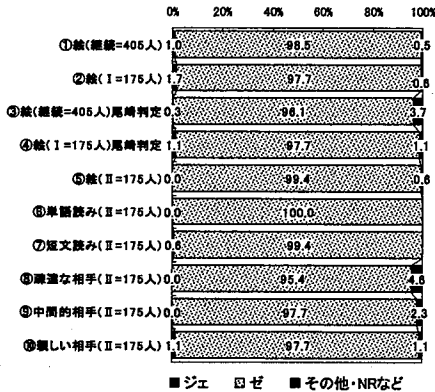


図 12-a 「税務署」のゼの発音

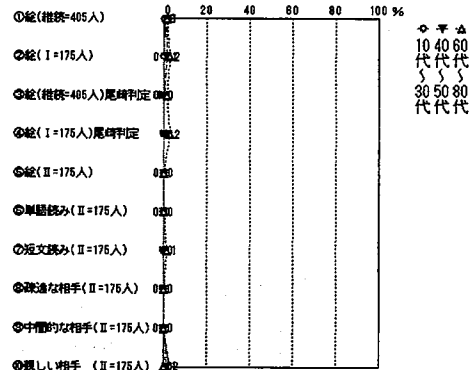


図 12-b 「税務署」のゼの [ジェ] の発音

①の継続調査の結果を見ると、口蓋音ジェの使用はわずか 1.0%である。②以降もこれとほぼ同様であり、場面に関わらず口蓋音の使用は皆無に近い。場面による使い分けも認められない。方言音声最も使用されやすい⑩でも使用がほぼ皆無であるということは、口蓋音の使用についても、現在生活全般においてほぼ消滅したということであろう。①の従来の「絵」による方法は、結果的に生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別に唇音の数値を示すと図 12-b のようであった。

どの年齢層も、場面に関わらず数値はほぼゼロである。先に見た二種の唇音と同様、口蓋音ジェもすでに「60代～80代」においてほぼ消滅している。年齢差も場面差も認められない。

このように、現在の鶴岡市では、口蓋音ジェは言語生活全般においてほとんど使われていない。しかし、図 1 によると、1972年の時点では約 4%、1950年の時点では約 50%が使用していた。つまり、自分では使わないけれども上の世代が使っているのを聞いたことがあるという人が、場面差調査の回答者の中に少なからずいることが考えられる。当然その人たちは、ジェは方言音

声だという意識を持っていよう。そうした意識が強く働くと、本来ジェと発音してよい音（おもに外来語音）までも、過剰修正してゼと発音する人がいそうだ。陣内正敬(1996:32-3)は、口蓋音ジェを持つ福岡市において、「JR」をゼーアールと発音する人が中高年にいることを報告している。このような過剰修正が見られる場合、距離を置くべき相手に対する場面ほど、発音を意識してゼと発音することが予想される。そこで、「ジェット機」のジェによりそれを調べることにした。結果は図 13-a のようであった。なお、この項目では⑤⑥は調査していない。そのため本書の資料 1 で継続調査の質問文が確認できないが、ジェット機の描かれた絵を提示しつつ「プロペラの無い、このような飛行機のことを何とおっしゃいますか。庄内空港の旅客機などは、これです」と質問した。

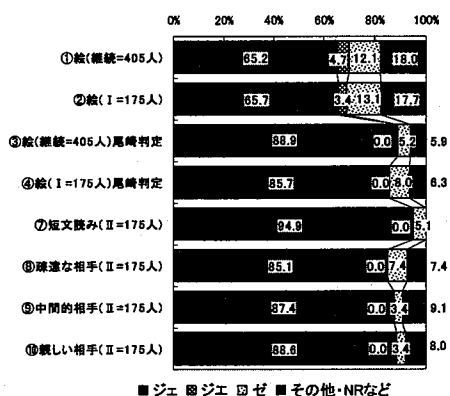


図 13-a 「ジェット機」のジェの発音

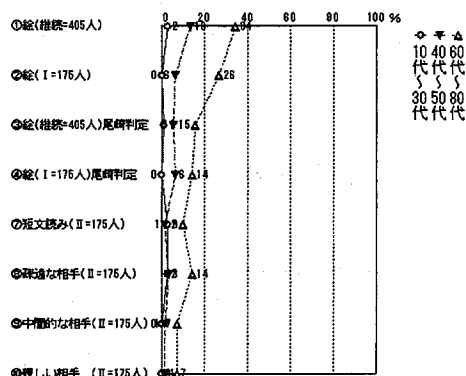


図 13-b 「ジェット機」のジェの[ゼ]の発音

本来の音であるジェの数値が非常に高く、ゼは 5%前後にとどまる。そのゼの数値に注目すると、「ジェット機」という文字を含む⑦の「短文読み」は別として、④～⑩においては、④に近づくほどゼの数値が高くなる傾向が多少見られる。明確な傾向ではないが、本来は誤りであるゼを規範的な発音と意識し、ジェと使い分けをしている人がいるようだ。

その点をもう少し詳しく見るために、④⑧⑨⑩の発音をパタンとして見てみよう。175人のうちこれら 4 場面全てでジェかゼを用いた回答者は 137 人いた(残り 38 人はいずれかにそれ以外の発音や無回答を含む)。このうち 116 人(84.7%; 母数は 137 人)は 4 場面ともジェとする発音、つまり使い分けを特にしない回答者である。逆に 4 場面ともゼとする回答者は皆無であった。

残りの 21 人(15.3%)がジェとゼの両方を使った回答者であるが、回答が 2 人以上いたパターンは、「ゼ/ジェ ジェ ジェ」9 人(6.6%),「ジェ/ゼ/ジェ ジェ」5 人(3.6%),「ジェ ジェ/ゼ/ジェ」2 人(1.5%)であった。この他、回答者が 1 人だけのパターンは「ゼ ゼ/ジェ ジェ」「ゼ ゼ ゼ/ジェ」「ゼ/ジェ ジェ/ゼ」「ジェ/ゼ ゼ ゼ」「ジェ/ゼ/ジェ ゼ」であった。すなわち、使い分けをする場合は、④とそれ以外とで区別するパターンが最も多い。普段話すときはジェであっても、単語を単独で発音する状況ではゼとするパターンが一定の割合見られる。これに次いで、単語単独の発音や家族や地元の人と話すときはジェだが、東京から来た初対面の人と話すときはゼというパターンが見られる。数値としては大きくないが、個人レベルで見た場合、単語単独で発音したり距離を置く相手に話す場面では、過剰修正をしている回答者が確かにいることが確認される。

図 13-b はゼの発音を年齢層別に示したものである。若年層になるほどゼは減少しており、年齢差が認められる。ゼを用いる人がある程度いるのは「60 代～80 代」であるが、⑦を除く④～⑩においては、④に近づくほど数値が高くなる傾向が若干見られる。

なお、図 13-a の①②には「ジェ」と 2 モーラで発音する回答も見られるが数値は低い。③以降の尾崎による判定では、この発音は特に見られない。

3.6. 中舌化 I (母音 u)

母音 u の中舌化については「烏」の s の母音を調査項目とした。結果は図 14-a のようであった。

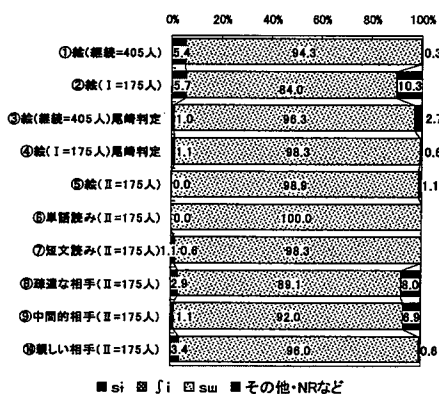


図 14-a 「烏」の s の発音

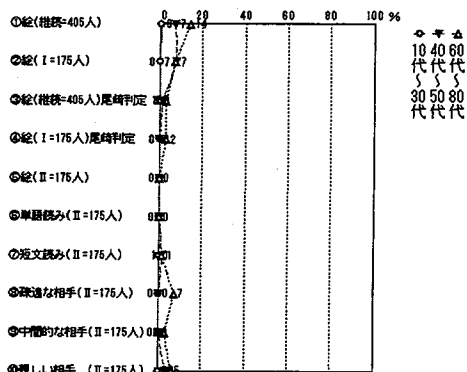


図 14-b 「烏」の s の [si] の発音

①の継続調査の結果を見ると、中舌音 si の使用は 5.4%に過ぎない。②もこれとほぼ同様である。尾崎の聴き取りによる③以降ではさらに数値が下がり、中舌音 si はどの場面でもほとんど使用されていない。ʃi との使い分けも、数値がゼロである⑤⑥と数パーセントある⑦以降との間に多少見られるかもしれないが、明確な形では特に認められない。母音 u の中舌音 si は、生活全般においてほぼ消滅したということであろう。①の継続調査の「絵」による方法では、結果的に生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別の中舌音 si の数値を示すと図 14-b のようであった。

尾崎の聴き取りによる③以降では、「60代～80代」の⑧以降で 5%前後の使用があり、⑦までとの間に多少使い分けが見られそうだが、それ以外はどの年齢層も、場面に関わらず数値はほぼゼロである。明確な形での使い分けはどの年齢層にも認められないと言ってよい。高年齢の段階ですでに共通語化が生活全般に行き渡っており、年齢差も場面差も認められない。

3.7. 中舌化Ⅱ（母音 i）

母音 i の中舌化については「辛子」のシと「知事」のジの母音を調査項目とした。「辛子」は図 15-a、「知事」は図 16-a の結果が得られた。

継続調査の結果は各図の①のとおりである。中舌音 si/zi の使用は、「辛子」が 25.4%、「知事」が 29.6%である。共通語音の ʃi/zi と比べると少数派ではあるが、これまで見てきた音声の中では方言音が比較的良好に用いられている。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む②は、si/zi の数値が若干上昇し、「辛子」が 29.1%、「知事」が 32.6%である。

①②について尾崎が聴き取りをした③④の中舌音 si の数値は、「辛子」も「知事」も 1割前後にまで下がる。「辛子」については、③④で sm の発音が 10数%見られるが、この発音は①②で用いた調査票の選択肢にはなく（ただし「その他」とすることは可能）、こうした発音が①②で現われた場合は中舌音 si と判定されたであろうことが、中舌音 si の数値の違いに反映された可能性がある（同じ事情は「知事」にも言える）。一方、「知事」については、①②では有効扱いとされたが③④では無効扱いとした「知事サン」等が 2～3割いたことが③④の有効母数を小さくし、これに連動して中舌音 zi の数値も小さくなった可能性がある。以上のほか、有声音の場合と同様に、尾崎による中舌音の判定が厳しい傾向にあった可能性も考えられる。

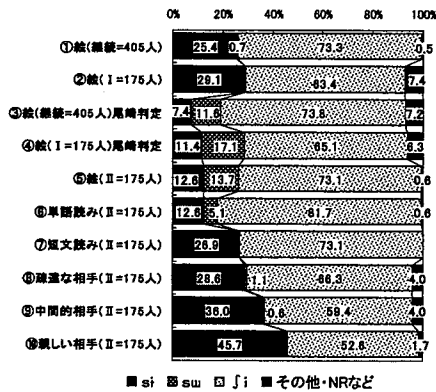


図 15-a 「辛子」のシの発音

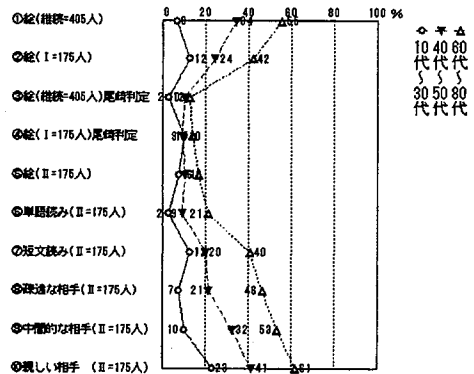


図 15-b 「辛子」のシの [s+] の発音

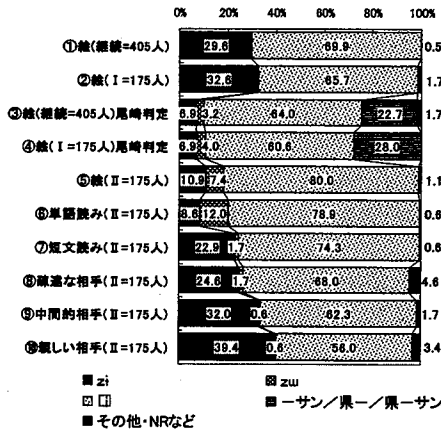


図 16-a 「知事」のジの発音

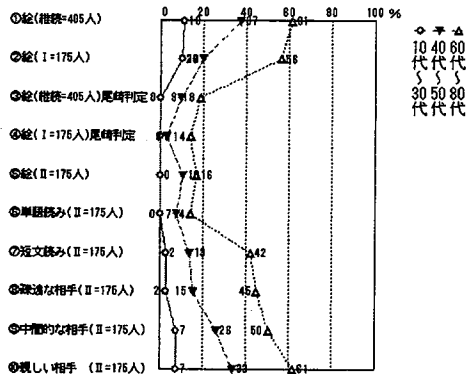


図 16-b 「知事」のジの [z(4)] の発音

⑤以降は場面差調査によるものである。⑤は「絵」による結果であるが、「辛子」の数値は④とほぼ同じである。「知事」も、④で約3割いた「知事サン」等の無効を除く部分で再集計すれば中舌音 zi は約1割と⑤の数値に近くなり、おおよそ④と同じと言ってよい状況である。

⑥の「単語読み」も、「辛子」の su の数値が下がるほかは、⑤の「絵」とほぼ同じ状況である。「絵」と「単語読み」は、特に中舌音 si/zi の数値について言えば、基本的に大きな違いは無いと言える。

これが⑦の「短文読み」になると、中舌音 si/zi の数値は倍増し、「辛子」が 26.9%、「知事」が 22.9%となる。同じく「読む」という言語行動であって

も、「単語読み」と比べると随分状況が異なる。「単語読み」では共通語の発音が強く意識され、中舌音を用いる人が少なくなるのであろう。

「単語読み」や「絵」では su/zu が見られる。すなわち、「辛子」をカラス、「知事」をチズとする発音であるが、これも、本来 $ʃi$ と su 、 $ʒi$ と zu を区別しないにも関わらず、それらを区別する“明瞭な”発音を得ようとする意識が強く働いた結果、共通語にない方の発音を選択してしまったものと考えられる。

この⑦の短文を他者に伝える⑧以降になると、中舌音 si/zi の数値はさらに上昇し、それが最大となる⑩では、「辛子」が 45.7%、「知事」が 39.4%となる。「親しい相手」に対しては、半数近くの人は今でも中舌音を用いている。中舌音 si/zi は、共通語音 $ʃi/ʒi$ と、場面による使い分けが明確になされている。

継続調査の①による中舌音 si/zi の使用は、尾崎聴き取りの③によれば 1 割程度になるが、鶴岡市民の言語生活の中でも中舌音 si/zi の使用が少ない場面、逆に言えば共通語音 $ʃi/ʒi$ の使用が多い場面をとらえたものと言える。人と会話をする場面、特に家族や友達など地元の親しい人との会話場面では、先に見た有声音と同様、母音 i の中舌音 si/zi はまだ普通に使われている。

年齢層別に中舌音 si/zi の数値を示すと 図 15-b、図 16-b のようであった。

中舌音 si/zi の数値は、場面を通じて高年齢層ほど高く、若年齢層ほど低い。こうした年齢差を伴いつつ、場面による使い分けはどの年齢層にも認められる。「40代～50代」が「10代～30代」に接近していた有声音の場合と異なり、3つの年齢層の間隔はほぼ等間隔となっている。有声音のように特定の年齢層で共通語化が一気に進むのではなく、徐々に進行しているようだ。ただし、最も若い「10代～30代」では、「親しい相手」の⑩であっても、中舌音は「辛子」で約 2 割、「知事」で約 1 割にとどまり、使い分けもそれほど顕著ではない。これよりも下の年齢層では、場面に関わらず中舌音 si/zi をほとんど用いず、従ってまた使い分けもほとんど見られない可能性がありそうだ。

3.8. ア行の e 音

ア行の e 音については「駅」のエを調査項目とした。結果は 図 17-a のようであった。

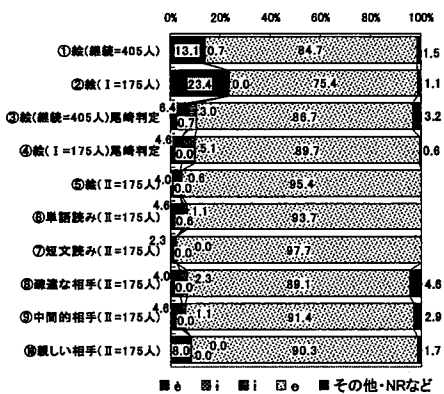


図 17-a 「駅」のエの発音

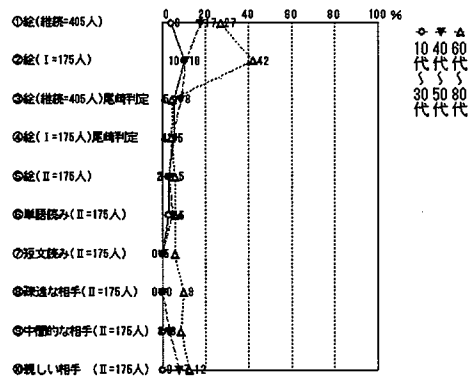


図 17-b 「駅」のエの[e]の発音

①の継続調査の結果を見ると、方言音である狭母音 *e* の使用は 13.1% であり、共通語音の *e* の使用と比べると少数派である。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む②は、*e* の数値が上昇し 23.4% となる。

①②について尾崎が聴き取りをした③④では、*e* の数値は 5% 程度にまで下がる。③④でやはり 5% 程度見られた *i* の発音が、①②の判定で用いられた調査票の選択肢になく、そのため①②では *e* と判定されたであろうことが、*e* の数値の違いに反映された可能性がある。なお、*i* の発音、すなわち「駅」を *イキ* とする発音は、*i* と *e* を区別せずその中間の *e* とする人にとっては、“明瞭な”音を得ようとする意識が強く働き、その結果共通語とは違う発音を選択してしまった可能性が考えられる。*e* の数値が低くなる原因については、このほか、尾崎による *e* の判定が厳しい傾向にあった可能性も考えられる。

⑤以降は場面差調査によるものである。⑩の「親しい相手」で数値が若干上昇する以外は、*e* の数値はいずれも 5% 程度であり、明瞭な形での場面による使い分けは認められない。尾崎の聴き取りによれば、*e* の発音は生活全般に渡り消滅寸前の状況である。「絵」による方法である①を尾崎が聴き取った③の数値は、結果的に生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別に *e* の数値を示すと図 17-b のようであった。

尾崎の聴き取りによる③以降では、⑦～⑩の間に多少年齢差が見られ、年齢が低くなるほど *e* の使用も低くなる。ただし、全体的にどの年齢層も数値は低めであるため、顕著な年齢差ではない。「40代～50代」と「60代～80代」では、⑩に近づくほど *e* の数値が多少上昇するが、顕著な増加と言える

ほどではない。明確な形での使い分けはどの年齢層にも認められないと言ってよい。高年齢の段階ですでに共通語化が生活全般に行き渡っており、年齢差も場面差も顕著なものは認められない。

3.9. ア行の i 音

ア行の i 音については「息」のイを調査項目とした。結果は図 18-a のようであった。

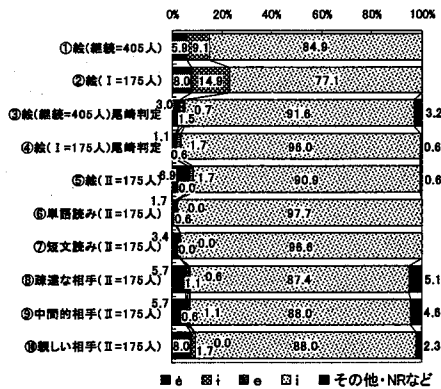


図 18-a 「息」のイの発音

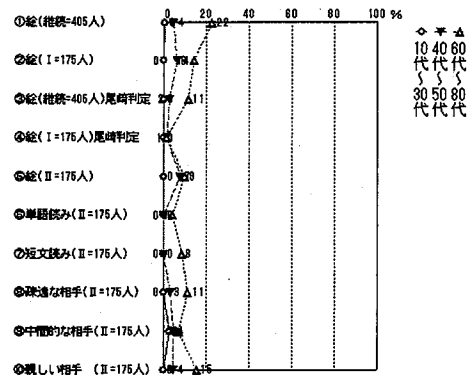


図 18-b 「息」のイの [é] の発音

①の継続調査の結果を見ると、éの使用は5.9%であり、共通語音のeと比べると少数派である。絶対的な数値は小さいが、é以上に数値が高い発音として、「駅」ではほとんど見られなかった中舌音のiがある。これらを合わせた非標準的発音は、「駅」のéとほぼ等しくなる。標準的発音(共通語音)の割合という点から見るならば、エとイはほぼ同じ数値ということになる。

①②について尾崎が聴き取りをした③④のéは、「駅」のéよりもさらに数値が下がり皆無に近づく。⑤以降も、⑩の「親しい相手」に近づくに従いéの数値は若干上昇傾向にあるものの、全般的に数値は低いままであり、明確な形での場面による使い分けは認められない。尾崎の聴き取りによれば、「息」のéの発音も、「駅」のéの発音と同様、生活全般に渡り消滅寸前の状況である。「絵」による方法である①を尾崎が聴き取った③の数値は、結果的に生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

年齢層別にéの数値を示すと図 18-b のようであった。

尾崎の聴き取りによる③以降では、⑦～⑩の間に多少年齢差が見られ、年

年齢が低くなるほどéの使用も低くなる。ただし、「駅」のéと同様、どの年齢層も全体的に数値は低く、顕著な年齢差ではない。明確な形での使い分けはどの年齢層にも認められない。「息」のéも、高年層の段階ですでに共通語化が生活全般に行き渡っており、年齢差も場面差も顕著なものは認められない。

3.10. アクセント

方言アクセントと共通語アクセントが場面により使い分けられているかどうかについては従来それほど多くの報告がないが、ある程度多人数を調査した研究としては、尾崎喜光(1988)による札幌市のケース、三井はるみ(1990)による岩手県水沢市のケース、佐藤亮一(1996)による鶴岡市の隣町である三川町のケースなどがあり、単語アクセントにも使い分けがなされる場合があることが報告されている。

鶴岡市の場合はどうであろうか。過去3回の調査でアクセント項目とされた語の中から、共通語アクセントと方言アクセントの違いが聴覚印象的に明瞭であると考えられる「猫」(共通語=HL, 方言=LH)と「鳥」(共通語=HLL, 方言=LHL)を場面差調査の項目とした。いずれも分節音についてもチェックした項目である。なお、これまで入り渡り鼻音だけをチェックする項目であった「窓」は、アクセントの対立パタンが「猫」と同じであるので(共通語=HL, 方言=LH), 場面差調査においてはアクセントもあわせてチェックした。

(1) 「猫」のアクセント

「猫」の結果は図19-aのようであった。

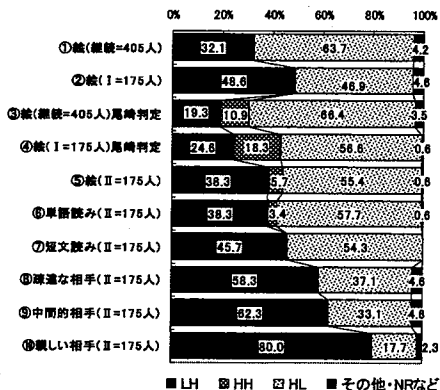


図19-a 「猫」のアクセント

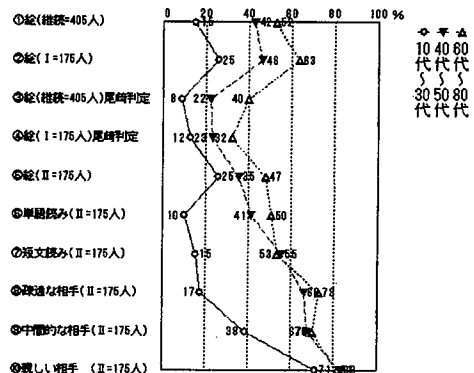


図19-b 「猫」の[LH]のアクセント

継続調査の結果は①のとおりである。方言アクセントの LH は 32.1%である。共通語アクセントの HL と比べると数値は 1/2 程度にとどまるものの、これまで見てきた分節音と比べると方言の数値が高い。冒頭に示した図 1 (分節音) と図 2 (アクセント) を比較して分かるように、全般的にアクセントは分節音よりも方言がよく保たれている。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む②は、LH の数値がさらに上昇し 48.6%となる。

①②について尾崎が聴き取りをした③④には HH が見られる。①②で HH が全く見られないのは、調査票に HH が選択肢として特に掲げられていなかったことが要因として大きいと考えられる。この HH は、下降を伴う HL とは明らかに異なって聞こえ、LH の変異形と考えるべきものであろう。HH を LH に含めて考えるならば、③④の数値は①②のそれとほぼ同じとなる。

⑤は場面差調査の「絵」による結果である。④と比べ LH の数値が増加するが、HH と併せて比較するならば、数値はほぼ同じと言える。この状況は、⑥の「単語読み」、⑦の「短文読み」でもほぼ同じである。

これに対し、⑦の短文を他者に伝える⑧以降になると LH の数値は増加する。⑧⑨のような知らない人に対する状況でも LH は 6 割前後見られ、共通語アクセントの HL よりも多い。これが⑩の「親しい相手」になると LH はさらに増加し 8 割に達する。家族や友人との会話では、今でもかなりの人が方言アクセントを用いている。このように、アクセントにも、場面による使い分けが明確に認められる。従来「絵」による方法では、鶴岡市民の言語生活の中でも方言アクセントの使用が少ない場面をとらえたものと言える。

年齢層別に方言アクセント LH の数値を示すと図 19-b のようである。

どの年齢層も、数値は場面により明確に異なり、場面による使い分けが明確に認められる。「40代～50代」と「60代～80代」は数値が接近しているのに対し、「10代～30代」はそれらよりも数値がかなり低く離れている。「猫」の方言アクセントは、「10代～30代」に至る段階において衰退が著しいようである。ただし、その「10代～30代」も、⑩の「親しい相手」では、上の年齢層と比べると数値はそれほど下がらない。その結果、「10代～30代」の使い分けの幅は、上の年齢層と比べ非常に大きくなっている。どの年齢層もアクセントの使い分けをしているが、それが著しいのは、共通語化が急速に進んだ「10代～30代」である。

● 格助詞の使い分け（参考）

⑦の「猫に鈴、はやる」という短文を相手に伝達する⑧～⑩では、「猫に」の格助詞まで含めて発話されるのが普通である。もちろん⑦も格助詞を伴うが、この場合はそのまま読むのであるから、格助詞は「ニ」しかありえない。これに対し⑧～⑩は、多少自分の言葉に直してもよいと指示しているので、「ニ」の他に方言の格助詞「サ」が現れることが期待される。つまり、「猫ニ」を「猫サ」とするのである。この格助詞の「ニ」と「サ」にも、場面による使い分けが予想される。「ニ」と「サ」の使い分けについては、文法項目の一つとして調査しており（先生に伝える場面と友人に伝える場面の比較）、その結果は第5章で報告しているが、「猫」に接続するケースとして、ここでもあわせて報告する。なお、前接する「猫」のアクセントやコの発音（コかゴか）との関係については3.14.で報告する。

格助詞を分析した結果は図20-aのようであった。

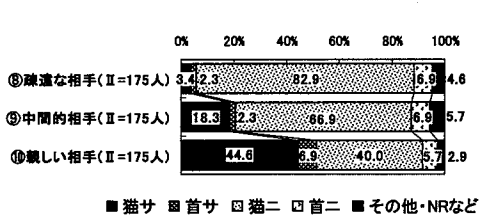


図 20-a 「(猫)に」の助詞

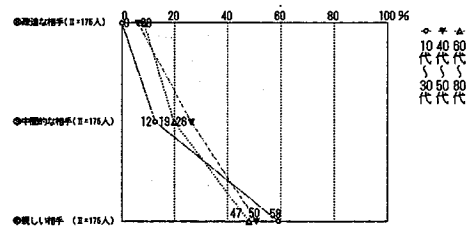


図 20-b 「(猫)に」の助詞の「サ」

格助詞が「猫」ではなく「首」に付く「(猫ノ)首サ」「(猫ノ)首ニ」も見られたが少数であり、主として「猫サ/猫ニ」の対立である。

⑧では「猫ニ」の数値が非常に高く8割以上を占める。これに対し⑩では、「猫ニ」も4割と少なくはないが、それ以上に「猫サ」が用いられている。⑨はこれらの中間となり、場面による「サ」と「ニ」の使い分けが明確に認められる。「首サ」も、⑧から⑩になるに従い数値は上昇傾向にあり、使い分けが認められそうだ。

図20-bは「猫サ」の数値を年齢層別に示したものである。どの年齢層にも使い分けが認められる。年齢層が低くなるほど「猫サ」の数値も低くなる傾向が多少見られるが、3本の線は比較的接近しており、年齢差はそれほど顕著ではない。⑩において、「10代～30代」の数値が上の年齢層よりも高く

なる点が注目される。家族や友達との会話では、上の年齢層以上に「サ」を用いるのである。このような場面に限って言えば、若年層での「サ」の衰退傾向は特に見られない。「10代～30代」の「猫」の方言アクセント LH の数値は、⑩では上の年齢層に接近していたが、それと共通する現象である。その結果、助詞の使い分けの幅は、「10代～30代」は上の年齢層よりも大きくなっている。

(2) 「窓」のアクセント

「窓」の結果は図 21-a のようであった。なお、「窓」は入り渡り鼻音のみを見る項目であったため、①②のデータはない。

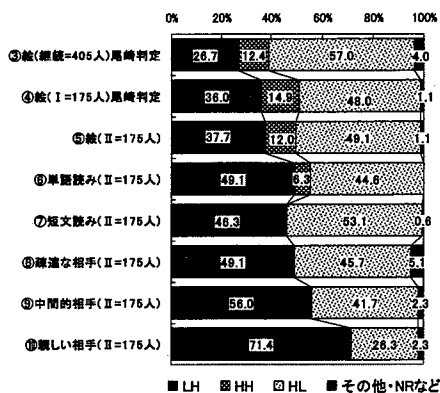


図 21-a 「窓」のアクセント

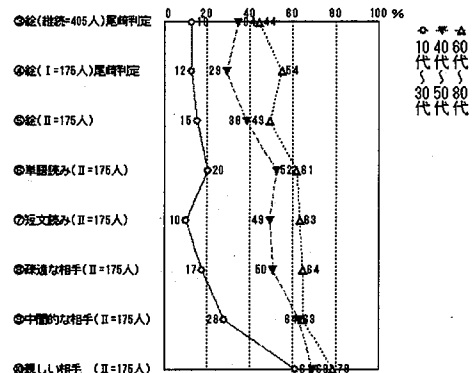


図 21-b 「窓」の[LH]のアクセント

尾崎の聴き取りによる③の方言アクセント LH は 26.7%である。HH も 12.4%あり、合わせると約 4 割が方言アクセントとなる。共通語アクセントの HL よりは少ないものの、分節音の場合と比べ、先に見た「猫」の③以上に方言の数値が高い。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む④は、LH および HH の数値がさらに上昇し、合わせると約半数に達する。

場面差調査の⑤は、④とほぼ同じ状況である。⑥の「単語読み」、⑦の「短文読み」、そして⑧の「疎遠な相手」もほぼ同様である。HH の出現が「絵」と「単語読み」に限定される点は、「猫」の場合と同様である。文の一部として読んだり、それを発話の形で伝える場面では現れないアクセント型である。

これに対し⑨⑩になると LH の数値は増加する。⑨の「中間的な相手」で

56.0%と半数を超え、⑩の「親しい相手」になると数値はさらに増加して7割に達する。このように「窓」も、家族や友人との会話では、今でも多くの人が方言アクセントを使っている。場面による使い分けが明確に認められる。

年齢層別に方言アクセント LH の数値を示すと図 21-b のようである。

どの年齢層にも場面による使い分けが認められる。「猫」のアクセントと同様、「40代～50代」と「60代～80代」の数値が接近しているのに対し、「10代～30代」はそれらより数値がかなり低く離れている。「10代～30代」に至る段階での衰退が著しいようだ。ただし、その「10代～30代」も、⑩の「親しい相手」では、上の年齢層とそれほど数値が変わらない。その結果、「10代～30代」の使い分けの幅は非常に大きくなっている。アクセントの使い分けが著しいのは、共通語化が急速に進んだ「10代～30代」である。

● 格助詞の使い分け (参考)

⑦の「ジェット機の窓に、カラス激突」の「窓に」について、「窓ニ」と「窓サ」の使い分けを分析したところ、図 22-a の結果が得られた。

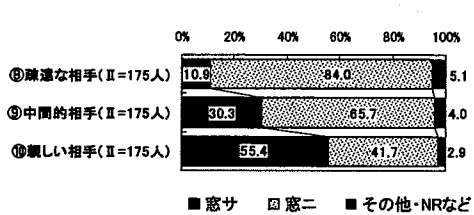


図 22-a 「(窓)に」の助詞

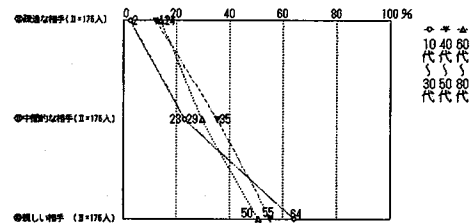


図 22-b 「(窓)に」の助詞の「サ」

場面による「サ」と「ニ」の使い分けが明確に認められる。先の「猫に」の「サ」と比べると、「窓に」の「サ」は全体的に数値が少し上昇する。

図 22-b は「窓サ」の数値を年齢層別に示したものである。「猫サ」と同様の傾向が認められる。

(3) 「鳥」のアクセント

「鳥」の結果は図 23-a のようであった。

継続調査の結果は①のとおりである。LHL が方言アクセント、HLL が共通語アクセントである(③④に現れる HLL は LHL の変異形と見るべきものとする)。方言アクセント LHL の数値は 38.5% である。共通語アクセント

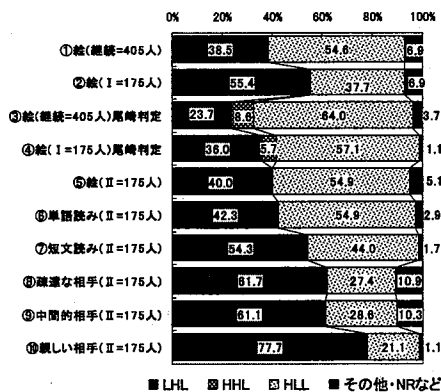


図 23-a 「烏」のアクセント

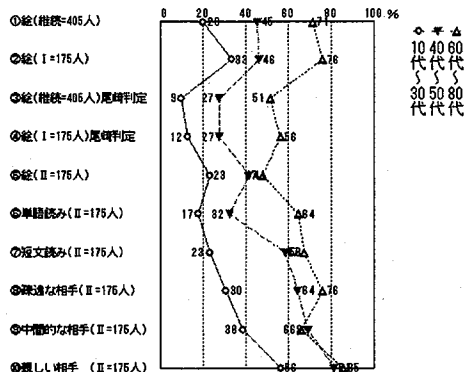


図 23-b 「烏」の[LHL]のアクセント

HLLと比べると数値は小さいものの、方言アクセントもよく用いられている。②ではLHLの数値がさらに上昇し55.4%となる。

尾崎の聴き取りによる③の方言アクセントLHLは23.7%、④のそれは36.0%である。これに、LHLの変異形と考えたHHLを含めると、数値はそれぞれ4割前後となり、「猫」「窓」のLHと似た状況となる。

場面差調査の⑤は、LHLとHHLを合わせた④とほぼ同じである。⑥の「単語読み」もこれらと似た状況である。

これに対し⑦以降になると、LHLの数値は増加する。⑦の「短文読み」で半数を超え、⑧⑨では6割となり、⑩の「親しい相手」になると数値はさらに上昇し8割に近づく。他者に自分の言葉で伝える場面、特に家族や友人に伝える場面では、「烏」の場合も、多くの人が方言アクセントを用いている。場面による使い分けが明確に認められる。

年齢層別に方言アクセントLHLの数値を示すと図23-bのようである。

場面による使い分けはどの年齢層にも認められる。⑤や⑦～⑩では「40代～50代」と「60代～80代」の数値が接近しており、「10代～30代」に至る段階での衰退が著しいが、それ以外では3つの年齢層がほぼ均等に離れている。⑩において「10代～30代」のLHLの数値が上の年齢層よりも2割以上低くなるが、これは「猫」や「窓」のLHの場合と異なる傾向である。

以上は、継続調査の結果を検証するための項目の分析であった。

次に、第1回・第2回の調査項目にはないが、方言音声に限らず音声の使

用状況を明らかにするため第3回の継続調査で追加した項目の中から、場面差調査でも対象とした項目の分析結果を報告する。

3.11. 非語頭のガ行鼻音

日本語の非語頭のガ行子音は鼻音の η (すなわちガ行鼻音) であるとされているが、実際には地域差がある。また、本来 η を使う地域であっても年齢差があり、若年層に向けての衰退が各地で著しい。東京都についてはたとえば加藤正信(1983)、北海道(札幌市・富良野市)については相澤正夫(1994)や国立国語研究所(1997)などの報告がある。鶴岡市はガ行鼻音を持っている地域であるが、現在の使用状況および年齢差の有無に加え、場面による使い分けの有無について「鏡」のガにより調べた。結果は図24-aのようであった。

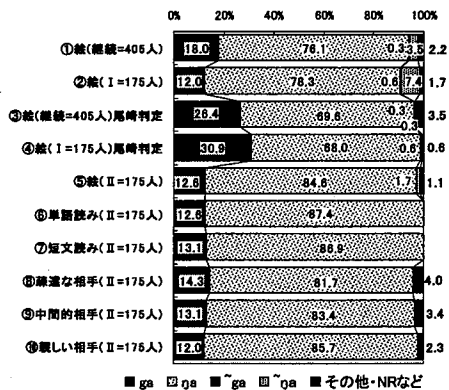


図 24-a 「鏡」のガの発音

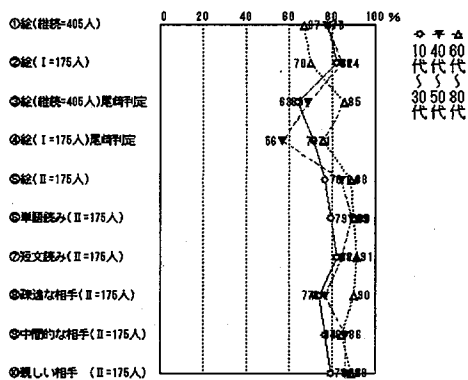


図 24-b 「鏡」のガの [(l) a] の発音

継続調査の結果は①のとおりである。ga が 18.0%， η a が 76.1%であり、鼻音の方がかなり優勢である。平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む②では ga が減少し、逆に η a が微増する。

尾崎の聴き取りによる③④では、ga が 3割前後、 η a が約 7割となる。①②で少数ながら見られた $\sim\eta$ a はほとんど見られない。

場面差調査の⑤は、ga が 12.6%， η a が 84.6%である。④と比較し ga の数値が低下するのは、④で ga と判定された者のうちの約 7割が⑤では η a と判定されたことが要因として大きい。④と⑤は、調査方法・調査対象者・聴き取り者が同じであり、得られる数値は近似となることが期待される。なぜこれだけ大きな違いが生じたのか、現在のところその原因は不明である。

⑤から⑩までは、ga が 1 割強、ŋa が 8～9 割であり、数値の大きな違いは認められない。東京都在住者を調査した Hibiya(1988:99-100)によれば、単語読みから短文読み、そして調査員との会話になるに従い g の使用に減少傾向が見られるが、鶴岡市を対象とした本調査では、そのような場面による ga と ŋa の数値的な違い・使い分けは特に認められない。ガ行鼻音を使い分けている地域・使い分けていない地域という地域差があるのかもしれない。

ŋa の数値を年齢層別に示すと 図 24-b のようである。

どの年齢層も、場面により ŋa の数値が顕著に変わるといこともなく、ga との使い分けは特に認められない。年齢差もあまりなく、鶴岡市では「10代～30代」の若年層であっても 8 割前後の人はガ行鼻音を用いている。ただし、この「10代～30代」を「60代～80代」と比べると、尾崎の聴き取りでは、どの場面でも一貫して数値が 10 数%ほど低下しており、ゆるやかな衰退傾向は認められる。

なお、「鏡」については、アクセントも合わせてチェックした。結果は 図 25-a のようであった。なお、①②は鼻音のみのチェックであったためアクセントのデータはない。

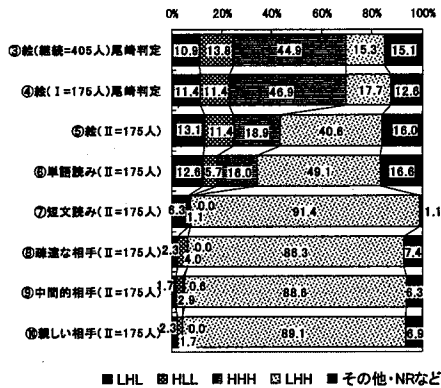


図 25-a 「鏡」のアクセント

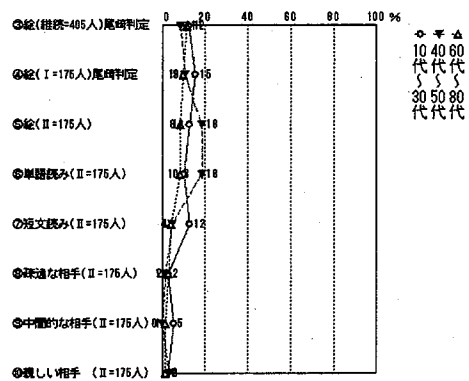


図 25-b 「鏡」の[LHL]のアクセント

共通語アクセントは LHH およびその変異形の HHH, 方言アクセントはおもに LHL ないしは HLL である。

全般的に共通語アクセントの割合が高い。④(および③)と⑤(および⑥)では、HHH と LHH の数値が大きく異なっているが、その原因は現在のところ不明である。方言アクセントの LHL・HLL は、③～⑥はいずれも 1 割程度であ

る。このうちの LHL に注目すると、⑦の「短文読み」では数値が半減し、⑧～⑩ではさらに半減する。そもそも小さな数値ではあるが、方言アクセントの LHL は、「絵」「単語読み」から「短文読み」に、そしてその短文を自分の言葉で伝える場面になるに従い減少する傾向が見られる。このように、方言形が増加するのではなく減少するパターンは、上述した項目には見られない。なお、⑧～⑩の間での違いはほとんどないので、厳密に言えば、場面というよりも発話スタイルによる使い分けが見られるケースということになる。

年齢層別に方言アクセント LHL の数値を示すと図 25-b のようである。

どの年齢層も、⑧～⑩では数値が非常に低くなる。全体的に数値が 2 割に届かないこともあり、一貫した顕著な年齢差は特に認められない。

3.12. 外来語音

外来語音の使用状況と使い分けの有無を見る項目として「NTT」(日本電信電話会社)を調査した。「T」が 2 つ重なるが、「TT」の部分をチェックした。

「T」の発音について、①の方法(なぞなぞ式)で調査したものに、早野慎吾(1996:129-41)による茨城県(玉造町)での調査、加藤正信(1983)による東京都での調査がある。いずれも、「テー」主体の高年齢層対「ティー」主体の若年齢層という年齢差が明確に見られる。鶴岡市では図 26-a の結果が得られた。

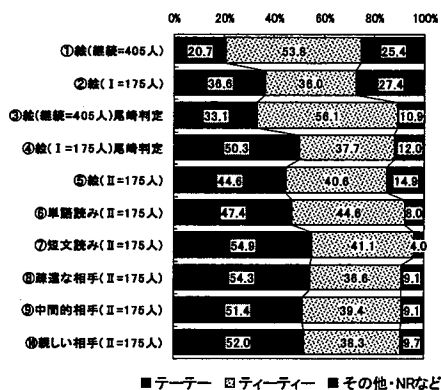


図 26-a 「NTT」の TT の発音

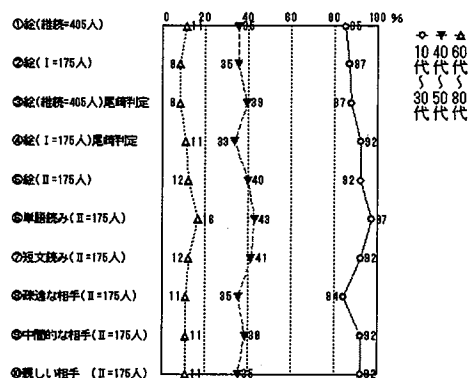


図 26-b 「NTT」の TT の [ティーティー] の発音

継続調査の結果は①のとおりである。テーテーが 20.7%，ティーティーが 53.8% で、ティーティーの方が一般的である。「その他」の数値が小さくない

が、このうち比較的大きな割合を占めるのは、無効扱いとした「電話局」である（「60代～80代」の回答者に多い）。なお、「TT」をチーチーと発音する回答は「その他」にも含まれていない（②以降も同様）。場面差調査にはなく継続調査のみの調査項目である「PTA」の「T」にもチーの発音は見られない（尾崎の聴き取りでも同様）。

平均年齢が継続調査よりも高いパネル調査の対象者を含む②では、テーターの数値が上昇し 36.6%となる。

①②について尾崎が聴き取りをした③④は、テーターの数値がそれぞれ 10 数パーセント上昇する。①②の「その他」のうち約半数が、③④ではテーターと判定されたことが要因として大きい。

場面差調査の⑤のテーターは 44.6%であり、④と大差がない。⑥以降も、多少⑤から数値が上昇するものの 5 割前後でとどまる。もう一方のティーティーも、場面に関わらず 4 割前後のままである。場面によるテーターとティーティーの使い分けは特に認められないと言ってよい。

ティーティーの発音について年齢層別に示すと **図 26-b** のようである。

どの年齢層にも場面による使い分けは特に認められないが、年齢差が著しい。「60代～80代」は、場面にかかわらずティーティーの発音は 10%前後にとどまるのに対し、「10代～30代」は 90%前後にのぼる。この約半世紀の間に、テーターからティーティーへとほぼ完全に発音が置き換えられたことになる。「40代～50代」はこの中間であるが、数値は 40%前後であり、どちらかと言えば「60代～80代」に近い。「40代～50代」から「10代～30代」にかけての変化が特に著しかったことがうかがえる。

3.13. 外来語のアクセント

(1) 「テレビ」

共通語アクセントは HLL、この地域の主たる方言アクセントは LHL である。結果は **図 27-a** のようであった。

継続調査の結果は①のとおりである。方言アクセント LHL が 38.8%、共通語アクセント HLL が 55.8%である。共通語アクセントと比べると数値は低いものの、方言アクセントもよく用いられている。この LHL 対 HLL という対立は、ちょうど「鳥」のアクセント（**図 23-a**）と同じだが、数値も類似している。②では LHL の数値がさらに上昇し 49.7%となる。

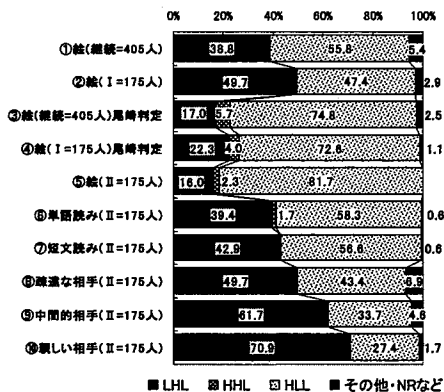


図 27-a 「テレビ」のアクセント

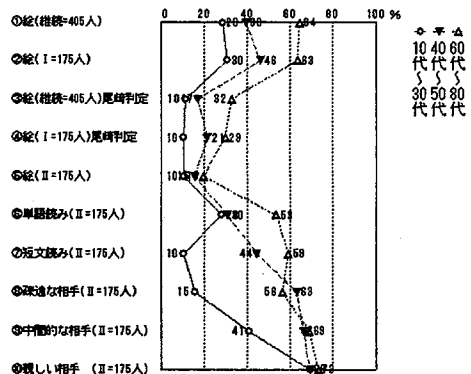


図 27-b 「テレビ」の[LHL]のアクセント

尾崎の聞き取りによる③では、方言アクセント LHL は 17.0%，④のそれは 22.3%と、方言アクセントの使用はそれぞれ 2 割ほど低下する。

場面差調査の⑤は、④と比べると数値は多少低下するが、2 割ほどである。

これが⑥になると、LHL の数値は倍増し約 4 割となる。⑦以降も数値は増加し続け、⑩の「親しい相手」では 7 割に達する。他者に自分の言葉で伝える場面、特に家族や友人など近い相手に伝える場面では、「テレビ」のような外来語であっても、多くの方は方言アクセントを用いている。場面による方言アクセントと共通語アクセントの使い分けは、外来語においても明確に認められる。

年齢層別に方言アクセント LHL の数値を示すと図 27-b のようである。

どの年齢層にも場面による使い分けが見られる。年齢差も同時に見られ、LHL は若年層になるほど減少する。「10 代～30 代」は、⑦⑧では上の年齢層と比べ数値が非常に低いが、⑩では年齢差がほとんど見られない。使い分けが非常に顕著であるのが「10 代～30 代」の特徴と言える。

(2) 「アメリカ」

共通語アクセントは LHHH、鶴岡市の方言アクセントは LHLL ないしはその変異形と考えられる HLLL である。3 モーラ以上の外来語の単純名詞は、共通語では語末から 3 モーラ目にアクセント核が置かれるのが原則であるが、古くから入った語は平板化しているものが少なくない。「アメリカ」もその例であるが、地域によっては本来のアクセント型である LHLL が用いられてい

るところがある。札幌市や富良野市もそうである（国立国語研究所 1997）。つまり、LHLL は本来のアクセントなのだが、地方に残っているために方言アクセントと位置づけられているのである。結果は図 28-a のようであった。

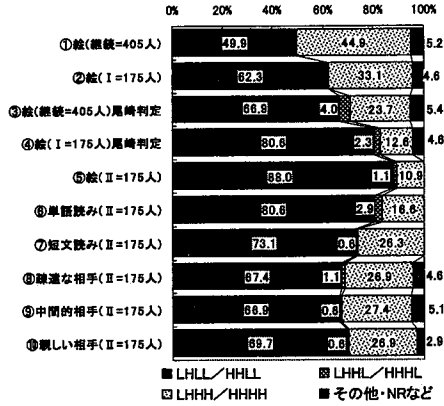


図 28-a 「アメリカ」のアクセント

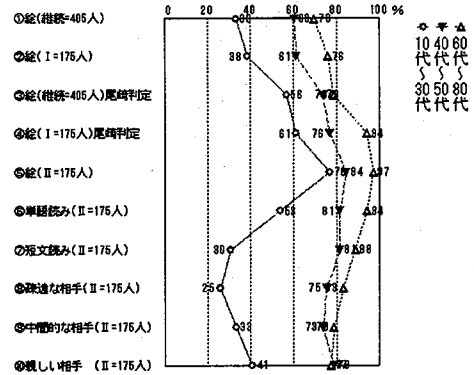


図 28-b 「アメリカ」の[LHLL/HHLL]のアクセント

継続調査の結果は①のとおりである。方言アクセントの LHLL/HHLL が 49.9%、共通語アクセントの LHHH/HHHH が 44.9%である。方言アクセントの方が共通語アクセントよりも若干数値が高く、方言アクセントは現在でもよく用いられている。

②では LHLL/HHLL の数値がさらに上昇し 62.3%となる。

尾崎の聞き取りによる③では LHLL/HHLL が 66.9%、④でのそれは 80.6%と、それぞれ 2 割ほど上昇する。尾崎の聞き取りによれば、鶴岡市ではむしろ LHLL/HHLL の方が、より一般的なアクセントとして用いられている。

場面差調査の⑤は、④と比べ数値が 1 割ほど上昇する。ただし、「その他・NR など」を除いた部分で④を考えると、⑤と大きな違いはなさそうである。

これが⑥になると、LHLL/HHLL は 1 割ほど減少して約 8 割となり、⑦以降ではさらに減少して約 7 割となる。逆に LHHH/HHHH は増加傾向にある。⑧～⑩の間はほぼ同じであるので、厳密に言えば場面差というよりも発話スタイルの差と見るべきであろう。いずれも LHLL/HHLL の数値が高いことに変わりはないが、単語を単独で発話する状況から文として発話する状況になると、LHLL/HHLL は相対的に減少し、LHHH/HHHH が増加する。発音が意識されやすい⑤⑥では共通語アクセントの数値が高くなることを予想したが、実際は逆の傾向が見られた。この地域では、外来語の本来のアクセント

型である LHLL/HHLL の方を標準的なアクセントと意識する人がいる可能性がありそうだ。

年齢層別に方言アクセント LHLL/HHLL の数値を示すと図 28-b のようである。

どの年齢層にも、⑤から⑩にかけて数値が下がる傾向が見られる。それと同時に年齢差も見られ、若い年齢層になるほど数値も全体的に低くなる。特に「10代～30代」では、⑥以降で数値が大幅に低下し、「40代～50代」から「10代～30代」にかけての衰退が著しい。ただし、この「10代～30代」では、⑧から⑨⑩にかけては上昇が見られる。「10代～30代」で衰退が大きいのは、LHLL/HHLL を標準的なアクセントではなく方言アクセントと認識する人も少なからず生じたためであろう。そこで、⑧で数値が低く、逆に⑩の「親しい相手」で高くなるという現象が生じるようになったものと考えられる。LHLL/HHLL を標準的なアクセントと受け止める意識から方言アクセントと受け止める意識への変化が、このような複雑なグラフとして現われているものと考えられる。

(3) 「チャンネル」

この項目は、共通語アクセントと方言アクセントの張り合いや使い分けを見るというよりも、鶴岡市でも使われていると推測される従来の共通語アクセント HLLL と、それが平板化した新しい共通語アクセント LHHH/HHHH の張り合いや使い分けを見ることを目的としたものである。結果は図 29-a のようであった。

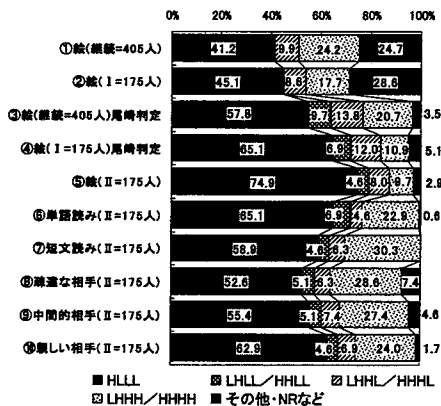


図 29-a 「チャンネル」のアクセント

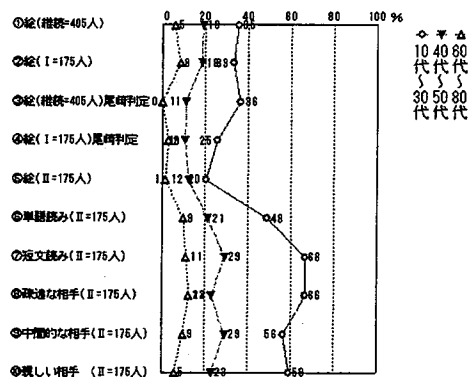


図 29-b 「チャンネル」の[LHHH/HHHH]のアクセント

継続調査の結果は①のとおりである。HLLL が 41.2%，LHHH/HHHH が 24.2%であり，従来のアクセントの方が数値が高い。この他 LHHL/HHHL も 1割ほど見られる。②では従来の HLLL の数値が上昇し 45.1%となる。

尾崎の聴き取りによる③では HLLL が増加し 57.8%となる。①で数値の高かった「その他・NR など」のうちの約 4割が HLLL と判定されたことが要因として大きい。HLLL が約 6割であるのに対し，LHHH/HHHH は約 2割にとどまる。尾崎の判定によれば，鶴岡市では従来のアクセントの方がかなり優勢である。④では HLLL の数値がさらに上昇し 65.1%となる。

場面差調査の⑤は，④と比べ HLLL の数値が 1割ほど上昇する。これが⑥の「単語読み」になると，逆に⑤から 1割ほど数値が低下し，⑦以降ではさらに 1割ほど低下し 5～6割程度となる。これと逆のパタンを示すのが LHHH/HHHH である。単語単独で発話するときは従来のアクセント，文の一部として発話するときは新しい平板型のアクセントという傾向が多少見られる。

年齢層別に新しい共通語アクセント LHHH/HHHH の数値を示すと図 29-b のようである。

全体的に若い年齢層になるほど数値が高くなる。LHHH/HHHH は若年層に向けて使用が増えてきていると言える。どの年齢層も⑤では数値が低い，⑥以降で上昇する。特に「10代～30代」は，文として発話する⑦以降では数値が 6割前後にまで達し，むしろ多数派となる。

3.14. 分節音とアクセントと格助詞の組み合わせ－「猫に」－

以上は分節音とアクセントを分離しての分析であった。

調査項目の中には，1つの語で分節音とアクセントの両方を観察する項目がある。「猫」「窓」「鳥」がそれである。このうち「窓」と「鳥」は，分節音が場面を通じてほぼ共通語音であり，アクセントと組み合わせて分析する意味があまりない。これに対し「猫」は，分節音が共通語のコと方言のゴのいずれも普通に使われており，アクセントと組み合わせて分析する意味がある。そこで，「猫」を対象に，両者の組み合わせがどうであるかについての分析を行う。なお，この「猫」については，⑧～⑩において，「猫に」の格助詞を共通語のニとするか方言のサとするかの使い分けも見られたので，それとの組み合わせもあわせて分析する。

(1) 分節音とアクセント

まず、「猫」のコとアクセントとの関係を見てみよう。結果は図 30-a のようであった。ここでは、⑤以降の場面差調査の結果を中心に見ていく。

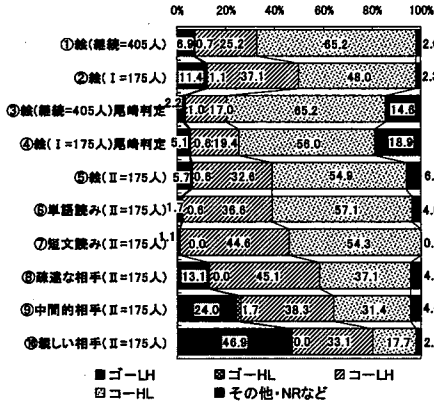


図 30-a 「猫」のコとアクセント

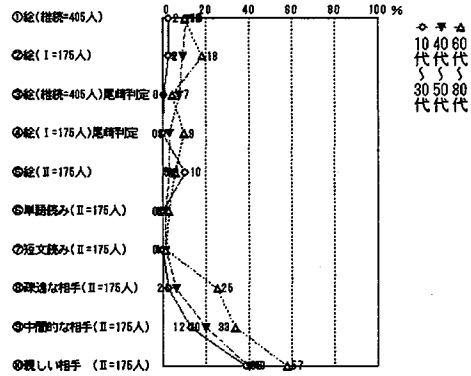


図 30-b 「猫」の[ゴ-LH]

まず、分節音がゴと発音された場合にアクセントがどうであったかを見てみよう。「ゴ-LH」と「ゴ-HL」を比較すると、「ゴ-HL」はほとんど見られず、実際に観察されるのは「ゴ-LH」がほとんどであることが分かる。つまり、分節音がゴと発音されるならば、アクセントは LH にほぼ限定されるのである。逆に言えば、分節音がゴと発音されてアクセントが HL となるということは現実にはほとんどない。じつは、こうした組み合わせの制約は、グラフで示すことは省略したが「窓」にも見られる。入り渡り鼻音のマ~ドの使用はそもそも少ないのだが、その発音があった場合、アクセントは方言アクセントの LH がほとんどであり、共通語アクセントの HL で発音されることは極めて少ない。

「猫」を「ゴ-LH」とする発音、つまり分節音もアクセントも方言形である発音は⑤~⑦では数値が非常に低いだが、他者に伝達する⑧以降になると数値が上昇し、特に⑩の「親しい相手」では5割近くに達する。

これに対し、分節音がコと発音された場合にアクセントがどうであるかを見てみよう。「コ-LH」と「コ-HL」を比較すると、両方とも使われていることが分かる。ただし、⑤~⑦では分節音もアクセントも共通語の「コ-HL」が優勢であるのに対し、他者に伝達する⑧以降ではむしろ「コ-LH」が優勢

となる。もっとも、⑧以降では「ゴ・LH」も数値が伸びてくるため、「コ・LH」が最高値をとるのは⑧の「疎遠な相手」においてである。

各場面における有力パターンという観点から見ると、親しい相手に話す⑩では両方言の「ゴ・LH」、親しくはない相手に話す⑧⑨では分節音のみ共通語の「コ・LH」、単語だけ発音したり文を読む⑤～⑦では両方共通語の「コ・HL」、ということになる。つまり、日常的な会話場面から遠ざかるにつれて、まずは分節音が共通語になり、次いでアクセントが共通語になる。

分節音とアクセントの両方が方言である「ゴ・LH」について年齢層別に表示すると図 30-b のようである。

どの年齢層も⑤～⑦では数値が非常に低いが、⑧以降になると数値が上昇する。ただし、「10代～30代」と「40代～50代」は、⑧の「疎遠な相手」では数値が低い。よそから来た者に対し「猫」を「ゴ・LH」と発音するのは主として「60代～80代」である。この「60代～80代」は、⑨⑩でも「10代～30代」「40代～50代」と比べ数値が高く、年齢差も同時に認められる。

「ゴ・LH」という発音は、「親しい相手」に対する「60代～80代」の数値が最も高く約6割となる。

(2) 分節音と格助詞

次に、⑧～⑩を対象に、「猫」のコと直後の格助詞との関係を見てみよう。結果は図 31-a のようであった。「その他・NR など」が10数%あるが、そのうちの大半は「(猫ノ)首ニ/首サ」が占める。それ以外の部分を見てみよう。

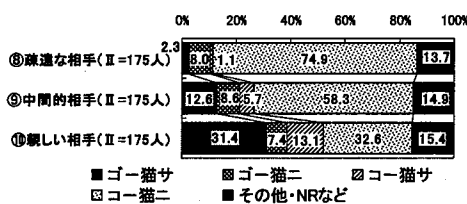


図 31-a 「猫」のコと格助詞

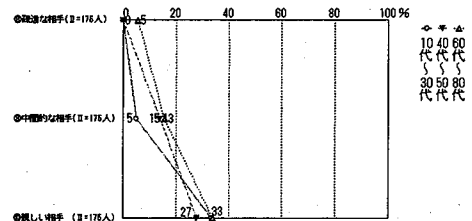


図 31-b 「猫」の「ゴ-猫サ」

まず、分節音がゴと発音された場合に格助詞がどうであるかを見てみよう。「ゴ-猫サ」と「ゴ-猫ニ」を比較すると、⑧の「疎遠な相手」では「ゴ-猫ニ」が優勢であるのに対し、⑨の「中間的な相手」や⑩の「親しい相手」ではむしろ「ゴ-猫サ」が優勢であることが分かる。

これに対し、分節音がコと発音された場合に格助詞がどうであるかを見てみよう。「コ・猫サ」と「コ・猫ニ」を比較すると、どの場面でも「コ・猫ニ」が優勢である。つまり、分節音が共通語のコであれば、それに続く格助詞も共通語のニとするのが一般的である。特に⑧ではその傾向が著しい。ただし、⑨そして⑩になるに従い、「コ・猫サ」もある程度数値が上昇する。全体としては、分節音と格助詞を方言ないしは共通語でそろえるパターンが多く、方言と共通語の組み合わせは少ない。

各場面における有力パターンという観点から見ならば、⑩では「ゴ・猫サ」と「コ・猫ニ」であるのに対し、⑧⑨では「コ・猫ニ」であり数値もかなり高い。つまり、親しい相手に対しては分節音も格助詞も方言である「ゴ・猫サ」もよく使われるが、親しさの度合いが下がるに従いその数値は減少し、代って分節音も格助詞も共通語である「コ・猫ニ」が増加する。日常的な会話場面から遠ざかるに従い、分節音と格助詞の両方が方言というパターンから、両方とも共通語というパターンに移行する、ということである。

分節音と格助詞の両方が方言である「ゴ・猫サ」について年齢層別に示すと図 31-b のようである。

どの年齢層も⑧では数値が非常に低いが、⑨で少し増加し、⑩では3割前後にまで達する。全体的に数値が低い中ではあるが、若い年齢層ほど数値が低く、「ゴ・猫サ」は衰退傾向にある。ただし「10代～30代」は、⑩では「60代～80代」とほとんど数値が同じである。「親しい相手」に対する場合は、「10代～30代」も「ゴ・猫サ」を上のある年齢層と変わらずによく用いている。

(3) アクセントと格助詞

次に、やはり⑧～⑩を対象に、「猫」のアクセントと直後の格助詞の関係を見てみよう。結果は図 32-a のようであった。「その他・NR など」は「(猫ノ)首ニ/首サ」が大半を占める。それ以外の部分を見てみよう。

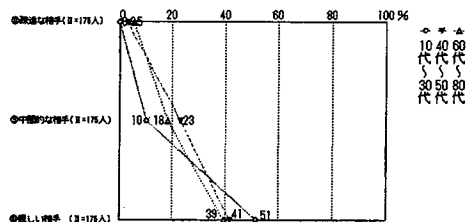
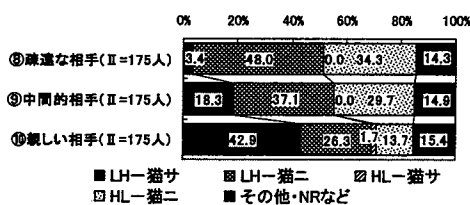


図 32-a 「猫」のアクセントと格助詞

図 32-b 「猫」の[LH-猫サ]

まず、アクセントが LH と発音された場合に格助詞がどうであったかを見てみよう。「LH・猫サ」と「LH・猫ニ」を比較すると、⑧の「疎遠な相手」では「LH・猫ニ」が非常に優勢であるのに対し、⑩の「親しい相手」ではむしろ「LH・猫サ」の方が優勢である。⑨の「中間的な相手」はその中間となるが、「LH・猫ニ」の方が優勢である。場面による両者の使い分けが顕著である。

これに対し、アクセントが HL と発音された場合に格助詞がどうであったかを見てみよう。「HL・猫サ」と「HL・猫ニ」を比較すると、「HL・猫サ」はほとんど見られず、実際に観察されるのは「HL・猫ニ」にほぼ限られる。つまり、アクセントが HL であるならば、格助詞はニにほぼ限定されるのである。逆に言えば、HL と発音されて格助詞がサになることはほとんどありえない。グラフで示すことは省略するが、こうした組み合わせの制約の傾向は、じつは「窓に」にも強く見られた。

各場面における有力パターンという観点から見るならば、⑩では「LH・猫サ」が最も優勢であるのに対し、⑧⑨では「LH・猫ニ」やこれに次いで「HL・猫ニ」が優勢である。つまり、親しい相手に対してはアクセントも格助詞も方言である「LH・猫サ」もよく使われるが、親しさの度合いが下がるに従いその数値は減少し、代って格助詞のみ共通語である「LH・猫ニ」や、アクセントも格助詞も共通語である「HL・猫ニ」が増加する。日常的な会話場面から遠ざかるに従い、アクセントと格助詞の両方が方言というパターンから、少なくとも格助詞は共通語とするパターンに移行する。

アクセントと格助詞の両方が方言である「LH・猫サ」について年齢層別に示すと図 32-b のようである。

どの年齢層も⑧では数値が非常に低いが、⑨でやや上昇し、⑩では 4～5 割程度にまで達する。全体的に数値が低い中ではあるが、若い年齢層ほど数値が低くなり、「LH・猫サ」も衰退傾向にある。ただし、「10代～30代」は、⑩での数値は上の年齢層以上あって 5 割に達する。「親しい相手」に対する場合は、「10代～30代」は上の年齢層以上に「LH・猫サ」をむしろよく用いている。先に見た「ゴ・猫サ」の使用と共通するところがある。

(4) 分節音とアクセントと格助詞

最後に、これまで見てきた 3 つの要素の組み合わせを見てみよう。結果は図 33-a のようであった。ここでも「その他・NR など」は「(猫ノ)首ニ/首サ」

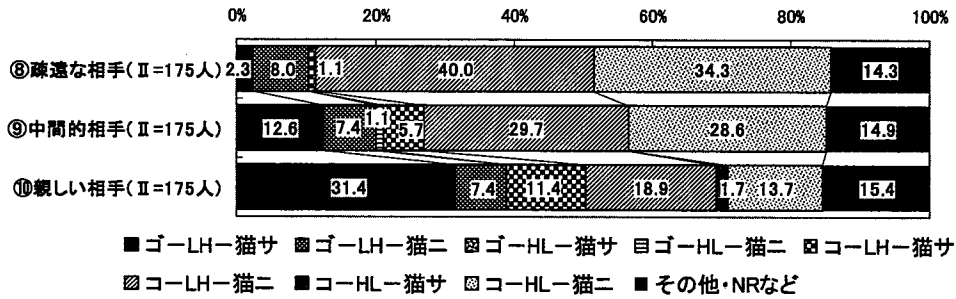


図 33-a 「猫」のコとアクセントと格助詞

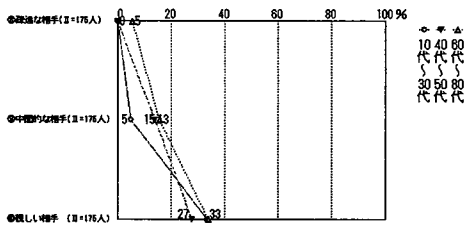


図 33-b 「猫」の[ゴ-LH-猫サ]

が大半を占める。それ以外の部分を見てみよう。

さまざまな組み合わせが見られるが、主要なパターンは、3要素とも方言の「ゴ-LH-猫サ」、アクセントのみ方言の「コ-LH-猫ニ」、3要素とも共通語の「コ-HL-猫ニ」の3種である。方言形か共通語形かということで考えると、3つの要素の組み合わせは8通りあるのだが、実際に多く用いられるのは、全ての要素を方言か共通語で一貫させたパターンか、アクセントのみ方言とするパターンである。

このうち、3要素とも方言の「ゴ-LH-猫サ」は、⑩の「親しい相手」において数値が最も高く、この場面では最も優勢なパターンとなっている。これが、⑨の「中間的な相手」、⑧の「疎遠な相手」となるに従い数値が低下する。特に⑧ではわずか2.3%にとどまる。

これに代って⑨⑧で数値が高くなってくるのは、アクセントのみ方言の「コ-LH-猫ニ」と、3要素とも共通語の「コ-HL-猫ニ」である。特に前者の「コ-LH-猫ニ」は、⑧の「疎遠な相手」においても、「コ-HL-猫ニ」以上に数値が高い点は注目される。初対面のよそ者と話をするときでも、分節音や格助詞は共通語であってもアクセントだけは方言にするというのが最も一般的な

パターンである。

このように、3要素の組み合わせのパターンとして見た場合も、⑩に近いほど「ゴ・LH・猫サ」の数値が高く、⑧に近いほど「コ・LH・猫ニ」ないしは「コ・HL・猫ニ」の数値が高いという、場面による使い分けが観察される。

以上の3パターンのほか、ある程度数値が高いものとしては、格助詞のみ共通語の「ゴ・LH・猫ニ」、分節音のみ共通語の「コ・LH・猫サ」がある。ただし数値は、最も高い場合でも1割程度にとどまる。このうち「ゴ・LH・猫ニ」は場面を通じて数値にほとんど変化がないのに対し、「コ・LH・猫サ」は⑩の「親しい相手」になるほど数値が高く、逆に⑧の「疎遠な相手」になるほど数値が低くなり、使い分けが見られる。使い分けのパターンとしては「ゴ・LH・猫サ」と同じである。分節音がコであれゴであれ、「LH・猫サ」という表現は、主として⑩の「親しい相手」に対して使われる。

これら「ゴ・LH・猫ニ」「コ・LH・猫サ」は、方言と共通語を混在させるパターンである。先に見たやはり混在型である「コ・LH・猫ニ」も考慮に入れると、方言と共通語を混在させる場合は、アクセントは必ず方言とし、これにさらに分節音か格助詞のいずれかを方言としうる、ということになる。

逆に、アクセントのみ共通語とするパターン、すなわち「ゴ・HL・猫サ」という組み合わせは、グラフによると、場面に関わらず皆無である。共通語圏出身の者が当該地域の言葉を真似て話す場合などには「ゴ・HL・猫サ」とすることはありそうだが、地元では実際には使われていない言い方である。

残りの「ゴ・HL・猫ニ」と「コ・HL・猫サ」という組み合わせも数値は非常に低く、皆無に近い状況である。先の「ゴ・HL・猫サ」が皆無であったこととあわせて考えると、アクセントが共通語である場合は、分節音や格助詞が方言になることはほとんど無いと言ってよい。逆に言えば、アクセントが共通語であるならば、分節音も格助詞もそれに連動して共通語になる、つまり3要素全て共通語の「コ・HL・猫ニ」になる、ということである。

3要素全て方言である「ゴ・LH・猫サ」について年齢層別に示すと図 33-b のようである。

分節音をゴ、格助詞をサとする場合は、アクセントも必然的に LH となるため、図 33-a の「ゴ・LH・猫サ」は、じつは図 31-a の「ゴ・猫サ」と全く同じになる。従って、図 33-b も、図 31-b と全く同じになる。

どの年齢層も⑧から⑨⑩になるに従い数値が上昇する。3つの年齢層を比

較すると若い年齢層ほど数値が低くなり、「ゴ-LH-猫サ」の衰退傾向が見られる。ただし、「10代～30代」は、「親しい相手」に対する場合には、「ゴ-LH-猫サ」を上る年齢層と変わらずよく用いている。

4. まとめ

最後に、本章の分析で得られたおもな結果をまとめて示す。

(1) 非語頭の無声子音の有声化

非語頭の無声子音の有声化については「柿」のキの子音、「猫」のコの子音を調査した。場面による使い分けが明確に認められた。「絵」「単語読み」「短文読み」では方言音声である有声音の使用は非常に少ないが、人と会話をする場面、特に家族や友達など地元の親しい人と会話をする場面では、有声音を用いる人が多い。従来の「絵」による調査方法では、有声音の使用が少ない状況をとらえていたと言える。なお、「単語読み」「短文読み」は、「絵」に比べ有声音の数値がさらに下がることも確認された。

有声音の使用には、場面差と同時に年齢差も認められ、年齢層が低くなるほど有声音の数値も低くなる。特に「60代～80代」と「40代～50代」の差が大きい。

(2) 非語頭の有声子音の鼻音化（入り渡り鼻音化）

非語頭の有声子音の鼻音化については「鈴」のズの子音、「窓」のドの子音を調査した。どの場面でも鼻音の使用は非常に少なく、従って場面による使い分けも特に認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る鼻音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

ただし年齢差は観察され、低い年齢層になるほど鼻音の数値も低くなる。有声化と同様、特に「60代～80代」と「40代～50代」の差が大きい。

(3) 唇音化（唇音声 I）

カをクワ、ガをグワとする唇音化については「西瓜」のカの子音を調査した。どの場面でも唇音の使用はほぼ皆無であり、従って場面による使い分けも特に認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る唇音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

年齢差も特に認められず、「60代～80代」の唇音の使用もほぼ皆無である。

高年層の段階ですでに共通語化が言語生活全般に行き渡っているようである。

(4) 唇音化 (唇音声Ⅱ)

ハ行音の唇音化については「髭」のヒの子音を調査した。唇音の使用はどの場面でも非常に少なく、特に尾崎の聴き取りではほぼ皆無であった。場面による使い分けも特に認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る唇音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

尾崎の聴き取りによれば年齢差も特に認められず、「60代～80代」でも唇音の使用はほぼ皆無である。高年層の段階ですでに共通語化が言語生活全般に行き渡っているようである。

(5) 口蓋化

セ・ゼの口蓋化については「税務署」のゼの子音を調査した。口蓋音ジェの使用は場面に関わらずほぼ皆無であり、従って場面による使い分けも認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る唇音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

年齢差も特に認められず、口蓋音はすでに「60代～80代」でほぼ消滅している。

関連して「ジェット機」のジェの子音を調査した。全般的にゼは少ないが、「絵」や「疎遠な相手」で数値が多少高くなる。ゼを規範的な発音と意識し、ジェと使い分けしている人がある。

(6) 中舌化Ⅰ (母音 u)

母音 u の中舌化については「鳥」のスの母音を調査した。尾崎の聴き取りによれば、中舌音 si の使用は場面に関わらず皆無に近い状況であった。場面による明確な使い分けも特に認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る唇音使用の状況をほぼとらえていたと言える。

年齢差も特に認められず、中舌音 si はすでに「60代～80代」でほぼ消滅している。

(7) 中舌化Ⅱ (母音 i)

母音 i の中舌化については「辛子」のシの母音と「知事」のジの母音を調査した。場面による使い分けが明確に認められた。「絵」「単語読み」では中

舌音 si/zi の使用は少ないが、「短文読み」や人と会話をする場面、特に家族や友達など地元の親しい人と会話をする場面では、中舌音 si/zi はよく使われている。従来の「絵」による調査方法では、中舌音 si/zi の使用が少ない状況をとらえていたと言える。

中舌音 si/zi の使用には、場面差と同時に年齢差も認められ、年齢層が低くなるほど中舌音の数値も低くなる。

(8) ア行の e 音

ア行の e 音については「駅」のエを調査した。尾崎の聴き取りによれば、方言音である狭母音 é の使用はどの場面でも少なく、従って場面による明確な使い分けも認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

é の発音は全体的にどの年齢層も数値が低く、顕著な年齢差は認められないが、年齢層が低くなるほど数値も低くなる傾向が多少見られる。

(9) ア行の i 音

ア行の i 音については「息」のイを調査した。尾崎の聴き取りによれば、ア行の e 音と同様、é の使用はどの場面でも少なく、場面による明確な使い分けも認められない。結果的に、従来の「絵」による方法では言語生活全般に渡る状況をほぼとらえていたと言える。

é の発音は全体的にどの年齢層も数値が低く、顕著な年齢差はやはり認められないが、年齢層が低くなるほど数値も低くなる傾向が多少見られる。

(10) アクセント

アクセントについては「猫」「窓」「鳥」を調査した。単語を単独で発音する場面から、文として発話したりそれを人に伝達する場面になる従い、方言アクセントの数値が明確に増加する。特に家族や友達など地元の親しい人と会話をする場面では、方言アクセントの数値は 7~8 割にまで達する。方言アクセントと共通語アクセントの場面による使い分けも明確に認められる。従来の「絵」による調査方法では、方言アクセントの使用が少ない状況をとらえていたと言える。

方言アクセントの使用には、場面差と同時に年齢差も認められ、年齢層が低くなるほど方言アクセントの数値も低くなる。有声化や入り渡り鼻音化の

場合と異なり、アクセントについては一世代下の「40代～50代」と「10代～30代」の差が大きい。場面による使い分けの幅は「10代～30代」において非常に大きい。

「猫」と「窓」は、自分の言葉で人に伝達する場面において、直後の格助詞を共通語の「ニ」とするか方言の「サ」とするかについてもチェックした。場面による使い分けが明確に認められた。このうち「サ」は、全体としては若年層になるほど数値がやや低くなり衰退傾向が見られるが、家族や友達など地元の親しい人を相手とする場面では、「10代～30代」の数値は上の年齢層よりもむしろ高くなった。

(11) 非語頭のガ行鼻音

非語頭のガ行鼻音については「鏡」のガを調査した。場面差調査では、いずれの場面でも ga が 1割強、ŋa が 8～9割であり、ga と ŋa の使い分けは特に認められなかった。顕著な年齢差もないが、「60代～80代」から「10代～30代」にかけてはゆるやかな衰退傾向が認められる。

(12) 外来語音

「NTT」の「TT」により、従来の外来語音テーテーと新しい外来語音ティーティーの使用を調査した。場面差調査では、どの場面でもテーテーが 5割前後、ティーティーが 4割前後であり、場面によるテーテーとティーティーの使い分けは特に認められなかった。ただし年齢差は著しく、ティーティーの使用は若い年齢層ほど多い。

(13) 外来語アクセント

「テレビ」については、方言アクセント LHL と共通語アクセント HLL との間に、場面による使い分けが明確に認められた。年齢差も認められ、全般的に若い年齢層ほど方言アクセントの数値は低くなる。ただし、親しい人と話をする場面では、上の年齢層とほとんど変わらず方言アクセントがよく用いられている。

「アメリカ」については、全般的に方言アクセント LHLL/HHLL の数値が高いが、文として発話する状況よりも単語を単独で発話する状況において、その数値はより高い。LHLL/HHLL を標準的なアクセントと意識している人がいる可能性がありそうだ。ただし、LHLL/HHLL の数値は年齢層が低くな

るほど低下する。特に若年層では、「疎遠な相手」は「親しい相手」よりも数値が低くなる。ここから考えると、LHLL/HHLLを方言アクセントと受け止める方向への意識の変化も、若年層では生じているものと推測される。

「チャンネル」については、新しい共通語アクセント LHHH/HHHH よりも従来の共通語アクセント HLLLの方が一般的に優勢であるが、単語単独で発音するときは HLLL、文の一部として発話するときは LHHH/HHHH という傾向性が多少見られる。年齢層別に見ると、LHHH/HHHH の数値は若年層ほど高い。

(14) 分節音・アクセント・格助詞の組み合わせ

「猫に」について、分節音とアクセントと直後の格助詞の組み合わせを分析した。

①分節音とアクセントの組み合わせ

分節音がゴと発音された場合、アクセントは LH にほぼ限定された。分節音もアクセントも方言であるこの「ゴ・LH」は、他者に伝達する場面では数値が上昇し、特に「親しい相手」では5割近くにまで達する。こうした組み合わせの制約は、「窓」の入り渡り鼻音とアクセントの関係にも見られた。

これに対し、分節音がコと発音された場合は、「コ・LH」と「コ・HL」の両方が見られた。他者に伝達する以外の場面では、分節音もアクセントも共通語の「コ・HL」が優勢である。分節音が共通語でアクセントが方言である「コ・LH」は、「疎遠な相手」で数値が最も高くなる。

場面ごとの有力パターンという観点から見ると、親しい相手に話すときは分節音もアクセントも方言の「ゴ・LH」、親しくはない相手に話すときは分節音のみ共通語の「コ・LH」、単語だけ発音したり文を読むときは両方とも共通語の「コ・HL」となる。日常的な会話場面から遠ざかるに従い、まず分節音が先行して共通語となり、次いでアクセントが共通語になる。年齢層別に見ると、分節音もアクセントも方言の「ゴ・LH」は、「親しい相手」に対する「60代～80代」の数値が最も高い。

②分節音と格助詞の組み合わせ

分節音がゴと発音された場合、「疎遠な相手」では「猫ニ」が優勢であるのに対し、「中間的な相手」や「親しい相手」ではむしろ「猫サ」が優勢となる。

これに対し、分節音がコと発音された場合は、どの場面でも「猫ニ」が優

勢である。分節音が共通語のコであれば、それに続く格助詞も共通語のニとなるのが一般的である。ただし、「親しい相手」になるに従い、「コ・猫サ」もある程度数値が上昇する。

場面ごとの有力パターンという観点から見れば、日常的な会話場面から遠ざかるに従い、分節音も格助詞も方言の「ゴ・猫サ」から、両方とも共通語の「コ・猫ニ」に移行する。年齢層別に見ると、分節音も格助詞も方言の「ゴ・猫サ」は若年層ほど数値が低く衰退傾向にある。ただし、「親しい相手」に対しては、「10代～30代」も上の年齢層とそれほど数値が変わらずよく用いている。

③アクセントと格助詞の組み合わせ

アクセントが方言の LH と発音された場合、「疎遠な相手」では「猫ニ」が優勢であるのに対し、「親しい相手」ではむしろ「猫サ」が優勢である。

これに対し、共通語の HL と発音された場合は、「猫サ」はほとんど見られず、実際に観察されるのは「HL・猫ニ」にほぼ限定される。こうした組み合わせの制約は、「窓」のアクセントと格助詞の関係にも見られた。

場面ごとの有力パターンという観点から見れば、日常的な会話場面から遠ざかるに従い、アクセントも格助詞も方言の「LH・猫サ」から、少なくとも格助詞は共通語というパターンに移行する。年齢層別に見ると、アクセントも格助詞も方言の「ゴ・猫サ」は、若い年齢層になるほど数値が低くなり衰退傾向にある。ただし、「親しい相手」に対する場合は、「10代～30代」は上の年齢層以上に「ゴ・猫サ」を用いる。

④分節音とアクセントと格助詞の組み合わせ

主要なパターンは、3要素とも方言の「ゴ・LH・猫サ」、アクセントのみ方言の「コ・LH・猫ニ」、3要素とも共通語の「コ・HL・猫ニ」である。

3要素とも方言の「ゴ・LH・猫サ」は「親しい相手」において数値が最も高く、「疎遠な相手」となるに従い数値が下がる。代って数値が増加するのは、アクセントのみ方言の「コ・LH・猫ニ」と、3要素とも共通語の「コ・HL・猫ニ」である。このうち「コ・LH・猫ニ」は、「疎遠な相手」に対しても、「コ・HL・猫ニ」以上に数値が高い。初対面のよそ者と話をする場面でも、分節音や格助詞は共通語であってもアクセントは方言とするというのが一般的なパターンである。

パターンとして見た場合も、場面による使い分けが明確に観察された。

なお、方言と共通語を混在させる場合は、アクセントは必ず方言とし、これにさらに分節音か格助詞のいずれかを方言としうる。アクセントのみ共通語の「ゴ・HL・猫サ」は場面に関わらず皆無であり、「ゴ・HL・猫ニ」「コ・HL・猫サ」という組み合わせも皆無に近い。アクセントが共通語であるならば、分節音も格助詞もそれに連動して共通語（つまり「コ・HL・猫ニ」）となる。年齢層別に見ると、3要素全て方言の「ゴ・LH・猫サ」は、若い年齢層になるほど数値が低くなり衰退傾向にある。ただし、「親しい相手」に対する場合は、「10代～30代」は上の年齢層以上に「ゴ・LH・猫サ」を用いる。

以上、音声に関する場面差調査の結果として得られたおもな知見をまとめた。

今回の場面差調査により、音声にも場面による使い分けが見られることが確認された。ただし、あらゆる音声項目で使い分けが見られるというわけではなく、分節音では有声化（非語頭の無声子音の有声化）と母音 i の中舌化に見られた。この2項目について言えば、従来の「絵」による方法でとらえてきたのは、共通語音声の使用が非常に高い場面、逆に言えば方言音声の使用が非常に低い場面であったと言える。これは、第3回の調査だけでなく、過去2回の調査にも該当する可能性がある。分節音で使い分けが見られない項目は、共通語化が早い段階で言語生活全般に渡って著しく進行した項目である。

アクセントにも使い分けが見られた。しかしこれも、あらゆる項目で見られるわけではなく、「猫」「窓」「鳥」のように主として共通語で頭高型になる語においてであった。それは「テレビ」のような外来語アクセントにも適用される。また、これに関連し、該当する語に接続する格助詞にも、方言形と共通語形の使い分けが認められた。さらに、分節音とアクセントと格助詞を組み合わせたパターンにも使い分けが認められた。アクセントが方言であるか共通語であるかが、分節音や格助詞との組み合わせを生成する上で決定要因となっている。

5. 今後の課題

本章で報告した音声の使い分けは、鶴岡市ばかりでなくいろいろな地域で

見られる可能性がある。その使い分けのあり方が、たとえば同じ東北方言の他の地域でも鶴岡市と同じであるのかどうか、また方言体系が違う地域ではいったいどうなっているのか、今後明らかにしていく必要がある。

場面差調査の実施からずいぶん時間が経過したが、鶴岡市でもその後使い分けのあり方が変化している部分があるかもしれない。有声化や母音 i の中舌化や頭高型のアクセントに見られた場面による使い分けがその後どのようになっているのか、再度調査してその実態を追跡する必要がある。

今回の調査では、相手に伝達する場面については、相手がその場にいるつもりでロールプレイ的に発話してもらい、そのときの音声をチェックした。同一の条件でまとまった数のデータを得るためにはそうした調査方法は必須であるが、実際の言語生活の中でどうなのかもある程度把握しておく必要がある。事例的な研究にとどまるかもしれないが、今後はそうした自然発話データもあわせて収集し分析することが必要であろう。

参考文献

- 相澤正夫(1994)「ガ行鼻音保持の傾向性と含意尺度—札幌市民調査の事例から—」『国立国語研究所報告 107 研究報告集 15』秀英出版,pp.165-205
- 尾崎喜光(1988)「場面によるアクセントの切り替えをさぐる試み—札幌市における社会言語学的調査から—」『国語学会 昭和 63 年春季大会要旨』pp.84-90
- 尾崎喜光(2000)「方言音声使用の場面的多様性—山形県鶴岡市での調査から—」『日本方言研究会 第 70 回 研究発表会 発表原稿集』pp.9-16
- 尾崎喜光(2001)「言語生活の変容についての百年という時間」『日本語学』20-1, 明治書院,pp.30-40
- 尾崎喜光(2003)「ことばの地域差の多様な姿」国立国語研究所編集・発行『新「ことば」シリーズ 16 ことばの地域差—方言は今—』, 財務省印刷局(現・国立印刷局),pp.38-46
- 加藤正信(1983)「第 4 章 東京における年齢別音声調査」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道—』(科学研究費補助金研究成果報告書),pp.71-91
- 国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告 5 地域社会の言語生活—鶴岡に

- おける実態調査一』秀英出版
- 国立国語研究所(1974)『国立国語研究所報告 52 地域社会の言語生活—鶴岡における 20 年前との比較—』秀英出版
- 国立国語研究所(1994)『国立国語研究所報告 109-1 鶴岡方言の記述的研究—第 3 次鶴岡調査 報告 1—』秀英出版
- 国立国語研究所(1997)『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』内部資料
- 佐藤亮一(1996)「方言の衰退と安定」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院,pp.61-75
- 陣内正敬(1996)『北部九州における方言新語研究』九州大学出版会
- 早野慎吾(1996)『地域語の生態シリーズ 関東篇 首都圏の言語生態』おうふう
- 三井はるみ(1990)「場面によるアクセントの切り替え—岩手県水沢市における世代別調査から—」『学苑』602, pp.158-167
- 米田正人(1993)「鶴岡市における共通語化の調査—約 20 年間隔で行われた 3 回の調査を比較して—」『日本方言研究会 第 56 回 研究発表会 発表原稿集』pp.17-24
- Hibiya,J.(1988) *A Quantitative Study of Tokyo Japanese*. Unpublished dissertation, University of Pennsylvania.

第3章 音声の使い分け(2) 一音響分析による検討一

前川喜久雄

1. はじめに

第3回鶴岡調査の特徴のひとつは調査が録音されていることである。録音をとることは調査の企画段階で比較的早くから決まっていたので、2年次調査のなかに録音の存在を前提とした項目を組み込むことができた。本章でとりあげる項目(201~203)はそういう項目のひとつである。

この項目では、まず図1に示した文章を回答者に朗読してもらった(項目201)。その後、回答者が「普段一番気楽に話をする相手の方」は誰かを質問し(項目202)、その相手に対して話すならばどのようになるかを実演してもらった(項目203)。その際、「自分が実際に見たことをしゃべるつもりで、できるだけ自然な調子をお願いします。少しことばを換えてもかまいません」という指示を与えている。図1では分析対象の語に下線を付しているが、回答者に提示した文にはこのような下線は用いていない。本書末尾の資料1・資料2の該当箇所も参照。

今朝の7時ぐらいのことだった。
公園で猫がスズメをねらっていた。
スズメが地面におりてくると、猫は静かに近づいてきた。
しかし、猫の首には鈴がついているので、
鈴の音でスズメは逃げてしまった。
猫はもう一度同じことを始めた。

図1 調査に用いた文章

この項目の狙いは、そのように要求された場合に、回答者が共通語音声と方言音声とをどの程度切り替えられるかを検討することにある。いわば意図的な共通語化能力の検討である。検討の方法としては、最初の朗読発話を共通語発話が期待される場面、二番目の発話を方言発話が期待される場面とみ

なし（共通語の音声が使われていてもここでは「方言発話」と呼ぶ）、両者間で音声特徴がどのように変化するかを比較することになる。以下では、前者を「共通語発話」、後者を「方言発話」と呼ぶ。

意図的な共通語化能力の検討は今回の調査の重要な焦点となっており、300～500番台の項目もすべてこの能力に関係しているといつてよい。その中で本項目の特徴となっているのは、当初から音声の客観的（音響的）分析を念頭において設計されている点である。具体的には、シ・ス、チ・ツ、ジ・ズの混同ないし合一現象をとりあげて、これらのモーラが母音の無声化の生じにくい環境で繰り返し発声される文章を作文した。この特徴を選択した理由は以下のふたつである。

- 1) 音韻の対立に関与する音声特徴であり、共通語化が方言の話者にとってある程度大きな負荷となる特徴であること
- 2) 録音された音声の分析手法がほぼ確立されており、また、あまり良好でない録音状態の音声にも適用可能であること

1) が必要であるのは、共通語化があまりに容易であると、意図的な共通語化能力の個人差が顕現せず、調査の目的を達成することができないと考えられたからである。

2) の条件が大切であるのは、音韻対立の有無にかかわる音声特徴の分析をほぼ完全に自動化したいと考えたからである。自動化が望まれる理由を以下に述べる。

少なくともシ・ス等の混同現象に関する限り、共通語化は漸進的に進行すると予想される。つまり明確に共通語の音韻体系に移行している回答者および明確に方言の音韻体系にしたがっている回答者を両極として、その中間に共通語化の様々な段階にある回答者が連続的に分布していると予想される。また同一の回答者にあっても諸状況によって共通語化の程度を変化させると予想される。

このように連続性に富んだデータを分析する際には、分析者の主観をいかに排除するかが重要な課題になる。特に研究者が共通語化の判定に携わると、無意識裡に研究者の期待が判定結果に影響する可能性を否定できない。そのため共通語化の有無ないし程度の判定が純粋に客観的な分析に立脚している

ことが望まれるのである。

自動化が望まれるもうひとつの理由として調査の規模がある。今回の回答者は百数十人の水準であるから、人手による分析も可能であるが、数百人、数千人規模のデータを処理するようになってくると分析は自動化せざるをえなくなると予想される。

もちろん言語分析のあらゆる側面を自動化することは困難にちがいない。しかし、それが可能と思われる側面では、自動化の可能性を追求しておく必要がある。本項目では、あらかじめ客観的な分析が実施しやすい条件を保障したうえで、どこまで客観的な分析を実施できるかを追求した。

今回の分析では、音韻対立に関与する母音の音色をフォルマント周波数という客観的な音響的関連量によって表現することにくわえて、所与の2母音間に音色の組織的な差異が存在しているかどうかを分散分析の結果にしたがって判定し、従来の音韻分析に代替することを試みている。

筆者は本稿と同じプロトコルによる分析を青森方言、出雲方言などの母音に適用したことがある（前川 1984, 1989; Maekawa 1988）。その結果は成功といえるものであったが、音響分析ではサウンドスペクトログラムを作成したのち視察でフォルマントパターンを推定していた。そこには当然分析者の期待が関与する余地があった。

今回の分析では、先行研究よりもはるかに多くの話者を対象とすることもあり、分析の全過程を可能なかぎり自動化した。そのために分析精度の低下に目をつぶった面もある。

フォルマント周波数の推定はアルゴリズムに基づく処理であるため、分析パラメタの指定によっては第3フォルマントを第2フォルマントと認識するような組織的な分析誤りが生じる。このような誤りは手作業で修正することができるが、以下では原則としてそのような修正をおこなっていない。多数の標本を分析するかぎりにおいては分析誤りもまた誤差の一部として処理可能と考えたからである。ただし少数サンプルに基づく議論をおこなう際には、人間（筆者）が音声を検聴して分析誤りと思われるサンプルを除外する処理を実施している（4.1節参照）。

以上は母音の音響分析についてであった。シ・ス等の混同現象には子音も関与しているのだが、今回の分析では母音の音質だけを分析の対象とした。子音を扱わなかった理由は子音の分析では条件2)を満たす分析を簡単には

実施できないからである。そのため分析に一定の限界がもたらされていることは否めない（4.1 節参照）。

2. 分析手法

2.1. 音声信号

本項目は 92 年度の場面差調査の一項目として実施された。回答者数は、前年度の継続調査対象者(92K)が 87 名、パネル調査対象者(92P)が 88 名の合計 175 名であるが、今回の分析ではそのうち、本稿執筆時点で音声ラベリング（2.2 節参照）が終了している 101 名を分析の対象とした。表 1 に今回分析対象とした回答者（以下では話者ないしは発話者と呼ぶこともある）の性別、年齢層別の分布を示す。

表 1 話者 101 名の性別、年齢層別分布

年代	男	女
20 歳代以下	3	0
30 歳代	10	6
40 歳代	4	9
50 歳代	11	9
60 歳代	14	18
70 歳代	6	7
80 歳代	1	3

収録された音声の録音状態はさまざまである。静かな室内での録音もあるが、激しい騒音を伴う録音もある。録音に利用されたのは、すべてアナログのカセットテープレコーダーであった。またマイクロホンは、民生用のタイプピン型マイクないしテープレコーダーの内蔵マイクロホンであった。

今回の分析のために音声を A/D 変換する必要があったが、アナログ録音された音声はバックアップ目的で DAT テープにダビングされていたので、DAT の信号を PC のハードディスクに転送した。その際、DAT における標本化周波数 48000Hz を 22050Hz にダウンサンプリングした。録音に利用されたマイクロホンの品質を考慮すると分析可能周波数帯域の上限（サンプリング周波数の二分の一にあたり、ナイキスト周波数と呼ばれる）として、10KHz が確保されていれば十分であると判断されたからである。量子化精度は変更しておらず転送前後とも 16bit である。

2.2. ラベリング

母音のフォルマント周波数を推定するためには、分析対象とする母音が音声信号のどの位置（時刻）に存在しているかを知ることが必要である。そのために音声信号のラベリングを実施して、音声信号に発話、単語、母音の三階層のラベルを付与した。発話ラベルは共通語ないし方言発話の開始時刻と終了時刻を示すラベルである。単語ラベルは発話に含まれる分析対象語（図1および表2参照）の開始時刻と終了時刻を示すラベルである。母音ラベルは分析対象となる母音の時間区分のほぼ中央の時刻を示すラベルである。

図2にラベリングを施された音声信号の状態をしめす。上から順に音声波形、サウンドスペクトログラムが表示されており、その下に発話ラベル、単語ラベル、母音ラベルが付与されている（音形の前後の添字の説明は後出）。

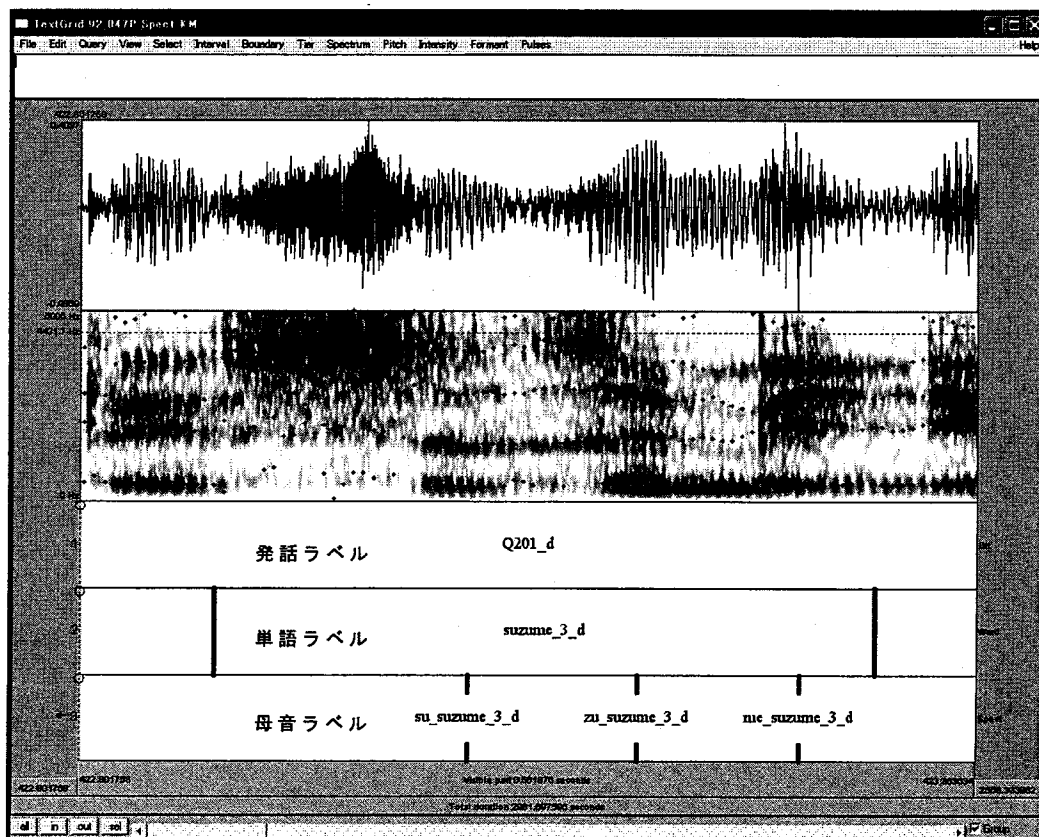


図2 音声信号のラベリング例

母音ラベルの縦線がフォルマント周波数の測定時刻に該当する。スペクトログラム上に重ねて表示されている点はフォルマント周波数の推定値であり、下から順に F1, F2, F3, F4, ……である。

今回の分析の対象とした母音ラベルを表 2 に示す。これらのラベルには、以下に説明する様々な添字を付加して利用するが、表では添字の大部分を省略して、後述するラベル文字列と出現順の添字だけを示した。そのため実際のラベル数は表 2 よりかなり多い。

表 2 の最終行は比較の対象とするために母音ラベルを付与したシ, チ, ジ以外のイ段母音である(3.2 参照)。なお、今回の分析では利用していないが、母音ラベリング作業では、表 1 中の語ラベルに含まれるほぼすべての母音に母音ラベルを付与した。その一部は後出の表 3 に見ることができる。

表 2 母音ラベルのモーラごとの一覧

モーラ	母音ラベル			
シ	si_sicizi	si_sizuka	si_sikasi	si_simatta
ス	su_suzume_1	su_suzume_2	su_suzu1	su_suzu_2 su_suzume_3
チ	ci_sicizi	ci_cikazui	ci_icido	
ツ	cu_cuite			
ジ	zi_sicizi	zi_zimenni	zi_onazi	zi_hazime
ズ	zu_suzume_1	zu_suzume_2	zu_sizuka	zu_cikazui zu_suzu_1 zu_suzu_2 zu_suzume_3
上記以外の イ段モーラ	bi_kubi 'i_iru 'i_icido	ri_orite		ni_zimenni

単語ラベルおよび母音ラベルの読み方について注意すべき点を以下に列挙する。

- 1) ラベル文字列：単語ラベルは図 1 の文章中に含まれる語の音形を音素記号化したものである。例えば「スズメ」「七時」はそれぞれ *suzume*, *sicizi* となる。
- 2) 発話タイプの添字：所与の語が共通語（朗読）発話中のものか方言発話中のものかを添字「_s」「_d」によって、*sicizi_s*, *sicizi_d* のように区別する。

- 3) 出現順の添字：図1の文章中には「スズメ」が3回、「鈴」が2回出現しているため、文中の出現順にしたがって、`suzume_3_s`, `suzu_2_d` のように、整数の添字を用いて区別する（出現位置の添字の後ろに発話タイプの添字が置かれていることに注意）。
- 4) 繰り返しの添字：文章中には1回しか用いられていなくても、言い直しなど、何らかの理由で繰り返し発音されている語がある。そのような繰り返しは「_a」「_b」のようにアルファベットの添字で表現する。この添字の位置は、`suzume_3_s_b` のように、添字全体の一番最後に位置づける。添字「_a」が最初の繰り返しではなく、最初の発音を示すことに注意。繰り返しが無い場合は添字は特に付さない。
- 5) 方言発話では、翻訳の結果、図1の文章中に指定されている音形が変更されることがある。例えばラベル `onazi` で表現される「同じ」は「オンナジ」と発音されたり「オナシ」と発音されたりしている。このように語形が変異している場合も、語が同一であるかぎり、ラベル文字列としては `onazi` を一貫して使用している。添字などによる識別は特にしていない。
- 6) 母音ラベルは、対象母音を含むモーラをラベル文字列のなかから切り出して、単語ラベルの頭に接頭辞として付与したものとする。例えば `suzume_2_d_b` に含まれる三つの母音には、`su_suzume_2_d_b`, `zu_suzume_2_d_b`, `me_suzume_2_d_b` の3ラベルが付与される。
- 7) 無声化した母音には、母音ラベルを付与していない。すなわち分析の対象外とした。
- 8) 稀に分析対象の母音を発話者が言い誤っていると思われる発話がある。例えば「スズメ」を「スズモ」と発音しているようなケースである。この場合も、モーラ「モ」に含まれる母音には母音ラベルを付与していない。言い誤りではないが、補助動詞の「いる」を「いた」と発音しているようなケースもこれに準じて処理している。

音声のラベリング作業は筆者の作成したマニュアルに従って、アルバイトの大学院生3名が実施した。作業終了後にすべてのラベルを筆者がチェックして必要な修正をくわえた後、以下の分析にすすんだ。

2.3. フォルマント周波数の推定

以下の手順に従って母音のフォルマント周波数を推定した。実際の処理はもう少し煩雑であるが、以下の議論には直接関係しないので省略する。

- 1) 音声ファイルには調査の全体が記録されており長いものは1時間以上に達している。そこで、発話ラベルに記録された共通語および方言発話の開始終了時刻を参照して、本項目の発話だけを別ファイルに切り出した。これらを共通語発話ファイル、方言発話ファイルと呼ぶ。これらのファイルは多くの場合30秒以下の長さであるが、概して方言発話の方が長い。
- 2) 共通語発話ファイルおよび方言発話ファイルに対し、線形予測分析法によるフォルマント周波数推定を実施した。分析には Entropic 社が販売していた音声分析パッケージ `esps` に含まれる `formant` コマンドを利用した。推定すべきフォルマント数を4個とし、分析次数12で線形予測分析を実施した (`esps` の `formant` コマンドは分析に先立って音声信号を10kHzにダウンサンプリングすることに注意)。分析窓はハミング、窓のシフト幅は10ms (百分の一秒ごとにフォルマント周波数を推定する) である。
- 3) 分析結果をテキストファイルに出力し、それに時間情報を付与する。このファイルには発話全体の分析結果が格納されている。
- 4) 最後に母音ラベルに記録されている対象母音の生起時刻を参照し、各母音の生起時刻にもっとも接近した時刻のフォルマント情報を当該母音のフォルマント周波数情報として採用する。

最終的には表3のようなファイルができあがる。左から順に、話者ID、母音ラベルの時刻、モーラ(母音ラベルの接頭辞)、母音ラベル本体(ラベルから接頭辞発話タイプおよび繰り返し等の添字を削除したもの)、発話タイプ(dは方言発話、sは共通語発話)、繰り返し(言い直し等により発音が複数回得られた場合の識別)、F1(第1フォルマント周波数)、F2(第2フォルマント周波数)、F3(第3フォルマント周波数)、F4(第4フォルマント周波数)。実際にはこの他に各フォルマントのバンド幅(B1~B4)も推定している。ちなみに、この表において語ラベル `sicizi` 中のシが分析されていないのは、母

表 3 フォルマント周波数の推定結果の例

話者	母音ラベル時刻[sec]	モーラ	語	発話タイプ	繰り返し	F1[Hz]	F2[Hz]	F3[Hz]	F4[Hz]
041P	653.67	ha	hazime	d		710	1150	2049	3895
041P	653.81	zi	hazime	d		365	1543	3525	4274
041P	653.93	me	hazime	d		356	1796	2393	3195
044K	323.16	ci	sicizi	s	a	402	1728	2433	3677
044K	323.26	zi	sicizi	s	a	295	2049	3453	4077
044K	323.91	ci	sicizi	s	b	311	1848	2480	3464
044K	323.99	zi	sicizi	s	b	331	2058	2083	3421
044K	326.7	su	suzume1	s		372	1432	2243	3882
044K	326.77	zu	suzume1	s		385	1409	2336	3696
044K	326.91	me	suzume1	s		528	1480	2124	3584

音が無声化しているためである。

ここでフォルマント周波数の推定に関してひとつ注意を述べておきたい。フォルマント周波数の測定はモデルとアルゴリズムに基づく推定作業である。モデルもアルゴリズムもともに完璧ではないから、推定結果にはエラーが含まれる可能性がある。特に今回のデータのように年齢および性別が異なる多くの話し手の音声を分析する場合、正確を期するためには話し手にあわせて分析条件を変更することが望まれる。

しかし今回はすべての話し手について同一の分析条件を適用した。その主たる理由は、先に第1節で指摘した分析者の主観を排除するためである。表3では話者044Kの共通語発話のsicizi「7時」中のモーラziの2回目の繰り返しで、F2とF3が接近しすぎている。分析誤りの例であるが、これを再分析して修正することをおこなっていない。

上記の手順で話者101名による8671個の母音を分析した。その内訳を表4に示す。

表 4 分析した母音の数

話者	シ	ス	チ	ツ	ジ	ズ	その他	合計
男 49名	172	430	161	89	336	662	2265	4115
女 52名	205	509	179	92	377	717	2477	4556

表 1 におけるモーラごとの分布を反映して、分析された母音数はモーラによって大きく変動している。特にツはもともと文章中に 1 回しか出現しない。この点は後の議論で重要なポイントになる (3.1 節参照)。3 節以下では、これらの母音の定量的な分析結果を報告するが、その前に定量的分析において重要な役割を果たすいくつかの概念について最少限の説明をくわえることにする。

2.4. フォルマント周波数について

2.4.1. 座標系の設定

フォルマントは声道の共鳴特性のピークを表現するパラメータである。母音がそうであるように、声道の共鳴だけによって生成される音声（反共鳴の特性をもたない音声）のスペクトルは、このパラメータを指定することによって完全に表現することができる。理論上は無数個のフォルマントについてフォルマント周波数（共鳴周波数）とバンド幅（共鳴の鋭さ）を指定する必要があるが、母音の音質のうち言語学的に重要な情報は、共鳴周波数の低い方から数個のフォルマントを指定するだけで十分表現されることが知られている。また言語学的情報の伝達に寄与するのはフォルマント周波数であり、バンド幅はほとんど寄与していないことも知られている。

声道の共鳴特性は声道の形状が定まれば一意に定まるので、フォルマント周波数を知ることによって、その母音を生成した声道の形状、すなわち調音の情報を推測することができる。F1（第 1 フォルマント周波数＝最も低い共鳴周波数）と F2（第 2 フォルマント周波数＝二番目に低い共鳴周波数）を直交座標上に配した場合、標準的な日本語の 5 母音は図 3 のように表現される。調音音声学の知識をもってこの図を検討すると、X 軸（F1）がいわゆる舌の最高点の上下位置に、Y 軸（F2）が前後位置に概略対応していることがわかる。

ただしこのままでは調音音声学における通常の母音図とは軸の向きが異なっているので、両軸ともに反転させて原点を右上に移動させると、通常の母音図に酷似した座標系がえられる（図 4 参照）。以下では一貫して図 4 のフォルマント座標系を利用する。

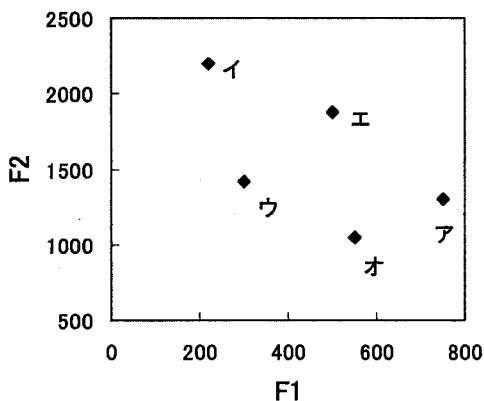


図3 共通語5母音の
F1-F2平面上の位置

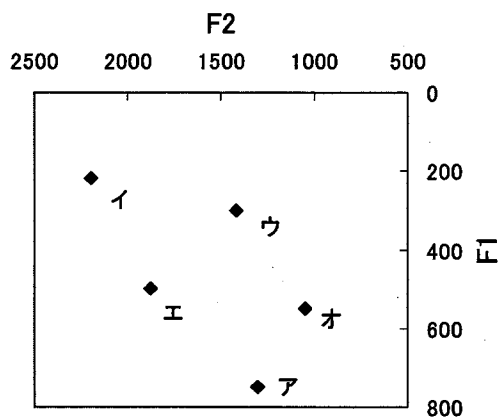


図4 以下で用いる
F1-F2平面図

2.4.2. フォルマント周波数が表すもの

今回分析の対象としているシ・ス等の混同現象は、母音に関するかぎり、狭母音イとウの混同現象であり、フォルマント座標系上では、F2軸（X軸）にかかわる現象であると予想される。すなわち共通語ではイのF2値が高く、ウのF2値が低く分布していることによって両母音が分離されているのに対し、鶴岡その他の方言では、1)イの調音位置が後方に移動することによってF2が低下する、2)ウの調音位置が前方に移動することによってF2が上昇する、あるいは、3)上記1)、2)の同時発生によって、両母音の音韻的対立が失われるか曖昧化するものと予想される。

ここでひとつ注意しておく必要があるのは、F2の値の変動をもたらす調音運動は舌の位置変化ばかりに限られないことである。例えばいわゆる円唇化は、声道前部の実効長を増大させるため、F2を顕著に低下させる。喉頭の下降も声道長を延長する効果があるため、F2の下降をもたらす。

鶴岡方言の場合、音声学的にみて、F2の変動に喉頭の上下動が関係しているとは考えられない。しかし、唇の状態がF2に影響している可能性は否定できない。一般に東日本方言では母音に円唇化がめだたないといわれており、鶴岡方言のウも、調音音声学的にみて円唇母音ではない。しかし、唇を突出させずに上下唇を接近させるだけでもF2は顕著に低下する。今回のデータについて言えば、話し手の唇の映像が記録されているわけではないので、唇の関与の可能性を疑問の余地なく排除することはできない。以下の分析では

F2 の変動が舌の調音位置の変動によって生じたものとみなして議論をすすめるが、厳密に言えばこれはあくまで仮定である。

2.4.3. 分散分析

以下の分析では F2 の推定値に分散分析を施すことによって、音韻対立の有無、および共通語発話と方言発話の差異の有無を検討する。分散分析 (Analysis of Variance; ANOVA) は、複数の正規母集団のグループ間において量的変数の平均値に統計的な差が存在するかどうかを検定する手法である。ここでは量的変数として、F1、F2 を個別に分散分析するだけでなく、F1 と F2 のペア (F1*F2 と表記する) も検定の対象とする。F1*F2 の分析は多変量分散分析 (MANOVA) と呼ばれるタイプの分散分析になる。

ここでは、分散分析の実例として、話者 1 名 (047P) が発音したジとズの母音のフォルマント周波数を共通語発話と方言発話にわけて検定してみる。

まず図 5 に共通語発話のデータの分布状態をしめす。図中の楕円は確率集中楕円であり、ジないズスの 68% がこの楕円内に収まると予測される分布の範囲を示している。通常の見定における信頼区間に相当する。図 5 の場合、両母音の F1 には差が認められないが、F2 には明瞭に差があると思われる。これを検定してみよう。

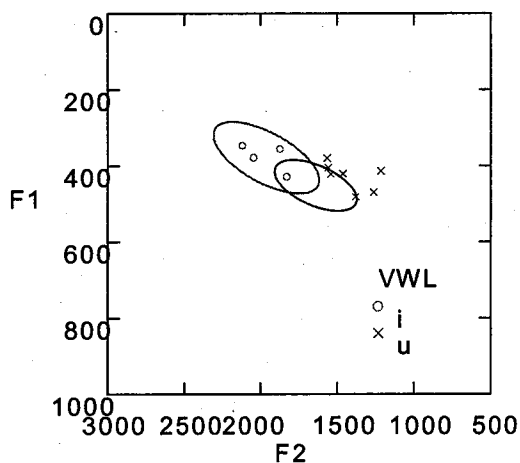


図 5 分散分析を施したサンプル (共通語発話)

図 5 のデータに分散分析を実施すると図 6 の結果を得る。図中最初の 3 行

は F1 単独での（一元配置）分散分析の結果，続く 2 行が F2 単独での検定結果，そして最後の 2 行が多変量分散分析の結果である。有意水準を 5%にとることとして，限界確率(P)を検討すると，F1 の差は有意でないが(P>.05)，F2 と F1*F2 のペアは高度に有意(P<.001)である。

Effect	SS	df	MS	F ratio	P
F1	1255.834	1	1255.834	3.389	<u>0.099</u>
Error	3334.920	9	370.547		
F2	910629.000	1	910629.000	168.212	<u>0.000</u>
Error	48722.118	9	5413.569		
Hotelling-Lawley Trace		F ratio		P	
43.570		174.281		<u>0.000</u>	

図 6 分散分析表（データは図 5）

図 7 に同じ話者の方言発話におけるサンプルの分布をしめす。図からわかるように，F1，F2 とともに顕著な差を認め難い。このデータに分散分析を実施すると図 8 の結果を得る。F1 単独の場合，F2 単独の場合に有意差は認められず，多変量分散分析(F1*F2)でも有意差は認められない。

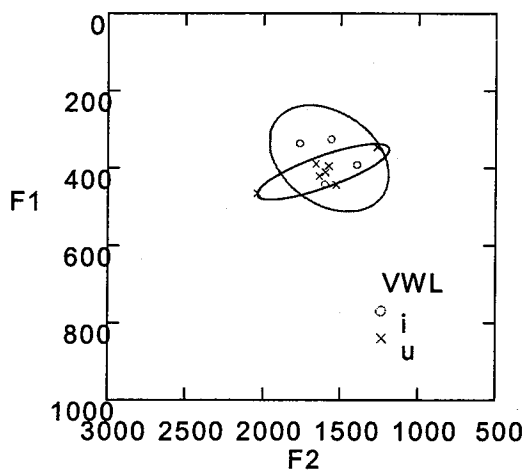


図 7 分散分析を施したサンプル（方言発話）

Effect	SS	df	MS	F ratio	P
F1	22.114	1	22.144	0.049	<u>0.830</u>
Error	4094.960	9	454.996		
F2	471.178	1	471.178	0.014	<u>0.908</u>
Error	48722.118	9	5413.569		
Hotelling-Lawley Trace			F ratio	P	
0.006			0.014	<u>0.908</u>	

図 8 分散分析表 (データは図 7)

図 6 および図 8 からは次の結論が導ける。この回答者は共通語発話においてはジとズの母音を F2 によって明瞭に区別して発音しており、従って両母音間に音韻の対立が存在していると解釈できる。一方、方言発話においては F1 にも F2 にも、さらに両者の同時分布にも有意差が認められず、したがって両者間の音韻対立も存在しないと解釈される。さらに両発話の比較から、この回答者は必要に応じて共通語と鶴岡方言の音韻特徴を切り替えられる話者であると解釈できる。次節以降の議論では、上に説明した方法でデータを分析し、分散分析の結果に従って音声上の区別(対立)の有無を判定する。

3. 分析

3.1. シ・ス, チ・ツ, ジ・ズ全体の分析

最初に、鶴岡全体として、シとス, チとツ, ジとズの間にとどの程度音声上の区別が保たれているかを検討する。ただし男性と女性のデータを同時に分析すると、性別に起因するフォルマント周波数の差が組織的なエラーの原因となるので(一般に女性の声道は男性よりも短いためにフォルマント周波数が高い)、男女別に分析する。

表 5 は共通語発話におけるシ・ス等の母音の F1, F2 の平均値と標準偏差(SD)を男女別に示している。また、表 6 はその分散分析結果である。

同様にして方言発話の分布と分散分析結果を表 7, 表 8 に示す。表 6, 表 8 中の自由度(df)は F1, F2 単独分析の場合を示している。多変量分散分析では分子が 1 増大することに注意(例えば, 1,295 が 2,295 になる)。

表 5 共通語発話におけるシ・ス, チ・ツ, ジ・ズ全体の分布

性別	モーラ	N	F1 平均	F2 平均	F1 STD	F2 STD
男	シ	79	376	1703	57	334
	ス	218	368	1456	52	319
	チ	90	364	1817	60	309
	ツ	47	377	1842	42	190
	ジ	173	388	1759	56	323
	ズ	337	403	1441	76	269
女	シ	109	408	2079	86	433
	ス	248	421	1603	75	276
	チ	88	404	2154	73	422
	ツ	48	416	1993	43	423
	ジ	187	410	2061	75	536
	ズ	356	450	1589	89	340

表 6 共通語発話の分散分析結果

性別	モーラ対	df	F1	F2	F1*F2
男	シ・ス	1,295	F=1.203 P=.274	F=33.696 P<.001	F=18.075 P<.001
	チ・ツ	1,135	F=1.708 P=.193	F=.262 P=.610	F=1.219 P=.299
	ジ・ズ	1,508	F=5.562 P=.019	F=138.510 P<.001	F=70.970 P<.001
女	シ・ス	1,355	F=1.965 P=.162	F=155.126 P<.001	F=78.936 P<.001
	チ・ツ	1,134	F=1.019 P=.315	F=4.438 P=.037	F=2.572 P=.080
	ジ・ズ	1,541	F=27.350 P<.001	F=155.845 P<.001	F=100.653 P<.001

表 7 方言発話におけるシ・ス, チ・ツ, ジ・ズ全体の分布

性別	モーラ	N	F1 平均	F2 平均	F1 STD	F2 STD
男	シ	93	392	1600	63	233
	ス	212	374	1442	54	282
	チ	71	365	1609	53	257
	ツ	40	390	1745	36	152
	ジ	163	409	1655	95	302
	ズ	325	406	1496	58	241
女	シ	96	412	1940	81	412
	ス	261	409	1609	71	314
	チ	91	397	1988	78	409
	ツ	44	435	1988	50	399
	ジ	190	412	1910	79	488
	ズ	361	456	1626	88	332

表 8 方言発話の分散分析結果

性別	モーラ対	df	F1	F2	F1*F2
男	シ・ス	1,303	F=6.345 P=.012	F=22.196 P<.001	F=14.119 P<.000
	チ・ツ	1,111	F=7.140 P=.009	F=9.641 P=.002	F=10.855 P<.001
	ジ・ズ	1,486	F=.261 P=.640	F=39.206 P<.001	F=19.801 P<.001
女	シ・ス	1,355	F=.117 P=.733	F=64.964 P<.001	F=33.389 P<.001
	チ・ツ	1,133	F=8.733 P=.004	F=.001 P=.994	F=4.362 P=.015
	ジ・ズ	1,549	F=32.092 P<.001	F=64.716 P<.001	F=52.306 P<.001

シ・スあるいはジ・ズの F2 (および F1*F2 も) には、発話のタイプ、話者の性別を問わずに高い有意差が認められる。また表 5, 表 7 によれば、シないしジの F2 はスないしズの F2 よりも高い値を示しており、音声学的な予測に合致する。以上の二点から、シ・スとジ・ズの対に関しては対立が存在していると考えられる。

一方、チ・ツの F2 は男性の共通語発話に有意差がなく、女性は 5%水準でのみ有意である。方言発話では反対に男性に有意差があり、女性に有意差が認められない。一見すると鶴岡ではチ・ツの対立が失われていることを示唆するように思えるが、実はそう考えない方がよい。

先に 2.3 節で表 4 に関連して指摘したように、今回分析した文章にはツのモーラが 1 回しか出現していない。そのため、そのツが音声的に特殊な環境にあれば、その影響が検定結果に著しいバイアスをあたえる可能性がある。今回の文章においてツのモーラを含む語は「就いて」であり(単語ラベルは cu_cuite), 連母音という特殊な環境におかれている。

この環境で母音/u/の F2 は後続する/i/の影響で顕著に上昇し、ときに連母音/ui/が/iH/ (すなわち/i/の長母音) にちかく発音されることもある。実際、表 5, 表 7 中のツの F2 を検討すると、発話のタイプ、話者の性別を問わずに、スないしズの F2 よりもはるかに高い値をとっていることがわかる。

以上の論拠によって、チ・ツにおける有意差の欠如は、ツがおかれた音声環境の影響によるものと判断できる。鶴岡の地域社会全体としては、他の 2 対と同じくチ・ツの対にも音韻的対立が存在しているものと判断できる。

3.2. 発話タイプが同一モーラにおよぼす影響

前節の分析によって、現代の鶴岡方言では、共通語発話においても方言発

話においても、シ・ス等の母音の対立が存在することが明らかになった。しかし、それは共通語発話と方言発話が音声学的に同一であることを含意してはいない。音韻的な対立の音声学的な実現形が発話タイプによって変化している可能性があるからである。本節ではこの問題を検討する。

そのためには、シ、ス、チ、ツ、ジ、ズの各モーラをひとつずつとりあげて、共通語発話と方言発話とで F1, F2 にどのような差が生じているかを検討すればよい。発話タイプおよび性別による F1, F2 平均値の変動は既に表 5, 表 7 中に示したので、以下には分散分析の結果だけを示す。

有意水準を 5%にとり、F2 の検定結果に注目すると、男性の発話ではシ、チ、ツ、ジ、ズに、女性の発話ではチ、ジ、ズに有意差が認められる。女性のシ (P=0.67) を例外として、イ段モーラには発話タイプによる影響が生じている。

ここで表 5 と表 7 の対応するセルを比較すると、イ段モーラの母音は一貫して F2 の平均値が方言発話において共通語発話よりも低下する方向に変化していることがわかる。2.4.2 節の仮定に則って調音音声学的に解釈すれば、調音位置の後方への移動が生じていることになる。

表 9 発話タイプが単一モーラにおよぼす影響の分散分析

性別	モーラ	df	F1	F2	F1*F2
男	シ	1,170	F=2.982 P=.086	F=5.603 P=.019	F=4.188 P=.017
	ス	1,428	F=1.357 P=.245	F=.229 P=.633	F=.765 P=.466
	チ	1,159	F=.001 P=.970	F=20.533 P<.001	F=10.593 P<.001
	ツ	1,87	F=2.141 P=.147	F=6.818 P=.011	F=3.432 P=.037
	ジ	1,334	F=6.379 P=.012	F=9.310 P=.002	F=7.381 P<.001
	ズ	1,630	F=.662 P=.416	F=5.982 P=.015	F=3.550 P=.029
女	シ	1,166	F=.194 P=.660	F=3.407 P=.067	F=1.699 P=.186
	ス	1,526	F=2.872 P=.091	F=.216 P=.642	F=1.681 P=.187
	チ	1,186	F=.695 P=.406	F=6.876 P=.009	F=3.851 P=.023
	ツ	1,93	F=2.829 P=.096	F=.030 P=.864	F=1.442 P<.242
	ジ	1,390	F=.360 P=.549	F=7.039 P=.008	F=3.928 P<.020
	ズ	1,660	F=.204 P=.651	F=7.674 P=.006	F=3.950 P=.020

一例として図 9 に女性話者のシの散布状態を示す。この図から方言発話中の母音 (○) が共通語発話中の母音 (×) よりも後寄りに位置している様子をみてとれる。ただし方言発話と共通語発話は大幅にオーバーラップしている。他のモーラにおける母音の変化もこれに類した変化であり、両者の母音

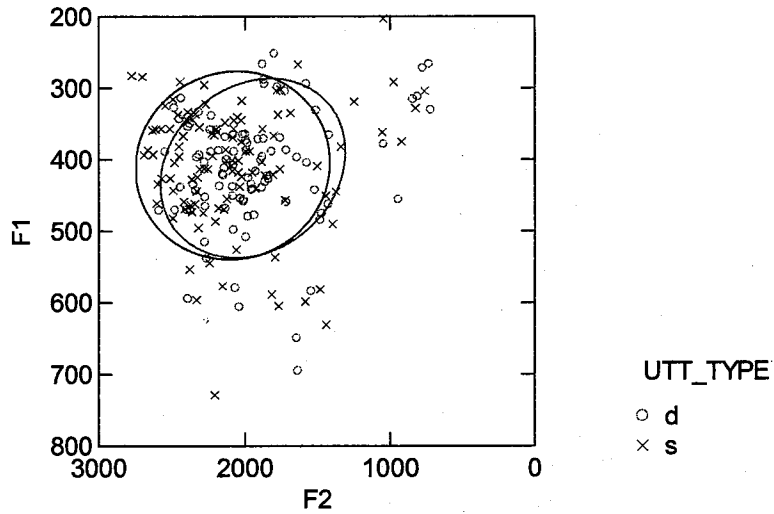


図 9 女性話者のジの母音の分布

が明確に分離することはない。このように連続性をともなった組織的な差異を把握できるのが客観的分析の強みである。

ここでひとつ疑問が生じる。発話タイプのこのような影響はシ、チ、ジに限って選択的に生じているのか、それともイ段母音全般の特徴であるのかと

表 10 シ、チ、ジ以外のイ段モーラ母音の F1, F2

性別	モーラ	発話タイプ	N	F1 AVG	F2 AVG	F1 STD	F2 STD
男	'i	s	91	364	1922	50	370
	'i	d	44	378	1860	59	321
	bi	s	48	361	1870	49	313
	bi	d	45	368	1853	46	285
	ni	s	46	410	1814	122	380
	ni	d	27	433	1750	74	285
	ri	s	48	372	1876	64	243
女	ri	d	55	374	1843	50	289
	'i	s	100	392	1997	66	657
	'i	d	53	406	1902	74	600
	bi	s	50	372	2069	46	709
	bi	d	50	400	2040	66	606
	ni	s	53	411	1730	114	768
	ni	d	31	455	1757	130	707
ri	s	51	402	2152	53	533	
ri	d	55	423	2143	64	462	

表 11 シ, チ, ジ以外のイ段モーラ母音の分散分析

性別	モーラ	df	F1	F2	F1*F2
男	'i	1,133	F=2.066 P=.153	F=.889 P=.347	F=1.215 P=.300
	bi	1,91	F=.543 P=.463	F=.065 P=.799	F=.293 P=.747
	ni	1,71	F=.764 P=.385	F=.551 P=.460	F=.596 P=.554
	ri	1,101	F=.037 P=.848	F=.378 P=.540	F=.221 P=.802
女	'i	1,151	F=1.498 P=.223	F=.757 P=.386	F=1.159 P=.317
	bi	1,98	F=5.793 P=.018	F=.047 P=.828	F=2.912 P=.059
	ni	1,82	F=2.517 P=.116	F=.025 P=.874	F=1.304 P=.277
	ri	1,104	F=3.479 P=.065	F=.010 P=.921	F=1.734 P=.182

いう問題である。この問題を検討するために、シ, チ, ジ以外のイ段モーラに対する発話タイプの影響を検討した。その結果を表 10 に、分散分析結果を表 11 に示す。

いずれのモーラについても、表 5, 表 7 と比較すると、表 10 における発話タイプによる平均値の差は相対的に僅少であることがわかる。また表 11 の F2 に注目すると、いずれのモーラの変動も統計的に有意ではないことがわかる。以上の事実から、発話タイプの影響は選択的であると判断できる。

3.3. 個人レベルでの分析

ここまでの分析はいずれも話者を集団として分析した結果であった。しかし、前節で検討したような変動には、話者ひとりひとりの特性が反映されている可能性がある。つまり、例えば発話タイプによって発音を明確に切り替える話者とそのような切り替えを全くおこなわない話者がともに存在する可能性がある。また、そもそもシ・ス等における母音の対立がない話者がいる可能性も否定できない。そのような話者の挙動は多数派の挙動のなかに埋没して、統計的検定では検出されない可能性があるからである。

以上のような問題を検討するために、本節では 101 名の話者をひとりひとり個別に分析する。対象としてシ, ス, ジ, ズの 4 モーラをとりあげ、イ段モーラ (シ, ジ) とウ段モーラ (ス, ズ) の間に F2 の有意差が存在するかどうかを発話タイプ別に分析する。ここでサ行とザ行のモーラをプールして分析するのは、それぞれを単独に分析すると、相当数の話者においてデータ数が不足する (サンプル数が 5 未満となる) からである。

上記の条件で音声グループ (すなわち特定話者の特定発話タイプのイ段な

いしウ段モーラ) ごとのサンプル数を集計すると, 1グループのサンプル数が4に満たないのは表12に示したケースであった。ここに含まれる話者25名を以下の分析から除外した。

以下, これまでと同様, 個人レベルの分析でも共通語発話と方言発話のそれぞれに分散分析を実施する。紙幅の関係でそのすべてを表示することは不可能なので, F2に関する検定結果だけを本章末に付録の形で掲載した。

表12 分析から除外した話者

話者	発話タイプ	性別	年齢	母音の段	サンプル数
246P	方言	男	61	i	1
012K	方言	男	37	i	1
079P	方言	女	73	i	1
176P	共通語	男	39	i	2
149P	方言	男	73	i	2
133K	方言	男	55	i	2
028P	方言	男	66	i	2
010P	共通語	男	78	i	2
116P	方言	女	54	i	2
244P	共通語	女	36	i	2
212P	方言	女	79	i	3
005P	方言	女	49	i	3
183P	方言	女	62	i	3
080P	共通語	女	85	i	3
002P	方言	女	66	i	3
026K	共通語	男	27	i	3
079P	共通語	女	73	i	3
099P	方言	女	43	i	3
192K	共通語	男	60	i	3
013K	共通語	男	31	i	3
031K	方言	男	39	i	3
120K	共通語	女	43	i	3
224P	方言	男	73	i	3
084K	共通語	男	37	i	3
032P	共通語	男	55	i	3

表13, 表14に共通語発話および方言発話でのF2の有意差の有無に着目して, 話者を4パターンに分類した結果を示す。パターンAは共通語でも方言でもイ段, ウ段母音が対立している話者, パターンDは反対に共通語でも方言でも母音の対立がない話者である。これに対してパターンB, Cでは発話タイプが対立の有無に影響している。Bでは共通語では対立があるが方言では対立がない。反対にCでは, 対立があるのは方言発話であって共通語発話には対立がない。有意水準を1%に設定すると表13, 5%に設定すると表14の結果を得る。

表 13 F2 の有意性による話者の分類（有意水準 1% の場合）

パターン	1%水準有意差		性別話者数			平均年齢	
	共通語	方言	男	女	合計	男	女
A	有	有	10	14	24	49.9	61.1
B	有	無	9	7	16	54.0	61.6
C	無	有	3	4	7	54.0	52.0
D	無	無	13	17	30	57.0	56.6

表 14 F2 の有意性による話者の分類（有意水準 5% の場合）

パターン	5%水準有意差		性別話者数			平均年齢	
	共通語	方言	男	女	合計	男	女
A	有	有	11	14	25	48.3	61.1
B	有	無	13	12	25	52.6	60.7
C	無	有	3	7	10	61.7	47.7
D	無	無	8	9	17	60.9	60.0

4. 議論

以下では前節に示した音響分析の結果を、鶴岡方言の言語学的分析と対比しながら解釈することをこころみる。具体的には、表 13,14 に示された個人レベルの分析結果を詳しく検討する。その際、対比すべき研究として井上史雄氏による鶴岡方言音韻体系の社会言語学的記述である井上（1994=2000; 以下 2000 として引用）をとりあげる。

井上（2000）は鶴岡方言の母音ないしモーラ体系を論じて、シ・ス等の音韻対立が欠如していたのは歴史上の鶴岡方言の特徴であり、現在の鶴岡方言の音韻体系においては最高年層（Y 体系）においても、「音韻的には、シス、チツ、ジズの対立が保たれており、共通語と同じ『二つ仮名』である」と述べている（p.380）。またもう少し低い年齢層の体系（M 体系）にも言及して、「音韻分析および自然会話の分析によると、共通語シジチに対応する音節は Y 体系では [si, zi, tsi] だが、M 体系では [ʃi, si, tʃi] になる傾向がある」（p.380）と述べている（井上が使っている母音の音声記号はウムラウトの [i] であるが、上では IPA の中舌母音記号で代用した）。すなわち現代の鶴岡では話者の年齢によって音声的実現形に若干の差異をとまなうものの、すべての年代でシ・チ等の対立が保たれているという解釈である。この主張と表 13, 表 14 に示した結果との間には矛盾が生じている。

この問題はいくつかの異なる観点から検討しなければならない。まずこの矛盾が顕在化するのには、個人レベルの音響分析結果においてであって、社会集団全体を眺めれば矛盾は生じていないことを確認しておく。集団としては、表 7、表 8 に示したように、共通語発話はいうまでもなく方言発話においてもシ・ス等の対立が保持されているからである。

しかし、井上の主張は社会集団全体と同時に個々の話者についての主張であると解釈すべきであろう（後ほど引用する井上の私信参照）。その場合、井上(2000)の記述と本稿の結論とのあいだにはたしかに矛盾が存在することになる。この問題についてさらにいくつかの観点から検討をくわえることにする。

4.1. 音声の検聴

最初に表 14 でタイプ C, D に分類された話者の音声を検聴する。1 節で述べたように、今回の分析では、サンプルが大量にあることを前提として音響分析結果の人手修正をおこなっていない。しかし個人レベルの分析ではこの前提が成立しないので、分析誤りが分散分析に影響する可能性が高い。もっとも頻繁に生じる誤りのひとつは、例えば第 3 フォルマントを対象母音の全時間区間にわたり一貫して第 2 フォルマントとして認識するような誤りである。第 3 フォルマント以上の高次フォルマントは、第 1、第 2 フォルマントに比べると母音間の差が少ないので、上記のような分析誤りが生じると母音間の対立が無いという結論が導かれやすくなる。

表 14 においてタイプ D に分類された 17 名の共通語発話音声におけるシ・ス等の対立の有無を聴覚的に判定した結果を表 15 に示す（判定は筆者が行なった）。17 件中、7 件が「対立有り」と判定されている。これらは前述したような理由によって、音響分析の誤りが分散分析に影響したケースと推定される。「対立有ったり無かったり」の判定が 2 件あるが、これらはいずれもシ・スには対立があるが、ジ・ズには無いように聞こえるものである。この場合、音響分析に誤りがなくても分散分析の結果には有意差が認められないことがありうる。最後に 1 件だけであるが「対立有り、子音による」という判定がある。母音には対立がないのだから、今回の手法では対立無しに判定されてしまうケースである。

表 15 表 14 においてタイプ D と判定された話者 17 名の共通語発話の聴取結果

話者	話者年齢	話者性別	聴取結果
030K	18	男	対立有り
140K	33	女	対立無し
096P	42	女	対立有り
153P	52	男	対立有り
087P	53	女	対立有り, 子音による
208P	53	女	対立有り
019P	64	女	対立無し
065P	65	男	対立無し
252K	66	女	対立有り
128P	66	男	対立無し
150P	68	女	対立有ったり無かったり
055K	69	男	対立無し
131P	69	男	対立有ったり無かったり
018P	71	男	対立無し
106P	73	女	対立有り
245P	77	男	対立無し
049P	88	女	対立無し

表 16 には表 14 でタイプ C と判定された話者 10 名の共通語発話の聴取結果を示す。ここでは全員の共通語発話が対立有りと判定されている。結局パターン C に属するサンプルは 1 件もなくなり, すべてパターン A に再分類されることになった (パターン C が社会言語学的にみて元来異常なパターンであることは言うまでもない)。

表 16 表 14 においてタイプ C と判定された話者 10 名の共通語発話の聴取結果

話者	話者年齢	話者性別	聴取結果
194K	37	女	対立有り
250K	38	女	対立有り
132K	39	女	対立有り
204K	43	女	対立有り
210P	50	女	対立有り
018K	56	男	対立有ったり無かったり
139P	63	女	対立有り
004P	63	男	対立有り
162K	64	女	対立有り
205P	66	男	対立有り

以上をまとめると、音声聴取の結果からも、やはり D パタンに分類すべき話者が存在していることが確認された。上記の矛盾はやはり存在している。

4.2. 地理的異同

次に局所的な地理的差異の可能性を検討する。

井上（2006）は、1976 年と 1991 年に実施された鶴岡市山添地区（2005 年 9 月まで櫛引町内；同年 10 月より櫛引町は鶴岡市と合併し新「鶴岡市」）での面接調査をまとめた資料集であるが、その項目 680 では「学校の運動会の呼び出し係になって、マイクの前でしゃべるような調子で」という指定のもとに「すずきいたるさん すぐ受付まで おいでください」という文章の朗読を求めた結果が報告されている。

この項目のグラフを眺めると(p.120)、「鈴木」の冒頭 2 音節、「ス」「ズ」をそれぞれ「シ」「ジ」と発音した回答者もあり、シ・ス等の対立がない人がいることをうかがわせる。この現象は 1950 年頃までに生まれた話者の 1 割程度に観察されており、それよりも若い年代ではほぼ消滅している。

つまり山添地区に関する限り、井上（2000）の記述に収まらない話者の存在が井上自身によって確認されたわけである。井上は筆者からの問い合わせに答えた 2006 年 2 月 5 日付の私信で、上に紹介した調査結果について「山添の『朗読・アナウンス』の項目では、中年以上に一部区別なしの人がいて、驚きでした」と述べ、鶴岡市内については「共通語発話で区別が出来ない人には市内では会ったことがありません」と述べることによって、鶴岡市とその周辺では音韻体系とその変異状態に微妙な差が存在する可能性を示唆している。

ところで、前節の分析では話者の出生地を問題としていない。従って、あまり可能性が高いとは思われないが、今回の分析対象に鶴岡市周辺の話者が多数含まれていることによって上記の矛盾が生じている可能性も否定できなくなる。

そこで表 14 に示した分類結果を話者の出生地情報で再整理したのが表 17 である。山添地区は「2：周辺部」に含まれる。この表を眺めると、そもそも周辺部出身の話者は数のうえでも少なく、また表 14 において、C,D に分類されている話者の比率も旧市街出身者と同一である。

表 17 話者の出生地と表 14 におけるパタンとの関係

出生地	表 14 におけるパタン				計
	A	B	C	D	
1 : 旧市街	13	13	5	8	39
2 : 周辺部	2	4	2	1	9
3 : 庄内	5	5	1	7	18
4 : 東北・北海道	3	1	1	0	5
5 : その他	2	2	1	1	6
計	25	25	10	17	77

したがって鶴岡市旧市街と山添地区を含む周辺部とで音韻体系ないしその変異に相違が存在しているとは考えにくい。音韻体系の局所的な地理的相違として上記の矛盾を解消することはできないと判断される。

4.3. サービス回答

表 15 において何らかの形で対立無しと判定された回答者の多くは 60 歳代から 80 歳代であったが、なかには 30 歳代の話者が 1 名含まれていた。少なくともこの話者については、「サービス回答」の可能性を考慮すべきである。共通語化調査において調査の意図を察知した“協力的な”回答者が、言語共同体の実情以上に方言色の濃い反応をかえす現象である。第 2 回鶴岡調査のデータにもサービス精神による過剰な方言回答が記録された可能性が指摘されている（国立国語研究所 1974；井上 1976）。

残念ながら、所与の回答がサービス精神の所産であるかどうかを回答自体の特徴にしたがって判定する方法は存在しない。しかし、サービス精神旺盛な回答者が実際に少なからず存在することは、経験的にたしかな事実である。この問題を検討するためには本項目と調査全体との関係を検討することが必須である。また録音中の雑談部分の分析なども有効であると思われる。ともに今後の課題とする。

5. 結論

本章では項目 201 および 203 の音声を対象として、集団ないし個人レベルで母音間の対立が組織的に認められるかどうか、またその音声実質はどうで

あるかを音響的分析と分散分析によって検討した。

鶴岡の話者は地域社会全体としては、共通語発話においても方言発話においてもシ・ス等の母音の対立が認められた。ただし両発話の音声は同一であるわけではない。両者間にはあきらかな音響的差異が存在しており、方言発話のイ段母音は共通語発話よりも後寄りに発音されている。

個人レベルの分析に関しては、共通語発話においてもシ・ス等の対立を(音声学的にも)実現していない話者が存在することを確認できた。井上(2000)など、従来の鶴岡方言音韻体系に関する社会言語学的記述からするとこのような話者の存在は予想外であった。社会言語学的記述を変更すべきであるのか、そうでなければ、今回記録された現象が特殊であることを何らかの手段で証明する必要がある。

最後に、今回の分析の目的のひとつであった分析の自動化についてコメントする。自動分析の成否は基本的に音響分析の精度によって決まる。4節で明らかになったように、今回の分析では77名中少なくとも17名のデータに分析誤りが発見された。これを多いとみるかどうかは意見のわかれるところであるが、サンプル数が少ない場合に自動分析結果を無批判に受容するのは危険である。

アルゴリズムに強く依存せざるをえないフォーマントの推定精度を現状より劇的に向上させることは容易でない。今後はアルゴリズムに強く依存せずに計算することのできる音響特徴量を利用することも考えるべきだろう。音声認識で用いられるメル周波数ケプストラム係数などがその候補となる。

謝辞：本稿の草稿に対し井上史雄教授から丁寧なコメントを頂戴しました。

4節の議論の大部分はこのコメントを参考にしながら執筆したものであることを記して深く感謝いたします。

参考文献

井上史雄(1976)「(書評)地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—」『国語学』107, pp.63-68

井上史雄(1994)「鶴岡方言の音韻」国立国語研究所編『国立国語研究所報告109-1 鶴岡方言の記述的研究』, pp.37-79

井上史雄（2000）『東北方言の変遷』秋山書店

井上史雄（2006）『鶴岡市山添地区の共通語化と新方言』（科研費報告書私家版）

国立国語研究所（1974）『国立国語研究所報告 52 地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』秀英出版

前川喜久雄（1984）「母音の合一と混同の理論—津軽，出雲方言を例として—」『計量国語学』14・4, pp.149-162

前川喜久雄（1989）「方言音声分析の問題点」『日本語学』8-3, pp.36-46

Kikuo Maekawa（1989） "Statistical tests for the study of vowel merger", *Quantitative Linguistics*, 39, pp.200-219.

付録：個人レベルの分散分析結果

話者	年齢	性別	共通語発話			方言発話		
			d.f.	F	P	d.f.	F	P
030K	18	男	1,15	0.48	0.499	1,14	4.111	0.062
044K	29	男	1,15	45.709	0	1,14	0.678	0.424
140K	33	女	1,16	0.275	0.607	1,15	0.083	0.777
085K	33	男	1,16	7.775	0.013	1,16	14.585	0.002
053K	33	男	1,12	17.522	0.001	1,21	15.037	0.001
114P	34	男	1,15	13.822	0.002	1,12	13.411	0.003
247P	36	男	1,15	6.069	0.026	1,16	2.368	0.143
142K	36	男	1,15	5.207	0.038	1,16	0.417	0.528
194K	37	女	1,16	2.739	0.117	1,14	6.524	0.023
250K	38	女	1,16	1.028	0.326	1,15	11.809	0.004
167P	38	女	1,16	5.28	0.035	1,15	0.326	0.576
132K	39	女	1,16	0.699	0.415	1,14	5.53	0.034
189P	41	男	1,15	56.221	0	1,19	14.211	0.001
096P	42	女	1,16	2.52	0.132	1,15	0.015	0.904
200K	42	女	1,16	12.952	0.002	1,15	9.449	0.008
009P	42	女	1,13	41.398	0	1,14	44.995	0
152K	42	男	1,16	31.019	0	1,14	1.235	0.285
272K	43	女	1,16	9.845	0.006	1,15	0.005	0.945
204K	43	女	1,15	2.596	0.128	1,14	31.786	0
262K	44	男	1,16	18.07	0.001	1,18	16.2	0.001
093P	45	男	1,15	12.934	0.003	1,22	11.531	0.003
134P	47	女	1,15	4.993	0.041	1,17	2.236	0.153
210P	50	女	1,16	0.069	0.796	1,16	5.167	0.037
008K	51	女	1,15	131.452	0	1,16	0.849	0.37
221P	51	男	1,15	65.604	0	1,17	0.052	0.822
153P	52	男	1,17	1.449	0.245	1,16	0.834	0.375
075K	52	男	1,14	12.617	0.003	1,23	2.579	0.122
087P	53	女	1,16	1.34	0.264	1,19	2.736	0.115
208P	53	女	1,16	0.02	0.889	1,23	1.024	0.322
194P	53	男	1,14	25.374	0	1,16	76.945	0
156P	54	女	1,17	121.741	0	1,17	62.631	0
047P	54	男	1,15	87.744	0	1,17	0.407	0.532
050K	54	男	1,13	11.993	0.004	1,14	0.415	0.53
091P	54	男	1,17	47.833	0	1,15	8.545	0.01
240K	56	男	1,19	5.342	0.032	1,18	0	0.999
018K	56	男	1,9	0.043	0.84	1,13	6.36	0.026
036K	57	女	1,16	6.156	0.025	1,14	3.319	0.09

046K	59	女	1,16	29.546	0	1,17	71.16	0
276P	59	女	1,17	15.091	0.001	1,15	1.486	0.242
041K	60	女	1,16	23.364	0	1,14	13.817	0.002
111P	60	男	1,13	9.635	0.008	1,16	0.01	0.923
196K	61	女	1,15	10.174	0.006	1,17	0.898	0.357
077P	62	女	1,17	16.199	0.001	1,14	14.866	0.002
226P	62	女	1,17	8.507	0.01	1,16	13.588	0.002
159P	62	男	1,15	18.893	0.001	1,16	1.564	0.229
139P	63	女	1,16	4.282	0.055	1,14	19.364	0.001
161P	63	女	1,20	268.152	0	1,17	59.173	0
004P	63	男	1,17	0.257	0.619	1,16	8.765	0.009
162K	64	女	1,16	0.402	0.535	1,13	33.231	0
019P	64	女	1,17	0.025	0.877	1,15	2.512	0.134
202P	64	女	1,16	319.485	0	1,20	33.074	0
071P	64	男	1,16	264.934	0	1,16	246.908	0
165P	65	女	1,16	7.472	0	1,23	40.967	0
129K	65	女	1,15	21.958	0	1,21	16.861	0.001
065P	65	男	1,16	0.269	0.611	1,15	0.039	0.845
115P	65	男	1,12	47.366	0	1,16	25.918	0
252K	66	女	1,15	0.518	0.483	1,17	2.363	0.143
114K	66	女	1,17	16.369	0.001	1,14	1.986	0.181
205P	66	男	1,15	3.122	0.098	1,14	21.031	0
041P	66	男	1,15	17.205	0.001	1,16	11.949	0.003
128P	66	男	1,16	0.459	0.508	1,18	0.012	0.913
260P	67	女	1,16	111.49	0	1,19	28.09	0
150P	68	女	1,14	1399	0.257	1,19	3.203	0.089
136P	68	女	1,18	5.85	0.026	1,15	0.766	0.395
131P	69	男	1,15	0.411	0.531	1,12	0.629	0.443
055K	69	男	1,16	0.036	0.851	1,15	0.663	0.428
207P	70	男	1,16	4.898	0.042	1,17	0.002	0.961
018P	71	男	1,16	0.969	0.339	1,14	0.002	0.968
169P	72	女	1,16	35.235	0	1,16	41.133	0
106P	73	女	1,15	1.77	0.203	1,20	0.054	0.819
272P	73	女	1,15	89.409	0	1,14	0.944	0.348
245P	77	男	1,15	0.039	0.847	1,16	1.235	0.283
196P	78	女	1,16	12.144	0.003	1,13	2.155	0.166
274P	78	女	1,16	33.428	0	1,21	17.037	0
036P	82	男	1,15	37.811	0	1,15	0.248	0.625
193P	87	女	1,17	5.589	0.03	1,17	0.01	0.922
049P	88	女	1,14	1.936	0.186	1,18	1.001	0.33

第4章 語彙の使い分け

加藤和夫

1. はじめに

本章では語彙項目の使い分けについて分析した結果を報告する。

音声項目や文法項目などは、前年度実施した継続調査で得られた結果の検証という面を持つが、語彙項目は継続調査と比較対照する項目は特になく、場面差調査だけで完結するものである。ただし、一部の項目は、国立国語研究所がかつて他の地域で場面性を付与して実施した調査項目と重なるものがあるので、それとの比較を行う。

2. 調査項目・設定場面・質問文

語彙項目についても、「場面」の違いは、想定した話し相手との上下・親疎の関係から規定した。設定した場面の種類・数により、設問は次の2つのパターンに分けられる。

ひとつは、「友達」と「先生」の2種類の相手（2場面）を想定させて、方言と共通語の使い分け見たものである。これにより調査した項目は、共通語形で示すと、「ゴハン」「食ベル」「コワレル」「捨テル」である（「ゴハン」は「米」ではなく「食事」の意味である）。

このうち「ゴハン」と「食ベル」は、意味領域が近いため、同じひとつの設問の中で、「ゴハンを食ベル」（厳密には「食ベル」は「食べテイタ」の形）をどう言うかにより、それぞれの場面で使われる表現を調べた。「ゴハン」「食ベル」と対立する方言形として出現が期待されるのは「マンマ」「メシ」「食ウ」などである。これらは、共通語においても、家族や友達などを相手とする場面で使われることがあり、地域差というよりも文体差という面が強いが（文体の低い語彙／高い語彙の違い）、広い意味での語彙の使い分けを見る目的で調査項目とした。なお、「ゴハンを」の格助詞「を」が使われるか否かについてもあわせて注目した。質問文は下記の間406のとおりである。本項目についても、回答は文（発話）の形で得たが、調査の現場では、

格助詞の部分を含む3つの注目箇所について、選択肢として掲げた語形の中から調査員がチェックした。事後、アルバイトと研究分担者である尾崎が改めて録音を聴き直してデータを確定した（他の語彙項目についても同様）。「ゴハン」の選択肢には「食事中」も掲げられているが、「ゴハンを食べテイル」状態を1語で表現したものであり、調査の趣旨から言えば期待しない表現であったが、場面によっては少なからざる出現が見られたので、これも分析対象とする。ただし、格助詞の有無は当然問題となりえないし、述部にも動詞は現れることがなく「デス」や「デシタ」等が選ばれることになる。述部の「シテタ」「シテマシタ」は、「ゴハン」の部分に「食事」が現れた場合に限られる。3つの要素の選択肢の組み合わせが全て可能というわけではない。

「コワレル」は、回答の得やすさや表現の自然さを考慮して「コワレタ」の形で調べた。これと対立する方言形として出現が期待されるのは接頭辞「ボ(ッ)」を伴う「ボ(ッ)コレタ」などである。共通語で言えば「ブッコワレタ」に当たる表現であり、地域差というよりもむしろ文体差が関与する項目である。質問文は下記の間407のとおりである。

「捨テル」と対立する方言形として出現が期待されるのは、『日本語地図』第2集の「捨てる」の地図(第62図)で庄内地方(山形県北西部)を中心とした分布が確認される「ウタル」と、東北地方に広く分布が確認される「ナゲル」である。このうち「ウタル」は、関東・甲信越地方を中心とする「ウツチャル」「ブツチャル」につながる語形と考えられる。質問文は下記の間408のとおりである。

以上が「友達」「先生」の2場面を想定させて回答を得た項目である。

もうひとつの場面設定のパターンは、「家族や友達」「近所の顔見知りの店の人」「鶴岡市のデパートで初めて話す店員」「山形市で初めて話す店員」「東京で初めて話す店員」の5種類の相手(5場面)を想定させて方言と共通語の使い分け見たものである。これにより調査した項目は、物の値段をたずねるときの表現であり、共通語形では「イクラ」である。これと対立する方言形として出現が期待されるのは、東北地方に広く分布する「ナンボ」である。じつは「ナンボ」は近畿地方を含む西日本にも広く分布しており(ただし九州地方は大分県・福岡県などに限られる)、国立国語研究所(1990)では近畿地方(京都府

宮津市と兵庫県豊岡市)における方言形「ナンボ」と共通語形「イクラ」の使い分けを調査している。その調査では、使い分けのあり方をきめ細かくとらえるために、場面の数を5場面(宮津市)ないし7場面(豊岡市)設定した。そこで得られた調査結果と比較対照することを想定し、本調査でも設定場面を2場面ではなく上記の5場面とした。質問文は下記の間502のとおりである。

質問文

406 -1. 友達から電話がかかってきて今なにをしていたかとたずねられました。「ご飯を食べていた」ということをふだんの調子で答えるとしたらどう言いますか？

- | | | | | | | |
|-----------|---|---|------|---|---|-----------|
| 1.マンマ |] | + | 1. φ |] | + | 1.クッテタ |
| 2.ママ | | | 2.-ヲ | | | 2.クッデダ |
| 3.メシ | | | | | | 3.タベテタ |
| 4.メス | | | | | | 4.タベテマシタ |
| 5.ご飯 | | | | | | 5.シテタ |
| 6.食事 | | | | | | 6.シテマシタ |
| 7.食事中 | | | | | | 7.デシタ |
| 9.その他 [] | | | | | | 9.その他 [] |

-2. 同じことを先生からの電話で答えるとしたらどう言いますか？
【選択肢は406-1と同じ】

407 -1. 時計を床に落としてしまいました。動きません。そのことを友達に説明します。「さっき落としたので、時計が・・・」どうなったと言いますか？

- 1.コワレタ 2.コワレダ 3.ボ(ッ)コレタ 4.ボ(ッ)コレダ
9.その他 []

-2. 同じことを、先生に説明するとしたらどう言いますか？「時計が・・・」。
【選択肢は407-1と同じ】

408 -1. 友達と話しているときの話のなかで、いらなくなったごみを、ごみ箱にどうすると言いますか？

- 1.ステル 2.スデル 3.ウタル 4.ウダル 5.ナゲル
9.その他 []

-2. 同じことですが、先生と話をしているときだったら「ごみを・・・」どうすると言いますか？
【選択肢は408-1と同じ】

3.1.1. 【友達場面】の「ご飯を食べていた」

(1) <ご飯>

【友達場面】における<ご飯>の表現については図1の結果が得られた。

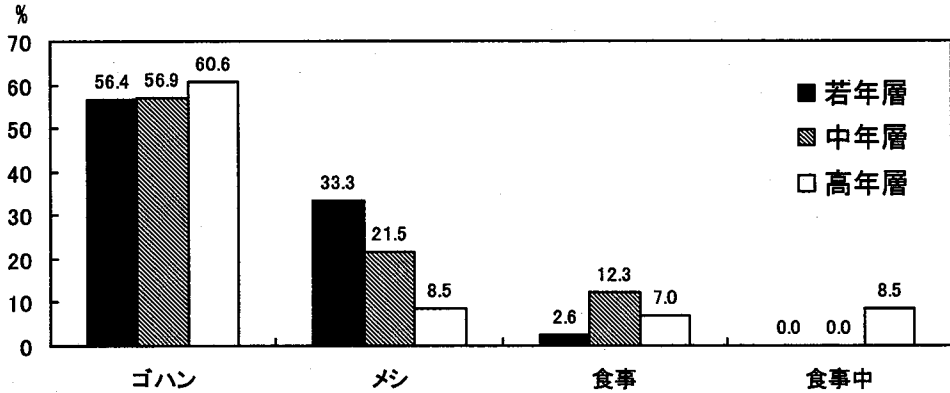


図1 「ご飯」にあたる表現形の使用者率【友達場面】

使用者率が最も高いのは「ゴハン」であり、3年齢層を平均すると58.3%の回答者がこの表現を用いている。次いで多いのは「メシ」で、3年齢層平均で18.9%が用いている。また、「食事」の使用者率は平均8.0%である。これら以外はいずれも数値が小さく、3年齢層を合わせた実数も10人に満たない。

【友達場面】で使用者率が最も高い「ゴハン」について年齢層別にみると、若年層56.4%、中年層56.9%、高年層60.6%であり、顕著な年齢差は認められない。

一方、「メシ」については、若年層33.3%、中年層21.5%、高年層8.5%であり、年齢層が若くなるにつれて使用が確実に増加している。ただしこの「メシ」は、新方言的なものではなく、共通語でも「ゴハン」の俗語として用いられる「メシ」が、当該地域でも年齢層を中心に浸透しつつあるものと考えられる。

「食事」は全体的に使用者率が低いが、年齢差が見られ、最もよく用いるのは中年層であり、高年層がこれに次ぐ。

(2) (ご飯) <を>

次に〔友達場面〕での「ご飯を食べていた」の格助詞「を」の使用について見てみよう（グラフは省略）。

格助詞「オ」の使用は各年齢層に一人ずつ見られた。高年層では「食事中」のような格助詞の有無がそもそも問題とならない表現が11.3%見られた。それ以外は格助詞を省略した表現である。〔友達場面〕では格助詞無しで表現するのがどの年齢層でも非常に一般的である。

(3) <食べる>

〔友達場面〕における<食べる>の表現については図2の結果が得られた。

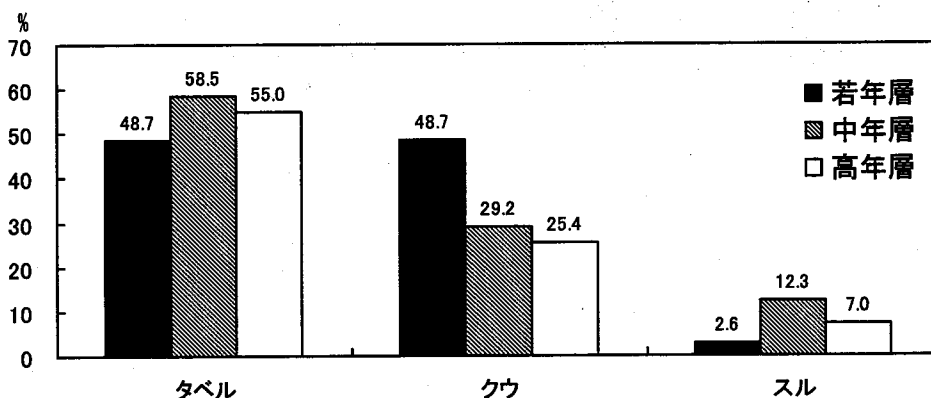


図2 「食べる」にあたる表現形の使用者率〔友達場面〕

最も多く用いられる表現は「タベル」である。3年齢層平均で54.9%、つまり約半数が「タベル」を用いている。

これに次ぐのは「クウ」である。「クウ」には年齢差が明確に認められ、最もよく用いているのは若年層の48.7%である。若年層のこの数値は「タベル」と全く同じである。これに対し中年層・高年層は数値が下がり、中年層が29.2%、高年層が25.4%である。この数値は「タベル」よりもずっと低く、ほぼ半減する。「クウ」よりも「タベル」の方が一般的な中年層・高年層、両形に優劣のない若年層という年齢差が確認される。

「クウ」を使う人の多くは「メシークウ」の組み合わせで用いてい

ることが予想され、それに「ゴハンクウ」が加わっていると考えられる。

数値は小さいが「スル」も見られる。この数値は図1の「食事」の数値と一致する。「食事スル」という組み合わせで用いられるものである。

(4) <ます>

<食べていた>にあたる言い方において、丁寧語のデス・マスが使われていたか否かを見てみよう（グラフは省略）。

高年層では丁寧語の使用が15.5%（マス8.5%，デス7.0%）見られたが、中年層・若年層ではほとんど、あるいは全く見られなかった。〔友達場面〕は全体的に丁寧語の使用は非常に少なく、多くは「タベテイタ」「クッテイタ」などの普通体であるが、高年層には丁寧語を用いる人も多少いる。

3.1.2. 〔先生場面〕の「ご飯を食べていた」

次に、〔先生場面〕の回答について同様に見ていこう。

(1) <ご飯>

<ご飯>の表現については図3の結果が得られた。

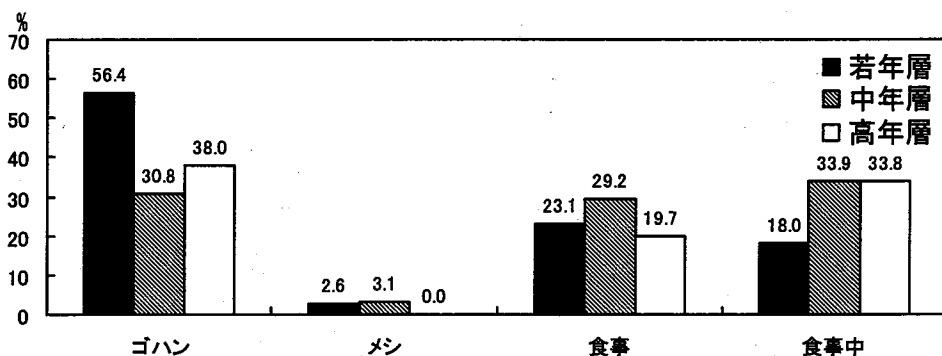


図3 「ご飯」にあたる表現形の使用者率〔先生場面〕

3つの年齢層を通じて使用者率が最も高いのは、ここでもやはり「ゴハン」である。ただし、平均値は、〔友達場面〕の58.3%に対し〔先生場面〕は39.4%であり、20ポイントほど低くなっている（場面の比較に

については次の図4も参照；なお帯グラフの各語形の面積の比率は4語形の合計を母数としたためグラフ中の数値と異なる）。また，〔友達場面〕では18.9%の使用が見られた「メシ」は，〔先生場面〕では非常に数値が低くなり，実数にしてわずか3人であった（全て男性）。「メシ」の使用は〔友達場面〕にほぼ限定されると言ってもよい。

逆に，〔友達場面〕に比べ数値が高くなっているのは「食事」と「食事中」である。平均値は「食事」が24.0%，「食事中」が30.3%であり，〔友達場面〕と比べると特に「食事中」の増加が目立つ。〔先生場面〕では，ぞんざいな表現である「メシ」が回避されるのみならず，「ゴハン」という日常的な表現もやや回避され，改まりの度合がより高いと考えられる「食事」という漢語を含む表現が選択される傾向が見られる。さらに言えば，動詞の部分についても，ぞんざいな表現である「クウ」のみならず，日常的な表現である「タベル」も回避され，先の「食事」と複合させた「食事中」という表現が用いられる傾向が見られる。

この「食事中」について年齢層別に見ると，若年層に比べ中年層・高年層の数値は2倍近くあり，年齢差がやや大きい。「食事」についても，中年層は若年層よりも数値が高い。「食事」を含む改まりの度合いが高い表現は，中年層や高年層を中心に使用される傾向にある。

なお，グラフでは特に示さないが，性別で見ると，「食事」「食事中」の使用は，わずかではあるが，いずれも女性の方が男性よりも高い傾向が見られる。

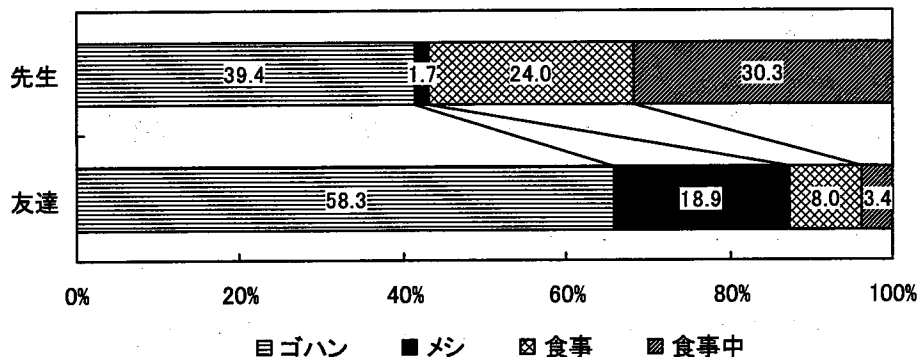


図4 「ご飯」にあたる表現形の場面比較

(2) (ご飯) <を>

次に〔先生場面〕での「ご飯を食べていた」の格助詞「を」の使用を見てみよう。

助詞「オ」の使用は〔先生場面〕でも7.4%にとどまる。顕著な男女差は見られない。逆に数値が高いのは助詞の省略であり59.4%見られる。しかしこの数値は、〔友達場面〕と比べると30ポイントほど少なくなっている。これは、「食事中」のような格助詞の有無がそもそも問題とならない表現が〔先生場面〕では32.6%も見られたためである。〔友達場面〕では11.3%であったので、20ポイントほど増加したことになる。改まりの度合いが高い「食事中」という表現の増加と連動した現象である。

(3) <食べる>

<食べる>にあたる表現について、先に見た〔友達場面〕と比較する形で（ただし年齢層別ではなく全体で）〔先生場面〕の分布を示すと図5のようであった。

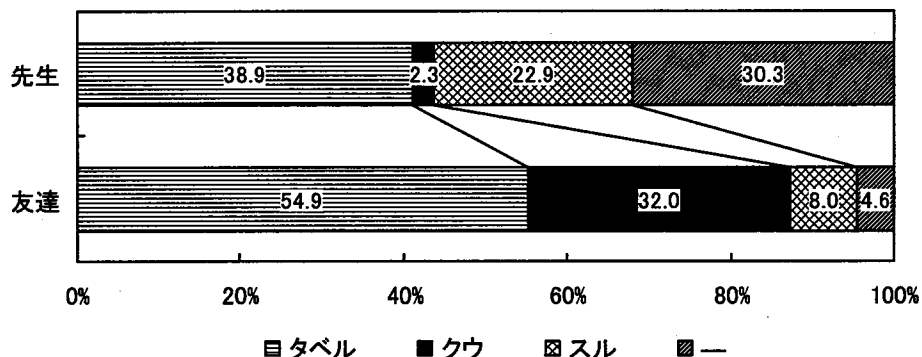


図5 「食べる」にあたる表現形の場面比較

〔友達場面〕と比べ大きく異なるのは「クウ」の数値が減少する点である。「クウ」をよく用いる若年層は、〔友達場面〕では約半数が使用していたが（図2），〔先生場面〕ではわずか5.1%となる。中年層・高年層はさらに数値が低く1.5%前後となる。ちょうど〔先生場面〕で「メシ」が回避されたのと同様，ぞんざいな表現である「クウ」も，

〔先生場面〕では回避される傾向が著しい。「クウ」の使用はほぼ〔友達場面〕に限定される。

では、〔先生場面〕で「クウ」の使用が減少した分、丁寧な言い方の「タベル」の使用が増加したかという点、そうではない。グラフは省略するが、年齢層別に見ると、若年層の「タベル」の数値は〔友達場面〕と比べ確かに5ポイント上昇しているが、中年層と高年層はむしろ20ポイント前後低くなっている。その分、中年層・高年層で数値が増加するのは、「(食事)スル」のような「食事」の使用を前提とした表現や、「食事中」の使用を前提とした「食事中(デシタ)」のような動詞を用いない表現（グラフでは「一」で示した）である。年齢層別に見ると、中年層・高年層では、「食事中」を含む「食事中デシタ」という表現が3割近くも見られる点が注目される（「デス」ではなく「デシタ」である点も注目される）。

(4) <ます>

最後に、<食べていた>にあたる言い方において丁寧語のデス・マスが使われていたか否かを見てみよう。まず、デスとマスに分けて分析する。

マスの使用者率について年齢層別に見ると、若年層が最も高く53.9%、中年層・高年層はそれよりいくぶん低くそれぞれ43.1%、43.7%であった。一方、デスの使用者率は、高年層が40.9%、中年層が44.6%、若年層が35.9%であった。若年層に比べ中年層・高年層でデスの数値が高いのは、既述のとおり、「食事中」という名詞述語文がこれらの年齢層で多く使用されるためと考えられる。マスが若年層で多いのはこの裏返しである。

デスとマスをあわせた数値は、高年層が84.6%、中年層が87.7%、若年層が89.8%であり、丁寧語の使用者率は8～9割に達する。〔友達場面〕では、中年層と若年層ではほぼゼロ、高年層でも15.5%に過ぎなかったことと比べると、〔先生場面〕での丁寧語の使用は大きく増加する。「〔友達場面〕では丁寧語は使わないが、〔先生場面〕では使う」というカテゴリーカルな用法にかなり近い面を持っている。

3.1.3. 「ご飯を食べていた」にあたる表現形の場面差のまとめ

以上に見てきた各要素ごとの場面による使い分けの状況をふまえ、「ご飯を食べていた」の主要項目である<ご飯>と<食べる>の組み合わせパターンがどのようなものであったかを、最後に概観しよう。

〔友達場面〕と〔先生場面〕を比較して特徴的なのは、〔友達場面〕では2割近くが用いていた「メシークウ（クッテイタ）」が、〔先生場面〕ではほとんど使用されなくなる点である。〔友達場面〕ですでに半数以上の回答者が「ゴハン・タベル（タベテイタ）」を使用していたことから判断すると、本来は位相的なニュアンスを特に伴わず使われていたであろう「メシ」や「クウ」に、今ではぞんざいなニュアンスが感じられるようになったため、かつて美化語的に意識されていた「ゴハン」や「タベル」が普通の表現になったものと考えられる。

また、〔友達場面〕でほとんど使われないが、<食べる>の末尾を「～テイマス」や「～デス」ではなく「～テイマシタ」や「～デシタ」とする表現が〔先生場面〕ではしばしば使われる点も注目される。これは、<ご飯>の部分はどう表現するかに関わらず見られる現象であり、先生に対する丁寧な表現と意識されているものと考えられる。場面によるその使い分けも確認された。

3.2. 「(時計が)こわれた」の結果

次に、「こわれる」の使い分けについて見てみよう。第2節で述べたように、回答の得やすさや表現の自然さを考慮し、実際には「こわれた」（こわれた物は時計）の形で調べた。共通語形「コワレタ」と、接頭辞「ボ(ッ)」を伴う「ボ(ッ)コレタ」の使い分けが予想される。

年齢層を分けて結果を示すと、〔友達場面〕は図6、〔先生場面〕は図7のようであった。

3.2.1. 〔友達場面〕の「こわれた」

〔友達場面〕で「こわれた」にあたる語形として回答されたのは全部で17種類あったが、予想表現形として調査票に掲げた形式以外の13種類の使用は実際には少なく、実数で言えば1人から5人とどまる。その内訳は、他動詞の「ボ(ッ)コシタ」が5人（高年層3人、中年層・若

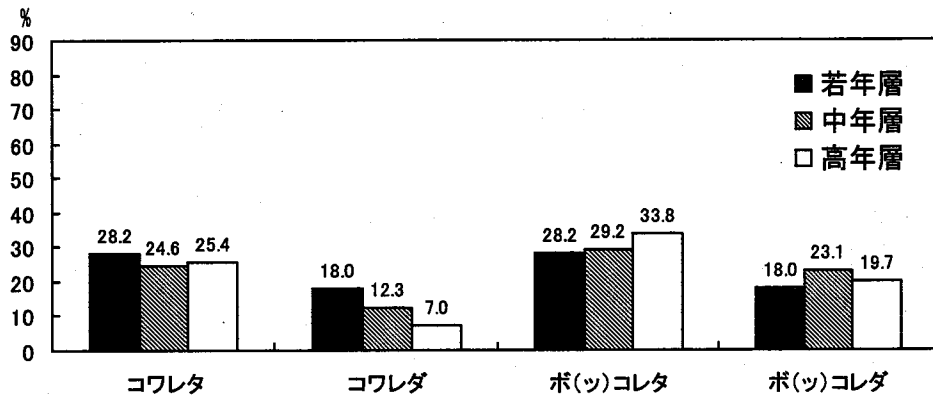


図6 「こわれた」にあたる表現形の使用率〔友達場面〕

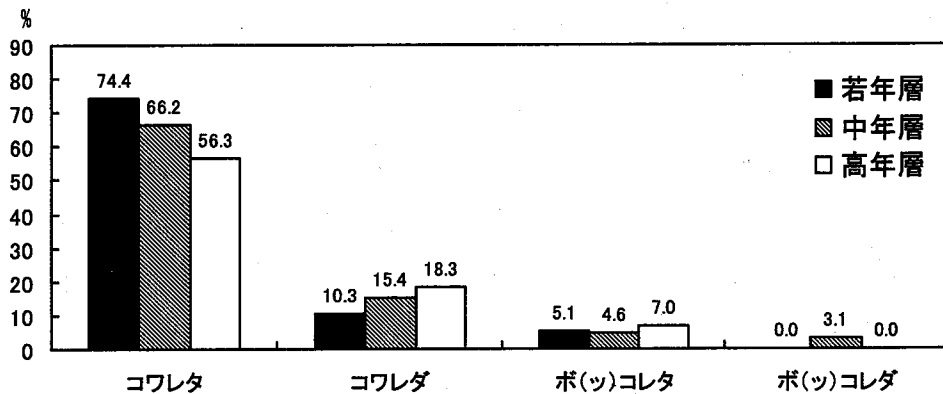


図7 「こわれた」にあたる表現形の使用率〔先生場面〕

年層各1人)，こわれた結果の側面から表現した「ウゴカナクナッタ」が3人（全て高年層），他動詞の「コワシタ」が2人（全て中年層），それ以外の10種類は1人ずつの使用であった。そこで以下では，予想表現形として挙げた4種類の表現について使用状況を見ることにする。

〔友達場面〕で使用者率が最も高いのは「ボ(ッ)コレタ」であり30.9%の回答者が使用している（後出の図9も参照）。顕著な年齢差はない。次いで数値が高いのは「コワレタ」であり25.7%の回答者が使用している。これも顕著な年齢差はない。これらに，「～タ」の部分が有声化した「ボ(ッ)コレダ」が20.6%，「コワレダ」が11.4%と続く。

このように〔友達場面〕では，どの年齢層でも，共通語形の「コワ

レタ」「コワレダ」よりも、方言形の「ボ(ッ)コレタ」「ボ(ッ)コレダ」を使用する人の方が多いたことがわかる。

東北方言では非語頭の無声子音が有声化する現象が見られ、鶴岡市でもその発音が観察される(第2章を参照)。その特徴を持つ「ボ(ッ)コレタ」に対する「ボ(ッ)コレダ」, 「コワレタ」に対する「コワレダ」の使用者率を見ると、有声化しない共通語の発音に比べ数値はそれぞれ低くなっている。〔友達場面〕では、語形的には方言が根強く使用されているが、音声面ではむしろ共通語とする方が優勢である。

有声化した「コワレダ」について年齢層別に見ると、高年層7.0%、中年層12.3%に対し若年層は18.0%であり、年齢が高くなるほど有声化の数値が高くなるという意外な結果が得られた。これは、年齢層が高くなるほど共通語形を強く意識するため、実際には有声化するにもかかわらず有声化しない形を回答したことが原因となっている可能性がある。すなわち、有声化の数値については、今回得られた結果が実際の〔友達場面〕での使用状況を正確に反映しているかどうかの判断は、慎重であるべきかもしれない。

「ボ(ッ)コレタ」「ボ(ッ)コレダ」「コワレタ」「コワレダ」について、場面および男女に分けて使用者率を示すと図8のようである。

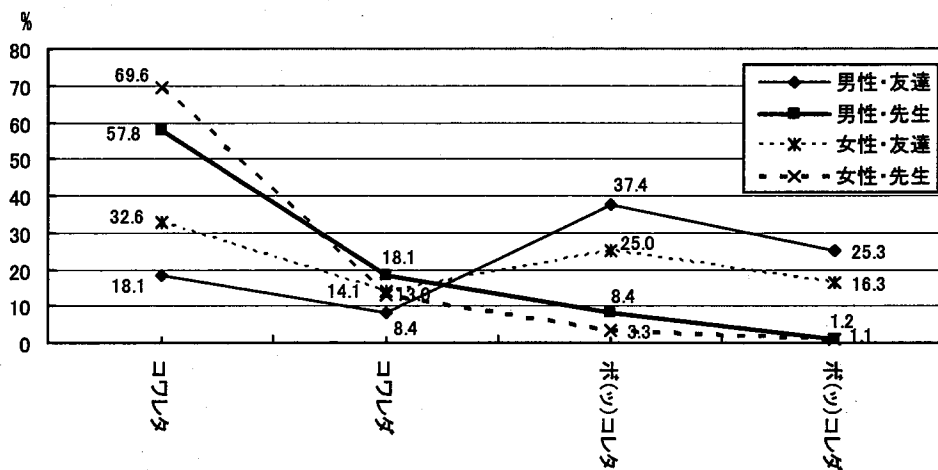


図8 「こわれた」にあたる表現形の性×場面比較

男女差の大きさという点に注目してグラフを見ると、〔先生場面〕

(グラフでは太い線)では男女差はそれほど大きくないのに対し、〔友達場面〕(グラフでは細い線)ではやや大きくなっている。共通語形「コワレタ」について〔友達場面〕の数値を見ると、男性の18.1%に対し女性は32.6%であり、これまで全国各地で多くの事例が報告されているように、男性よりも女性の方が共通語形の使用(受容)に積極的であることがわかる。反対に、方言形の「ボ(ッ)コレタ」「ボ(ッ)コレダ」の数値は、〔友達場面〕において、男性がそれぞれ37.4%、25.3%であるのに対し、女性は25.0%、16.3%であり、男性の方が方言形をよく用いていることがわかる。(グラフの「男性・友達」と「女性・友達」の線が、「コワレダ」と「ボ(ッ)コレタ」の間で交差している点に注目)

グラフは省略するが、性別×年齢層別で分析すると次のようであった。

男性では、「コワレタ」や「コワレダ」には顕著な年齢差が見られないのに対し、「ボ(ッ)コレダ」や「ボ(ッ)コレタ」にはやや年齢差が見られる。「ボ(ッ)コレダ」は、数値が最も高い高年齢層と最も低い中年層に約10ポイントの差が見られる。また「ボ(ッ)コレタ」については、数値が最も高い中年層と最も低い高年齢層にやはり約10ポイントの差が見られる。

これに対し女性は、男性以上に年齢差が見られた。「コワレタ」については、最も高い若年齢層と最も低い中年層に約10ポイントの差が見られた。「コワレダ」「ボ(ッ)コレタ」「ボ(ッ)コレダ」については、数値が最も高い年齢層と最も低い年齢層の間に20ポイント前後の差が見られた。

3.2.2. 〔先生場面〕の「こわれた」

〔先生場面〕で「こわれた」にあたる語形として回答されたのは全部で12種類あった。このうち調査票に掲げた4種類について年齢層別に示すと図7(既出)のとおりである。ここでは、〔友達場面〕と比較しつつ検討するために、年齢層を分けず全体を示した図9を見てみよう。

これによると、〔友達場面〕では20.6%の数値を示していた方言形の「ボ(ッ)コレダ」は、〔先生場面〕では1.1%とほとんど用いられなくなっている。それに対し、〔友達場面〕では方言形よりも劣勢であった共通語形の「コワレタ」「コワレダ」は、〔先生場面〕ではそれぞれ

64.0%、15.4%となり、方言形を圧する。特に、音声面でも共通語形に一致する「コワレタ」の数値が、〔先生場面〕で大きく増加する点は注目される。「ボ(ッ)コレダ」が〔先生場面〕でほとんど使用されなくなることとあわせて考えると、〔友達場面〕では方言形を使用しても〔先生場面〕では共通語形に切り替える、つまり場面による使い分けをしている回答者が多いことがわかる。

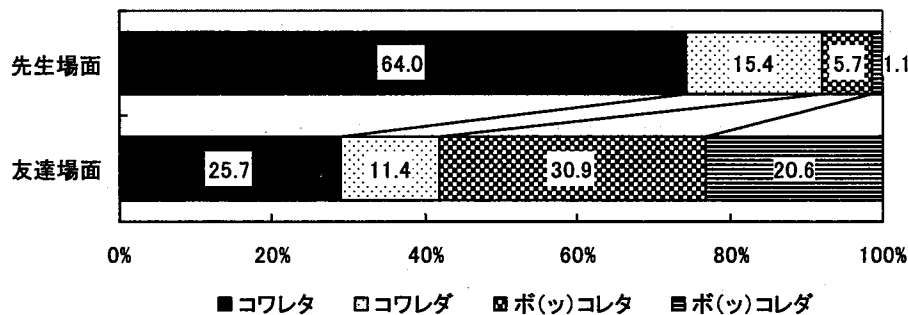


図9 「こわれた」にあたる表現形の場面比較

ところで、方言の音声的特徴（非語頭のタ行子音の有声化）を持つ「コワレダ」が、〔先生場面〕でわずかながら増加が見られる。これは、「ボ(ッ)コレタ」や「ボ(ッ)コレダ」との対比で、使用者の一部に「コワレダ」に対する共通語意識があるためなのかもしれない。

〔先生場面〕での「コワレタ」の使用者率を年齢層別に見ると（図7）、若年層74.4%、中年層66.2%、高年層56.3%であり、若い年齢層になるほど数値も増加する。逆に「コワレダ」は、若年層10.3%、中年層15.4%、高年層18.3%であり、10ポイント以内の差ではあるが、年齢層が高くなるほど数値も高くなる。全体としては、有声化のない発音の方がどの年齢層でも圧倒的に優勢であるが、相対的なこととして言えば、高年層ほど有声化の発音が、逆に若年層ほど有声化のない発音に傾くと言える。

ふたたび図8の場面および男女別のグラフを見ると、先に指摘したように、〔先生場面〕では全体的に際立った男女差は見られないものの、「コワレタ」については、男性57.8%に対して女性69.6%と女性の方が10ポイント余り高い。逆に「コワレダ」は、男性18.0%、女性13.0%と

わずかではあるが男性の方が数値が高い。〔先生場面〕では、全体としては有声化のない「コワレタ」の方が男女ともに圧倒的に優勢であるが、相対的なこととて言え、男性は有声化の発音に、逆に女性は有声化のない発音に傾く。

ただし、性別×年齢層別で見ると（グラフは省略）、「コワレタ」の数値は、若年層・高年層では、女性が男性を多少（10%以内）上回るにとどまるのに対し、中年層では23%も上回っている点が注目される。〔先生場面〕での中年層女性の共通語志向の強さを示すものと言えよう。

3.2.3. 「こわれた」にあたる表現形の場面差のまとめ

以上に述べたことをふまえ、「こわれた」にあたる表現形の場面のよる違いをまとめる。

もう一度図9を見ると、〔友達場面〕では方言形「ボ(ッ)コレダ」の使用者率が2割程度、これにタが有声化しない「ボ(ッ)コレタ」を加えると約5割に達し、〔友達場面〕での方言形使用の根強さが確認される。しかしながら、これが〔先生場面〕になると、「ボ(ッ)コレダ」「ボ(ッ)コレタ」の使用者率はあわせても1割に満たなくなる。すでに述べたような男女差、年齢差を伴いながらも、鶴岡市に暮らす人々にとって、相手による方言と共通語の使い分けが今やごく普通のこととなっていることが確認される。もっとも、〔先生場面〕で共通語形「コワレタ」を使おうとしながらも、音声面では方言の「コワレダ」を使用している回答者が15.4%いることは興味深い。

3.3. 「(ごみを)捨てる」の結果

次に、「捨てる」の使い分けについて見てみよう。共通語形「ステル」と、庄内地方を中心に分布する「ウタル」（ないシタが有声化した「ウダル」）および東北地方に広く分布が確認される「ナゲル」との使い分けが予想される。年齢層を分けて示すと、〔友達場面〕の結果は図10、〔先生場面〕の結果は図11のとおりである。また、年齢層を分けて、両場面を比較する形で示すと図13のとおりである。

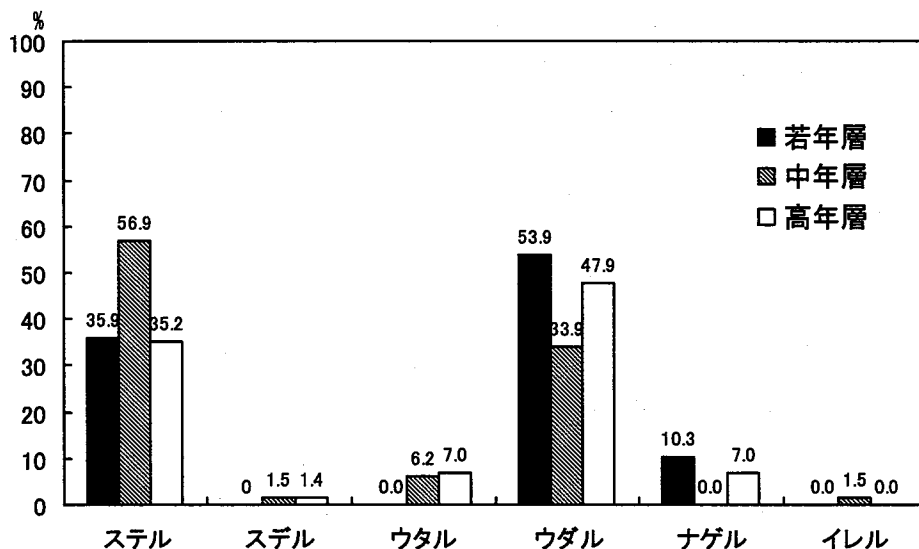


図10 「捨てる」にあたる表現形の使用率〔友達場面〕

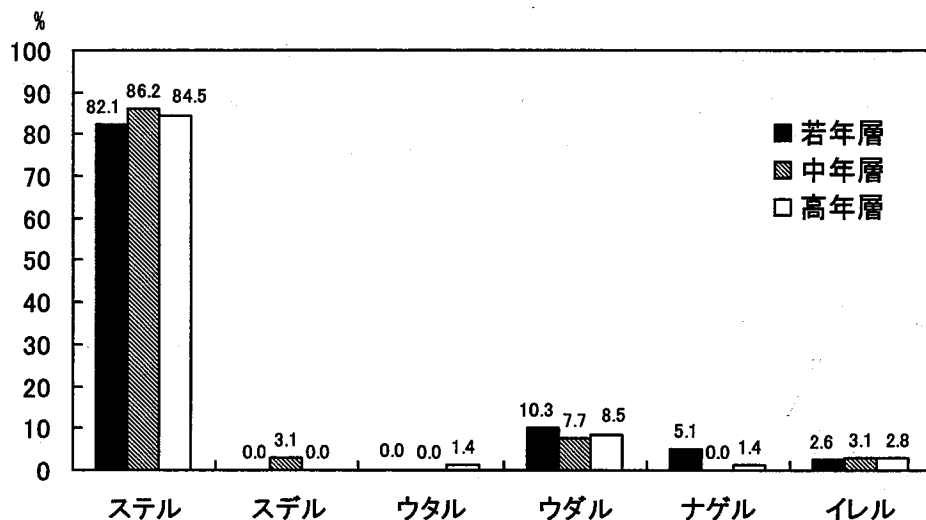


図11 「捨てる」にあたる表現形の使用率〔友達場面〕

3.3.1. 〔友達場面〕の「捨てる」

〔友達場面〕で「捨てる」にあたる語形として回答されたのは図10に示した6種類である。このうち「イレル」(入れる)は調査票の選択肢にない語形である。これは、「ごみ箱にどうすると言いますか？」の

ように捨てる先を「ごみ箱」として質問したため得られた回答であり、本来的には「捨てる」の意味を持っていない表現である。

図10によると、〔友達場面〕で数値が高いのは、共通語形「ステル」と庄内地域の方言形「ウダル」である。それぞれの平均値は、図13の〔友達場面〕に示したように、「ステル」が43.4%、「ウダル」が44.0%である。ほぼ拮抗した数値となっている。東北地方に広く分布する「ナゲル」の数値は低く、平均でわずか5.1%にとどまる。

「ステル」と「ウダル」は、全体としては数値がほぼ同じであるが、年齢層別に見ると傾向が異なる（図10）。共通語形「ステル」は中年層が56.9%と最も高く、高年層・若年層と20ポイント余りの差がある。これに対し、方言形「ウダル」は、中年層は他の年齢層よりも15～20ポイントほど数値が低い。結局中年層は、共通語形の使用が最も多く、逆に方言形の使用は最も少ない。両表現の数値を比較した場合も、中年層は「ウダル」よりも「ステル」の方が高いのに対し、若年層と高年層はむしろ「ウダル」の方が高い。若年層や高年層ではなくその中間の中年層が特徴的な数値を示すのは、年齢層が低くなるほど共通語形の使用も高くなるという一般的傾向と異なっており興味深い。

場面および男女に分けて各表現の使用者率を示すと図12のようである。

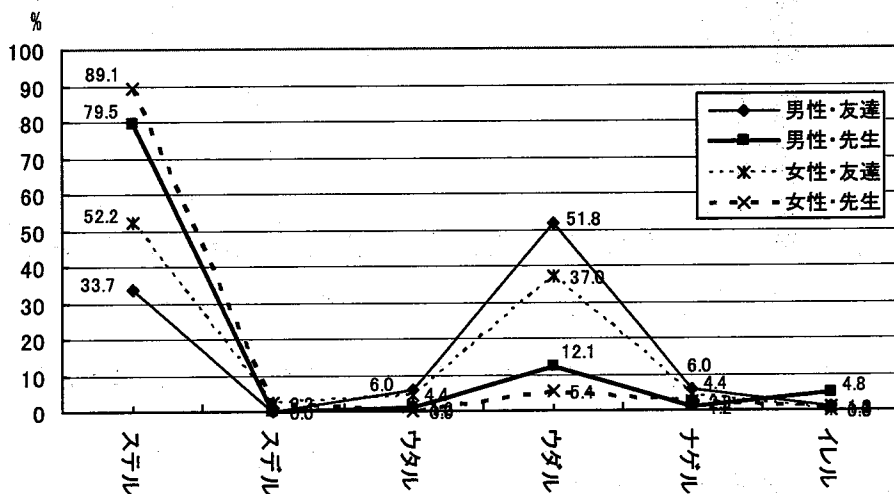


図12 「捨てる」にあたる表現形使用者率の性×場面比較

グラフ中の細い線が〔友達場面〕である。共通語形「ステル」の数値に注目すると、男性33.7%に対し女性52.2%と女性の方が20ポイント近く上回っている。これに対し方言形「ウダル」は、男性51.8%、女性37.0%と男性の方が15ポイント近く上回っている。女性は男性よりも共通語形を好み、逆に男性は女性よりも方言形を好むと言われる一般的傾向がここでも確認される。

グラフは省略するが、〔友達場面〕で「ステル」の使用者率が中年層で最も高くなるという特徴(図10)は、男女に共通して見られる。一方、方言形「ウダル」については、男女で年齢差の傾向が異なる。女性で数値が最も高いのは高年齢層であるのに対し(ただし若年齢層との差は大きくない)、男性で数値が最も高いのはむしろ若年齢層である。

3.3.2. 〔先生場面〕の「捨てる」

〔先生場面〕で回答された表現も、〔友達場面〕と同じ6種類である。

図11によると、共通語「ステル」はどの年齢層でも数値が非常に高く、いずれも8割を超えている。〔友達場面〕と比べると数値はほぼ倍増する(図13も参照)。一方、方言形「ウダル」は、どの年齢層も数値が非常に低く1割前後にとどまる。〔友達場面〕と比べると数値は五分の一程度となる(図13も参照)。この結果、〔先生場面〕では、共通語の「ステル」のみの使用に非常に近い状況となる。「ステル」の数値はどの年齢層でも非常に高く、逆に「ウダル」の数値はどの年齢層でも非常に低くなり、その結果、〔友達場面〕に顕著に見られた年齢差は〔先生場面〕ではほとんど見られない。

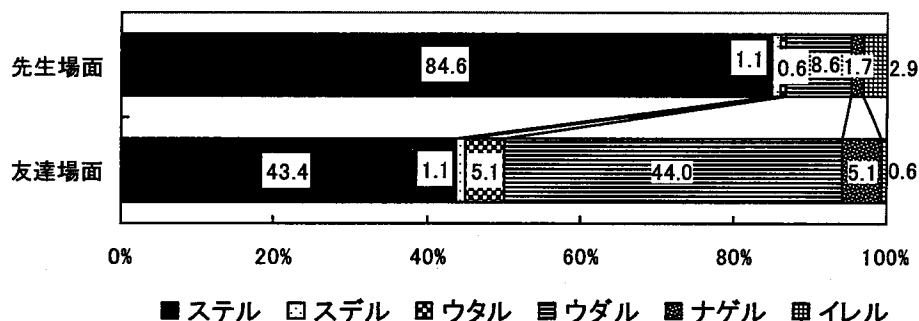


図13 「捨てる」にあたる表現形の場面比較

図12により男女差を見てみよう。

共通語形「ステル」について、〔先生場面〕(グラフでは太い線)と〔友達場面〕(グラフでは細い線)の差を見ると、男性が45.8%(79.5-33.7)、女性が36.9%(89.1-52.2)であり、男性の方が場面による違いが大きい。方言から共通語への切り替えは一般に男性よりも女性に強く現れることから考えると、女性の方が数値が大きくなることが期待されるが、逆になっている。女性は〔友達場面〕で数値がすでに50%を超えており、それが30%強にとどまる男性と比較すると上限までの幅が小さい。これが原因となっている可能性がある。

3.3.3. 「捨てる」にあたる語形の場面差のまとめ

これまで示したグラフ、特に図13を改めて見ると、両場面での方言形と共通語形の使い分けの状況は、先に見た「こわれた」の使い分け(特に図9)と、基本的なところはかなり似ていることがわかる。

図13によれば、〔友達場面〕における方言形「ウダル」と「ウタル」を足した数値は約5割となるが、これは図9「こわれた」の〔友達場面〕における方言形「ボ(ッ)コレダ」と「ボ(ッ)コレタ」を足した数値とほぼ同じである。「捨てる」では「ウダル」が方言形のほとんどを占めるのに対し、「こわれた」にはそのような偏りは特に見られないといった内訳面での違いはあるものの、〔友達場面〕での方言的表現の使用者率がともに5割程度で一致する点は興味深い。

男女差についても両項目間に似た傾向が見られる。例えば、図8により「こわれた」の〔友達場面〕について、「ボ(ッ)コレダ」と「ボ(ッ)コレタ」をあわせた数値を男女で比較すると、その差は21.4%である(数値は男性が高い)。一方、図12により「捨てる」の〔友達場面〕について「ウダル」と「ウタル」をあわせた数値を男女で比較すると、その差は16.4%である(ここでも数値は男性が高い)。〔友達場面〕では女性よりも男性の方が方言形をよく用いる傾向と男女差の数値に、「こわれた」と「捨てる」の類似性が確認される。

こうした両項目間の類似傾向は、共通語形の使用についても言える。図8により「こわれた」の〔友達場面〕における「コレタ」と「コレダ」をあわせた数値を男女で比較すると、その差は20.2%である(数

値は女性が高い)。一方、図12により「捨てる」の〔友達場面〕について「ステル」と「スデル」をあわせた数値を男女で比較すると、その差は18.5%である(ここでも数値は女性が高い)。男女差はともに20%前後で女性の方が高く、相互によく似た傾向を示している。

これが〔先生場面〕になると、男性の共通語形の使用が増加するため、女性との差は、「こわれた」の共通語形で6.7%、「捨てる」の共通語形で9.6%と、ともに縮小する。〔友達場面〕では男女差が大きく、〔先生場面〕ではそれが縮小するという点でも共通性が見られる。

3.4. 「いくら」の結果

最後に、物の値段をたずねるときの表現の使い分けについて見てみよう。共通語形の「イクラ」と、東北地方に広く分布する「ナンボ」の使い分けが予想される。

第2節で述べたように、本項目については、これまでのような2場面ではなく、次の5場面を設定して調査した。以下ではそれぞれを場面1～場面5と記すことがある。

- | |
|----------------------|
| 場面1：家族や友達 |
| 場面2：近所の顔見知りの店の人 |
| 場面3：鶴岡市のデパートで初めて話す店員 |
| 場面4：山形市で初めて話す店員 |
| 場面5：東京で初めて話す店員 |

全体の結果は図14、男性の結果は図15、女性の結果は図15のとおりである。

まず図14により全体の傾向を見てみよう。

主要な語形は「イクラ」と「ナンボ」であることが確認されるが、場面3～場面5では丁寧さを表わす接頭辞「オ・」を付加した「オイクラ」もある程度見られる。

方言形「ナンボ」と共通語形「イクラ」の使用者率は、場面により大きく異なる。「ナンボ」の使用者率に注目すると、場面1(家族や友達に)で86.3%、場面2(近所の顔見知りの店の人に)で62.3%と非常に

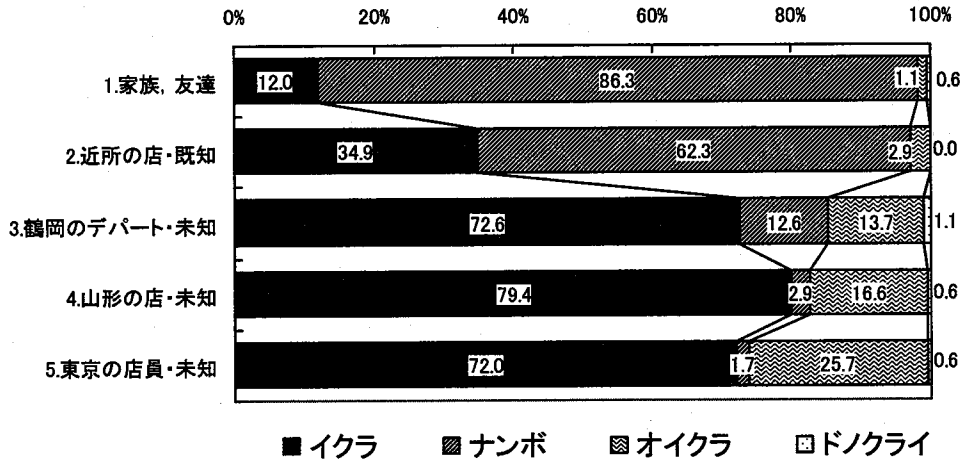


図14 「いくら」にあたる表現形の場面比較

優勢であるのに対し、場面3（鶴岡市のデパートで初めて話す店員に）では大きく減少して12.6%となり、さらに場面4（山形市で初めて話す店員に）で2.9%(5人)、場面5（東京で初めて話す店員に）で1.7%(3人)と一段と減少する。場面2と場面3の間に大きな差が見られる。

この「ナンボ」の使用者率の減少に反比例して場面1から場面5にかけて数値が増加するのが「イクラ」である。場面1～場面2では「ナンボ」と比べ劣勢であるが、場面3～場面5では「ナンボ」よりも優勢となる。また、場面3～場面5では、「イクラ」よりもさらに丁寧な形である「オイクラ」が増加する。

以上より、場面による違いという点では、場面2と場面3の違い、すなわち相手を知っているか否か（未知か既知か）という違いと、場面の改まりの度合いの違い（近所の店か鶴岡のデパートか）が、「ナンボ」を使うか「イクラ」や「オイクラ」を使うかの選択基準になっているようだ。ただし、場面3の場所（鶴岡）と場面4・場面5の場所（山形・東京）とで「イクラ」の数値にそれほど差が見られないことからすると、場面の改まりの度合いの違いよりも、未知か既知、つまり初めて話す相手か否かの違いの方が、使い分けの選択基準としてより重要なものとなっていると考えられる。

「イクラ」と「ナンボ」の場面による使い分けについては、国立国

語研究所(1990)による京都府宮津市と兵庫県豊岡市における調査結果の報告がある。場面設定が鶴岡市の調査と異なる部分があるため単純な比較は難しいが、同報告書のp.197には次の記述がある。

「一方、被調査者の京都・東京との接触状態に差があるにもかかわらず、あらたまった場面では、両地域（筆者注：宮津市と豊岡市をさす）とも「京都」と「東京」とにおける差（筆者注：「イクラ」の使用者率の差）がほとんどみられなかった。また、豊岡調査における「姫路」の場面もこれらとほぼ一致している。球磨川流域調査では、「東京」と「熊本」とにおいて場面差が認められていたのに対して、今回の調査では調査地域と他の都市との結びつきの強弱の程度とは無関係に、「他の都市で初対面の相手」という1点に集約されてしまったといえる。」

上に述べた鶴岡市での場面による使い分けと似た結果が報告されている。

次に、図15と図16により、男女を比較して見てみよう。

場面1と場面2では、「イクラ」の使用者率は男性よりも女性の方がわずかながら高く、逆に「ナンボ」は女性よりも男性の方が高い。地元の近い人に対する場合であっても、女性は相対的に共通語形、男性は相対的に方言形という違いが見られる。

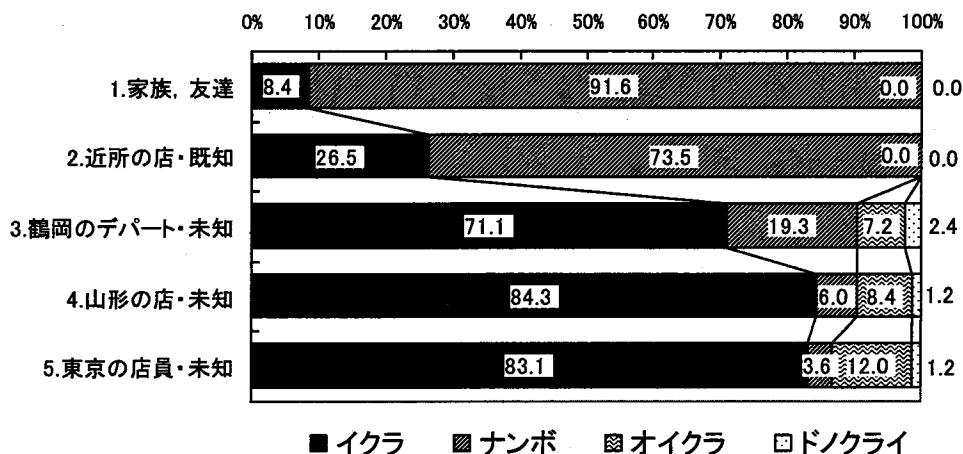


図15 「いくら」にあたる表現形の場面比較（男性）

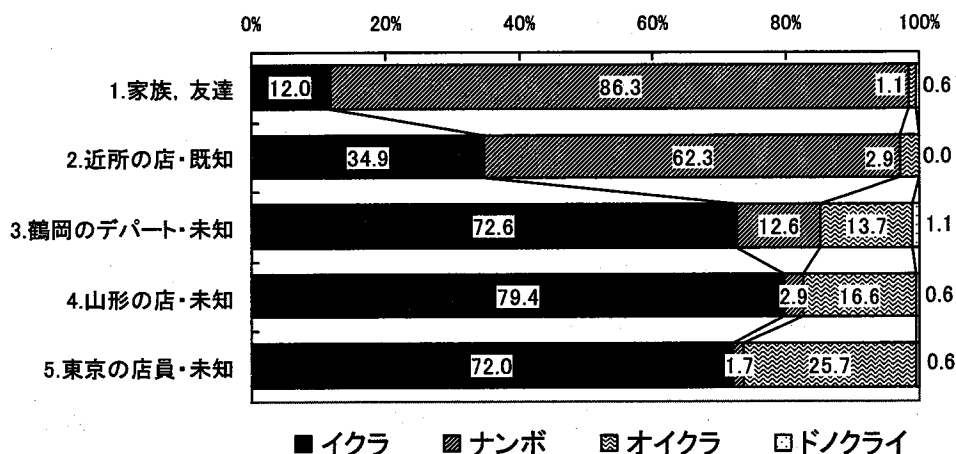


図16 「いくら」にあたる表現形の場面比較（女性）

これが場面4・場面5になると、「いくら」の数値は女性よりもむしろ男性の方が高くなる。これは、場面3～場面5で女性は、「いくら」よりも丁寧さの度合いがさらに高い「オイクラ」の使用が増え、その結果「いくら」が相対的に減少するためである。女性による「オイクラ」の使用者率は、男性のほぼ2倍となっている。

表1・表2は、図15・図16をさらに年齢層別に示したものである。

表1の男性の数値を見ると、共通語形「いくら」は、場面2～場面5で中年層が最も低くなっている。年齢差は場面2と場面3で特に顕著である。これと対照的に、表2の女性では、「いくら」の使用者率は場面3～場面5で中年層が最も高くなっている。この違いは、場面2・場面3で中年層男性が、他の年齢層に比べ方言形「ナンボ」を多用していることと関係がある。中年層男性は、女性と比べても、場面3（鶴岡のデパート・未知）の「ナンボ」の数値は高い。未知の相手ではあるが、山形市や東京と異なり鶴岡市は地元であるという意識が、「ナンボ」をなお3割近くの人に使わせているものと考えられる。これに対し女性の「いくら」の使用は、「未知」であることが重要な要素となっているようである。

女性における丁寧形「オイクラ」の使用者率は、場面1から使用が見られる高年層が最も高くなっている。若年層の女性と中年層の女性の

表1 「いくら」にあたる表現形の場面×年齢層別使用者率（男性）

男性	若年層			中年層			高年層		
	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ
1. 家族、友達	12.0	88.0	0.0	8.0	92.0	0.0	6.1	93.9	0.0
2. 近所の店・既知	36.0	64.0	0.0	12.0	88.0	0.0	30.3	69.7	0.0
3. 鶴岡デパート・未知	80.0	8.0	12.0	52.0	32.0	8.0	78.8	18.2	3.0
4. 山形の店・未知	92.0	0.0	8.0	76.0	8.0	12.0	84.9	9.1	6.1
5. 東京の店員・未知	84.0	0.0	16.0	80.0	4.0	12.0	84.9	6.1	9.1

表2 「いくら」にあたる表現形の場面×年齢層別使用者率（女性）

女性	若年層			中年層			高年層		
	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ	イクラ	ナンホ [°]	オイクラ
1. 家族、友達	21.4	78.6	0.0	10.0	87.5	0.0	18.4	76.3	5.3
2. 近所の店・既知	42.9	57.1	0.0	40.0	52.5	7.5	44.7	50.0	5.3
3. 鶴岡デパート・未知	71.4	7.1	21.4	82.5	2.5	15.0	65.8	10.5	23.7
4. 山形の店・未知	78.6	0.0	21.4	80.0	0.0	20.0	68.4	0.0	29.0
5. 東京の店員・未知	64.3	0.0	35.7	67.5	0.0	32.5	55.3	0.0	44.7

「オイクラ」にはそれほど差がないが、若年層は場面3で初めて使用が見られるのに対し、中年層では場面2からすでに使用されている点は異なる。

4. まとめ

最後に、本章の分析で得られたおもな結果をまとめて示す。

(1) 「ご飯を食べていた」の<ご飯>と<食べる>

「ご飯を食べていた」の主要項目であった<ご飯>と<食べる>についてその組み合わせパターンを見ると、〔友達場面〕では2割近くの人が回答した「メシークウ（クッテイタ）」は、〔先生場面〕ではほとんど使用されなくなる。〔友達場面〕で半数以上が「ゴハンータベル（タベテイタ）」を使用していることから判断すると、現在では「メシ」や「クウ」にぞんざいなニュアンスが感じられ、かつては美化語

的に意識されていた「ゴハン」や「タベル」が普通の表現として使われるようになったものと考えられる。また、〔先生場面〕では、〈食べる〉の末尾を「～テイマシタ」「～デシタ」のように「タ」とする表現がしばしば使われている点も注目される。先生に対する丁寧な表現と意識されているものと考えられる。

(2) 「こわれた」「捨てる」

「こわれた」と「捨てる」については、場面による方言形と共通語形の使い分けが非常に明確に認められた。鶴岡市の人々の言語生活では、方言と共通語の使い分けはごく自然なこととなっている。

男女差については、「こわれた」と「捨てる」で似た傾向が見られた。〔友達場面〕では、女性に比べ男性は方言形用い、逆に女性は共通語形を用いる傾向が見られた（男性との差は20%前後）。これに対し〔先生場面〕では、男性による共通語形の使用が増加するため、女性との差は小さくなる。

(3) 「いくら」

「いくら」についても、場面による方言形と共通語形の使い分けが非常に明確に認められた。特に場面2（近所の顔見知りの店の人に）と場面3（鶴岡市のデパートで初めて話す店員に）の間で、方言形と共通語形の優劣が逆転し、数値も大きく異なってくる。場面の改まりの度合いの違いよりも、相手を知っているか否か（未知か既知か）の方が、方言形を使うか共通語形を使うかの選択基準としてより重要なものとなっていると考えられる。

5. 今後の課題

鶴岡市で場面差調査を実施したのは平成4年（1992年）であり、現在はそれから14年経過した。今回調査した語彙項目については、恐らく今でも方言と共通語の使い分けはなされており、今後も使い分け自体は当面は続くものと予想される。従って、今後の課題は、親しい人を相手とした場面で方言形がどの程度使用され続けるか、逆に言えば共通語形がどの程度勢力を広げるかを明らかにすることにある。そう

した場面差調査を今後継続するとした場合、「いくら」以外の項目については場面数をもう少し増やしたり、場面の性格（場所および相手との親疎関係などの基準）を今回よりも明確なものとするなどの工夫も必要となるかもしれない。

参考文献

国立国語研究所(1967)『国立国語研究所報告30-2 日本言語地図 第2集』
大蔵省印刷局[現国立印刷局]

国立国語研究所(1985)『国立国語研究所報告84 方言の諸相一『日本言語地図』検証調査報告一』三省堂

国立国語研究所(1990)『国立国語研究所報告102 場面と場面意識』三省堂

佐藤和之・米田正人編(1999)『どうなる日本のことば一方言と共通語のゆくえ一』大修館書店

米田正人(1993)「鶴岡市における共通語化の調査一約20年間隔で行われた3回の調査を比較して一」『日本方言研究会第56回研究発表会発表原稿集』,pp.17-24

第5章 文法の使い分け

朝日祥之

尾崎喜光

1. はじめに

本章では、文法項目に関する方言と共通語の使い分けについて分析した結果を報告する。相手と上下関係が異なる複数の会話場面を設定し、それぞれの場面において共通語の文法形式を使うか、それとも方言の文法形式を使うかについて、発話の形で得た回答の分析を行う。あわせて、従来の調査方法でとらえてきた文法項目の結果が、鶴岡市民の言語生活のどの側面をとらえてきたかについても検討する。

場面差調査で対象とした文法項目は、基本的にこれまでの継続調査してきた項目である。具体的には、方言形で示すと、①格助詞「サ」（例文1）、②原因・理由を表す接続助詞「サケ・ハケ等」（例文2）、③形容詞の連用形の語形（例文3）、④過去回想を表す助動詞「ケ」および終助詞「ノ」（例文4）である。

- (1) 太郎は京都{サ／ニ／エ}行く。
- (2) 風邪を引いた{サケ／ハケ／スケ／カラ／ノデ}、学校を休む。
- (3) (1年ぶりに会った甥に) ずいぶん背が{タゲクナッタ／タカクナッタ}。
- (4) 子供の頃は相撲が{ツヨイッケ／ツヨカッタ}{ノ／ナ}。

このうち(2)の接続助詞と(4)の過去回想の助動詞は、第1回調査から第3回調査まで一貫して調査してきた項目である。

場面差調査では、これらの項目について、「親しい友人と話す場面」と「先生と話す場面」の二場面を設定し、回答者がどのような表現を用いるかを調べた。

以下、本章では、第2節で回答者の性別・年齢層別分布について改めて簡単に示した後、第3節で設定場面および調査項目について説明を加える。第4節では分析結果を報告し、続く第5節では前年度実施した継

続調査（第3回調査）の結果との比較を行う。第6節では本章の結論と今後の課題について述べる。

2. 回答者の性別・年齢層別分布

場面差調査の回答者の性別・年齢層別分布は第1章で述べたとおりであるが、それと比較対照する継続調査の分布とあわせて改めて示すと表1（場面差調査）・表2（継続調査）のとおりである。年齢層は若年層（10～30代）・中年層（40～50代）・高年層（60～80代）の三層とした。

表1 回答者の分布（場面差調査）

年齢 性別	若年層 (10～30代)	中年層 (40～50代)	高年層 (60～80代)	計
男性	25人	25人	33人	83人
女性	14人	40人	38人	92人
計	39人	65人	71人	175人

表2 回答者の分布（継続調査）

年齢 性別	若年層 (10～30代)	中年層 (40～50代)	高年層 (60～80代)	計
男性	84人	66人	31人	181人
女性	99人	86人	39人	224人
計	183人	152人	70人	405人

3. 設定場面・調査項目・質問文

3.1. 設定場面

文法項目について方言と共通語の使い分けを見るために設定した場面は次の二場面である。①は上の立場の者と話す場面ということで「上位場面」、②はそれと対立する場面ということで「下位場面」と呼ぶことにする。

- ①先生と話す場面（上位場面）
- ②親しい友人と話す場面（下位場面）

3.2. 調査項目

調査項目は次のとおりである。

- (1) 方向を表す格助詞（共通語「エ」「ニ」／方言「サ」）
- (2) 原因・理由の接続助詞（共通語「カラ」「ノデ」／方言「サケ」「ハケ」）
- (3) 形容詞連用形の語幹の形（共通語「タカク(ナッタ)」／方言「タゲク(ナッタ)」）
- (4) 過去回想を表す助動詞（共通語「ツヨカッタ」／方言「ツエツケ」）
- (5) 終助詞（共通語「ネ」／方言「ノ」）

3.3. 質問文

調査で用いた質問文は次のとおりである（本書末尾の資料1も参照）。

(1) 格助詞－「エ」「ニ」「サ」－

〔相手に尋ねる場合〕

401

- 1. 道で、仲のよい友だち（回答者と同性で同年齢くらい）に会いました。「どこへ行くのか」とたずねるとしたらどう言いますか？（下位場面）
1.ドコニ 2.ドコエ 3.ドコサ 4.ドゴサ 5.ドコハ 6.ドゴハ
7.ドサ 9.その他 []
- 2. お世話になっている（教えてもらっている）年配の先生に道で会って、「どこへ行くのか」とたずねるとしたらどう言いますか？（上位場面）
1.ドコニ 2.ドコエ 3.ドコサ 4.ドゴサ 5.ドコハ 6.ドゴハ
7.ドサ 9.その他 []

〔自分が受け答える場合〕

402

- 1. 今度は逆に、親しい友だちからどこに行くのかをたずねられて、「学校へ行く」と答えるとき、あなたならどう答えますか？（下位場面）
1.ニ 2.エ 3.サ 4.ハ 9.その他 []
- 2. 同じことをさっきと同じ先生に答えるとしたら、どう答えますか？（上位場面）
1.ニ 2.エ 3.サ 4.ハ 9.その他 []

(2) 原因・理由の接続助詞 -「カラ」「サケ」「ハケ」-

403

-1. 親しい友だちに、今からどこかにいっしょに行こうと誘われたとします。「すぐに行くからちょっと待って欲しい」と友達に言うとしたらどう言いますか？（下位場面）

- 1.カラ（ガラ） 2.サケ（サゲ） 3.ハケ（ハゲ） 4.スケ
5.ノデ 6.ンデ 9.その他 []

-2. 同じことを、先生に言うとしたらどう言いますか？（上位場面）

- 1.カラ（ガラ） 2.サケ（サゲ） 3.ハケ（ハゲ） 4.スケ
5.ノデ 6.ンデ 9.その他 []

(3) 形容詞連用形の語幹の形

404

-1. 友だちと話していて「最近、野菜の値段が高くなった」というとき、ふつうどう言いますか？（下位場面）

- 1.タカク 2.タガク 3.タゲク 4.タツガク 5.タツゲク
9.その他 []

-2. 同じことを、先生に言うとしたらどう言いますか？（上位場面）

- 1.タカク 2.タガク 3.タゲク 4.タツガク 5.タツゲク
9.その他 []

(4) 過去回想を表す助動詞「ケ」および終助詞「ノ」

405

-1. 親しい友達と話していて、「大相撲の柏戸（千代の富士）は強かったなあ」と言うとしたらどう言いますか？（下位場面）

- | | | | |
|----------|---------|-------|--------------|
| 1.ツヨカッタ | 2.ツヨガッタ | } + [| 11.文末辞なし |
| 3.ツイ(エ)ケ | 4.ツエッケ | | 12.文末辞あり [] |
| 5.ツヨイケ | 6.ツヨイッケ | | |

-2. 先生と話していて同じことを言うとしたらどう言いますか？

(上位場面)

- | | | | |
|----------|---------|-------|--------------|
| 1.ツヨカッタ | 2.ツヨガッタ | } + [| 11.文末辞なし |
| 3.ツイ(エ)ケ | 4.ツエッケ | | 12.文末辞あり [] |
| 5.ツヨイケ | 6.ツヨイッケ | | |

回答者からは文(発話)の形で回答を得た。調査の現場では、回答された発話全てを書き取るのではなく、各設問でねらいとする部分を示した選択肢にチェックする方法をとった。回答は、後日、アルバイトおよび研究分担者尾崎によるチェック(録音の聴き直し)を経た上で確定した。なお、発話全体の文字化も行ない参考データとした。

4. 分析

本節では、前節で示した文法項目について、場面による使い分けが見られるか否かの分析を行う。

まず、回答者全体について、二場面間の使い分けを分析する。次いで、回答者の社会的属性(性・年齢層)と関連付けて分析を行う。その後、前年度実施した継続調査で得られた結果と比較し、継続調査でとらえてきた文法項目の数値が、鶴岡市の言語生活のどの側面であったかを検討する。

4.1. 全体的傾向

4.1.1. 格助詞-「エ」「ニ」「サ」-

(1) 「どこへ」

移動の到達点や方向を表す格助詞には、共通語形の「エ」「ニ」と方言形の「サ」がある。これらの形式の間に、場面による使い分けが見られるか否かを見ていこう。

相手に「どこへ行くのか」と尋ねる場合の「へ」に相当する格助詞の使用については図1の結果が得られた。なお、ここでは格助詞を分析対象としているので、「ドコサ」「ドゴサ」「ドサ」などは「サ」としてまとめた。

相手に「どこへ行くのか」と尋ねる場合、上位場面(「先生」に尋ねる場面;以下「先生場面」)では共通語形の「エ」「ニ」が、下位場面(「友人」に尋ねる場面;以下「友人場面」)では方言形の「サ」が、それぞれ多用されている。改まりの度合いが高い「先生場面」では共通語形を、気の置けない「友人場面」では方言形を用いる傾向が見られる。場面による違い、すなわち使い分けは顕著である。

4.1.2.節で分析結果を報告する原因・理由を表わす接続助詞「サケ」

は、サ行音をハ行音とする当地の発音傾向に従い「ハケ」と発音することがある。これに習い、格助詞「サ」を「ハ」とする新形（全体はドゴハ／ドコハ／ドハなど）の使用を期待したが、使用者率は「先生場面」で0.6%、「友人場面」でも1.7%に過ぎなかった。

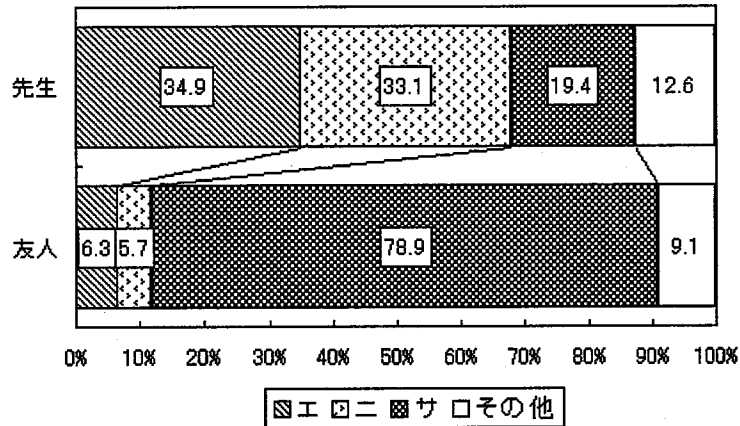


図1 「どこへ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け

(2) 「どこへ」

本設問の主たる注目点は「どこへ」の格助詞の部分であるが、それに前接する「どこ」についてもあわせて注目した。すなわち、「ドコ」という通常の形式ないしはその方言形にあたる「ド」を使うか、それとも改まりの度合いがより強い「ドチラ」を使うか、その使い分けを見ようとした。「ドコ」が使われた場合は、共通語音声の「ドコ」か、方言音声の「ドゴ」かにも注目してチェックしたが（ゴは鼻にかからない非鼻濁音）、ここではその違いは考慮せず「ドコ(ドゴ)系」としてあわせて示した。

結果は図2のとおりであった。まず指摘されるのは、場面の違いに関わらず「ドコ(ドゴ)系」の使用者率が最も高い点である。しかしながら、その数値は、「先生場面」が48.6%、「友人場面」が62.9%であり、「友人場面」は「先生場面」よりも高い。一方「ドチラ系」は、「友人場面」ではほとんど用いられないが、「先生場面」では使用者率が44.6%とかなり高くなっている点が注目される。「先生場面」では、「ドコ(ドゴ)系」に加え「ドチラ系」も用いられる傾向が明確に認められる。

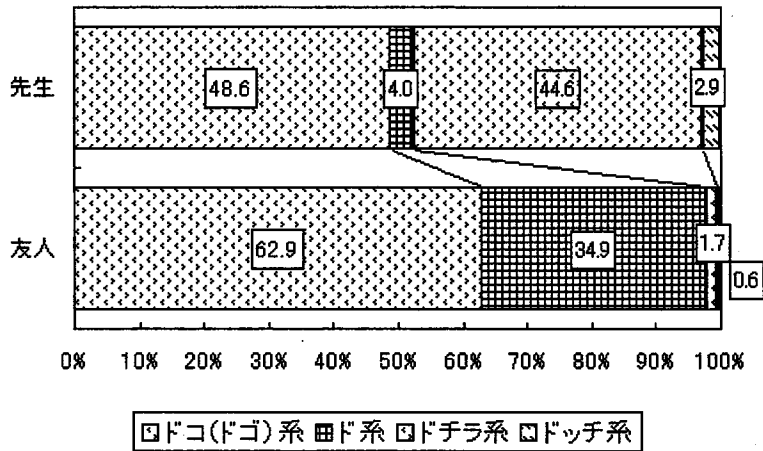


図2 「どこへ」の「どこ」に該当する形式の使い分け

方言形の「ド系」（格助詞まで含めると「ドサ」「ドハ」）に注目すると、「友人場面」での使用者率は34.9%と高いのに対し、「先生場面」では使用がほとんど見られない。「先生場面」と「ドチラ系」、「友人場面」の「ド系」という使い分けが明確である。

(3) 「学校へ」

次に、相手の質問に応答する形で「学校へ行く」と答える場合の格助詞「へ」の形式の現れ方を見てみよう。結果は図3のとおりであった。

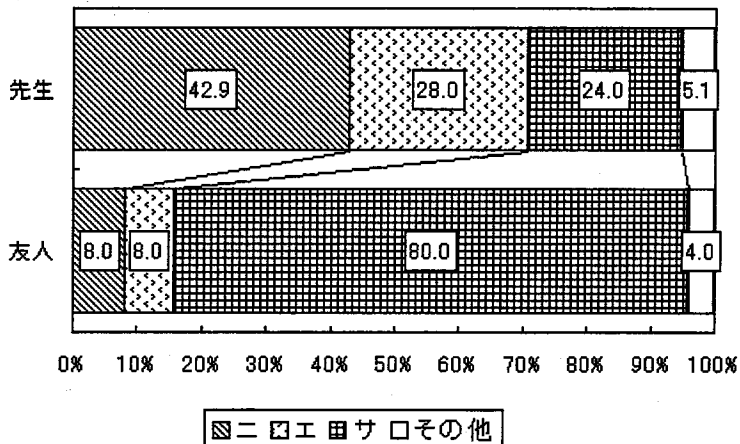


図3 「学校へ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け

「先生場面」では共通語形の「ニ」「エ」が、「友人場面」では方言形の「サ」が、それぞれ多用される傾向が見られる。先に見た「どこへ行くのか」の格助詞「へ」の場合と同様、ここでも、方言形と共通語形との使い分けが明確に認められる。新形として出現を期待した「ハ」の使用は、両場面とも皆無であった。

「どこへ」も「学校へ」も、格助詞の使用については、下位場面と上位場面とで多用される形式が明確に異なっている。場面による方言形と共通語形の使い分けが明確である。

4.1.2. 原因・理由の接続助詞－「カラ・ノデ」「サケ・ハケ」－

次に、「すぐ行くから」の「から」に相当する原因・理由を表す接続助詞を見てみよう。ここでは、共通語形「カラ」「ノデ」と方言形「サケ」「ハケ」の使い分けが予想される。結果は図4のとおりであった。非語頭の無声子音の有声化は特に区別せずまとめて示した。

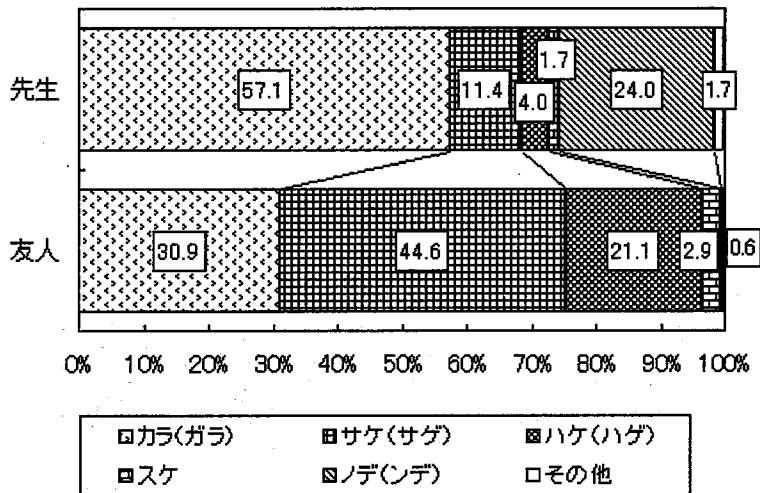


図4 「すぐ行くから」の原因・理由の接続助詞の使い分け

共通語形の「カラ(ガラ)」と「ノデ(ンデ)」，方言形の「サケ(サゲ)」と「ハケ(ハゲ)」と「スケ」をそれぞれあわせ、共通語形対方言形という形で両場面を比較してみよう（ガラのガ，サゲのゲ，ハゲのゲは鼻にかからない非鼻濁音）。

「先生場面」では、共通語形の使用者率が81.1%であるのに対し、方言形の使用者率は17.1%にとどまる。一方、「友人場面」では、共通語形の使用者率が30.9%であるのに対し、方言形の使用者率は68.6%であり、方言形の使用の方が優勢となる。このことから、原因・理由の接続助詞についても、「先生場面」と「友人場面」とで、共通語形と方言形の使い分けがなされていることがわかる。

なお、接続助詞の直前には丁寧語「マス」が接続することがある。丁寧語を接続した人は、「先生場面」で73.1%、「友人場面」で2.9%であった。方言対共通語という対立ではないが、場面による丁寧語の使い分けも観察される。

次に、上ではまとめて示した諸形式を分けて見てみよう。

方言形の中では「サケ(サゲ)」の数値が最も高く、これに「サケ(サゲ)」のサの子音が弱化した「ハケ(ハゲ)」が続く。「スケ」は両場面に見られるものの、数値はきわめて低い。

一方、共通語形に目を向けると、「カラ」は場面の違いに関わらずよく用いられているのに対し、「ノデ」は「先生場面」にほぼ限定して用いられている。「ノデ」の使用が改まりの度合いが高い場面に傾くことについては、中学生・高校生を対象とした国立国語研究所の別の調査でも確認されている(国立国語研究所2003)。その傾きの度合いは、東京や大阪よりも山形(東田川郡)においてより顕著であったが、同様の傾向が鶴岡市の成人にも確認される。

4.1.3. 形容詞連用形の語幹-「高く(なった)」-

共通語の形容詞連用形は、例えば「高イ」であれば、「タカ・ク(-ナル)」となるように、終止形からイを除いた部分を語幹として、これに「-ク(-ナル)」を接続させる。これに対し鶴岡市には、イまでを含めた部分を語幹とし、これに「-ク(-ナル)」を接続させる表現がある。ただし、連母音の融合(ai>e)と無声子音の有声化が関与するため、実際の語形は「タカイ・ク(-ナル)」ではなく「タゲ・ク(-ナル)」となる。調査では、野菜の値段が「高くなった」と言う場合、共通語形の「タカク」等を使うか、それとも方言形の「タゲク」等を使うかに注目した。結果は図5のとおりであった。

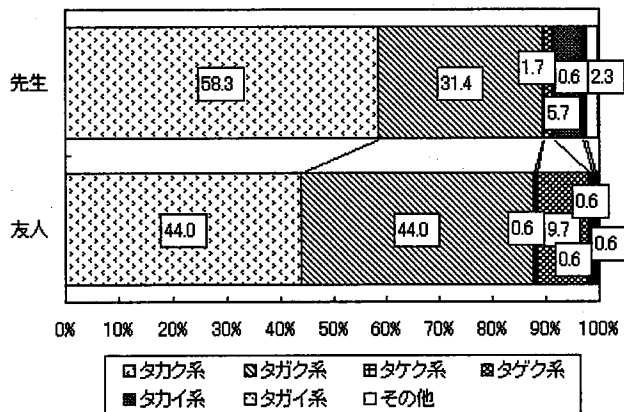


図5 形容詞「高い」の連用形の語幹の使い分け

方言形の「タケク系」「タゲク系」の数値は両場面とも低い。逆に共通語形の「タカク系」「タガク系」は両場面ともあわせて9割近くを占める。場面に関わらず、現在では共通語形の方が非常に優勢である。

ただし、数値自体は低いが、「タケク系」と「タゲク系」をあわせた数値を両場面と比較すると、「友人場面」では約1割であるのに対し「先生場面」ではわずかに2%程度にとどまり、場面による差が認められる。これに対し、「タカク系」と「タガク系」をあわせた数値は、「友人場面」よりも「先生場面」で多少高い。つまり、方言形「タケク系」「タゲク系」は「先生場面」よりも「友人場面」において、逆に共通語形「タカク系」「タガク系」は「友人場面」よりも「先生場面」において、それぞれ相対的により多く用いられており、場面による使い分けが認められる。

「タカク系」と「タガク系」の関係を見ると、「先生場面」では有声化しない「タカク系」が優勢であるのに対し、「友人場面」ではその数値が減少して有声化した「タガク系」が増加し数値が均衡する。

「友人場面」では方言音声と共通語音声と同程度用いられているのに対し、「先生場面」では共通語音声の方に使用が傾き、場面による使い分けが音声面にも観察される。こうした音声面での使い分けについては、第2章の語中無声子音の有声化の項でも報告しているが、本項目でも同様の傾向が確認された。なお、全体として数値が低かった方言形の「タケク系」と「タゲク系」を比較すると、使用は「タゲク系」

に大きく傾く。語形が方言形である場合は、音声も方言形とするのが一般的なようである。

凡例の「タカイ系」「タガイ系」について補足説明する。これらは、「タカイ(ヨー)(デス){ネー/ノー}」などの回答であり、期待した「ク(ナル)」の形で現れなかったものである。数値自体は両場面とも低いですが、「友人場面」よりも「先生場面」で用いられている。場面による使い分けとして興味深い現象であるが、本書では方言形と共通語形の使い分けをテーマとしているので、ここでは指摘のみにとどめる。

4.1.4. 過去回想を表す助動詞「ケ」および終助詞「ノ」

(1) 過去回想を表す助動詞「ケ」

共通語において、文語のカリ活用に由来する系列の形容詞連用形は、例えば「強イ」の場合「ツヨ・カッ(-タ)」となるように、終止形からイを除いた部分を語幹とし、これに「-カッ(-タ)」を接続させる。これに対し鶴岡市の方言形では、カリ活用ではなくク活用を用い、しかも前節で示したようにイまでを含めた部分を語幹とする。ただし、連母音の融合も関与するため、語幹の実際の語形は「ツヨイ」ではなく「ツエ」ないしは「ツイエ」などとなる。また、過去回想を表す助動詞は「タ」ではなく「ケ」が用いられる。そのため、「強かった」は、全体として「ツエ・ケ」「ツイエ・ケ」などとなる。

共通語対方言という対立で言えば語幹の形も問題となるが、ここでは主としてそれに後接する過去回想を表す助動詞に注目し、共通語形「タ」を使うか方言形「ケ」を使うかを分析する。ただし、実際の回答は、語幹を含む形でなされ、しかも「ツエ・タ」のような組みあわせは実在しないことを考慮し、語幹を含む全体の形で見ることにする。

調査では、大相撲の力士の柏戸（または千代の富士）は「強かったなあ」と言う場合を調べた。

なお、本設問では、発話末尾の終助詞についてもあわせて注目し、方言形「ノ」を用いるか、それとも共通語形「ネ」を用いるかもチェックしたので、その結果もあわせて示すことにする。ただし終助詞はバリエーションが少ないので、グラフで示すことは省略する。

終助詞を除く「強かった」の部分については図6の結果が得られた。

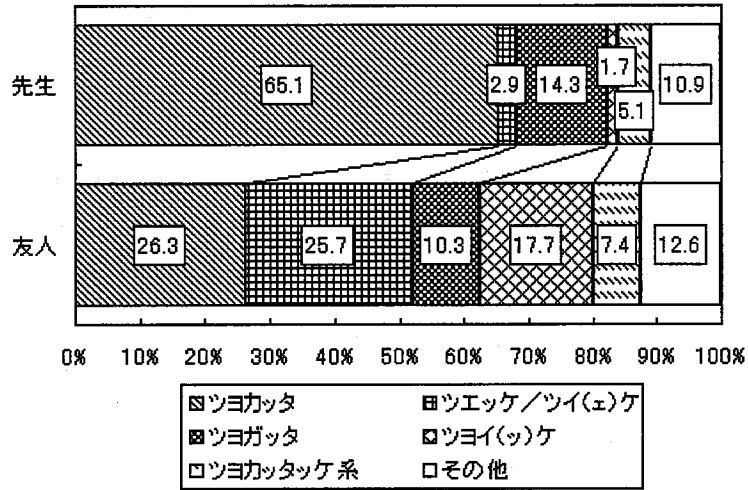


図6 形容詞「強かった」の語形の使い分け

「先生場面」では共通語形の「ツヨカッタ」が優勢であり全体の2/3近くを占める。これに対し「友人場面」では、「ツヨカッタ」のほか、「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」「ツヨイ(ッ)ケ」など「ケ」を含む方言形式も用いられており多彩である。「先生場面」は共通語形の使用に大きく傾くのに対し、「友人場面」は共通語形と方言形の両方を含みかつ多様性に富むという違いがまず指摘される。

共通語形「タ」（「ツヨカッタ」＋「ツヨガッタ」）か、それとも方言形「ケ」（「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」＋「ツヨイ(ッ)ケ」）かという形で両場面を比較すると、「先生場面」では「タ」79.4%、「ケ」4.6%、「友人場面」では「タ」36.6%、「ケ」43.4%である。「先生場面」では共通語形の「タ」に大きく傾くのに対し、「友人場面」ではむしろ方言形の「ケ」の方が優勢であり、本項目についても場面による使い分けが明確に認められる。なお、「ツヨカッタ」と「ツヨガッタ」を比較すると、有声化しない「ツヨカッタ」の方が両場面とも優勢であるが、その度合いは「先生場面」においてより強く、音声面での使い分けの傾向も同時に認められる。

数値は両場面とも1割に満たないが、「ツヨカッタツケ系」を用いる回答者がいることが注目される。おそらくこれは、「タ」と「ケ」が混交した形と考えられる。

(2) 終助詞「ノ」

「強かった」に後接する終助詞については次のようであった。

「先生場面」では、「ノ」60.0%、「ネ」31.4%、「ナ」3.4%、終助詞無し4.6%、無回答0.6%であった（終助詞はいずれも長く伸ばして発音されることの方が普通である）。これに対し「友人場面」では、「ノ」84.6%、「ネ」8.0%、「ナ」6.3%、終助詞無し1.1%であった。

両場面とも方言形「ノ」の数値が最も高い。場面に関わらず「ノ」は非常によく用いられている。筆者（尾崎）が行った実際の調査場面を想起しても、調査員である筆者との会話の中で「ノ」を用いる回答者は少なくなかった。他所から来た初対面の者に対しても使用を控えるということのあまりない方言形だという印象を当時持ったが、調査結果からもそのことが伺える。

ただし、相対的に見るならば、「先生場面」では「ネ」を用いる回答者も1/3ほどいるのに対し、「友人場面」での「ネ」の数値は1割に満たない。逆に「ノ」の使用は、「先生場面」に比べ「友人場面」ではさらに数値が増加する。「先生場面」では「ネ」、「友人場面」では「ノ」という使い分けの傾向が認められる。

数値は低いが「ナ」も用いられている。「先生場面」よりも「友人場面」で数値が高くなっていることから、「ノ」と同じ方向性の待遇価（下位場面主体の使用）を持つ表現と考えられる。

なお、これらの終助詞の直前には丁寧語（主として「デス」）が接続することがある。丁寧語を用いた回答者は、「先生場面」で54.3%、「友人場面」で0.0%であった。方言対共通語という対立ではないが、4.1.2.節の「行くから」で見た従属節の場合と同様、主節においても場面による丁寧語の使い分けが観察される。

4.2. 回答者の社会的属性から見た傾向

前節では、それぞれの文法項目について、回答者全体として、場面による方言形と共通語形の使い分けが行われているかどうかを分析した。その結果、全ての文法項目について、方言形と共通語形との使い分けが観察された。

本節では、こうした状況にある文法項目について、回答者の社会的

属性との関係からさらに検討を加える。具体的には、性別と年齢層の2つの変数を取り上げて、それらと各形式の使用者率との関係を分析する。

4.2.1. 格助詞「エ」「ニ」「サ」

まず、移動の到達点や方向を表す格助詞「エ」「ニ」「サ」の使われ方から見る。前節で触れたように、この格助詞をめぐっては、「どこへ行くのか」と問いかける場合と、逆にそう問われて「学校へ行く」返答する場合の2つについて質問した。この順に見て行こう。

(1) 問いかける場合（「どこへ」）の格助詞

性別により分析した結果を図7に、年齢層別に分析した結果を図8に示す。

[性差]

男性と女性に分けて見た場合も、「友人場面」では方言形の「サ」、
「先生場面」では共通語形の「ニ」と「エ」がそれぞれ多用されている。場面による方言形と共通語形の使い分けは、男女ともに認められる。ただし、グラフをよく見ると、次のような男女による違いも観察される。

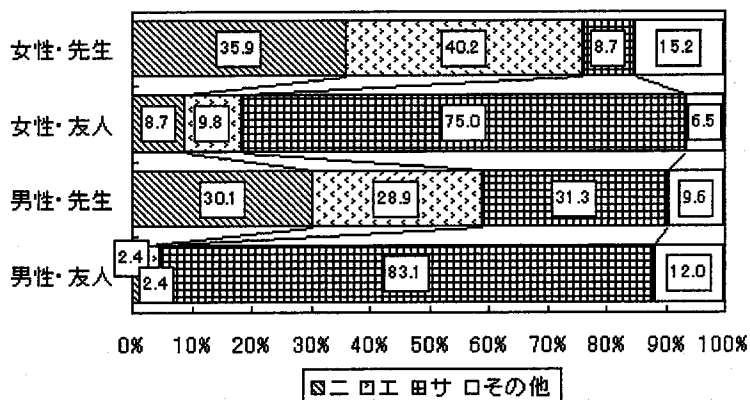


図7 「どこへ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け—性差—

まず、方言形の「サ」に注目すると、両場面とも男性の方が女性よりも数値が高い。特に「先生場面」では、女性が8.7%であるのに対し男性は31.3%であり、その差は顕著である。改まりの度合いの高い「先生場面」において方言形の使用を避ける傾向は女性に強いと言える。

逆に、共通語形「エ」「ニ」の使用者率は、両場面とも男性よりも女性の方が高い。

以上より、場面による使い分けは男女ともに認められるが、相対的なこととして言えば、男性は女性よりも方言志向、女性は男性よりも共通語志向であると言える。

【年齢差】

年齢層別に分けて見た場合も、「友人場面」では方言形の「サ」, 「先生場面」では共通語形の「ニ」と「エ」がそれぞれ多用されている。場面による方言形と共通語形の使い分けはいずれの年齢層にも認められる。ただし、グラフをよく見ると、次のような年齢層による違いも観察される。

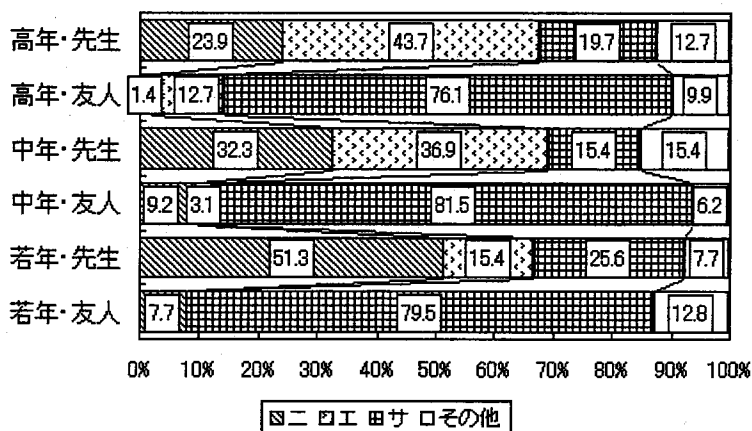


図8 「どこへ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け—年齢差—

方言形の「サ」の使用については大きな年齢差はない。また、共通語形についても、「ニ」と「エ」をあわせた数値はやはり大きな年齢差はない。しかし、共通語形の数値が高い「先生場面」について、「ニ」と「エ」の内訳を見ると、「ニ」は若年層 > 中年層 > 高年層であるの

に対し、「エ」は **高年層 > 中年層 > 若年層** と逆になっている。つまり、「先生場面」では、若年層ほど「ニ」を、逆に高年層ほど「エ」をそれぞれ用いる傾向が認められる。共通語形が「エ」から「ニ」に移り変わっていて、それが年齢差として反映している可能性がある。

(2) 返答する場合（「学校へ」）の格助詞

次に、「学校へ行く」と返答する場合の格助詞の使われ方を見てみよう。性別の結果は **図9**、年齢層の結果を **図10** のとおりであった。

【性差】

先に見た問いかけの場合と同様、返答についても、男女ともに、「友人場面」では方言形の「サ」が、「先生場面」では共通語形の「ニ」と「エ」がそれぞれ多用されている。返答の場合についても、場面による方言形と共通語形が使い分けは、男女ともに認められる。

ただし、詳細に見ると、次のような男女による違いもある。

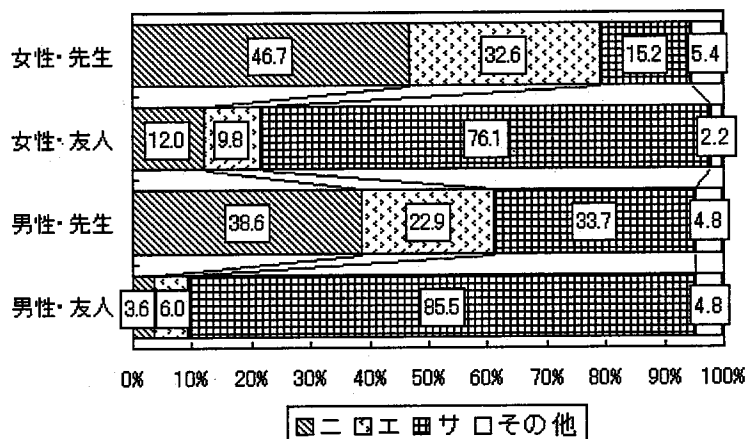


図9 「学校へ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け—性差—

まず、方言形「サ」の使用者率を見ると、両場面とも女性よりも男性の方が高い。逆に、共通語形の「ニ」「エ」の使用者率は、男性よりも女性の方が高い。男性は女性よりも方言志向、女性は男性よりも共通語志向という、問いかけの場合と同様の傾向が認められる。

「ニ」と「エ」の関係について、問いかけの場合と比較すると、返答

の場合は「エ」よりも「ニ」が優勢になる傾向が見られる。特に「ニ」と「エ」の数値が高い「先生場面」では、そうした傾向は男女ともに明確に認められる。動作の帰着点が「学校」のように明確である場合は「ニ」が、「どこ」のように移動の方向をいわば漠然と示す場合は「エ」がそれぞれ用いられやすいのかもしれない。

【年齢差】

いずれの年齢層でも、「友人場面」では方言形の「サ」が、「先生場面」では共通語形の「ニ」「エ」が多用されており、場面による方言形と共通語形が使い分けはどの年齢層にも認められる。

ただし、詳細に見ると、次のような年齢層による違いもある。

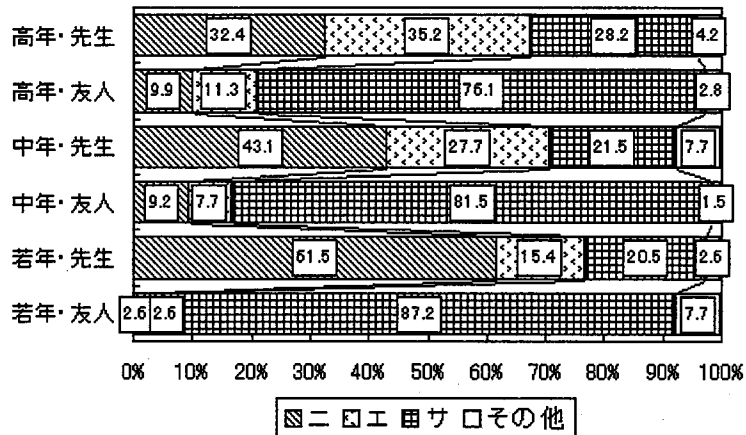


図10 「学校へ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の使い分け—年齢差—

まず、方言形の「サ」について見ると、大きな差ではないものの、「友人場面」は若年層 > 中年層 > 高年層であるのに対し、「先生場面」は高年層 > 中年層 > 若年層と逆の傾向が見られる。その結果、「サ」の使用は、全体としてはどの年齢層も「友人場面」に傾くのであるが、「友人場面」への度合いは若年層ほど強くなる。若い年齢層になるにつれ、「サ」が下位場面専用の形式に移行する傾向が見られる。

一方、共通語形の「ニ」「エ」について見ると、どの年齢層でも「友人場面」よりも「先生場面」の方が数値が高い。「ニ」と「エ」をあわせた数値を年齢層で比較すると、「先生場面」では若年層になるほ

ど数値が高くなる傾向が多少見られるのに対し、「友人場面」では逆に低くなる。これは、「友人場面」では、若年層になるほど方言形「サ」の使用が増えるためである。その結果、両場面間の「ニ」+「エ」の差、すなわち「ニ」+「エ」の場面による使い分けの幅は、高年層46.4%、中年層53.9%、若年層61.8%と、若年層ほど大きくなる。これと連動し、方言形「サ」の場面による使い分けの幅も、高年層47.9%、中年層60.0%、若年層66.7%と、若年層ほど大きくなる。つまり、場面による方言と共通語の使い分けは、若年層になるほど顕著になる。

共通語形の「ニ」と「エ」の関係について、数値の高い「先生場面」で見ると、先に見た「どこへ」の場合と同様、「ニ」は若年層>中年層>高年層、「エ」は高年層>中年層>若年層と逆になっている。つまり、「先生場面」では、若年層ほど「ニ」を、逆に高年層ほど「エ」をそれぞれ用いる傾向が見られる。

問いかけの「どこへ」と比較して違いが認められるのは、「エ」と「ニ」の関係である。返答の「学校に」では、「エ」よりも「ニ」の方が優勢となる傾向がどの年齢層にも見られる。この傾向は、男女別に見た場合も同様であった。性別・年齢層に関わらず、動作の帰着点が明確である場合は「ニ」が、移動の方向をいわば漠然と示す場合は「エ」がそれぞれ用いられやすいのかもしれない。

4.2.2. 原因・理由の接続助詞－「カラ・ノデ」「サケ・ハケ」－

次に、原因・理由を表す接続助詞の使い分けについて同様に見てみよう。

〔性差〕

図11によると、「先生場面」では共通語形の「カラ(ガラ)」「ノデ(ンデ)」の数値が男女とも高いのに対し、「友人場面」では「サケ(サゲ)」「ハケ(ハゲ)」を中心とする方言形の数値が高い。上位場面では共通語形、下位場面では方言形という使い分けが男女ともに見られる。特に「ノデ」の使用は、男女ともほぼ「先生場面」に限定されており、上位場面を特徴付ける形式となっている。

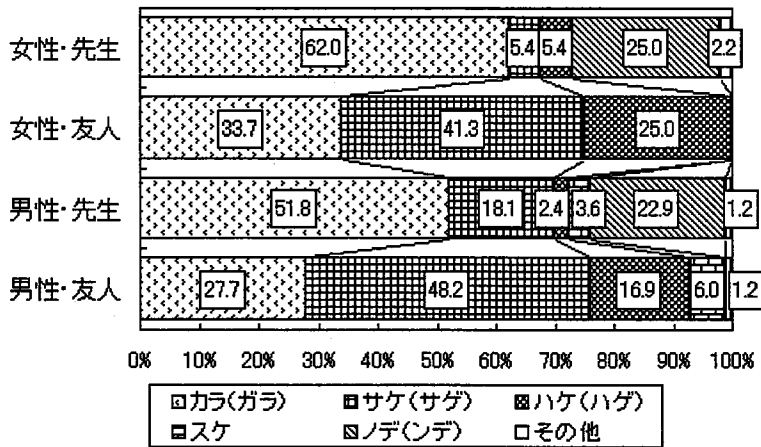


図11 「すぐ行くから」の原因・理由の接続助詞の使い分け－性差－

このように、基本的な使い分けのあり方は男女で同じだが、多少異なる部分もある。「スケ」も含む方言形を合計した数値を見ると、「友人場面」では男性71.1%，女性66.3%で男女差は小さいが、「先生場面」では男性24.1%，女性10.8%であり、男性の方が数値が高くなる。これに対し共通語形「カラ(ガラ)」は、両場面とも女性の方が2～3割数値が高い。つまり、女性は男性よりも共通語志向が強いのに対し、男性は女性よりも方言志向が強いと言える。

【年齢差】

図12によると、上位場面では共通語形、下位場面では方言形という使い分けがどの年齢層にも認められる。「ノデ」が「先生場面」にほぼ限定されるのも全ての年齢層に共通する。

このように、基本的な使い分けのあり方は全ての年齢層で共通だが、多少異なる部分もある。方言形を合計した数値を見ると、「先生場面」では全体として低いものの、**高年齢層 > 中年層 > 若年齢層**となっており、方言形の使用は若年齢層になるほど少なくなる。ただし「友人場面」では、**中年層 > 若年齢層 > 高年齢層**と中年層が最も高い。

これに対し共通語形は、「カラ(ガラ)」と「ノデ(ンデ)」で異なる傾向を示す。両語形とも一定以上の数値を持つ「先生場面」を見ると、「カラ(ガラ)」は**高年齢層 > 中年層 > 若年齢層**であるのに対し、「ノデ(ン

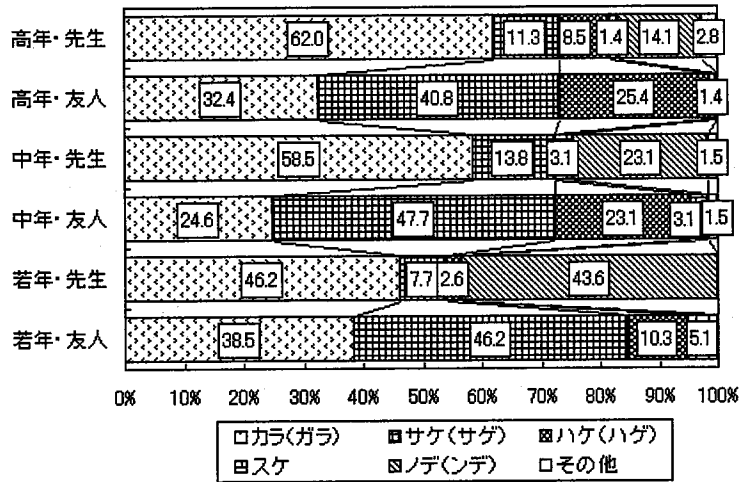


図12「すぐ行くから」の原因・理由の接続助詞の使い分け一年齢差一

デ)」は **若年層 > 中年層 > 高年層** と逆になる。とりわけ「ノデ(ンデ)」は年齢差が著しい。これにより、高年層では、方言形と対立する共通語形は主として「カラ(ガラ)」であるのに対し、若年層ではこれに「ノデ(ンデ)」が加わる。「先生」は「年配の先生」という設定であるので、回答者との年齢差の違いが要因として働いているのかもしれない。あるいは、上位場面における共通語形が、当地本来の「カラ(ガラ)」から、改まりの度合いがより高い「ノデ(ンデ)」に現在置き換えられつつありそれが年齢差に反映している可能性も考えられる。

4.2.3. 形容詞連用形の語幹「高く(なった)」一

次に、形容詞連用形の語幹「高く(なった)」について見てみよう。

[性差]

図13によると、方言形「タケク系」「タゲク系」の使用者率は男女ともに低いですが、いずれも「先生場面」よりも「友人場面」の方が数値が高くなっており、場面による使い分けが男女ともに認められる。方言形の数値を男女で比較すると、両場面とも、女性よりも男性の方が高い。特に「友人場面」での男性の数値は14.5%に達する。こうした方言形は、いずれの場面でも、女性よりも男性で用いられる傾向にある。

これに対し共通語形「タカク系」「タガク系」をあわせた数値は、

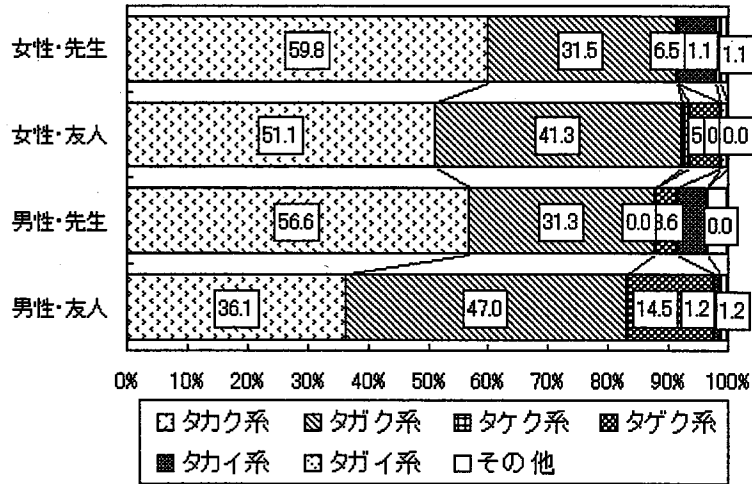


図13 形容詞「高い」の連用形の語幹の使い分け－性差－

男女とも8～9割に達し、男女に関わりなくよく用いている。特に女性は使用者率が極めて高いため、場面による使い分けもほとんど見られない。これに対し男性は、「先生場面」の方が「友人場面」よりも数値がやや高く、場面による使い分けが多少認められる。

場面による使い分けがほとんど認められない女性について、「タカク系」対「タガク系」という対比で見ると、有声化のない「タカク系」は「先生場面」に、有声化のある「タガク系」は「友人場面」に使用が傾き、音声レベルでの方言と共通語の使い分けは認められる。この傾向は男性にも見られ、「友人場面」では「タカク系」よりも「タガク系」の方がむしろ数値が高くなる。

「タカイ(ヨー)(デス){ネー/ノー}」などの回答を含む「タカイ系」は「先生場面」にほぼ限定して用いられているが、男女差は特にない。

[年齢差]

図14によると、高年層と中年層は互いによく似た分布を示すのに対し、若年層の分布はそれらと随分異なる。

高年層と中年層は、方言形「タケク系」「タゲク系」の数値はいずれも非常に低く、共通語形「タカク系」「タガク系」があわせて9割前後を占める。「タカク系」と「タガク系」の場面による使い分け、すなわち音声レベルの使い分けは、顕著ではないがある程度認められる。

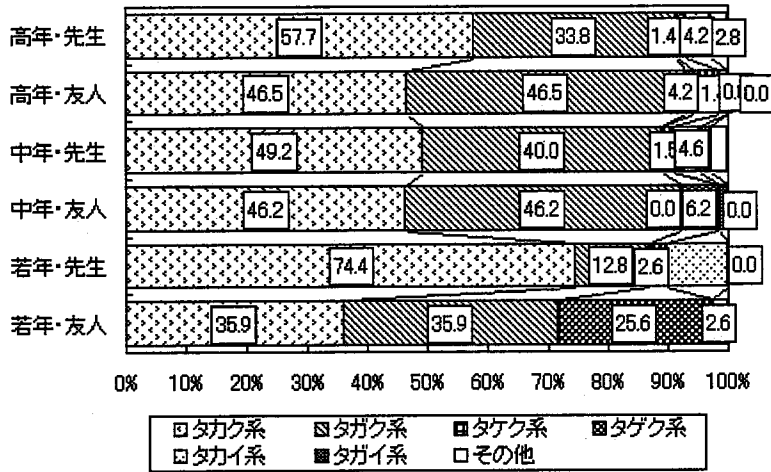


図14 形容詞「高い」の連用形の語幹の使い分け—年齢差—

これに対し若年層は、「友人場面」で「タゲク系」が25.6%見られる。中年層・高年層での使用がまれであることを考えると、若年層の下位場面（「友人場面」）を中心に新しく使われ始めた表現である可能性がある（前年度実施した継続調査でも使用のピークは20代である）。場面性を含め、今後使用がどのように推移するか、継続調査による確認が望まれる。なお、若年層では、「タカク系」と「タガク系」の使い分け、すなわち音声レベルでの使い分けも顕著に認められる。第2章でも有声化現象に使い分けが見られることを報告しているが、そこでは中年層・高年層でも使い分けが明確であった。本項目では、それらの年齢層における音声の使い分けはそれほど明確でない。この違いが何に起因するのかは（例えば体言と用言の違い）今後の課題である。

「タカイ(ヨー)(デス){ネー/ノー}」などの回答を含む「タカイ系」は主として若年層の「先生場面」で用いられており、「友人場面」との使い分けが明確に見られる。方言形と共通語形の使い分けではないが、「先生場面」で「(高く)ナル」という表現を避ける傾向が見られること、つまり先生に対しては断定しない表現を用いる回答者も若年層を中心にある程度見られる点は、待遇表現の使い分けという点で目される。

4.2.4. 過去回想を表す助動詞「ケ」および終助詞「ノ」

(1) 過去回想を表す助動詞「ケ」

最後に、過去回想を表す助動詞「ケ」およびそれに後接する終助詞「ノ」の使い分けについて見てみよう。まず、助動詞「ケ」について検討する。

〔性差〕

図15によると、「先生場面」では共通語形「ツヨカッタ」が男女とも優勢であり全体の6～7割を占める。これに対し「友人場面」では、その数値が大きく減少する。代って数値が伸びてくるのは、女性では「ツヨイ(ッ)ケ」、男性では「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」など方言形「ケ」を含む表現である。「ツエ-ツイ(エ)-」は、「ツヨイ-」の連母音oiが融合しさらに短縮した形と見ることができる(「ツイ(エ)-」の[j]ないしは[i]は、「ツヨイ-」の[j]の残存であろう)。共通語形と方言形の使い分けがなされる点は男女で共通するが、方言形として最もよく使われるのが、女性は連母音が融合しない標準的な語形、男性は融合する非標準的な語形という違いが認められる。発音に関わる男女差は、じつは共通語形にも見られる。「ツヨカッタ」と「ツヨガッタ」を男女で比較すると、両場面とも、「ツヨカッタ」は女性の方が数値が高いのに対し、「ツヨガッタ」は男性の方が数値が高い。基本的な形は共通語形であっても、男性は音声レベルは方言とする回答者が多いのに対し、女性では音声レベルも共通語とする回答者が多い。

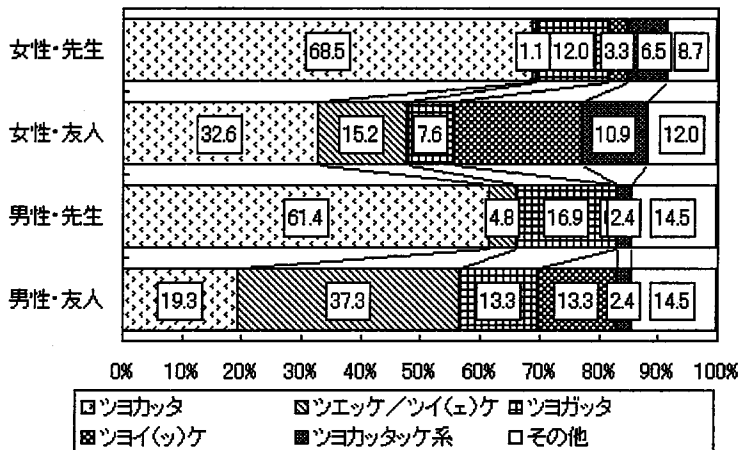


図15 形容詞「強かった」の語形の使い分け—性差—

「タ」と「ケ」が混交した形と考えられる「ツヨカッタツケ系」は数値が低いですが、男女で比較すると女性に、それも「先生場面」よりも「友人場面」で使われやすい傾向が見られる。

【年齢差】

図16によると、「先生場面」では共通語形の「ツヨカッタ」がどの年齢層でも優勢であり、半数以上が使用している。特に若年層では、数値が8割近くにまで達し、非常に一般的な表現となっている。

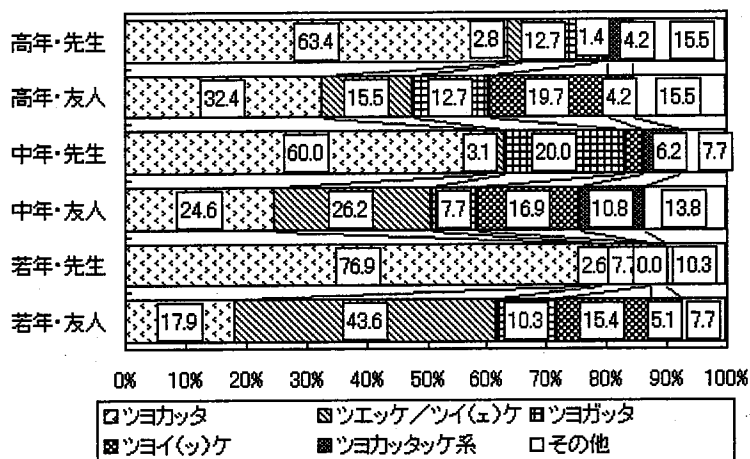


図16 形容詞「強かった」の語形の使い分け—年齢差—

これに対し「友人場面」では、その数値が大きく減少し（特に若年層ではその傾向が著しい）、代って「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」ないしは「ツヨイ(ッ)ケ」など方言形「ケ」を含む表現の数値が増加する。両者を足した数値は、高年層35.2%、中年層43.1%、若年層59.0%であり、「ケ」を含む表現は若年層に向けて増加傾向にある。特に「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」には、年齢層が低くなるほど数値が高くなる傾向が明確に認められ、若年層での数値は4割を超える。「友人場面」における最もポピュラーな表現となっている。逆に「ツヨイ(ッ)ケ」は、どちらかと言えば年齢層が高くなるほど数値も高くなる傾向が見られる。「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」は、「ツヨイ(ッ)ケ」を元の形とすること、また使用者率は若年層に向けて増加しつつあることから考えると、この表現は

下位場面（「友人場面」）を中心に新しく使われ始めた表現である可能性が高い（前年度実施した継続調査でも使用のピークは30代である）。場面性を含め、今後使用がどのように推移するか、継続調査による確認が望まれる。

「ツヨカッタツケ系」は数値が低いが、年齢層で比較すると、中年層での数値が最も高い。「ツヨカッタ」から「ツエツケ/ツイ(エ)ケ」に使用が移行する段階で、中間世代である中年層において、混交形として「友人場面」を中心に一時的に使われた表現である可能性が考えられる。

(2) 終助詞「ノ」

次に、助動詞「ケ」に後接しうる終助詞「ノ」について見てみよう。

[性差]

男性による使用者率を場面別に示すと次のとおりであった（終助詞はいずれも長く伸ばして発音されることの方が普通である）。

先生：「ノ」62.7%、「ネ」25.3%、「ナ」6.0%、終助詞無し他6.0%

友人：「ノ」83.1%、「ネ」3.6%、「ナ」13.3%、終助詞無し0.0%

これに対し女性による使用者率は次のとおりであった。

先生：「ノ」57.6%、「ネ」37.0%、「ナ」1.1%、終助詞無し他4.3%

友人：「ノ」85.9%、「ネ」12.0%、「ナ」0.0%、終助詞無し2.2%

男女とも、場面の違いに関わらず、方言形「ノ」の数値が最も高い。終助詞「ノ」は、場面・性別を問わず、鶴岡市では非常に一般的に用いられる形式である。男女差はほとんど無いといってよいが、場面差については、男女とも「友人場面」の方が数値が一層高い。「ノ」は下位場面において一層用いられやすい形式である。

数値は小さくなるが、「ノ」に次いで用いられるのは共通語形の「ネ」である。男女とも、「友人場面」よりも「先生場面」で数値が高くなる。男女で比較すると、両場面とも女性の方が数値が高い。終助詞「ネ」は、女性が「先生場面」で用いる傾向にある形式と言える。

「ナ」も用いられるが数値は小さい。特に女性による使用は皆無に近く、使うとすればほぼ男性に限定される。その男性も、「先生場面」

では数値が小さい。終助詞「ナ」は、男性が、主として「友人場面」で用いる傾向にある形式と言える。

なお、終助詞の直前には、丁寧語（主として「デス」）が入ることがある。「友人場面」で丁寧語を入れた回答者は男女とも皆無であったが、「先生場面」では、男性51.8%、女性56.5%であった。

〔年齢差〕

高年層による使用者率を場面別に示すと次のとおりであった。

先生：「ノ」62.0%、「ネ」23.9%、「ナ」5.6%、終助詞無し他8.5%

友人：「ノ」80.3%、「ネ」12.7%、「ナ」7.0%、終助詞無し0.0%

また、中年層による使用者率は次のとおりであった。

先生：「ノ」63.1%、「ネ」32.3%、「ナ」3.1%、終助詞無し他1.5%

友人：「ノ」87.7%、「ネ」7.7%、「ナ」3.1%、終助詞無し1.5%

さらに、若年層による使用者率は次のとおりであった。

先生：「ノ」51.3%、「ネ」43.6%、「ナ」0.0%、終助詞無し他5.1%

友人：「ノ」87.2%、「ネ」0.0%、「ナ」10.3%、終助詞無し2.6%

方言形の「ノ」は、どの年齢層でも、場面の違いに関わらず数値が最も高い。「ノ」は、性別のみならず、年齢層にも関わりなく、鶴岡市では非常に一般的に使われる形式であると言える。ただし、両場面を比較すると、どの年齢層でも、「先生場面」よりも「友人場面」の方が数値が高い。下位場面において一層用いられやすい形式と言える。なお、「ノ」の数値の両場面の差は、高年層18.3%、中年層24.6%、若年層35.9%と、若い年齢層になるほど拡大する傾向が見られる。つまり、若年層ほど場面による使い分けが顕著になり、使用は下位場面に傾く。

「ノ」に次いで用いられる形式は共通語の「ネ」である。どの年齢層も、「友人場面」より「先生場面」の方が数値が高い。特に若年層の「先生場面」は数値が半数近くにまで達し、「ノ」と同程度に一般的な表現となっている。興味深いのは、「先生場面」では年齢層が高くなるほど数値も高くなるのに対し、「友人場面」では逆の傾向を示す点である（特に若年層の使用はゼロである）。その結果、両場面の差は、高年層11.2%、中年層24.6%、若年層43.0%と、若い年齢層になるほど拡大する傾向が見られる。つまり、若い年齢層ほど場面による

使い分けが顕著になり、「ネ」の使用は上位場面に傾く。先ほどの「ノ」とあわせて考えると、数値自体は「ネ」よりも「ノ」の方が優勢であるが、若い年齢層になるにつれ、「先生場面」では「ネ」，「友人場面」では「ノ」という使い分けの傾向が顕著になりつつあると言える。

「ナ」の数値はどの年齢層も小さい。ただし、両場面を比較すると、若年層では、「先生場面」0.0%，「友人場面」10.3%と、その差は10.3%あり、他の年齢層よりも大きい。その点は「ノ」と同じ傾向を持つ形式であると言える。

終助詞の直前の丁寧語について見ると、「友人場面」で丁寧語を入れた人はどの年齢層でも皆無であったのに対し、「先生場面」では、高年層43.7%，中年層47.7%，若年層84.6%であった。若年層で数値が高いが、相手として想定させた先生が「年配の先生」であったこと、すなわち回答者との年齢差が大きいものとして想定されたことが要因となっている可能性がある。

5. 継続調査との比較

以上の結果を踏まえ、本節では、これまで鶴岡市で実施してきた継続調査（特に前年度実施した第3回の調査）の結果が、市民の言語生活のどの側面をとらえていたかについて、場面差調査の結果と比較・対照しつつ検討する。

継続調査における文法項目の場面・質問文は表3のとおりである。

表3 第3回調査(継続調査)での質問文と設定場面

	項目	場面	質問文
1	格助詞「エ」「ニ」「サ」(問いかけ)	「友人場面」	親しい友だちに「どこへ行くのか」と尋ねるとしたらどのように言いますか。
2	格助詞「エ」「ニ」「サ」(返答)	「友人場面」	逆に、親しい友だちに「どこへ行くのか」と尋ねられ、「学校へ行く」と答えるときには何とおっしゃいますか。
3	原因・理由の接続助詞	「友人場面」	親しい友達にむかって、「おれも行くから、ちょっと待ってくれ」という時、「行くから」ということをふつう何とおっしゃいますか。
4	形容詞連用形(「高く(なった)」)	「友人場面」	「野菜の値段が高くなった」という時、「高く(なった)」ということをおっしゃいますか。
5	過去回想を表す助動詞「ケ」	「友人場面」	親しい友達にむかって、「あの人はずいぶん強かったなあ」と昔のことを話す時、「強かったなあ」ということをふつう何とおっしゃいますか。

このうち3と4は第1回調査から継続して調査している項目である。それに対し1・2・5は第3回調査で追加した項目である。継続調査では、3の原因・理由の接続助詞に前接する丁寧語の有無は特に問題としていない。また、4の形容詞連用形の語幹「高く(なった)」については、終助詞「ノ」やそれに前接する丁寧語の有無は特に問題としていない。

継続調査で設定された場面は、「親しい友だち」あるいは「ふつう」の場面である。「ふつう」というのは多少あいまいだが、家族や友だちなど気の置けない人とくつろいで話をする場面のことであり、改まりの度合いは「親しい友だち」とほぼ同じである。これらは、場面差調査で言えば「友人場面」に相当する（そこで表では「友人場面」と記した）。つまり、継続調査では、言語生活の中でも下位場面での使用を想定して質問したことになる。場面差調査では、それに加え上位場面（「先生場面」）での使用も質問している。

ここでは、場面差調査の結果と比較しつつ、継続調査では言語生活全般のどの側面をとらえていたかを検証する。ただし、第1章で述べたように、回答者の求め方が継続調査と場面差調査で異なるため、数値の厳密な比較はできないデータであることを付言しておく。

5.1. 格助詞-「エ」「ニ」「サ」-

まず、格助詞の使用状況から見てみよう。相手に問いかける場合（「どこへ」）と、返答する場合（「学校へ」）に分けて検討する。

相手に問いかける場合については図17の結果が得られた。グラフでは、継続調査を「1年目」、場面差調査を「2年目」として区別した。

1年目の結果を2年目の結果と照らしあわせると、グラフの状況は2年目の「友人場面」とほぼ同じであることが分かる。これより、継続調査でとらえた結果は、確かにねらいどおり下位場面における状況であることが確認される。

しかしながら、「先生場面」になると方言形「サ」の数値が大幅に減少し、代って共通語形「エ」「ニ」が増加すること、つまり場面が変われば使用状況も変わるという事実はとらえられていなかった。可能性としては、場面が変わっても使用状況に変化がないということもありうるわけで、場面性を付与しない1年目の調査ではそこが不明であっ

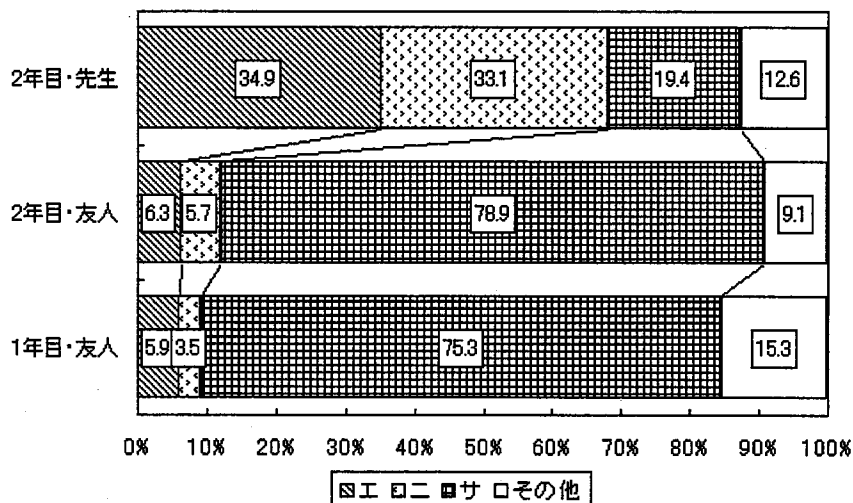


図17 「どこへ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の比較

たのだが、場面差調査によりその点が明らかになった。つまり、格助詞について言えば、継続調査では鶴岡市の使用状況全般ではなく、下位場面での使用をとらえていたことが、今回の場面差調査から確認されたことになる。

次に、相手に返答する場合（「学校へ」）の格助詞の使用を見てみよう。結果は図18のとおりであった。

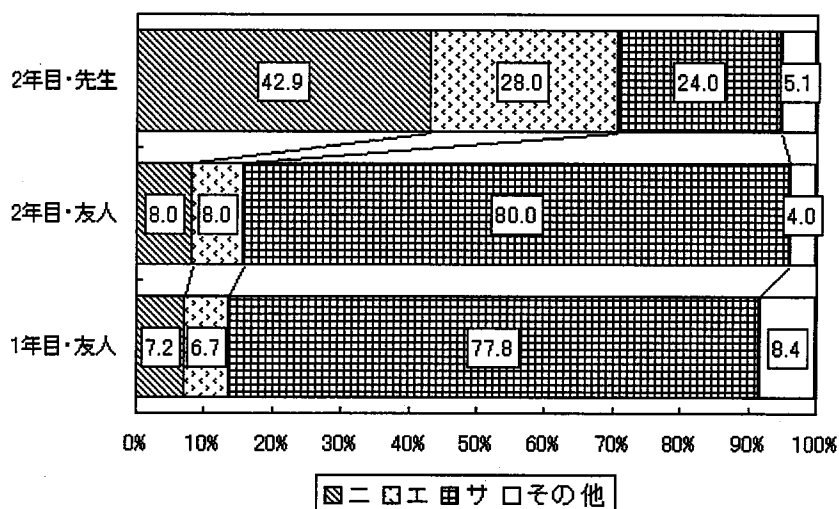


図18 「学校へ」の格助詞「エ」「ニ」「サ」の比較

先ほど見た相手に問いかける場合とよく似た分布傾向を示している。返答する場合の格助詞についても、継続調査では下位場面での使用をとらえていたことが確認される。

5.2. 原因・理由の接続助詞－「カラ・ノデ」「サケ・ハケ」－

原因・理由を表す接続助詞については図19の結果が得られた。

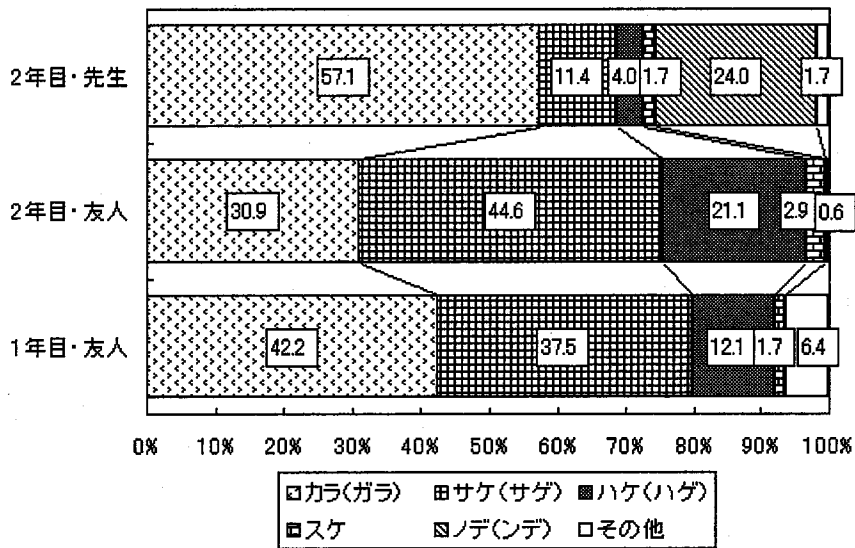


図19 「すぐ行くから」の原因・理由の接続助詞の比較

1年目の調査結果を見ると、主たる方言形である「サケ(サゲ)」と「ハケ(ハゲ)」をあわせた数値は49.6%となり、共通語形の「カラ(ガラ)」を上回る。共通語形よりも方言形の数値が高くなる傾向は、2年目の「友人場面」と共通する。継続調査では下位場面での使用をとらえていたことが確認される。

こうした共通点を持つ一方、2年目の「友人場面」と1年目の「友人場面」を比較すると、2年目は方言形の数値がより高く、逆に1年目は共通語形の数値がより高い傾向が見られる。これは、回答者の求め方の違いに起因するところが小さくないと考えられる。第1章に記したように、1年目の継続調査の回答者は市民から無作為に得たのに対し、2年目の場面差調査の回答者は、1年目の継続調査とパネル調査の回答者

から選んだ。パネル調査からの回答者を含むため、場面差調査の回答者の平均年齢は、継続調査のそれよりも11.7歳高くなる。場面差調査の結果を年齢層別に見ると（図12を参照），若年層では方言形の使用が少なく年齢差が認められる。それを考慮すると，2年目で方言形の数値が高いのは，回答者の年齢構成の違いに起因するものと考えられる。

なお，先に見た格助詞では，1年目と2年目の間にほとんど差がなかった。これは，「友人場面」では若い年齢層ほど方言形「サ」の数値が高くなる傾向が（図10を参照），若い年齢層ほど回答者の比率が小さくなることで打ち消された可能性が考えられる。つまり，もし2年目の調査でも回答者を無作為に選んでいたとすれば，若年層の回答者の割合が増え，その効果により，「サ」の数値は2年目の結果よりも高くなった可能性がある。もしそうであれば，1年目の調査では，方言使用がまだ最大ではないところをとらえていたということになる。

5.3. 形容詞連用形の語幹－「高く(なった)」－

形容詞連用形の語幹については図20の結果が得られた。

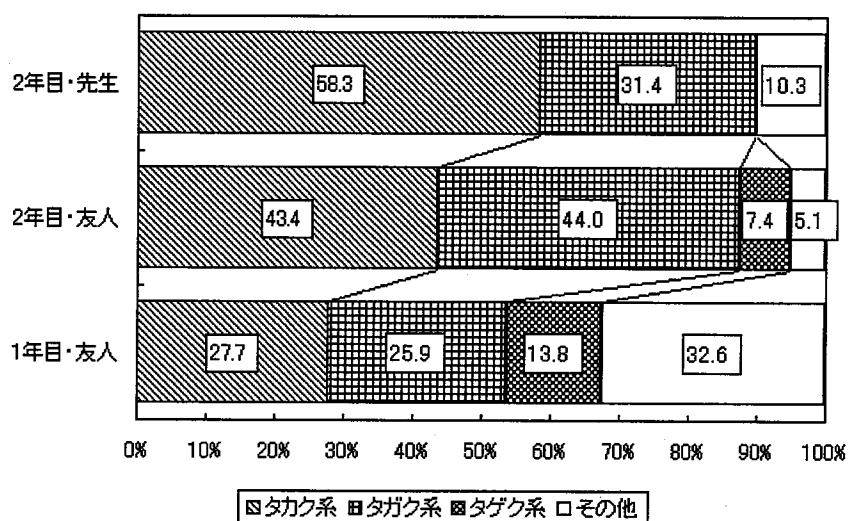


図20 形容詞「高い」の連用形の語幹の比較

1年目では「その他」が32.6%と大きな割合を占めることが，2年目との違いとして大きい。2年目で「その他」の数値が小さいのは，調査後

に録音テープを聴き直して語形を確定し、いずれかの「系」に分類できるケースが大半であったことによる。これに対し1年目の調査データは、調査現場でのチェックのみであった。調査現場で「その他」とされたものの中には、もし聴き直しをしたならば、いずれかの「系」に分類できるものが多く含まれている可能性が高い。

そうした不確実なデータが大きな割合を占めるため、1年目と2年目の比較は単純には行いにくいだが、「その他」を除いた部分を母数として再計算すると次のようになる。

2年目・先生 タカク系65.0 タガク系35.0 タゲク系 0.0

2年目・友人 タカク系45.8 タガク系46.4 タゲク系 7.8

1年目・友人 タカク系41.4 タガク系38.4 タゲク系20.5

1年目の数値の分布は、2年目の「友人場面」に近い傾向を示すものと判断される。ここから、継続調査では下位場面での使用をとらえていたと考えられる。

1年目と2年目の「友人場面」を比較すると、方言形「タゲク系」の数値にやや開きがある。場面差調査の結果を年齢層別に示した図14によれば、「タゲク系」の数値は高年層・中年層では小さいのに対し、若年層では大幅に増加する。ここから考えると、本来であれば、2年目の「友人場面」の「タゲク系」は数値がもっと大きくなるはずのものが、平均年齢が高いために数値が相対的に低下した可能性が考えられる。もしそう考えることができるのであれば、2年目も無作為に回答者を得たならば、「タゲク系」の数値は2年目の結果よりも増加し、1年目の分布により近いものとなった可能性がある。

5.4. 過去回想を表す助動詞「ケ」

最後に、過去回想を表す助動詞「ケ」について見てみよう。

1年目の継続調査の調査票では、「ツヨカッタ」「ツイエケ・ツエケ」「ツヨイケ」の3語形が選択肢と掲げられ、かつ「その他」の回答が実際にはゼロであった。そこで、ここでは、集計の枠組みを図6から少し変更し、2年目については「ツヨカッタ」「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」「ツヨイ(ツ)ケ」を足した数値を母数としてそれぞれの構成比を示し、1年目の結果と比較することにする。厳密に言えば「ツイエケ・ツエケ」

と「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」は語形が異なるが、ほぼ同じであることも確かであるので、互いに比較の対象とする。

結果は図21のとおりであった。グラフの凡例の語形は2年目の調査に従った。

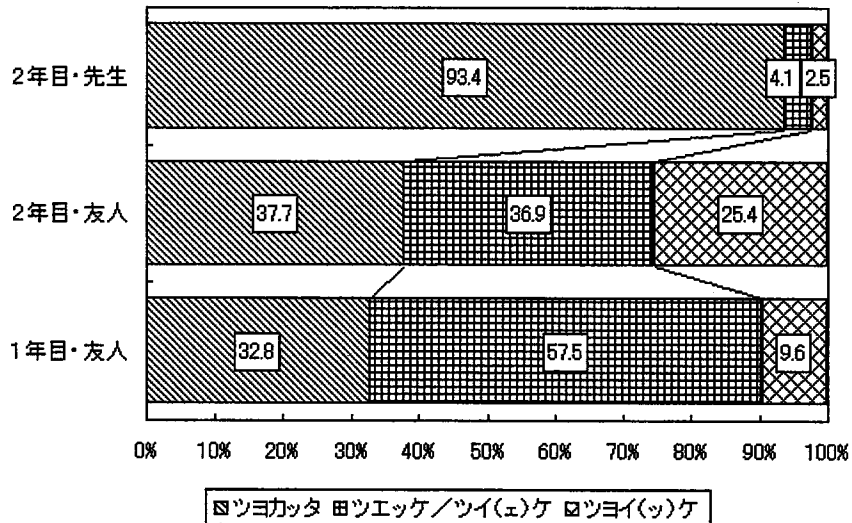


図21 形容詞「強かった」の語形の比較

1年目の数値の分布は、2年目の「先生場面」ではなく「友人場面」と似た傾向を示すものと判断される。ここから、継続調査では下位場面での使用をとらえていたものと考えられる。

方言形の「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」と「ツヨイ(ッ)ケ」をあわせた数値は、1年目の「友人場面」と2年目の「友人場面」はほぼ同じだが、語形間の張り合い関係に差がある。場面差調査の結果を年齢層別に示した図16によれば、「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」は、若い年齢層に向けて増加傾向が明確に認められる。ここから考えると、本来であれば、2年目の「友人場面」の「ツエッケ/ツイ(エ)ケ」は数値がもっと大きくなるはずのものが、平均年齢が高いために数値が相対的に低下した可能性が考えられる。「ツヨイ(ッ)ケ」についてはこれと逆のことが言える。つまり、もし2年目も無作為に回答者を得たならば、2年目と1年目のグラフは、数値がより接近したものとなった可能性がある。

6. 結論と今後の課題

6.1. おもな結論

本章では、おもな方言形で示すならば、格助詞「サ」、接続助詞「サケ／ハケ」、形容詞連用形の語幹「タゲ(高)ク」、過去回想の助動詞「ケ」、終助詞「ノ」といった文法項目について、それぞれに対応する共通語形との使い分けがどのようなものであるかを分析した結果を報告した。

調査項目としたいずれの文法項目についても、上位場面（「先生場面」）では相対的に共通語形に、逆に下位場面（「友人場面」）では相対的に方言形にそれぞれ使用が傾き、場面による使い分けが認められた。また、これまで「親しい友だちに」あるいは「ふつう」という状況設定で調査してきた継続調査の結果は、場面差調査の結果と照らしあわせると、言語生活の中でも下位場面での言語使用をとらえてきたこと、別の言い方をすれば、継続調査ではとらえていなかった共通語形を多くの人を使う場面もじつはあるということも明らかになった。以上が、文法項目に関する主要な結論である。

6.2. 今後の課題

今回の分析では、「先生場面」と「友人場面」を別々に集計し、その結果を比較対照した。つまり、回答者全体として、場面が異なることによりどのような数値的な動きを示すかを見たのである。そうした分析も、基礎的な作業としてももちろん重要だが、両場面で使用される表現の「組みあわせ」という観点からの分析も、場面による使い分けを詳細に分析する上では不可欠である。例えば格助詞「サ」だが、「友人場面」で「サ」を使う人に注目したとき、「先生場面」で「エ」や「ニ」に置き換える人はどれくらいいるのか、逆に「サ」のままで使い分けをしない人はどれくらいいるのか、それには性差や年齢差はあるのかないのか、といった分析である。本章では、「使い分け」の分析と言いながらも、両場面を全体として比較することで「使い分け」を見ようとしたのであり、厳密に言えば「使い分け」そのものを見たわけではない。そうした「使い分け」そのものの分析が、今後の課題として残されている。

また、今回の場面差調査では、使い分けを見るために、改まりの度

合いの両極端と考えられる「先生場面」と「友人場面」の二場面を想定させて回答を求めた。しかし、実際の言語生活には、その中間段階の場面もいろいろとある。さらに、今回の場面差調査では、人的要素を変えることで場面の改まりの度合いを変えたのであるが、人的要素以外の場面的要素が変わることで改まりの度合いが変わるという側面もある。例えば、正式な会議で発言する場面か、それとも休憩時間に雑談をする場面かという違いである。使い分けをより総合的に把握するためには、今後はそうした観点からの調査も必要である。

参考文献

国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告5 地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』秀英出版

国立国語研究所(1974)『国立国語研究所報告52 地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較－』秀英出版

国立国語研究所(1994)『国立国語研究所報告109-1 鶴岡方言の記述的研究－第3次鶴岡調査 報告1－』秀英出版

国立国語研究所(2003)『国立国語研究所報告120 学校の中の敬語2－面接調査編－』三省堂

第6章 敬語の使い分け

朝日祥之

尾崎喜光

1. はじめに

本章では、場面による方言の敬語形式と共通語の敬語形式の使い分けについて分析した結果を報告する。

鶴岡市には、例文1, 2のような方言の敬語形式が存在する。

例文1: どうぞ, 家に入ってクネヘン。

例文2: どうぞ, 家に{ハラヘ/ゴザヘ}。

例文1の「クネヘン」は、待遇表現に深い関わりを持つ授受表現の方言形であり、共通語の「クダサイ」に相当する。また例文2の「ハラヘ」「ゴザヘ」は、共通語の「～ナサル」に相当する方言の尊敬助動詞「サル」の命令形「サレ」が「サエ」>「セ(シェ)」>「ヘ」と変化し、一般動詞「入ル」や尊敬動詞「ゴザル」に接続したものである。

また、次の例文3のように、近しい間柄などでは、動詞の命令形に終助詞「(ッ)チャ」を下接させる表現も見られる。これは共通語の終助詞「ヨ」に相当するものであり、待遇表現に関係する面がある。

例文3: とにかく家に{ハイレ(ッ)チャ/アガレ(ッ)チャ}。

本章では、これらの形式が鶴岡市の言語生活においてどのように用いられているか、場面による方言形と共通語形の使い分けはどのようなものであるかを分析する。以下では、まず第2節で、分析対象とする項目と質問文を示す。続く第3節では全体的な傾向の分析をまず行い、次いで話者の属性（性別・年齢層）との関係からの分析を行う。第4節では本章のまとめを行い、最後の第5節では今後の課題について述べる。

2. 分析対象とする質問項目

敬語項目の質問文は次のとおりである。自宅の玄関の外に立っている人物(後述の6種)に対し、中に入るよう勧めるときの表現を質問した。

回答者からは発話の形(文の形)で回答を得た。調査票のメインク

エスションのすぐ下には語形が掲げられているが、発話回答のうち「入れ」に当たる部分について、調査員がここから選んでチェックした。選択肢が書かれたカード等を回答者に提示して選ばせたわけではない。

501. あなたの家に次のような人が来ました。玄関先（入口）の外に立っています。その人にむかって家の（部屋の）中に入るように勧めるとき、どんなふうに言いますか？

* 主動詞は「ハイル」でも「アガル」でもよい（以下同じ）。

- 1. 近所の顔見知りのお年寄り（70歳くらい）が来たときはどうでしょう？
1. オハイリ（アガリ）クダサイ 2. ハイ（アガ）ツテクダサイ
3. ハイ（アガ）ツテクネヘン 4. ハイ（アガ）ラシテクネヘン
5. ハラ（アガラ）へ 6. ハイレ（アガレ） 7. ハイレヤ（アガレヤ）
8. ハイレ（アガレ）（ッ）チャ 9. ゴザへ 10. その他 []

- 11. 「～クネヘン」「ハラ（アガラ）へ」「ゴザへ」が出ないとき
～クネヘン 1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない
ハラ（アガラ）へ 1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない
ゴザへ 1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない

- 12. 「オ～クダサイ」「～（テ）クダサイ」が出ないとき
オ～クダサイ 1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない
～テクダサイ 1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない

- 2. 世話になっているお医者さん、あるいはお寺のご住職（お寺さん）であったらどうでしょう？

【選択肢および下位質問は501-1と同じ】

- 3. 用事があってたずねてきた、東京から来た見知らぬ人（私のような）であったらどうでしょう？

【選択肢および下位質問は501-1と同じ】

- 4. 近所の人で、顔は知っているけれどもあまり親しくない人が来たときは？

【選択肢および下位質問は501-1と同じ】

- 5. 同年配で、同性の、親しい友達が来たときはどうでしょう？

【選択肢および下位質問は、-51は501-1と同じ】

- 52. 「ハイレ（アガレ）（ッ）チャ」が出ないとき

ハイレ（アガレ）（ッ）チャ

1. この相手に言うことがある 2. この相手には言わない

- 6. 近所の顔見知りの男の子（小学校1年生くらい）が来たときはどうでしょう？

【選択肢および下位質問は501-5と同じ】

3. 分析

3.1. 場面の設定について

分析に入る前に、調査で設定した場面について説明する。

調査では、話し相手として次の6種の相手（6つの場面）を設定した。

- ① 近所の顔見知りのお年寄り（70歳くらい）
- ② 世話になっているお医者さん，あるいはお寺の住職（お寺さん）
- ③ 用事があってたずねてきた，東京から来た見知らぬ人
- ④ 近所の人で，顔は知っているけれどもあまり親しくない人
- ⑤ 同年配で，同性の，親しい友達
- ⑥ 近所の顔見知りの男の子（小学校1年生くらい）

分析では，これら6つの場面による違いを検討するにあたり，それぞれの場面に想定された「場面の改まりの度合い」に基づき，次のようにカジュアルな場面からフォーマルな場面へという序列で並べ替えてグラフで示した。各場面の名称は【 】内のように略称する。

- I. 同年配で，同性の，親しい友達 →【親しい友人】場面
- II. 近所の顔見知りの男の子 →【男の子】場面
- III. 近所の顔見知りのお年寄り（70歳くらい）
→【近所の年寄り】場面
- IV. 近所の人で，顔は知っているけれどもあまり親しくない人
→【近所の知り合い】場面
- V. 世話になっているお医者さん，あるいはお寺の住職（お寺さん）
→【医者】場面
- VI. 用事があってたずねてきた，東京から来た見知らぬ人
→【東京】場面

3.2. 6場面における敬語形式の使用の全体的傾向

3.2.1. メインクエスションの結果

まず，全体的な傾向を把握するために，6場面に現れた表現を少し整理し，それらの使用者率（全回答者175人に対する当該の表現を使用した人の割合）を見てみよう。結果は図1のとおりであった。グラフの上

側ほど改まりの度合いが大きいと考えられる場面，下側ほどそれが小さいと考えられる場面である。凡例の「V」は「動詞」の意味である。

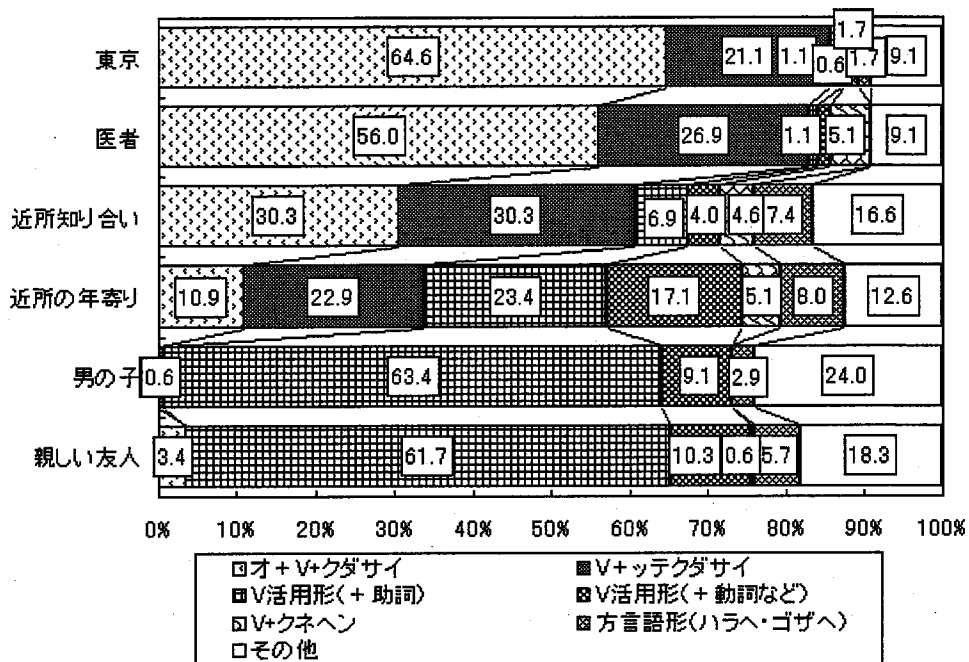


図1 場面ごとに見た敬語形式の使用者率

このグラフから次の3点が指摘できる。

1. 「オ+V+クダサイ」「V+ッテクダサイ」のような共通語形の授受表現「クダサイ」を含む形式は，改まりの度合いが高くなるにつれ使用者率も高くなる。特に【東京】場面における両形式の使用者率は合計85.7%と非常に高い。これに対し【親しい友人】や【男の子】の場面の使用者率は，合せても5%に満たない。
2. 一方，「V活用形(+助詞)」（「ハイレ(+ヤ/+(ッ)チャ）」など動詞の命令形を含む表現）や「V活用形(+動詞など)」（「ハイッテ(イケ)」など動詞の連用形を含む表現）は，改まりの度合いが低くなるにつれ使用者率が高くなる。【男の子】場面や【親しい友人】場面のようなカジュアルな場面では合計70%台となる。これに対し【東京】場面や【医者】場面のようなフォーマルな場面の使用者率は1%台に過ぎない。

3. 方言形の授受表現を下接する「V+クネヘン」や、方言の尊敬助動詞の命令形「へ」を下接する「ハラへ/ゴザへ」といった方言形式の使用者率は全体的に低い。逆に言えば、共通語形の使用者率が全体として優勢である。方言形式の使用者率を場面別ごとに見ると、【男の子】場面や【親しい友人】場面のようなカジュアルな場面よりも、【近所の年寄り】場面や【近所の知り合い】場面や【医者】場面など、地元の高年者や距離を置くべき人物に対する場面で用いられる傾向が見られる。両表現を合せた使用者率は【近所の年寄り】場面で最も高く13.1%となる。

3.2.2. サブクエスションの結果

以上のメインクエスションにおける結果を踏まえ、サブクエスションにより方言形式「クネヘン」「ハラへ/アガラへ」「ゴザへ」、共通語形式「オ〜クダサイ」「〜(テ)クダサイ」、方言の終助詞「〜(ッ)チャ」の使用について質問した結果を次に見てみよう。

上記の質問文に示したように、メインクエスションの回答中に上記の表現が含まれていなかった場合、サブクエスションにより、各設問で設定した相手に対し、当該の表現を自分で「言うことがある」か「言わない」かを二者択一で回答させた。メインクエスションは回答のチャンスが1回だけであり、従って得られる語形も当然いずれか1つに限られるわけだが、さまざまな表現を併用することが普通である現代においては、複数あるうちのいずれか1つがたまたま回答された可能性が十分考えられる。敬語項目では、こうした実際の回答の背後にある別の表現（ただし代表的な表現）の使用についても、サブクエスションにより探ろうとした。

次にそのサブクエスションの回答結果を見て行こう。

(1) 方言形式「クネヘン」「ハラへ」「ゴザへ」

図2は、方言形の「クネヘン」「ハラへ」「ゴザへ」の使用者率（「言うことがある」と回答した人の数値）をまとめて示したものである。質問は、メインクエスションで各表現を使わなかった回答者に対してのみ行ったが、ここで示した数値の母数は、サブクエスションへの回

答者ではなく全回答者（175人）であるので注意されたい。従って、メインクエスションでは使わなかったが、各場面で使おうと思えば使うことのできるいわば“実際”の使用者率は、図1の数値に図2の数値を加えたものとなる。

図2によると、いずれの表現も、【近所の年寄り】場面で数値が最も高くなっていることがわかる。こうした方言形の使用は、高年層に対する場面が中心となっている。

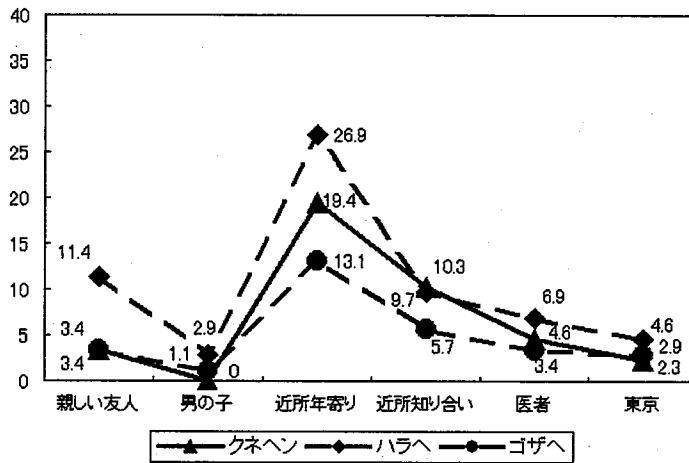


図2 鶴岡方言の敬語形式の使用者率

場面による数値の動きを見ると、「クネヘン」「ゴザヘ」と「ハラヘ」に分けることができそうだ。

「クネヘン」「ゴザヘ」は【近所年寄り】場面で数値が最も高く、これに【近所知り合い】が続く。ここで言う「知り合い」とは、「顔は知っているけれどもあまり親しくない人」のことである。つまり「クネヘン」「ゴザヘ」は、高年層のほか距離を置くべき地元の人物に向けての使用が中心と言える。

これに対し「ハラヘ」は、【近所の年寄り】場面で数値が最も高くなる点は「クネヘン」「ゴザヘ」と同じだが、これに次ぐのは、「クネヘン」「ゴザヘ」では数値が低かった【親しい友人】場面である。つまり「ハラヘ」は、「クネヘン」「ゴザヘ」とやや異なり、高年層のほか距離を置かない地元の人物に向けての使用が中心と言える。

(2) 共通語形式「オ〜クダサイ」「〜(テ)クダサイ」

次に、共通語の敬語形式「オ〜クダサイ」「〜(テ)クダサイ」について見てみよう。図1の凡例では、「オ+V+クダサイ」「V+ッテクダサイ」と表記した表現がそれぞれ該当する。

結果は図3のとおりであった。なお、これらの表現についてのサブクエスションは、【近所の年寄り】【近所知り合い】【医者】【東京】の4場面である。【親しい友人】と【男の子】の2場面は、こうした表現の使用はまれであろうと考えあえて質問しなかった（メインクエスションの結果である図1によれば確かにそうである）。

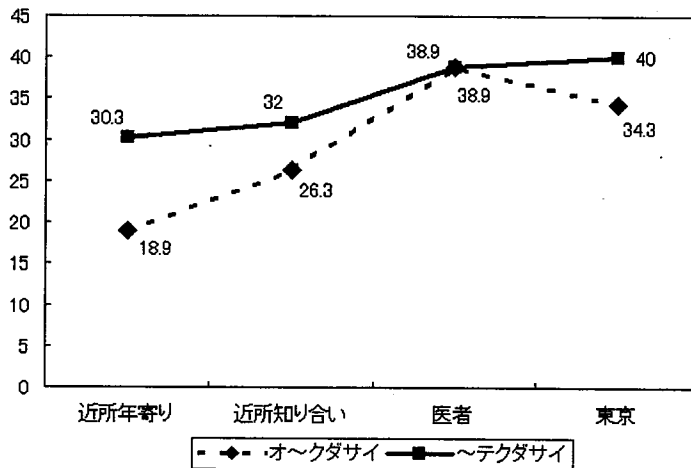


図3 共通語の敬語形式の使用者率

これらの4場面を見ると、両表現の数値はある程度の高さを持っていることが分かる。メインクエスションで使用しなかった回答者も、使用しようと思えばそれが可能な回答者が少なくない。

数値の動きを見ると、改まりの度合いが高い場面ほど数値も高くなっている。サブクエスションにおいても、これらは丁寧さの度合いが高い表現として用いられていることが確認される。

(3) 方言の終助詞「〜(ッ)チャ」

最後に、終助詞「(ッ)チャ」を見てみよう。

この表現は、図1では、「V活用形(+助詞)」と分類したものの一部である。サブクエスションでは、【親しい友人】と【男の子】の2場面についてのみ質問した。結果は図4のとおりであった。

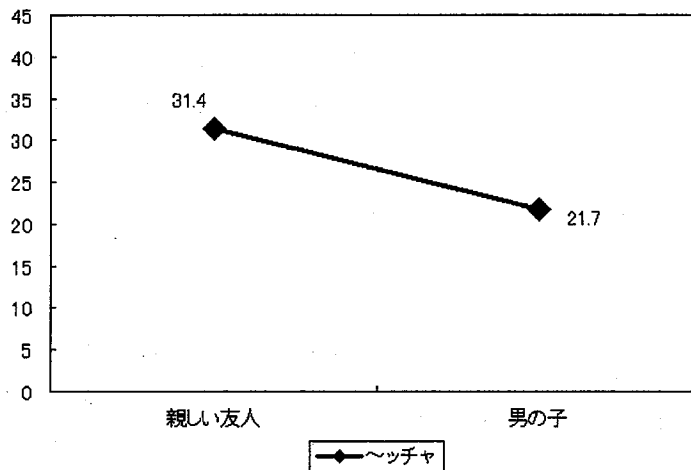


図4 終助詞「(ッ)チャ」の使用者率

「(ッ)チャ」の使用は、【男の子】場面よりも【親しい友人】場面で高くなっている。【親しい友人】というのには、正確には「同年配で、同性の、親しい友達」である。「(ッ)チャ」は、丁寧に遇する必要はないが年齢が離れた年下の相手に対してよりも、気の置けない近しい相手に対して一層用いられる表現である。

3.3. 6場面における敬語形式の使用の属性差

3.3.1. メインクエスションの結果の属性差

本節では、3.2.1.節で示したメインクエスションの結果について、回答者の属性（性別・年齢層）と関連づけてデータを分析する。ただし、ここでは、全ての表現について取り上げることはせず、共通語の敬語形式「オ～クダサイ」「～(テ)クダサイ」（図1ではそれぞれ「オ+V+クダサイ」「V+ッテクダサイ」）と、方言の敬語形式「～クネヘン」（図1では「V+クネヘン」）および「ゴザへ」（図1では「方言語形(ハラへ・ゴザへ）」の一部）の4形式を取り上げることにする。

(1) 共通語形式「オ〜クダサイ」の属性差

まず「オ〜クダサイ」について見てみよう。

男女別に集計した結果が図5、年齢層別に集計した結果が図6である。各グラフには「平均」も参考情報として示したが、各カテゴリーの数値を単純に足して除した数値であるため、図1の数値と多少異なる。

【性差】

まず指摘できるのは、図1と同様、改まりの度合いが高くなるほど使用者率が高くなる傾向が男女ともに明確に認められる点である。

男女で比較すると、全体的に女性の方が男性よりも数値が高めである。男性よりも女性の方が、共通語の「オ〜クダサイ」を志向している傾向がうかがえる。男女の差を見ると、【親しい友人】や【男の子】の場面では、男女ともに使用がゼロに近いため男女差も当然認められない。これに対し【医者】場面は男女差が24.2%、同様に【東京】場面は14.1%と、男女差が大きい。改まりの度合いが高い場面では男女差も大きくなる傾向が認められる。

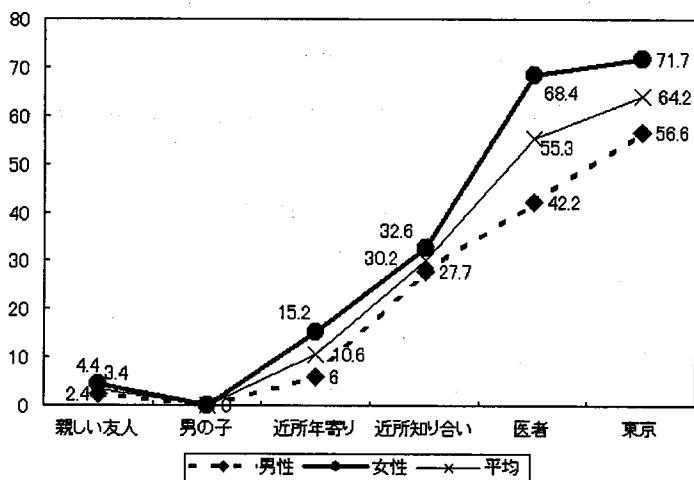


図5 6場面における「オ〜クダサイ」の使用者率－性差－

【年齢差】

次に年齢差を見てみよう。図6によると、改まりの度合いが高くなるにつれ、どの年齢層も使用者率が高くなる。3本の線は大きくかけ離れ

ることもなく、年齢層による顕著な差は認められない。特に【親しい友人】や【男の子】のようなカジュアルな場面では、どの年齢層も数値がきわめて低く、従って年齢差もほとんど見られない。

一方、改まりの度合いが高い場面では、ある程度の年齢差が認められる。【医者】や【東京】の場面では、若年層の数値が高年層や中年層と比べ10%以上低い。こうした場面で「オ～クダサイ」という非常に丁寧な共通語形を用いるのは、若年層よりも中年層・高年層に相対的に多い。

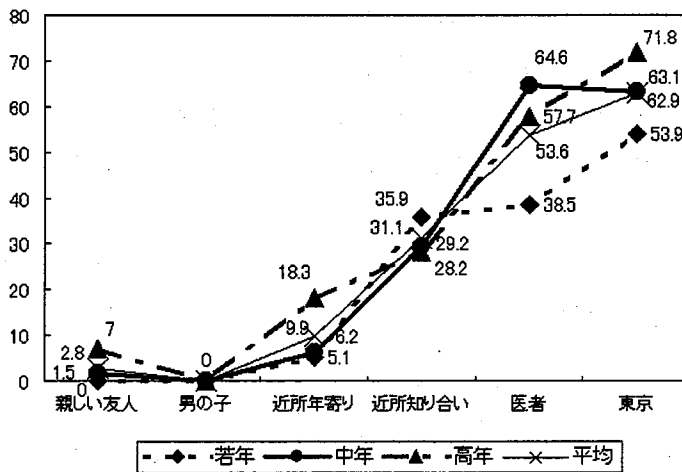


図6 6場面における「オ～クダサイ」の使用者率－年齢差－

(2) 共通語形式「～(テ)クダサイ」の属性差

次に、「オ～クダサイ」から接頭辞「オ」を除き丁寧さの度合いが少し低くなった「～(テ)クダサイ」について見てみよう。男女別に集計した結果が図7-a、年齢層別に集計した結果が図8-aである。

【性差】

図7-aによると、全体的に男女差はあまりない。ただ、【医者】場面でのみ、男性は女性の数値を大きく上まわる。これは、先に見た「オ～クダサイ」が、男性よりも女性に多かったことと関係する(図5)。つまり、「オ～クダサイ」と「～(テ)クダサイ」の関係ということで見ると、【医者】場面ではある程度男女差があり、女性は相対的により

丁寧な「オ〜クダサイ」に、男性はそれよりも丁寧さが落ちる「〜(テ)クダサイ」に傾くと言える。

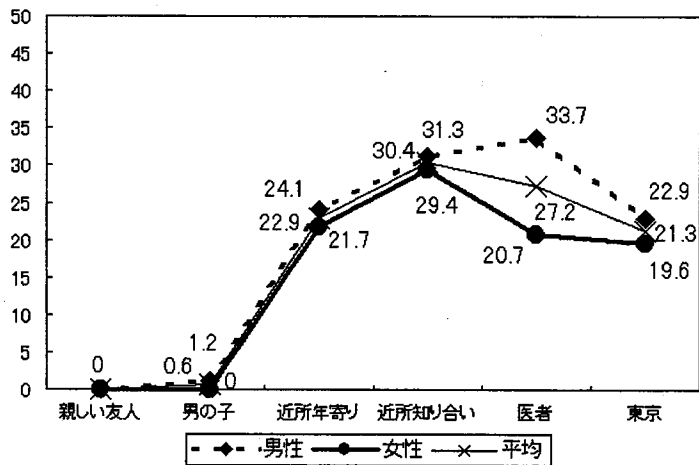


図7-a 6場面における「〜(テ)クダサイ」の使用者率－性差－

ここで、「オ〜クダサイ」と「〜(テ)クダサイ」の関係を改めて見てみよう。「オ〜クダサイ」の数値から「〜(テ)クダサイ」の数値を差し引いた数値を場面別・男女別に示すと図7-bのようになる。数値がプラスの場合は「オ〜クダサイ」を志向することを、マイナスの場合は「〜(テ)クダサイ」を志向することをそれぞれ示している。数値の絶対値は、両表現の差の度合いを示している。

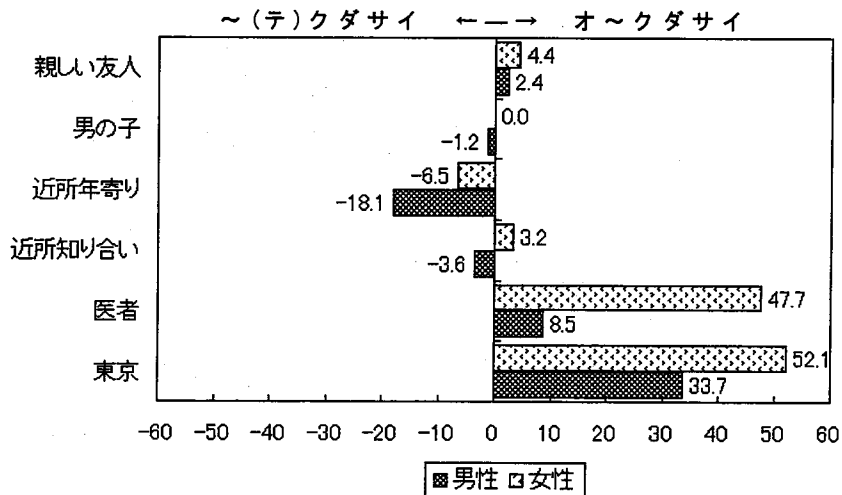


図7-b 「オ〜クダサイ」と「〜(テ)クダサイ」の使用者率の差－性差－

全体として、【医者】と【東京】の場面では「オ〜クダサイ」に、逆に【近所年寄り】場面では「〜(テ)クダサイ」に傾く。これに対し【親しい友人】【男の子】【近所知り合い】の各場面では、男女とも絶対値は小さく、いずれかの表現への片寄りはいささか小さい。【親しい友人】と【男の子】の場面は両表現の使用率自体が極めて低いためそれは当然であるが、使用率がともにある程度見られる【近所知り合い】でこの数値が低いのは注目される。こうした相手に対しては、どちらも同程度に用いられている。

男女で比べると、「オ〜クダサイ」への傾きは、男性は【東京】場面で、女は【医者】場面と【東京】場面でそれぞれ大きい。【医者】場面は、女性は「オ〜クダサイ」、男性は「オ〜クダサイ」と「〜(テ)クダサイ」の両方という形での違いが大きな場面と言える。

【近所年寄り】場面は数値がマイナスに傾き、特に男性の数値はやや大きい。こうした相手に対しては、男性を中心に、丁寧度がやや落ちる「〜(テ)クダサイ」の方に使用が傾く。

【年齢差】

次に、年齢差について見てみよう。

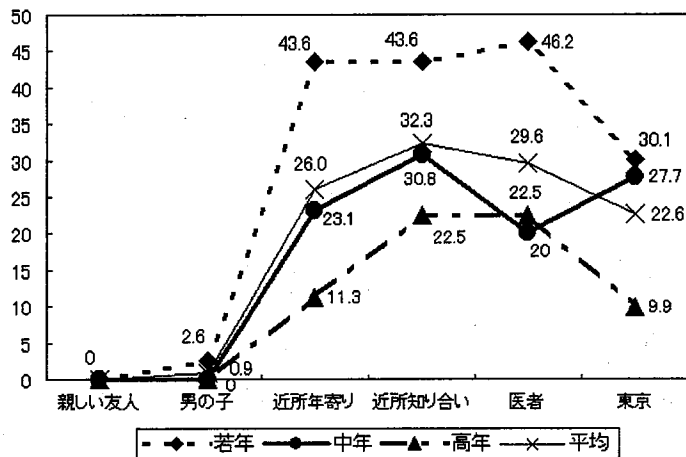


図8-a 6場面における「〜(テ)クダサイ」の使用率—年齢差—

まず平均値を見ると、図1と同様、カジュアルな場面では「～(テ)クダサイ」はほとんど用いられないが、改まりの度合いが高くなるにつれ使用者率も高くなる傾向が改めて確認される。

年齢層別に見ると、【親しい友人】と【男の子】の場面はどの年齢層も数値が非常に低く年齢差も認められないが、【近所年寄り】よりも改まった場面では、年齢層が低くなるほど数値が高くなる傾向が見られる。丁寧さの度合いが相対的に低い共通語の「～(テ)クダサイ」は、それが使える場面では、若年層ほど使う人が多い。なお、【医者】場面では、中年層は高年層よりも数値が低くなる。中年層は、こうした場面では「オ～クダサイ」を用いる人が多いためである（図6）。

その「オ～クダサイ」から「～(テ)クダサイ」を差し引いた数値を場面別・年齢層別に示すと図8-bのとおりである。プラスの数値が高いほど「オ～クダサイ」への志向が強い。

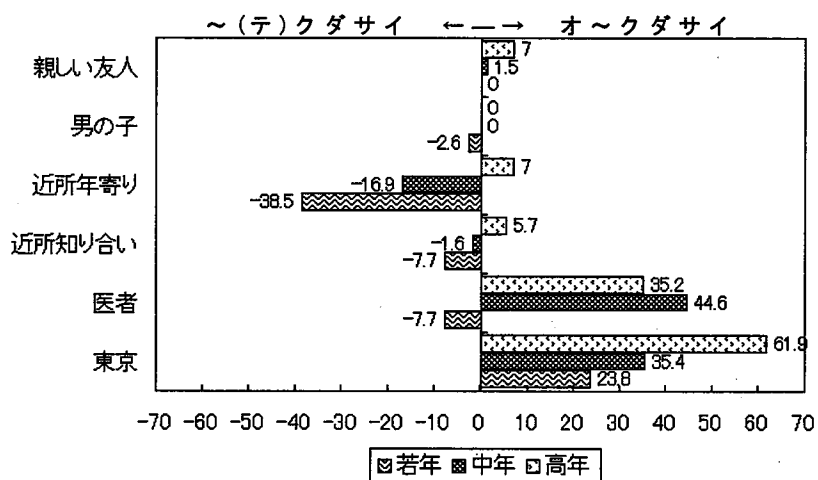


図8-b 「オ～クダサイ」と「～(テ)クダサイ」の使用者率の差－年齢差－

先ほどの男女別のグラフと同様、全体として、【医者】と【東京】の場面では「オ～クダサイ」に、【近所年寄り】場面では「～(テ)クダサイ」に傾く。【近所知り合い】場面はその中間となり、いずれかの表現への大きな片寄りはない。

年齢層による違いに注目すると、【東京】場面では年齢層が高くなるほど数値が高くなる。【東京】場面における「オ～クダサイ」への

志向は、年齢層が高くなるほど強い。これと関連し、【近所年寄り】場面では、年齢層が低くなるほど「～(テ)クダサイ」への志向が強い。

【医者】場面は、全体としては「オ～クダサイ」に傾くが、【東京】場面と異なり、高年層ではなく中年層で数値が最も高い。また、若年層は「オ～クダサイ」よりもむしろ「～(テ)クダサイ」に傾く点が【東京】場面と異なる。

(3) 「V活用形(+助詞)」(動詞の命令形)の属性差

次に、授受表現の補助動詞「クダサル」を後接しない「V活用形(+助詞)」(動詞の命令形で「ハイレ(+ヤ/+(ッ)チャ)」などの表現)について、性差・年齢差を見てみよう。男女別に集計した結果が図9-a、年齢層別に集計した結果が図10-aである。

【性差】

図9-aによると、図1と同様、【親しい友人】や【男の子】の場面向けて数値が高くなることが改めて確認される。先ほどの「オ～クダサイ」「～(テ)クダサイ」とちょうど補い合うような分布である。

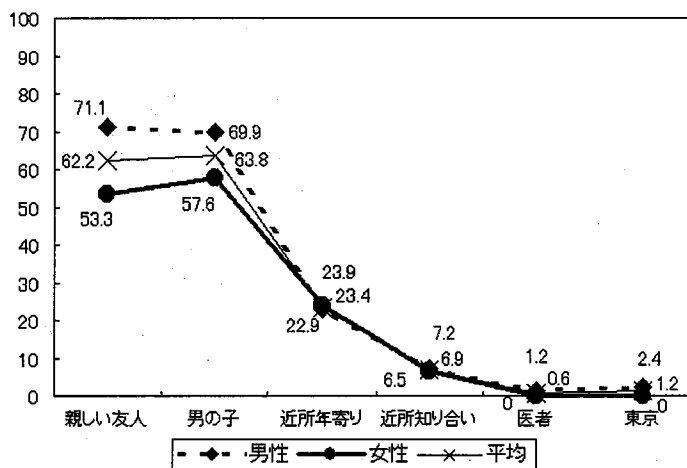


図9-a 6場面における「V活用形(+助詞)」の使用率—性差—

数値が低い【近所年寄り】から【東京】までの場面では男女差はほとんど見られないが、【親しい友人】【男の子】の場面では、顕著な差ではないものの、男性の方が女性よりも数値が高くなる傾向が見ら

れる。こうした相手に対し「ハイレ(+ヤ/+ツ)チャ)」のような丁寧度の低い表現を用いるのは、どちらかと言えば男性に多い。

ここで、丁寧さの度合いが非常に高い共通語の「オ〜クダサイ」から、それがかなり低い「V活用形(+助詞)」を差し引いた数値を場面別・性別に示すと図9-bのようになる。プラスの数値が高いほど「オ〜クダサイ」に、マイナスの数値が高いほど「ハイレ(+ヤ/+ツ)チャ)」のような「V活用形(+助詞)」に傾くことを示す。

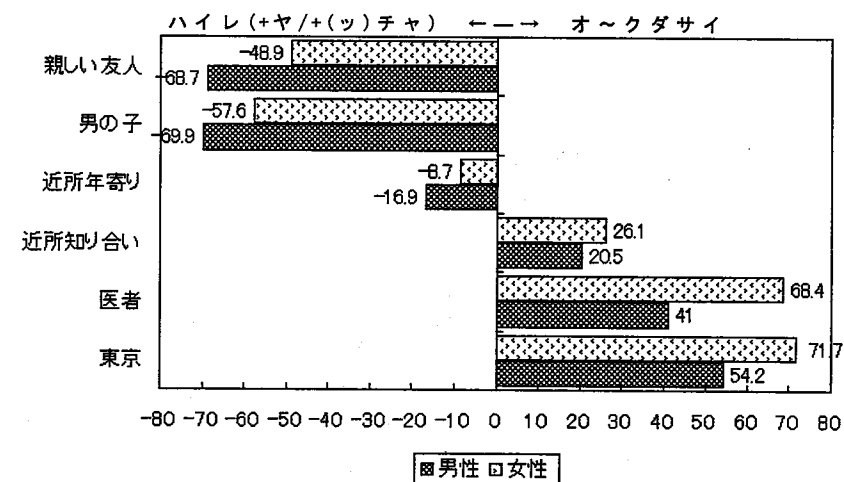


図9-b 「オ〜クダサイ」と「V活用形(+助詞)」の使用者率の差—性差—

全体として、【親しい友人】【男の子】【近所年寄り】の各場面では「V活用形(+助詞)」に、【近所知り合い】【医者】【東京】の各場面では「オ〜クダサイ」に傾く。「V活用形(+助詞)」への志向は特に【親しい友人】と【男の子】の場面で強く、逆に「オ〜クダサイ」への志向は特に【医者】と【東京】の場面で強い。これに対し、【近所年寄り】はどちらかと言えば「V活用形(+助詞)」に、【近所知り合い】はどちらかと言えば「オ〜クダサイ」に傾く程度である。

男女差という観点からグラフを見ると、全ての場面で女性の方が男性よりも数値が高い。つまり、「オ〜クダサイ」か「V活用形(+助詞)」かという対比で見ると、女性は男性よりも「オ〜クダサイ」に傾く度合いが強い、逆に男性は女性よりも「V活用形(+助詞)」に傾く度合いが強い。特に【医者】場面では、そうした男女差が顕著となる。

【年齢差】

図10-aにより年齢層別に見てみると、【親しい友人】や【男の子】の場面で数値が高くなるのがここでもまず確認される。

数値が低い【近所知り合い】から【東京】までの場面では年齢差はあまり見られないが、平均値が最も高い【親しい友人】場面では年齢差も大きい。若い年齢層ほど数値が高くなり、特に若年層では「ハイレ(+ヤ/+ッ)チャ)」のような表現を用いる回答者は9割近くに達する。

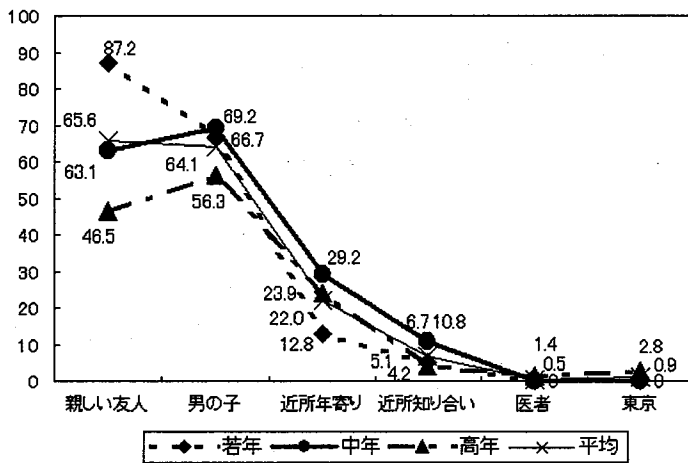


図10-a 6場面における「V活用形(+助詞)」の使用者率—年齢差—

これに比べると年齢差の度合いは小さいが、【男の子】と【近所年寄り】の場面でも年齢差が多少認められる。ただし、若年層は他の年齢層よりも数値が低くなる傾向が見られ、その結果これらの場面で最も数値が高いのはむしろ中年層となる。

ここで、「オ〜クダサイ」から「V活用形(+助詞)」を差し引いた数値を場面別・年齢層別に示すと図10-bのとおりである。

全体として、男女別に見た場合と同様の傾向がここでも確認される。

年齢差という観点からグラフを見ると、【東京】場面では年齢層が高くなるほど「オ〜クダサイ」への傾きが強くなる。これに関連し、【親しい友人】場面では、年齢層が低くなるほど「V活用形(+助詞)」への傾きが強くなる。

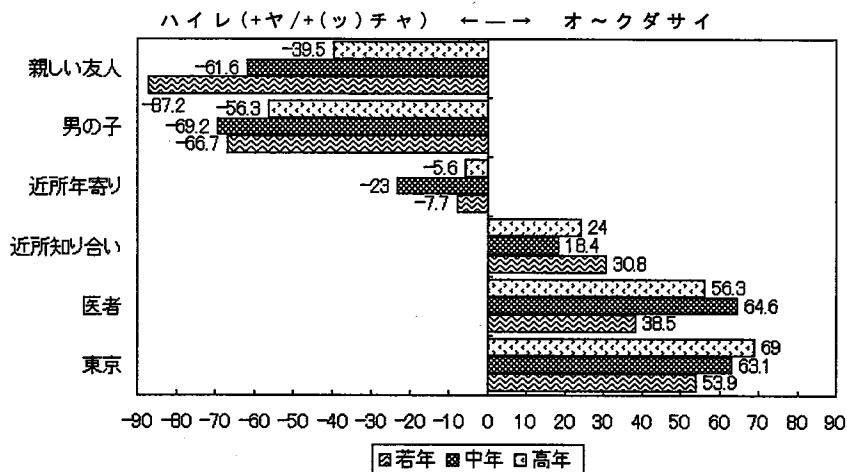


図10-b 「オ〜クダサイ」と「V活用形(+助詞)」の使用者率の差—年齢差—

それに対し【男の子】【近所年寄り】【近所知り合い】の各場面では、中年層が他の年齢層よりも数値が低く、「V活用形(+助詞)」への傾きが強い。しかしこの中年層は、【医者】場面では、他の年齢層よりもむしろ「オ〜クダサイ」への傾きが強い。

(4) 方言形式「クネヘン」の属性差

次に、方言の授受表現「クネヘン」を後接した形式の使用について、性差・年齢差を見てみよう。男女別に集計した結果が図11、年齢層別に集計した結果が図12である。

【性差】

図1ですでに確認したことであるが、全体的に使用者率が低いことがここでもまず確認される。特に【親しい友人】や【男の子】の場面では、授受表現であり依頼の形をとるため、使用はほぼゼロに近い。使う場合は、【近所年寄り】【近所知り合い】【医者】といった地元で距離を置くべき人物に対してが中心となる。

男女差も全体的にあまり見られないが、【近所知り合い】場面では女性よりも男性の方が数値が高くなり、比較的明確な形で男女差が見られる。

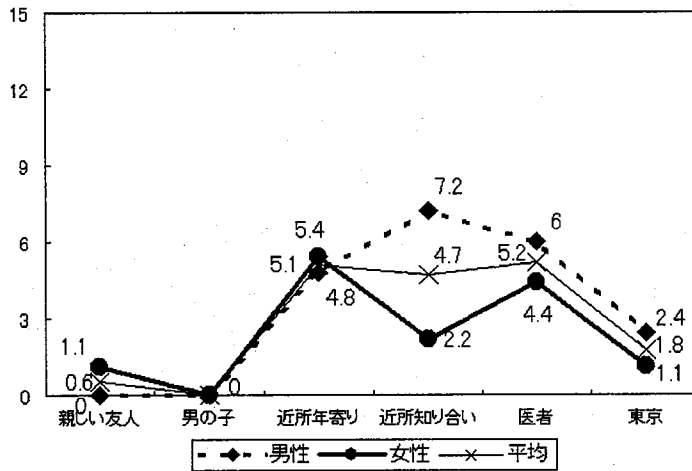


図11 6場面における「クネヘン」の使用者率－性差－

【年齢差】

次に、図12により年齢層別に見てみよう。

ここでも【親しい友人】や【男の子】の場面では、どの年齢層も数値はほぼゼロに近い。

それ以外の場面では、小さな数値の範囲内でのことではあるが、年齢差がある程度認められる。

まず、若年層は、どの場面であっても数値はほぼゼロである点が注目される。つまり、そもそも使うか否かというレベルで、若年層対中年層・高年層という違いが認められる。

これに対し高年層と中年層では、まだ多少使用が認められる。両年齢層を比べると、【近所年寄り】と【近所知り合い】の場面では高年層よりも中年層の方が高い。これが【医者】場面になると、高年層の数値が上昇し、逆に中年層の数値が下降するため、数値はほぼ同じになる。この結果、使用場面のピークは、中年層は【近所年寄り】場面、高年層は【医者】場面となる。つまり「クネヘン」は、高年層にとっては単純に丁寧な地元の表現であるのに対し、中年層にとっては丁寧度が相対的に下がり、むしろ年配者と接する際に使う地元の表現となっているようだ。用法面での位置づけが、両年齢層で異なっているようである。

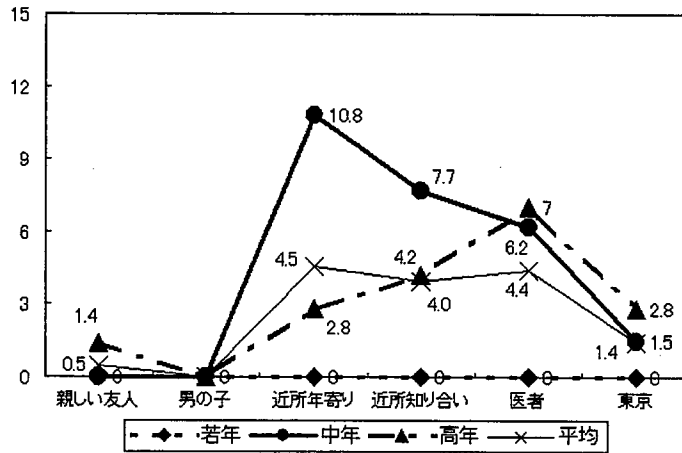


図12 6場面における「～クネヘン」の使用意識－年齢差－

3.3.2. サブクエスションの結果の属性差

以上、メインクエスションの結果について、回答者の属性と関連づけて分析した。

次に、メインクエスションの回答に特定の表現が現れなかった回答者に対し、各場面での当該の表現の使用・不使用をサブクエスションとして質問した結果について、回答者の属性と関連づけて見ていこう。

(1) 方言形式「クネヘン」の属性差

【性差】

男女別に集計した結果は図13のとおりである。顕著な男女差は認められない。メインクエスションの結果を男女別に示した図11と比較すると、図13では【近所年寄り】場面に多少男女差が見られ、男性の方が女性よりも多少数値が高くなる。【近所知り合い】場面は、男女の数値が図11と逆転する。

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図14のとおりである。若年層は、メインクエスションではどの場面でも使用はほぼゼロであったが（図12）、サブクエスションでは【近所年寄り】場面で1割ほどの使用が見られる。いわば手持ちの表現として、使おうと思えば使えるという若年層の回

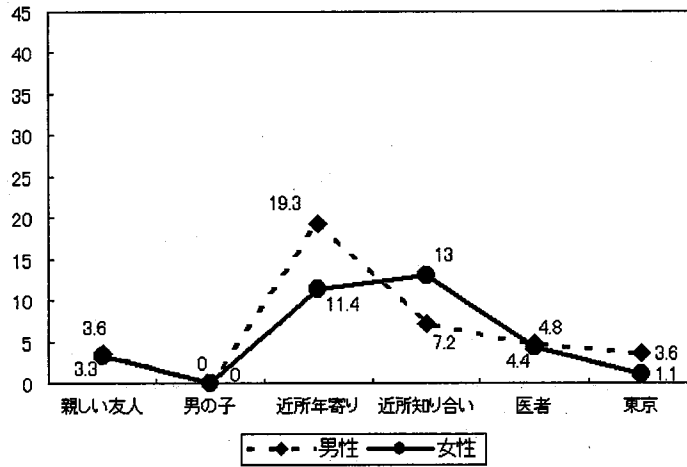


図13 6場面における「~クネヘン」の使用意識 - 性差 -

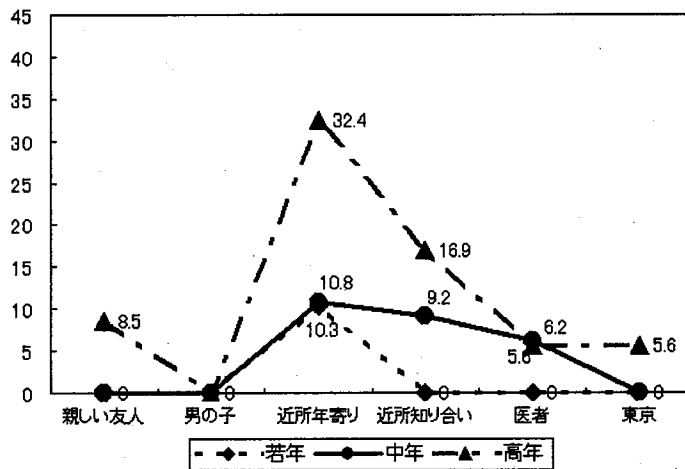


図14 6場面における「~クネヘン」の使用意識 - 年齢差 -

答者も多少はいる。

その【近所年寄り】場面では年齢差が明確に認められ、高年層は3割の回答者が使用している。高年層がこの場面で数値が高くなる傾向はメインクエスションでも認められた。合わせると使用者率は4割となる。鶴岡市全体としては「クネヘン」の使用者率は少ないものの、高年層では【近所年寄り】場面を中心に、まだある程度普通の表現として用いられている。

(2) 方言形式「ハラへ」の属性差

【性差】

男女別に集計した結果は図15のとおりである。メインクエストでの使用者率は、「ゴザへ」と合わせた数値が最も高い【近所年寄り】場面であっても8.0%と非常に低かったが（図1の「方言語形(ハラへ・ゴザへ)」を参照）、サブクエストでは、この場面の数値は2～3割に達する。このような場面であれば、使おうと思えば使える人という人も一定の割合はいることが確認される。

男女差という観点から見ると、顕著な差ではないが、数値が他の場面よりも相対的に高い【近所年寄り】と【親しい友人】の場面では、女性の方が男性よりも数値が高い。この「へ」は、尊敬助動詞の命令形であり、共通語の「ナサイ」に相当する表現である。この地域の一般的な音声変化に従い「サレ」>「サエ」>「セ(シエ)」>「へ」と語形を変えたものである。こうした尊敬語の表現の使用は、男性よりも女性に傾く。

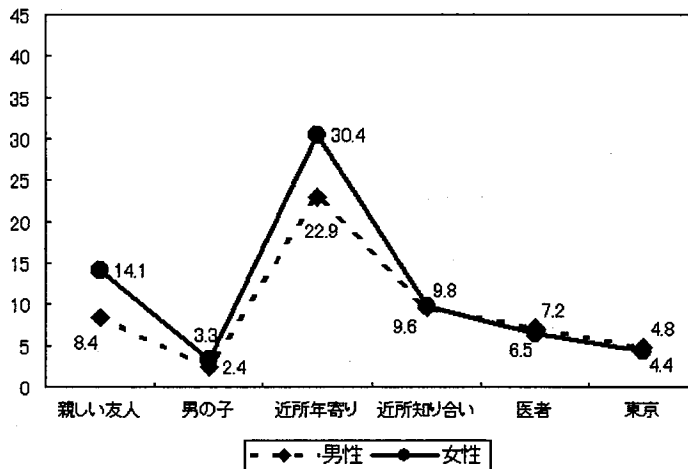


図15 6場面における「ハラへ」の使用意識－性差－

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図16のとおりである。図15と同様、ここでも【近所年寄り】場面では数値が高くなり、その傾向はどの年齢層にも共通して見られる。特に高年層の数値は4割に達し、こうした相手

に対してであれば、使おうと思えば使える人がかなりいることが確認される。若年層は全般的に数値が低い、この場面であれば使用者率が1割ほど見られる。

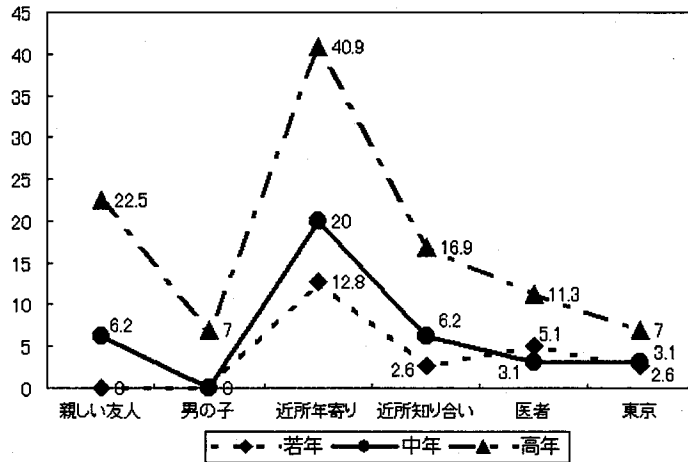


図16 6場面における「ハラヘ」の使用意識—年齢差—

年齢層による違いも見られ、全般的に高年齢層対中年層・若年層という対立で、高年齢層が他よりも数値が高い傾向にある。「ハラヘ」は主として高い年齢層が使う表現であると言える。

(3) 方言形式「ゴザヘ」の属性差

次に、「ハラヘ」と同様に尊敬助動詞「ヘ」を持つが、主動詞の部分も尊敬語「ゴザル」とした「ゴザヘ」を見てみよう。「ハラヘ」が共通語の「入りナサイ」に相当するのに対し、「ゴザヘ」は「オ入りニナリナサイ」に相当する。

【性差】

男女別に集計した結果は図17のとおりである。メインクエスションでの使用者率は、「ハラヘ」と合わせた数値が最も高い【近所年寄り】場面でも8.0%と非常に低かった(図1参照)。サブクエスションでも、先に見た「ハラヘ」以上に数値が低く、使用は全般的に低調である。ただし、場面による違いは多少あり、「ハラヘ」と同様、【近所年寄

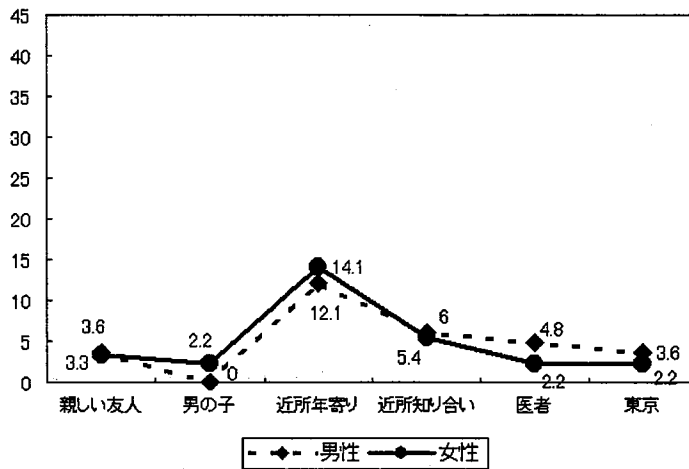


図17 6場面における「ゴザへ」の使用意識－性差－

り】場面で他よりも数値が高くなる。つまり、方言形の尊敬表現の使用は【近所年寄り】場面が中心であると言える。

「ハラへ」は【親しい友人】場面でもある程度数値が高かったが、「ゴザへ」はそうではない。相手が地元の人とはいえ、友人に対しては丁寧すぎる表現であるためと考えられる。

男女差は、このグラフで見る限りほとんどないと言ってよい。

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図18のとおりである。ここでも数値は一般的に低いだが、年齢差が認められる。

中年層と若年層はどの場面でも数値が非常に低い（ただし若年層は【近所年寄り】場面で1割近くの使用が見られる）。

これに対し高年層は、全体としては数値はやはり低いものの、他の年齢層と比較すると相対的に高い。特に【近所年寄り】場面では数値が2割を超える。数値自体は「ハラへ」よりも低いだが、「ゴザへ」についても、高年層の間ではこうした場面を中心に使われる表現であることが確認される。

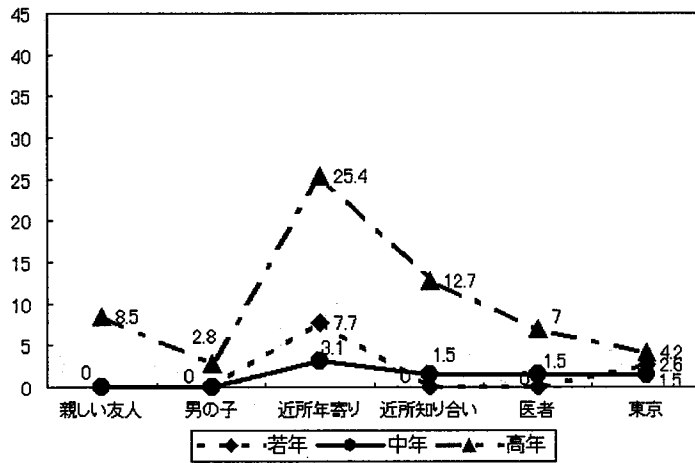


図18 6場面における「ゴザヘ」の使用意識—年齢差—

(4) 共通語形式「オ〜クダサイ」の属性差

次に、共通語形式の「オ〜クダサイ」「〜(テ)クダサイ」について、同様にサブクエスチョンで質問した結果を見てみよう。これらの表現は【男の子】と【親しい友人】の場面での使用はほとんど期待されないため（図1によると実際そうであった）、それ以外の4つの場面でのみ質問した。すでに述べたように、サブクエスチョンは、メインクエスチョンで当該の表現が得られなかった回答者に対してのみ質問したのであるが、【東京】と【医者】の場面では「オ〜クダサイ」のメインクエスチョンで使用者率が高いため（6割前後）、サブクエスチョンでの「オ〜クダサイ」の回答者は少なめとなる。

その「オ〜クダサイ」についてまず見てみよう。メインクエスチョンで言えば図5（性差；ただし左側の2場面を除いたもの）・図6（年齢差）と対比されるものである。

【性差】

男女別に集計した結果は図19のとおりである。メインクエスチョンと同様、男性の【東京】場面を除けば、改まりの度合いが高くなるほど（グラフの右側に行くほど）数値が高くなる傾向が男女ともに認められる。メインクエスチョンでこの表現を使わなかった回答者にとっても、この表現は丁寧な表現と意識されていることがわかる。

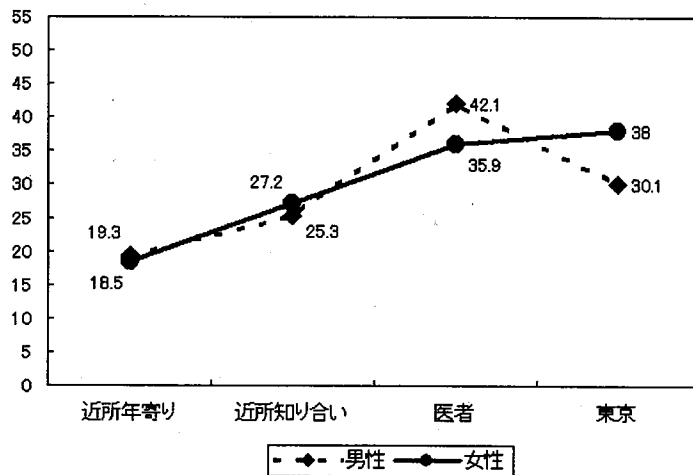


図19 4場面における「オ～クダサイ」の使用意識－性差－

顕著な男女差はないと言ってもよいが、【東京】場面では男性よりも女性の方が数値がやや高い。これは、後出の図21で見るように、男性はこうした場面では、丁寧さがこれよりも少し下がる「～(テ)クダサイ」を用いる傾向が女性より強く、その結果であると考えられる。

これに対し【医者】場面では、女性よりも男性の数値の方がやや高く、メインクエスションの図5と逆の傾向を示している。女性はメインクエスションでの使用者率が約7割と高く、サブクエスションの数値の上限がそもそも低いことが原因であるのかもしれない。

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図20のとおりである。改まりの度合いが高くなるほど数値が高くなる傾向がどの年齢層にも認められる。

【近所年寄り】や【近所知り合い】の場面では顕著な年齢差は見られないが、【医者】と【東京】の場面では、若年層対中年層・高年層という形で年齢差が見られる。これらの場面で若年層が他よりも数値が高くなる傾向は、メインクエスション（図6）では見られず、むしろ逆の傾向であった。若年層は、回答のチャンスが1回だけのメインクエスションでは、これよりも丁寧さの度合いが低い「～(テ)クダサイ」の方を他の年齢層よりも用いる傾向が見られたが（図8-a）、「～(テ)クダサイ」を使った若年層の回答者であっても、こうした場面で「オ～

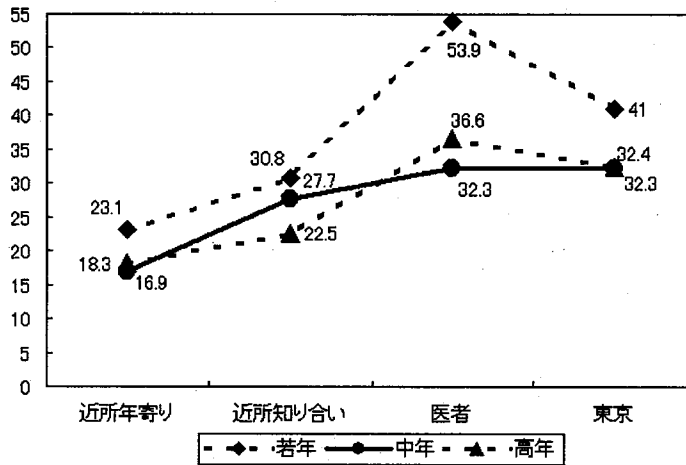


図20 4場面における「オ～クダサイ」の使用意識－年齢差－

クダサイ」を使おうと思えば使える人がかなりいるということである。

(5) 共通語形式「～(テ)クダサイ」の属性差

次に、「オ～クダサイ」よりも丁寧さの度合いが少し下がる「～(テ)クダサイ」について同様に見てみよう。メインクエスションで言えば図7-a（性差；ただし左側の2場面を除いたもの）・図8-a（年齢差）と対比されるものである。

【性差】

男女別に集計した結果は図21のとおりである。先ほどの「オ～クダサイ」と比べると場面による違いはあまりないが、改まりの度合いが高くなるほど数値が高くなる傾向がここでも多少見られる。メインクエスション（図7-a）の当該の4場面では、むしろ【近所知り合い】や【医者】の場面で数値が高くなり、異なる部分がある。

男女で比べると、どの場面でも女性よりも男性の方が数値が高くなる傾向が見られる。メインクエスション（図7-a）では【医者】場面で男女差がやや大きかったが、ここでは【東京】場面で大きい。改まりの度合いの大きな場面では、概して男性は女性よりも「～(テ)クダサイ」を好む傾向が見られる。

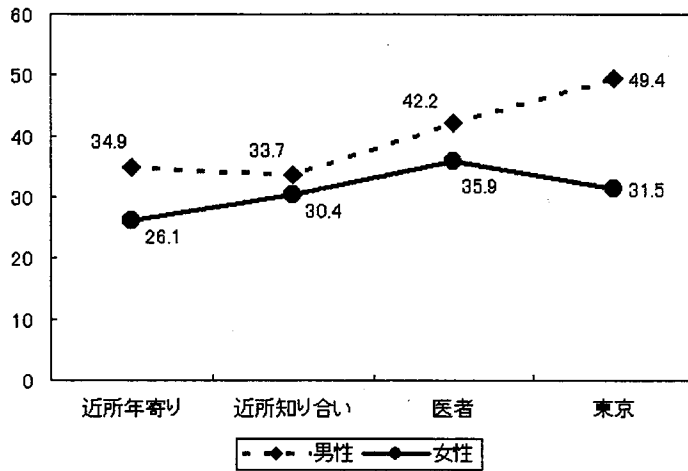


図21 4場面における「～(テ)クダサイ」の使用意識－性差－

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図22のとおりである。若年層と中年層は場面による違いはあまりないが、高年層は改まりの度合いが高くなるほど数値が高くなる傾向が比較的明確に認められる。ただし、メインクエスチョンでは、高年層はむしろ【近所知り合い】や【医者】の場面で数値が高くなり（図8-a）、傾向が異なる。

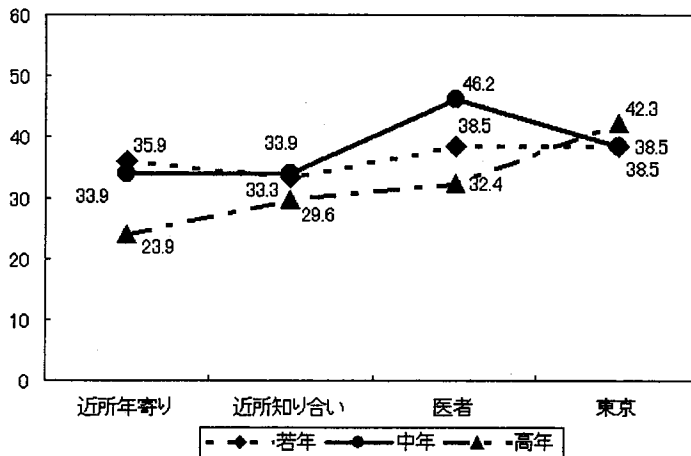


図22 4場面における「～(テ)クダサイ」の使用意識－年齢差－

顕著な年齢差も見られないが、【東京】場面を除き、高年層は他の

年齢層よりも数値がやや低くなる。この傾向はメインクエスションの結果とも一致する。概して高年齢層は、他の年齢層と比べ「～(テ)クダサイ」を使わない傾向が見られる。

(6) 方言形式「V活用形+(ッ)チャ」の属性差

最後に、方言の終助詞「(ッ)チャ」を伴う「V活用形+(ッ)チャ」について見てみよう（「V活用形」は動詞の命令形）。回答者に提示した表現は「ハイレ（アガレ）(ッ)チャ」である。サブクエスションは、こうした表現の使用が期待される【親しい友人】と【男の子】の2場面についてのみ行なった。

【性差】

男女別に集計した結果は図23のとおりである。顕著な男女差が認められる。男性の数値は4～5割と比較的高いのに対し、女性の数値はかなり低い。メインクエスションの結果を示した図9-aは、「ヤ」などの終助詞も含むため厳密な比較とはならないが、当該の2場面について言えば女性よりも男性の方が数値が高く、同様の傾向が認められる。こうした表現は、概して男性の方が女性よりも用いるようである。

場面を比べると、男女とも【男の子】場面よりも【親しい友人】場面の方が数値が高い。ただしメインクエスションでは、こうした場面差は特に見られない。

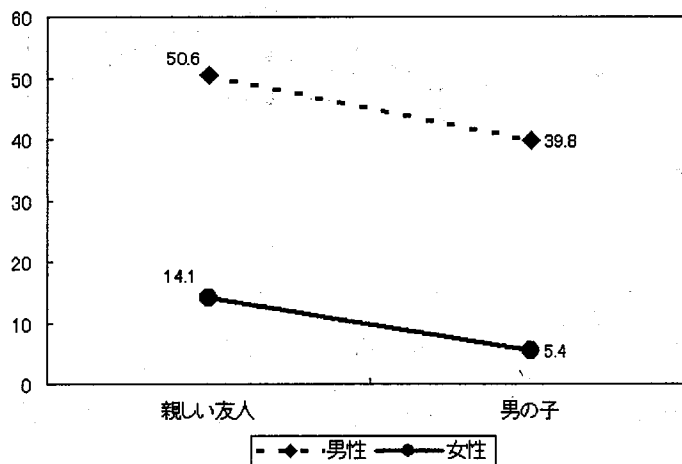


図23 2場面における「V活用形+(ッ)チャ」の使用意識—性差—

【年齢差】

年齢層別に集計した結果は図24のとおりである。若年層が他の年齢層よりも数値が高い。特に【親しい友人】場面で年齢差が大きい。この傾向はメインクエスション（図10-a）でも認められた。そのメインクエスションでは、高年層は、これらの場面では他の年齢層よりも数値が低い。年齢層が低くなるほどこうした表現を使う傾向が見られる。

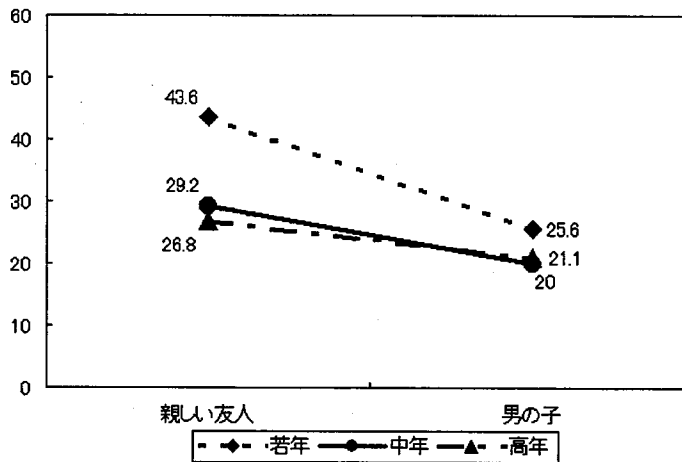


図24 2場面における「V活用形+(っ)チャ」の使用意識—年齢差—

場面を比べると、どの年齢層も【男の子】場面よりも【親しい友人】場面の方が数値が高い。ただしメインクエスションでは、若年層ではその傾向が認められたが、中年層と高年層はむしろ逆の傾向が認められた。使用者率が高い若年層について言えば、【親しい友人】場面を中心に使われる表現であると言える。

4. まとめ

最後に、本章の分析で得られたおもな結果をまとめて示す。ただし、サブクエスションの回答傾向は、メインクエスションで当該の表現を使わなかった回答者に対してのみ質問したという事情から数値が不安定な面もありそうだ。そこでここでは、数値として確実なメインクエスションの結果についてのみ示すことにする。

4.1. 全体的な傾向

共通語形の授受表現「～クダサイ」が後接する形式は、改まりの度合いが高くなるにつれ使用者率も高くなる。これに対し、「ハイレ(+ヤ/+ (ッ)チャ)」など動詞の命令形を含む表現や、「ハイッテ(-イケ)」など動詞の連用形を含む表現は、改まりの度合いが低くなるにつれ使用者率が高くなる。場面による使い分けが明確に認められる。

一方、敬語項目の使い分けとして注目した方言の敬語形式については、授受表現の「V+クネヘン」にしても、尊敬助動詞の命令形「へ」を下接する「ハラへ/ゴザへ」にしても、そもそも使用者率が全般的に低かった。逆に言えば、共通語形の使用者率が全体として優勢であった。そのため、方言敬語対共通語敬語という形での使い分けは、明確な形では認められなかった(図1を参照)。しかしながら、方言形式の使用者率は、6つの場面のうち【近所の年寄り】【近所の知り合い】【医者】の場面で他よりも高くなる傾向が多少認められた。方言敬語は、地元の高年者や距離を置くべき人物に対して用いられる傾向がある。両表現を合せた使用者率は【近所の年寄り】場面で最も高くなる。

4.2. 属性別に見た傾向

(1) 性差

丁寧さの度合いが高い共通語形の「オ～クダサイ」は、男性よりも女性に使用が高い傾向が見られる。特に【医者】場面や【東京】場面での男女差が大きい。これに対し、それよりも丁寧さの度合いが少し下がる「～(テ)クダサイ」は男女差があまり見られない。ただし【医者】場面では、女性は「オ～クダサイ」の使用が高くなる関係で「～(テ)クダサイ」の数値は下がり、その結果男性は女性よりも数値が高くなる。

「ハイレ(+ヤ/+ (ッ)チャ)」など動詞の命令形を含む表現は、使用者率の高い【親しい友人】場面や【男の子】場面では、女性よりも男性の方が使用者率が高い傾向が見られる。

一方、全体的に使用者率の低い方言の授受表現「V+クネヘン」は、男女差もあまり見られないが、【近所知り合い】場面では女性よりも男性の方が数値が高くなる。

(2) 年齢差

共通語形の「オ～クダサイ」の使用については顕著な年齢差は認められない。ただし，【医者】場面や【東京】場面では，若年層の数値が他の年齢層よりも低くなる。丁寧さの度合いがそれよりも少し下がる「～(テ)クダサイ」は，使用者率がゼロに近い【親しい友人】場面と【男の子】場面を除き，年齢層が低くなるほど数値が高くなる傾向が見られる。丁寧さの度合いが軽いこの共通語の授受表現は，若年層になるほど使われる傾向が見られる。

「ハイレ(+ヤ/+ (ッ)チャ)」など動詞の命令形を含む表現は，使用者率が高い【親しい友人】場面で年齢差も大きく，若い年齢層ほど数値が高くなる。特に若年層は9割近くが使っている。

一方，全体的に使用者率の低い方言の授受表現「V+クネヘン」は，若年層はどの場面でも使用がほぼゼロであるのに対し，中年層と高年層にはある程度使用が見られる。中年層の使用のピークは【近所年寄り】場面であるのに対し，高年層のそれは【医者】場面という違いも見られる。

5. 今後の課題

本章で分析対象とした敬語項目は，メインクエスションで回答されたものとサブクエスションで回答されたものがある。メインクエスションは回答チャンスが1回しかないためたまたま使用されなかった場合を考慮し，使用や場面による使い分けが期待される代表的な方言形式や共通語形式についてはサブクエスションを設けた。第一段階の分析である本章では，メインクエスションとサブクエスションの結果を基本的に分けて分析したが，両者を関連づけてデータを分析することで新たな知見が得られる可能性がある。

今回の調査では，想定する話し相手との関係から改まりの度合いを設定し，その違いに基づく方言敬語と共通語敬語の使い分けを見ようとした。つまり，回答者には，場面を固定的なものとして想定させたのである。しかしながら，ここで言う「場面」が同じであっても，他者に対し自分の家の中に入るよう勧めるその場の状況がどのようなものであるかによっても（例えば必然性や緊急性がどうであるかなど），

方言敬語と共通語敬語の使い分けがなされていることが考えられる。そうしたダイナミックな「場面」による言語使用についても、今後追究していく必要がある。

資料 1

面接調査票

「場面差調査」の面接調査で用いた調査票を掲げる。サイズは縦長 B5 版である。

最初のページは回答者のフェイスシート情報であるが、本調査の回答者は全員前年度調査の回答者でありすでにその情報を得ているため、氏名・生年月日・出生地等の項目は、実際の調査票では、回答者ごとすでに印刷されている。

調査票中に「リスト」とあるものは、絵や選択肢を提示して回答を求めた設問である。提示したリスト(カード)は資料 2 として示した。

('92鶴岡調査)

面接調査票 (場面調査)

001. 氏名

			No.
--	--	--	-----

002. 生年月日

明治 年 月 日 → 明治 年 月 日
 大正 昭和

003. 被調査者の諸属性 ('91調査時) 【要確認】

出生地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>	本籍地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>	出身地 5~15歳の成育地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>
5~15歳の間の移動 <input style="width: 50px;" type="text"/>	鶴岡市外の居住 <input style="width: 100px;" type="text"/>	
父親の出身地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>	母親の出身地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>	配偶者の出身地 <input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>

☆ 現在、同居している家族は全部で (自分を除いて) 何人ですか。 _____人

それは、どなたですか。

祖父 祖母 父 母 夫 妻 兄姉 (____人) 弟妹 (____人)

子ども (____人) その他 _____

004. 昨年度の調査員

昨年度の調査場所

005. 調査員氏名 _____

今年度の調査員と
被調査者との接触：
(どちらかに○)

1. 初めての接触
2. 昨年度に続き
2度目の接触

006. 調査月日 平成4年11月 _____日 (曜日)

007. 開始時刻
午前 _____時 _____分
午後 _____時 _____分

調査の記録

No.	氏名:		性
住所:			TEL
備考:		調査	第1希望: 日()
		予定日	第2希望: 日()

訪問状況

	日	曜日	時刻	接触の相手	調査員
1			前後 時 分	本人・家人() / 不在 その他()	
2			前後 時 分	本人・家人() / 不在 その他()	
3			前後 時 分	本人・家人() / 不在 その他()	

※ 欄が不足の場合は裏面へ記入

調査票回収状況

留置
調査票

- イ. 留置調査票の回収月日: ____月____日
- ロ. 未回収 回収予定日: ____月____日 回収予定者: _____
- ハ. 回収不能 理由(具体的に) → _____

面接
調査票

- イ. 面接調査票の回収月日: ____月____日
 - ロ. 回収不能と決定した日: ____月____日
- 理由: 転出・転居/長期不在・接触できず・病気・障害/拒否
 転出先・その他 → _____

メモ欄 (記載事項の誤り・その他)

留置 Tape

--	--

■ 電池チェック

■ 録音確認

まず、絵を見てお答え下さい。ふつう何とおっしゃいますか？（録音のみ）

101. 〈西瓜〉 【リスト101】
102. 〈柿〉 【リスト102】
103. 〈烏〉 【リスト103】
104. 〈窓〉 【リスト104】
105. 〈駅〉 【リスト105】
106. 〈税務署〉 …税金をとりたてる役所を何とおっしゃいますか。
107. 〈猫〉 【リスト107】
108. 〈鈴〉 【リスト108】
109. 〈アメリカ〉 【リスト109】 …地図のこの国を何といいますか。米国のことです。
110. 〈髭〉 【リスト110】
111. 〈息〉 ……口からハーッとほくもの、これを何とおっしゃいますか。
112. 〈鏡〉 【リスト112】 …顔をうつすための、こういうものを何とおっしゃいますか。
113. 〈NTT〉 …昔の「電電公社」、電話や電報を扱っている会社のことを、ふだん、何と呼んでいらっしゃいますか。
114. 〈知事〉 ……市でいちばん上の人を「市長」と言いますが、県でいちばん上の人を何とおっしゃいますか。
115. 〈テレビ〉 【リスト115】 …このような機械を何とおっしゃいますか。
116. 〈チャンネル〉 【リスト115】 …それでは、この部分は何とおっしゃいますか。
117. 〈辛子〉 …こちらの名産の小さいなすをつける辛い粉を何とおっしゃいますか。
118. 〈地図〉 【リスト118】
119. 〈胃〉 【リスト119】
120. 〈絵〉 【リスト120】
121. 〈汗〉 ……夏働くと背中からだらだら流れるものを何とおっしゃいますか。
122. 〈鉛筆〉 【リスト122】
123. 〈インク〉 【リスト123】 *インキでも可。

それでは、別のことについてお尋ねします。

【リスト310】

311. 新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。野菜や果物の値段の予想についての記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈今年はスイカは安い、柿は高い〉

312. では、この話しの内容を、●●さん(202の回答)に向かって自分のことばで伝えるとしたら、ふだんどんなふうに言いますか？ 多少ことばを換えて言ってもかまいません。(つかえたら再度)

◆「スイカ」「柿」が含まれている？ 含まれていない場合は、リストのその文字の部分の指で差し、再度発話を求める。以下でも同様。

◆引用的发話になった場合には、「最後のところを〈高いそうだよ〉などと言うとしたらどうなりますか？」などと質問し、再度発話を求める。以下でも同様。

313. では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？(つかえたら再度)

314. では、鶴岡の国勢調査の人(50~60代で同性で初対面の人)が家に来たとして、雑談中、その人に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？(つかえたら再度)

【リスト320】

321. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。空港での事故の記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈ジェット機の窓に ガラス 激突〉

322. では、この話しの内容を、●●さん(202の回答)に向かって自分のことばで伝えるとしたら、ふだんどんなふうに言いますか？ 「激突」を「ぶつかる」などと、多少ことばを換えてもかまいません。(つかえたら再度)

323. では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

324. では、鶴岡の国勢調査の人(50~60代で同性で初対面の人)に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト330】

331. では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。鶴岡市の役所の移転の記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。(つかえたら再度)

〈駅の北側に税務署移転〉

332. では、この話しの内容を、●●さん(202の回答)に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 「移転」を「引っ越し」「移る」などと、多少ことばを換えてもかまいません。(つかえたら再度)

333.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

334.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト340】

341.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。最近のペットの飼い方の流行についての記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

<猫に餌、はやる>

342.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

343.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

344.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト350】

351.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。外国の男性のファッションについての記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

<アメリカで髪、はやる>

352.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

353.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

354.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト360】

361.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。冬の朝などに手鏡を使おうとすると、よく曇ってしましますが、そうならない新製品を発明した、という記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

<鏡で曇らぬ鏡を発明>

362.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

363.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

364.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト370】

371.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。政治記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

＜NTT社長、知事と会談＞

372.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 「会談」を「話し合う」などと、多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

373.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

374.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト380】

381.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。少し前までは、放送の番組を切り替える時にはツマミを回していましたが、最近リモコンになってツマミがなくなりました。将来は全ての製品がそうなる、という記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

＜テレビからチャンネルなくなる＞

382.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

383.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

384.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

【リスト390】

391.では次に、やはり新聞にこのような見出し記事が載っていたとします。食品会社がちょっと変わった色の調味料を新しく売り出した記事です。まず、一度目を通してから、私に向かって普通に読んでみて下さい。（つかえたら再度）

＜白いカラシ、新発売＞

392.では、この話しの内容を、●●さん（202の回答）に向かって自分のことばで伝えるとしたらどうですか？ 多少ことばを換えてもかまいません。（つかえたら再度）

393.では、私に向かって同じことを伝えるとしたらどうですか？

394.では、鶴岡の国勢調査の人（50～60代で同性で初対面の人）に向かって伝えるとしたらどうですか？

少し質問の仕方が変わります。
 ことばの言い回しが相手によって変わるか変わらないかを
 考えながら答えてください。

401 1. 道で、仲のよい友だち（回答者と同姓で同年齢くらい）に会いました。
 「どこへ行くのか」とたずねるとしたらどう言いますか？

1. ドコニ 2. ドコエ 3. ドコサ 4. ドゴサ 5. ドコハ 6. ドゴハ
 7. ドサ 9. その他 []
 * 「～マデ」が出たら「マデのほかの言い方で言う？」と再質問する。
 [全文(録音だけ)]

2. お世話になっている（教えてもらっている）年配の先生に道で会って、
 「どこへ行くのか」とたずねるとしたらどう言いますか？

1. ドコニ 2. ドコエ 3. ドコサ 4. ドゴサ 5. ドコハ 6. ドゴハ
 7. ドサ 8. ドチラ+ [] 9. その他 []
 * 「～マデ」が出たら再質問。

[]

402 1. 今度は逆に、親しい友だちからどこに行くのかをたずねられて、「学校へ行く」と答えるとき、あなたならどう答えますか？

1. ニ 2. エ 3. サ 4. ハ 9. その他 []
 * 「～マデ」が出たら再質問。
 []

2. 同じことをさっきと同じ先生に答えるとしたら、どう答えますか？

1. ニ 2. エ 3. サ 4. ハ 9. その他 []
 * 「～マデ」が出たら再質問。
 []

403 1. 親しい友だちに、今からどこかにいっしょに行こうと誘われたとします。
 「すぐに行くからちょっと待って欲しい」と友達に言うとしたらどう言いますか？

1. カラ（ガラ） 2. サケ（サゲ） 3. ハケ（ハゲ） 4. スケ
 5. ノデ 6. ンデ 9. その他 []
 []

406 1 友達から電話がかかってきて今なにをしていたかとたずねられました。
「食事をしていた」ということをふだんの調子で答えるとしたらどう言いますか？

1. マンマ 2. ママ 3. メシ 4. メス 5. ゴハン 6. 食事 7. 食事中 9. その他 [} + {	1. φ 2. -ヲ	} + {	1. クッテタ 2. クッデダ 3. タベテタ 4. タベテマシタ 5. シテタ 6. シテマシタ 7. デシタ 9. その他 []
[]					

2 同じことを先生からの電話で答えるとしたらどう言いますか？

1. マンマ 2. ママ 3. メシ 4. メス 5. ゴハン 6. 食事 7. 食事中 9. その他 [} + {	1. φ 2. -ヲ	} + {	1. クッテタ 2. クッデダ 3. タベテタ 4. タベテマシタ 5. シテタ 6. シテマシタ 7. デシタ 9. その他 []
[]					

407 1 時計を床に落としてしまいました。動きません。そのことを友達に説明します。
「さっき落としたので、時計が・・・」どうなったと言いますか？

1. コワレタ 9. その他 [2. コワレダ	3. ボ(ッ)コレタ	4. ボ(ッ)コレダ]
[]				

2 同じことを、先生に説明するとしたらどう言いますか？ 「時計が・・・」。

1. コワレタ 9. その他 [2. コワレダ	3. ボ(ッ)コレタ	4. ボ(ッ)コレダ]
[]				

こんどは、もう少しいろいろな相手を考えてください。
 同じことを言うのに、相手によって言い回しを変えるか変えないかということです。

501. あなたの家に次のような人が来ました。玄関先（入口）の外に立っています。その人にむかって家の（部屋の）中に入るように勧めるとき、どんなふうに言いますか？

*主動詞は「ハイル」でも「アガル」でもよい（以下同じ）。

1. 近所の顔見知りのお年寄り（70歳くらい）が来たときはどうでしょう？

- | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------|
| 1. オハイリ (アガ) クダサイ | 2. ハイ (アガ) ッテクダサイ | |
| 3. ハイ (アガ) ッテクネヘン | 4. ハイ (アガ) ラシテクネヘン | 5. ハラ (アガ) ヘ |
| 6. ハイレ (アガ) | 7. ハイレヤ (アガヤ) | 8. ハイレ (アガ) ッチャ |
| 9. ゴザヘ | 10. その他 [|] |

- 11. 「～クネヘン」「ハラ (アガ) ヘ」「ゴザヘ」が出ないとき
- | | | |
|-----------|-----------------|---------------|
| ～クネヘン | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ハラ (アガ) ヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ゴザヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |

- 12. 「オ～クダサイ」「～テクダサイ」が出ないとき
- | | | |
|--------|-----------------|---------------|
| オ～クダサイ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ～テクダサイ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |

2. 世話になっているお医者さん、あるいはお寺のご住職（お寺さん）であったらどうでしょう？

- | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------|
| 1. オハイリ (アガ) クダサイ | 2. ハイ (アガ) ッテクダサイ | |
| 3. ハイ (アガ) ッテクネヘン | 4. ハイ (アガ) ラシテクネヘン | 5. ハラ (アガ) ヘ |
| 6. ハイレ (アガ) | 7. ハイレヤ (アガヤ) | 8. ハイレ (アガ) ッチャ |
| 9. ゴザヘ | 10. その他 [|] |

- 21. 「～クネヘン」「ハラ (アガ) ヘ」「ゴザヘ」が出ないとき
- | | | |
|-----------|-----------------|---------------|
| ～クネヘン | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ハラ (アガ) ヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ゴザヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |

- 22. 「オ～クダサイ」「～テクダサイ」が出ないとき
- | | | |
|--------|-----------------|---------------|
| オ～クダサイ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ～テクダサイ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |

6. 近所の顔見知りの男の子（小学校1年生くらい）が来たときはどうでしょう？

1. オハイリ (アガ) クダサイ
2. ハイ (アガ) ッテクダサイ
3. ハイ (アガ) ッテクネヘン
4. ハイ (アガ) ラシテクネヘン
5. ハラ (アガ) ヘ
6. ハイレ (アガレ)
7. ハイレヤ (アガレヤ)
8. ハイレ (アガレ) ッチャ
9. ゴザヘ
10. その他 []

-61. 「～クネヘン」「ハラ (アガ) ヘ」「ゴザヘ」が出ないとき

- | | | |
|-----------|-----------------|---------------|
| ～クネヘン | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ハラ (アガ) ヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
| ゴザヘ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |

-62. 「ハイレ (アガレ) ッチャ」が出ないとき

- | | | |
|---------------|-----------------|---------------|
| ハイレ (アガレ) ッチャ | 1. この相手に言うことがある | 2. この相手には言わない |
|---------------|-----------------|---------------|

502. 話が変わります。相手にむかって物の値段をたずねるとき、どんな言い方をしますか？ つぎのそれぞれの場合ではどうでしょうか？

1. 家の中でいちばん気楽に話せる家族や友達に「これは一つ・・・」それからどう言いますか？

1. イクラ
2. ナンボ
3. オイクラ
4. イカホド
5. その他 []

2. 近所のいつもよく行く親しい店で、顔見知りの店の人にたずねるときは？

1. イクラ
2. ナンボ
3. オイクラ
4. イカホド
5. その他 []

3. 鶴岡の駅前のデパート（「マリカ」）で、初めて話す店員さんにはどうですか？

1. イクラ
2. ナンボ
3. オイクラ
4. イカホド
5. その他 []

4. 山形に買物に行って、初めて話す店員さんにはどうでしょうか？

1. イクラ
2. ナンボ
3. オイクラ
4. イカホド
5. その他 []

5. 東京へ出かけて、むこうの店で店員さんに値段をたずねるとしたらどうでしょう？

1. イクラ
2. ナンボ
3. オイクラ
4. イカホド
5. その他 []
9. ほとんど行かないのでわからない。

では今度は、次のことばを発音に注意しながら少し改まった調子で読んでみて下さい。(録音のみ；調査者は解説をしない；リストは1ページにつき3語)

【リスト601～630】

- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| 601. 〈西瓜〉 | 602. 〈柿〉 | 603. 〈烏〉 |
| 604. 〈窓〉 | 605. 〈駅〉 | 606. 〈税務署〉 |
| 607. 〈猫〉 | 608. 〈鈴〉 | 609. 〈アメリカ〉 |
| 610. 〈髭〉 | 611. 〈息〉 | 612. 〈鏡〉 |
| 613. 〈N T T〉 | 614. 〈知事〉 | 615. 〈テレビ〉 |
| 616. 〈チャンネル〉 | 617. 〈辛子〉 | 618. 〈地図〉 |
| 619. 〈紙クズ〉 | 620. 〈宝クジ〉 | 621. 〈時間〉 |
| 622. 〈図鑑〉 | 623. 〈鉛筆〉 | 624. 〈インク〉 |
| 625. 〈胃〉 | 626. 〈絵〉 | 627. 〈汗〉 |
| 628. 〈癖〉 | 629. 〈風邪〉 | 630. 〈小銭〉 |

では次は、録音テープの声を聞きながらお答え下さい。

710. < 髭 > ……唇音化

まず、男の人の口のまわりに生えている〈髭〉ですが、2種類の発音で交互に3回テープから出てきます。まず、2つを比べながら注意してお聞き下さい。

→ [710. 「ヒケ°、フィケ°」×3回]

711. 【リスト701】発音の上での違いはどうでしょうか。次から選んで下さい。

1. 全く同じ発音。 →再度テープを聞かせる（それでも1なら、720へジャンプ）
2. 発音に違いがある。

712. どのように違うと思いますか。もう一度1回ずつ聞いて答えて下さい。

→ [712. 「ヒケ°、フィケ°」×1回]

1. 正しく区別される発音を実演して示した。
2. ヒの部分が違う。
3. その他の適切と思われる答え。
4. 不適切と思われる答え。 →再度テープを聞かせる（それでも4なら、720へジャンプ）
(9. わからない。)

713. では、あとの方の発音についてのみ、もう一度お聞き下さい。

→ [713. 「フィケ°」×3回]

【リスト703】このような発音について、あてはまるものを一つ選んで下さい。

1. 今も自分で言う。
2. 昔は自分も言った。
3. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを今聞く。(→誰?)
4. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを昔聞いた。(→誰?)
5. 聞いたこともない。)
9. わからない。) →720へジャンプ

714. 【リスト704】（上で1～4を答えた人だけにのみ）では、やはり今の発音についてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 新しい発音。
2. 昔からの発音。
9. わからない。

715. 【リスト705】では、次の中からはどうでしょうか。

1. 標準語的な発音。
2. 方言的な発音。
9. わからない。

716. もう一度今の発音をお聞き下さい。→ [716. 「フイケ」 × 3回]

【リスト706】今の発音についてですが、この発音を使いにくい相手や場面、あるいは自分なら使わないだろうと思う相手や場面が、ひょっとしたらあるかもしれません。このリストを、上から一つづつ見ていくとどうでしょうか。(使いにくい(使わない)ものに×印、使いにくい(使ってもいい)ものに○印。)

1. 目の前の調査員と話するとき。
2. 家族や友達と話するとき。
3. 国勢調査の人と話するとき。(50~60代・同性・初対面)
9. わからない。

717. 【リスト707】では、もう一つ今の発音についてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

720. <辛子> ……中舌化

では次に、調味料の<辛子>ですが、2種類の発音で交互に3回テープから出てきます。まず、2つを比べながら注意してお聞き下さい。

→ [720. 「カラシ, カラst」 × 3回]

721. 【リスト701】発音の上での違いはどうでしょうか。次から選んで下さい。

1. 全く同じ発音。 →再度テープを聞かせる(それでも1なら、730へジャンプ)
2. 発音に違いがある。

722. どのように違うと思いますか。もう一度1回ずつ聞いて答えて下さい。

→ [722. 「カラシ, カラst」 × 1回]

1. 正しく区別される発音を実演して示した。
2. シの部分が違う。
3. その他の適切と思われる答え。
4. 不適切と思われる答え。 →再度テープを聞かせる(それでも4なら、730へジャンプ)
9. わからない。

723. では、あの方の発音についてのみ、もう一度お聞き下さい。

→ [723. 「カラst」 × 3回]

【リスト703】このような発音について、あてはまるものを一つ選んで下さい。


1. 今も自分で言う。
2. 昔は自分も言った。
3. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを今聞く。(→誰?)
4. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを昔聞いた。(→誰?)
5. 聞いたこともない。
9. わからない。) →730へジャンプ

724. 【リスト704】（上で1～4を答えた人にものみ）では、やはり今の発音についてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 新しい発音。
2. 昔からの発音。
9. わからない。

725. 【リスト705】では、次の中からはどうでしょうか。

1. 標準語的な発音。
2. 方言的な発音。
9. わからない。


726. もう一度今の発音をお聞き下さい。→  [726. 「カラst」×3回]

【リスト706】今の発音についてですが、この発音を使いにくい相手や場面、あるいは自分なら使わないだろうと思う相手や場面が、ひょっとしたらあるかもしれません。このリストを、上から一つづつ見ていくとどうでしょうか。（使いにくい(使わない)ものに×印、使いにくくない(使ってもいい)ものに○印。)


1. 目の前の調査員と話するとき。
2. 家族や友達と話するとき。
3. 国勢調査の人と話するとき。（50～60代・同性・初対面）
- (9. わからない。)

727. 【リスト707】では、今の発音について、次の中からはどうでしょうか。

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

730. <  > ……有声化


まず、動物の〈猫〉ですが、2種類の発音で交互に3回テープから出てきます。まず、2つを比べながら注意してお聞き下さい。

→  [730. 「ネコ、ネゴ」×3回]

731. 【リスト701】発音の上での違いはどうでしょうか。次から選んで下さい。

1. 全く同じ発音。 →再度テープを聞かせる（それでも1なら、740へジャンプ）
2. 発音に違いがある。

732. どのように違うと思いますか。もう一度1回ずつ聞いて答えて下さい。

→  [732. 「ネコ、ネゴ」×1回]

1. 正しく区別される発音を実演して示した。
2. コの部分が違う。
3. その他の適切と思われる答え。
4. 不適切と思われる答え。 →再度テープを聞かせる（それでも4なら、740へジャンプ）
- (9. わからない。)

733.では、あとの方の発音についてのみ、もう一度お聞き下さい。

→ [733.「ネゴ」×3回]

【リスト703】このような発音について、あてはまるものを一つ選んで下さい。

1. 今も自分で言う。
2. 昔は自分も言った。
3. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを今聞く。(→誰?)
4. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを昔聞いた。(→誰?)
5. 聞いたこともない。)
9. わからない。) →740へジャンプ

734.【リスト704】(上で1~4を答えた人だけに)では、やはり今の発音についてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 新しい発音。
2. 昔からの発音。
9. わからない。

735.【リスト705】では、次の中からはどうでしょうか。

1. 標準語的な発音。
2. 方言的な発音。
9. わからない。

736.もう一度今の発音をお聞き下さい。→ [736.「ネゴ」×3回]

【リスト706】今の発音についてですが、この発音を使いにくい相手や場面、あるいは自分なら使わないだろうと思う相手や場面が、ひょっとしたらあるかもしれません。このリストを、上から一つづつ見ていくとどうでしょうか。(使いにくい(使わない)ものに×印、使いにくくない(使ってもいい)ものに○印。)

1. 目の前の調査員と話すとき。
2. 家族や友達と話すとき。
3. 国勢調査の人と話すとき。(50~60代・同性・初対面)
- (9. わからない。)

737.【リスト707】では、今の発音について、次の中からはどうでしょうか。

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

740. < 猫 > ……アクセント

ところで、食べる時に使う「箸(ハシ)」と、川にかかっている「橋(ハシ)」とでは、同じ「ハ」「シ」であっても、声の上がり下がり(アクセントとも言います)に違いがあるかと思えます。「箸(ハシ)」と「橋(ハシ)」。いかかでしょうか。

先程の〈猫(*̣)〉ということばの、今度は声の上がり下がりについてですが、テープから2種類の上がり下がりです。3回交互に出てきます。まず、2つを比べながら注意してお聞き下さい。

→ [740. 「ネコ、ネコ」×3回]

741. 【リスト701】 声の上がり下がりの違いはどうでしょうか。次から選んで下さい。

1. 全く同じ発音(抑揚)。 →再度テープを聞かせる(それでも1なら、750へジャンプ)
2. 発音(抑揚)に違いがある。

742. (省略)

743. では、あとの方の声の上がり下がりについてのみ、もう一度お聞き下さい。

→ [743. 「ネコ」×3回]

【リスト703】 このような抑揚について、あてはまるものを一つ選んで下さい。

1. 今も自分で言う。
2. 昔は自分も言った。
3. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを今聞く。(→誰?)
4. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを昔聞いた。(→誰?)
5. 聞いたこともない。)
9. わからない。) →750へジャンプ

744. 【リスト704】 (上で1~4を答えた人だけに) では、やはり今の声の上がり下がりについてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 新しい発音(抑揚)。
2. 昔からの発音(抑揚)。
9. わからない。

745. 【リスト705】 では、次の中からはどうでしょうか。

1. 標準語的な発音(抑揚)。
2. 方言的な発音(抑揚)。
9. わからない。

746. もう一度今の声の上がり下がりをお聞き下さい。→ [746. 「ネコ」×3回]

【リスト706】 今の声の上がり下がりについてですが、この声の上がり下がりを使いにくい相手や場面、あるいは自分なら使わないだろうと思う相手や場面が、ひょっとしたらあるかもしれません。このリストを、上から一つづつ見ていくとどうでしょうか。(使いにくい(使わない)ものに×印、使いにくい(使ってもいい)ものに○印。)


1. 目の前の調査員と話するとき。
2. 家族や友達と話するとき。
3. 国勢調査の人と話するとき。(50~60代・同性・初対面)
- (9. わからない。)

747. 【リスト707】では、今の声の上がり下がりについて、次の中からはどうでしょうか。

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

750. <窓> ……鼻音化


ではもう1つ、部屋の<窓>ですが、2種類の発音で交互に3回テープから出てきます。まず、2つを比べながら注意してお聞き下さい。

→  [750. 「マド, マンド」×3回]

751. 【リスト701】発音の上での違いはどうでしょうか。次から選んで下さい。


1. 全く同じ発音。 →再度テープを聞かせる（それでも1なら、801へジャンプ）
2. 発音に違いがある。

752. どのように違うと思いますか。もう一度1回ずつ聞いて答えて下さい。

→  [752. 「マド, マンド」×1回]

1. 正しく区別される発音を実演して示した。
2. マとドの間の部分が違う。
3. その他の適切と思われる答え。
4. 不適切と思われる答え。 →再度テープを聞かせる（それでも4なら、801へジャンプ）
9. わからない。）

753. では、あの方の発音についてのみ、もう一度お聞き下さい。

→  [753. 「マンド」×3回]

【リスト703】このような発音について、あてはまるものを一つ選んで下さい。


1. 今も自分で言う。
2. 昔は自分も言った。
3. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを今聞く。（→誰？）
4. 今も昔も自分は言わないが、他人が言うのを昔聞いた。（→誰？）
5. 聞いたこともない。）
9. わからない。) →801へジャンプ

754. 【リスト704】（上で1～4を答えた人にものみ）では、やはり今の発音についてですが、次の中からはどうでしょうか。

1. 新しい発音。
2. 昔からの発音。
9. わからない。

755. 【リスト705】では、次の中からはどうでしょうか。

1. 標準語的な発音。
2. 方言的な発音。
9. わからない。

756. もう一度今の発音をお聞き下さい。→  [756. 「マ^ンド」×3回]

【リスト706】今の発音についてですが、この発音を使いにくい相手や場面、あるいは自分なら使わないだろうと思う相手や場面が、ひょっとしたらあるかもしれません。このリストを、上から一つづつ見ていくとどうでしょうか。(使いにくい(使わない)ものに×印、使いにくくない(使ってもいい)ものに○印。)

1. 目の前の調査員と話すとき。
2. 家族や友達と話すとき。
3. 国勢調査の人と話すとき。(50～60代・同性・初対面)
- (9. わからない。)

757. 【リスト707】では、今の発音について、次の中からはどうでしょうか。

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

では最後に、ことばには直接関係ないことですが、教えてください。

801. 【リスト801】あなたは町内の行事や仕事の関係で、公式の会合によく出席するほうですか。

1. 多いほう。
2. あまり多くないほう。
9. わからない。

802. 【リスト801】あなたは仕事や親類つきあいとの関係などで、よその人(庄内以外の人)と話すことが多いほうですか。(同じリストで)

1. 多いほう。
2. あまり多くないほう。
9. わからない。

803. 【リスト803】鶴岡のことばは、これからさき、もっと共通語に近づく方向に変わっていくべきだ、あるいは変わっていく方がいいと思いますか。

1. そう思う。
2. そうは思わない。
9. わからない。

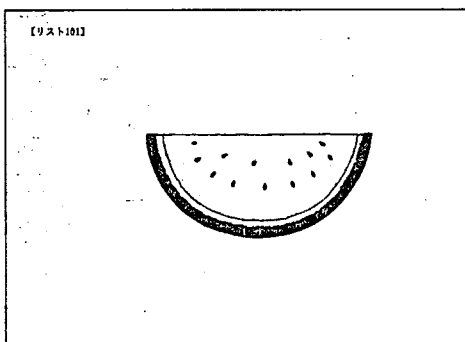
資料 2

提示リスト

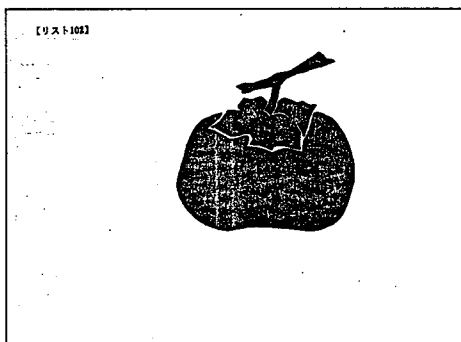
面接調査では、絵や選択肢が書かれたカードを提示して回答を求めた設問がある。本調査ではこれらを「リスト」と呼んでいるが、ここにその一覧を掲げる。リストの番号は、「資料1」として示した面接調査票の設問番号に対応している。リストの実際のサイズは横長の A5 版である。

リスト 101～104, 107～108, 110 は、前年度実施した継続調査を含むこれまでの調査で用いてきた絵である。複写を重ねたため、調査で用いた絵も画質が多少落ちる。

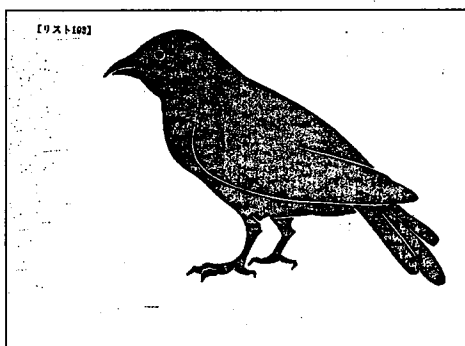
【リスト 101】



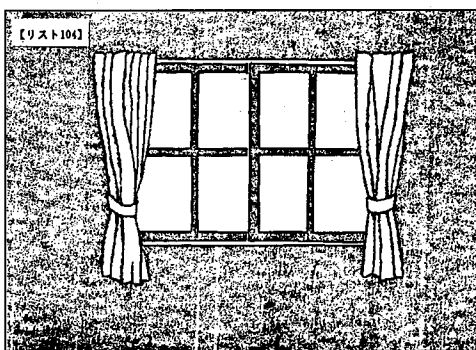
【リスト 102】



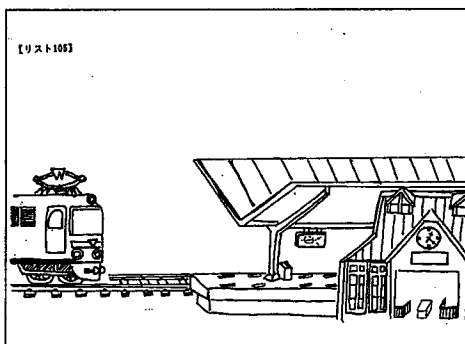
【リスト 103】



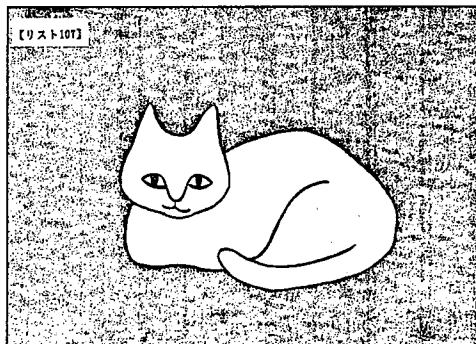
【リスト 104】



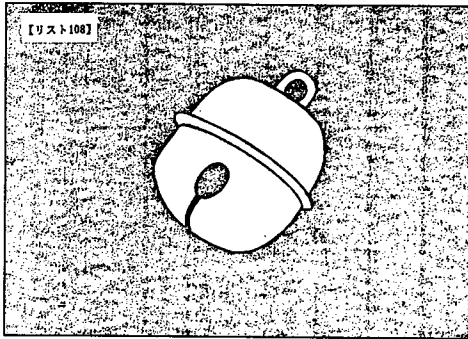
【リスト 105】



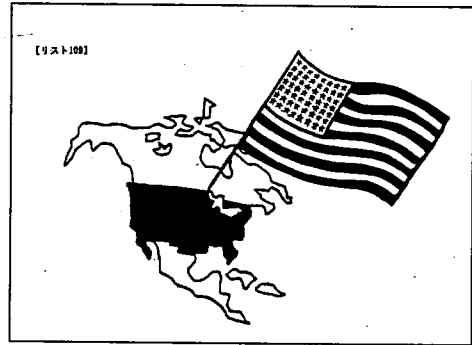
【リスト 107】



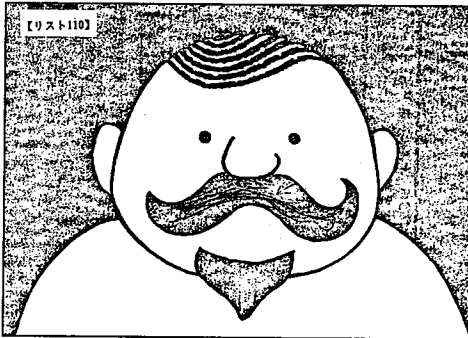
【リスト 108】



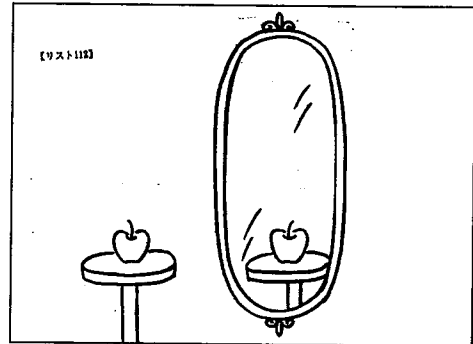
【リスト 109】



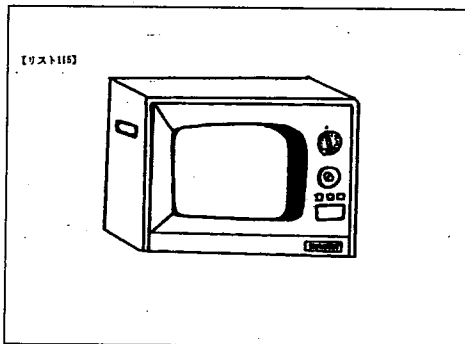
【リスト 110】



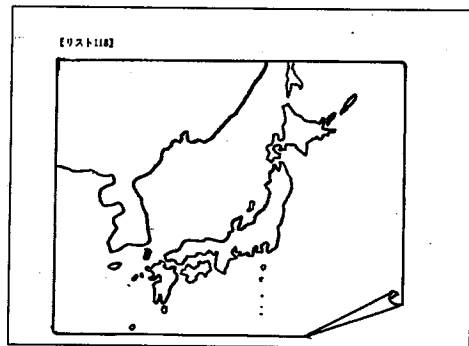
【リスト 112】



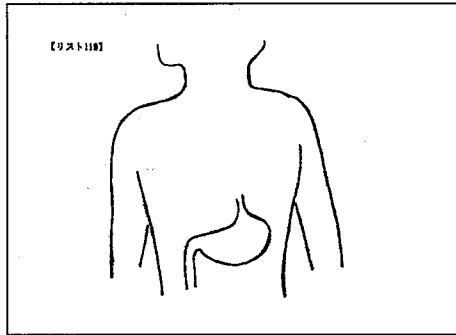
【リスト 115】



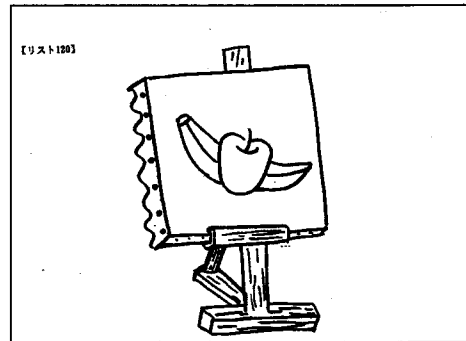
【リスト 118】



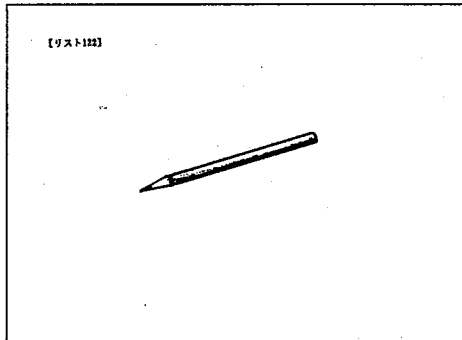
【リスト 119】



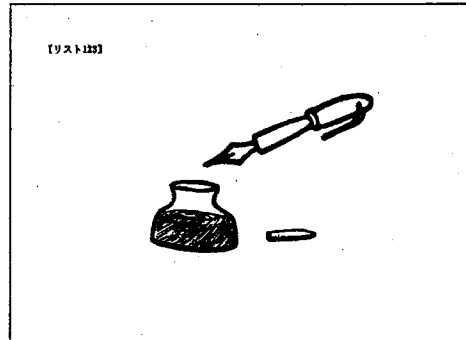
【リスト 120】



【リスト 122】



【リスト 123】



【リスト 201】

【リス201】

今朝の7時ぐらいのことだった。
公園で猫がスズメをねらっていた。

スズメが地面におりてくると、猫は静かに近づいてきた。

しかし、猫の首には鈴がついているので、
鈴の音でスズメは逃げてしまった。

猫はもう一度同じことを始めた。

【リスト 202】

- 【リスト202】
1. 夫
 2. 妻
 3. 父親
 4. 母親
 5. 息子
 6. むすめ
 7. 兄
 8. 姉
 9. 弟
 10. 妹
 11. 友達 (男・女)
 12. その他 ()

【リスト 310】

【リスト310】

今年はスイカは安い、柿は高い

【リスト 320】

【リスト320】

ジェット機の窓に カラス^{ばさつ}衝突

【リスト 330】

【リスト330】

駅の北側に税務署^{いてん}移転

【リスト 340】

【リスト340】

猫に鈴、はやる

【リスト 350】

【リスト350】

アメリカで髭^{ひげ}、はやる

【リスト 360】

【リスト360】

息で曇^{くも}らぬ鏡を発明

【リスト 370】

【リスト370】
NTT社長、知事と^{かいぎん}会談

【リスト 380】

【リスト380】
テレビからチャンネルなくなる

【リスト 390】

【リスト390】
白いカラシ、新発売

【リスト 601～603】

【リスト601】 すいか 西瓜
【リスト602】 かき 柿
【リスト603】 からす 烏

【リスト 604～606】

【リスト604】 まど 窓
【リスト605】 えき 駅
【リスト606】 ぜいむしょ 税務署

【リスト 607～609】

【リスト607】 おに 猫
【リスト608】 すず 鈴
【リスト609】 アメリカ

【リスト 610～612】

【リスト610】	ひび 罅
【リスト611】	いき 息
【リスト612】	かがみ 鏡

【リスト 613～615】

【リスト613】	NTT
【リスト614】	ち 知事
【リスト615】	テレビ

【リスト 616～618】

【リスト616】	チャンネル
【リスト617】	からし 辛子
【リスト618】	ち 地図

【リスト 619～621】

【リスト619】	か 紙クズ
【リスト620】	な 宝クジ
【リスト621】	じかん 時間

【リスト 622～624】

【リスト622】	ずかん 函鑑
【リスト623】	えんぴつ 鉛筆
【リスト624】	インク

【リスト 625～627】

【リスト625】	い 胃
【リスト626】	え 絵
【リスト627】	あせ 汗

【リスト 628～630】

【リスト628】	くせ 癖
【リスト629】	かぜ 風邪
【リスト630】	こぜに 小銭

【リスト 701】

【リスト701】
1. 全く同じ発音。
2. 発音に違いがある。

【リスト 703】

【リスト703】
1. 今も <u>自分で言う</u> 。
2. 昔は <u>自分も言った</u> 。
3. 今も昔も自分は言わないが、 他人が言うのを <u>今聞く</u> 。
4. 今も昔も自分は言わないが、 他人が言うのを <u>昔聞いた</u> 。
5. 聞いたこともない。
9. わからない。

【リスト 704】

【リスト704】
1. 新しい発音。
2. 昔からの発音。
9. わからない。

【リスト 705】

【リスト705】
1. 標準語的な発音。
2. 方言的な発音。
9. わからない。

【リスト 706】

【リスト706】
1. 目の前の調査員と話すとき。
2. 家族や友達と話すとき。
3. 国勢調査の人と話すとき。 (50～60代・同性・初対面)

【リスト 707】

【リスト707】

1. 好き。
2. きらい。
3. どちらとも言えない。
9. わからない。

【リスト 801】

【リスト801】

1. 多いほう。
2. あまり多くないほう。
9. わからない。

【リスト 803】

【リスト803】

1. そう思う。
2. そうは思わない。
9. わからない。

資 料 3

調 査 協 力 依 頼 状

調査対象者に事前に送付した「調査協力依頼状」を掲げる。

実際のサイズは、横長 B4 版 1 枚である。

依頼状とともに、協力の諾否を問う返信用葉書と、協力が得られた場合面接調査時に回収する自記式の「言語生活調査票」を同封した。

様

ことばの調査のお願い

日だまりが恋しい時候となりましたが、皆様にはお元気でお過ごしのこととお喜び申し上げます。

昨年度は国立国語研究所のことばの調査にご協力くださりありがとうございます。おかげさまで、鶴岡市民 700名以上の方からお話を伺うことができました。お伺いした貴重な内容について、現在、鋭意分析を進めているところでございます。来年早々には、結果の中間報告会を開催できるようにしたいと思っております。実現の折にはまたご案内をさしあげます。

さて、分析を進めていく過程で、さらに詳しく教えていただきたい事柄がいくつか出てまいりました。そこで、昨年度ご協力いただいた方を中心に、本年度ももう一度お話を伺いたく、ここに改めてご協力をお願いいたす次第でございます。昨年度とよく似た内容について、より詳しくお話を伺いたく存じます。お忙しいところ勝手なお願いで恐縮ですが、どうぞご協力くださいますようお願い申し上げます。

期間は11月18日(水)から25日(水)の8日間の予定です。前回と同様、お名前など個人的な内容は一切公表いたしませんので、どうかあなたご自身のふだんのままのことばづかいについてお答えください。

以上突然ですが、なにとぞご協力くださいますようお願い申し上げます。

平成4年11月5日

国立国語研究所
所長 水谷 修

お 願 い の 内 容

- (1) きたる、11月18日(水)から25日(水)までのうち、ご都合のよいときに、私どもの調査員がお訪ねし、お話を伺いたいと存じます。
- (2) お手数ですが、折り返しご都合の程を同封のはがきにてお知らせください。できるだけ12日(木)までに ご投函くださいますようお願いいたします。
- (3) 調査員がお尋ねすることは、ふだんお使いになっていることばについての簡単な内容です。1時間ほどで終わりますので、どうぞご協力くださいますようお願いいたします。その際に、ご記入いただいたアンケート用紙(『言語生活調査票』)を調査員にお渡しください。アンケート用紙への記入は、ご自身でお願いいたします。
- (4) なお、お礼の粗品を用意していますので、調査員からお受け取りくださいますようお願いいたします。

【東京の連絡先】

国立国語研究所 情報資料研究部 第二研究室

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 03-3900-3111(内線 225) [担当: 米田, 磯部]

Fax. 03-3906-3530

【鶴岡での宿舎】 [11月17日(火)午後から26日(木)午前まで]

鶴岡ホテル 〒997 鶴岡市本町2-1-18

電話 0235-25-3286(直通) 0235-22-1135(ホテルの代表番号)

付 記

本書を作成するにあたっては、刊行物検討委員会が研究所内に設置され、各委員より内容と表現に関するコメントを得た。委員は次のとおりである。

相澤正夫 [研究開発部門・部門長] (委員長)

井上文子 [情報資料部門第一領域・主任研究員]

小河原義朗 [日本語教育部門第一領域・研究員]

執筆者一覧（50音順）

〔所外執筆者〕

加藤和夫（かとう・かずお）

金沢大学教育学部・教授（第4章）

〔所内執筆者〕

朝日祥之（あさひ・よしゆき）

独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域・研究員（第5章・第6章）

尾崎喜光（おざき・よしみつ）

独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域・主任研究員（第1章・第2章・第5章・第6章）

杉戸清樹（すぎと・せいじゅ）

独立行政法人国立国語研究所・所長（第1章）

前川喜久雄（まえかわ・きくお）

独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域・領域長（第3章）

方言使用の場面的多様性

— 鶴岡市における場面差調査から —

平成 18 年（2006 年）3 月 31 日



独立行政法人

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 3591-2

電話 042-540-4300（代表）

URL:<http://www.kokken.go.jp>